

長野県大町市埋藏文化財緊急発掘調査報告書

借 馬 遺 跡

III

追 分 遺 跡

前 田 遺 跡

南 原 遺 跡

1981

大町市教育委員会

古墳時代の日常生活—長野県西部を中心にして

MIN AUNG THWE

91L0152H

<前文>

弥生時代以後、埋葬施設として古墳が築造された時期を古墳時代と名付け、古墳と古墳出土品を中心とした様々な研究が行われてきた。当時代の政治的、文化的様相を探る目的であったが、一方でそれらの基である生活様式は軽視されたようでもあった。今発表では当時代の生活様式を観察することが唯一の目的である。東アジア地域と緊密な交流関係をもち、やや後進的だった日本列島内で、古墳と古墳出土品から当時の生活を観察する従来の方法には幾つかの問題があると見なしている。従来の方法で得た復元生活を重視せず、発掘された生活遺跡からの遺構と遺物を中心に観察していく。今回は松本盆地の北端にある借馬遺跡を自然環境と当時代の適応能力、当時代前後の生活環境などを考慮しながら調査した。

<本文>

1. 借馬遺跡

(a) 遺跡の立地

(b) 住居址

c) 出土土器

(19) 弥生後期

(2) 古墳時代前期

(3) 古墳時代中期

4) 古墳時代後期

5) 古墳時代以降

d) その他の出土品

e) 住居址以外の遺構

!!) 古墳時代の復元生活

(a) 生産活動

昭和 年 月 日

各 位

大町市教育委員会
教育長 一志 開平

発掘調査報告書「高聖遺器冢古墳」の贈呈について

時下、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。当市の文化財保護行政につきましては、常にご配慮を賜り深く感謝申し上げます。

さて、このたび発掘調査報告書「高聖遺器冢古墳」を発行いたしましたのご高覧頂きたく贈呈いたします。

なお、お手数ですが、下記受領書に記名押印のうえ、ご返送下さいますようお願いいたします。

記

郵便番号 388 長野県大町市桜田町3887番地

大町市教育委員会 社会教育係

長野県大町市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

借 馬 遺 跡

III

追 分 遺 跡

前 田 遺 跡

南 原 遺 跡

1981

大町市教育委員会

序

大町市社地区二か所と平地区二か所の計画か所に所在する大町市理蔵文化財緊急発掘調査は昭和56年4月から9月末日までの間に実施された。この事業は前年度に引き続き県営ほ場整備事業に伴う発掘調査であり、あたかも時間的な制約の中で終了しなければならないだけに教育委員会としては極めて多忙な発掘調査であった。

調査は大町市理蔵文化財緊急発掘調査団を編成し、長野県考古学会員篠崎健一郎氏を団長とする調査団をお願いしてはじめられた。

発掘調査が進められる中で、社地区の前田遺跡からは7世紀より12世紀に及ぶ竪穴住居跡34、建物址3のほか鉄器、ビット、土器片多数が出土し、平地区の借馬遺跡からは6世紀より11世紀に及ぶ竪穴住居跡24、建物址のほかビット、土器片等多数が出土された。これらは両者ともに当時の大規模な集落跡であることが立証された。

短期間の発掘調査であったが、地元地権者の方々、広く地域の方々からはこの事業の趣旨をよくご理解いただき快くご協力をたまわった。また長野県中信土地改良事務所をはじめ、地元大町市土地改良区からもそれぞれご賛意とご協力をいただいた。さらにまた調査の実施にあたっては終始長野県教育委員会文化課長さんをはじめ、担当者方々にそのおりに適切なご指導とご援助とをたまわった。

なお現地における発掘現場では連日晴雨にかかわらずこの事業が行われたのであるが、その間市民の皆さん、特にこの趣旨に賛同されて積極的にご参加いただいた方々、中学、高校の生徒諸君をはじめ、大勢の方々の時間と労力を超越したまさに献身的なご協力によってこの事業の終結をみる事ができた。ここにこれらの方々、そして諸機関、関係団体のご労苦に対し深甚なる謝意を表すものである。

この調査を通してこの地方における古代の生活や集落のなりたちを知るための貴重な成果をあげることができた。今後これらの資料をもとに当地の古代史研究を更に深めたいと念願するものである。

この報告書の刊行にあたって、調査団各位特に執筆にあたった先生方、関係各位のご労苦に改めて感謝の意を表するしだいである。

昭和57年3月25日

長野県大町市教育委員会

教育長 一 志 開 平

例 言

1. 本書は、昭和56年度に中信土地改良事務所長と大町市教育委員会教育長との契約に基づいて行なわれた、県営團場整備事業に伴う緊急発掘調査の平地区「借馬遺跡・追分遺跡」社地区「前田遺跡・南原遺跡」の報告書である。
2. 調査にあたっては、大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団を編成し、同調査団に再委託をし実施された。
3. 本報告書は、多くの学識経験者、市民、関係機関諸氏の協力からなったものである。特に下記の諸氏からは、発掘調査から報告書作成にいたるまでの間それぞれの立場でご指導・助言をたまわった。
県教育委員会文化課 関 考一指導主事 白田武正指導主事 樋口昇一専門主事、笹沢 浩
専門主事 百瀬長秀専門主事 土屋 積専門主事 島田哲男氏 樋口誠司氏 石上周蔵氏
宮城孝之氏
4. 調査結果については、検討会で何回か協議を重ねたが、前田遺跡の地質は土器の遺存状態を不良にしているため観察できたかぎりを記すこととするなど、遺跡の立地条件等の相違から全体的な統一ができず、原則として検出された遺構・遺物の図示に重点を置いて編集したため、各担当者によって表現方法等に相違がある点は了解されたい。
5. 整理作業と原稿執筆は、関係者全員の協議によって決定し、執筆分担は文末に記した。
 - ・ 整理接合補修作業は、篠崎健一郎、原田曠、丸山鈴加、吉沢三三子、池田和加江、寺島仁、木村隆一を中心として、飯沢茂雄、大久保隆司が一部担当したほか、大町北高等学校社会クラブ員、大町高等学校社会研究クラブ員の協力を得た。
 - ・ 竪穴住居址・掘立柱建物址等の遺構は、篠崎、原田、丸山、吉沢、寺島、市川、飯沢、大久保、木村が分担し、トレースは池田が専ら行なった。
 - ・ 遺物の実測・トレース・拓本は、特に島田哲男氏の助力と指導をいただきながら、寺島、市川、木村が分担した。
 - ・ 遺跡の地形・地質・環境と、石器類の石質・炭化物などの異質物は、森義直が専ら行なった。
 - ・ 遺構測量は、荒沢進を中心に丸山、吉沢、寺島、市川、飯沢、大久保、木村が分担したほか、一部大町北高等学校社会クラブ員の協力を得た。
 - ・ 写真撮影は、木村が専ら行ない、遺構関係の一部は大久保が、遺物関係は白井が行なった。
6. 本報告書の編集は、全員協議のもとに事務局で行ない、篠崎健一郎が総括した。
7. 本報告書関係の遺物・実測図等は、大町市教育委員会に保管してある。

本文目次

序	
例言	
第1章 調査状況	1
第1節 調査に至るまで	1
1 大町市園場整備の経過	1
2 発掘調査委託契約	5
1) 埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書	
2) 大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団	
第2節 発掘調査の実施と経過	9
1 調査の経過	9
2 発掘調査日誌	9
1) 南原遺跡	
2) 前田遺跡	
3) 追分遺跡・借馬遺跡	
3 発掘調査・整理作業協力者	11
4 関係地主	11
第3節 発掘調査と整理の方法	12
1 発掘区の設定	12
1) 大町市平地区	
2) 大町市社地区	
2 発掘調査の方法	13
3 整理の方法	15
第II章 大町市の概況	16
第1節 大町市の環境	16
第2節 大町市の遺跡	18
第III章 出土遺物の分類と遺構の時期区分	30
第1節 出土土器の分類	30
1 土器の手法と変遷	30
2 土器の分類	31
第2節 遺構の時期区分と建物址の分類	35
1 遺構の時期区分	35
2 建物址の分類	37
第IV章 調査遺跡	40
第1節 借馬遺跡III	40
1 位置と自然環境	40
1) 位置	
2) 自然環境と土層	

2	遺構と遺物	44
1)	竪穴住居址	44
(1)	第Ⅴ期	45
	① 79号住居址	45
	② 80号住居址	45
	③ 81号住居址	45
(2)	第Ⅵ期	48
	① 61号住居址	48
	② 62号住居址	52
	③ 63号住居址	55
	④ 67号住居址	61
	⑤ 71号住居址	65
	⑥ 74号住居址	71
	⑦ 78号住居址	71
(3)	第Ⅶ期	73
	① 64号住居址	73
	② 72号住居址	79
	③ 77号住居址	81
(4)	第Ⅷ期	83
	① 75号住居址	83
	② 76号住居址	88
(5)	第Ⅸ期	88
	① 69号住居址	88
	② 73号住居址	89
(6)	第Ⅹ期	89
	① 65号住居址	89
	② 68号住居址	94
	③ 70号住居址	94
	④ 83号住居址	96
(7)	第Ⅺ期	100
	① 66号住居址	100
(8)	第Ⅻ期	104
	① 82号住居址	104
2)	建物址	107
	① 建物址29	107
	② 建物址30	108
	③ 建物址31	109
	④ 建物址32	109
	⑤ 建物址33	110
	⑥ 建物址34	110
	⑦ 建物址35	111
	⑧ 建物址36	112
3)	その他の遺構と遺物	113
(1)	不明竪穴	113
	① 不明竪穴1	113
	② 不明竪穴2	113
(2)	竪穴住居址・建物址以外のピット	114
	① P1	114
	② P2	114
	③ P17	114
	④ P84	114
	⑤ P86	114
	⑥ P114	114
	⑦ P118	115
(3)	河川址	115
3	借馬遺跡出土の炭質物、骨片、その他	116
4	発掘区域外出土遺物	117
5	まとめ	121
第2節	追分遺跡	150
1	位置と環境	150

(1) 位置	(2) 環境	
2	遺構	150
3	追分遺跡表面採集の遺物	152
4	まとめ	152
第3節	南原遺跡	153
1	位置と環境	153
2	遺構と遺物	153
(1) 遺構	(2) 遺物	
3	まとめ	155
第4節	前田遺跡	156
1	位置と遺跡付近の自然環境	156
(1) 高瀬川と段丘について	(2) 前田遺跡について	
2	遺構と遺物	160
1) 竪穴住居址		160
(1) 第Ⅷ期		160
① 1・2号住居址	② 35号住居址	163
(2) 第Ⅷ期		168
① 9号住居址	② 10号住居址	170
③ 15・16号住居址		171
④ 36号?住居址		173
(3) 第Ⅸ期		174
① 8号住居址	② 14号住居址	175
③ 20号住居址		176
④ 30号住居址		176
(4) 第Ⅹ期		182
① 12号住居址	② 13号住居址	182
③ 18号住居址		183
④ 25号住居址	⑤ 33号住居址	186
⑥ 34号住居址		188
(4) 第Ⅺ期		188
① 4号住居址	② 5号住居址	193
③ 7号住居址		195
④ 21号住居址	⑤ 23号住居址	197
⑥ 24号住居址		199
⑦ 26号住居址	⑧ 27号住居址	200
(5) 第Ⅻ期		201
① 3号住居址	② 6号住居址	202
③ 17号住居址		204
④ 19号住居址	⑤ 28号住居址	206
⑥ 29号住居址		208
(6) 第Ⅼ期		209
① 11号住居址	② 22号住居址	211
③ 32号住居址		212
(7) 時期不明		214
① 3号住居址		214
2) 建物址		215
① 建物址1	② 建物址2	215
③ 建物址4		217

④ 建物址 3	216
3) その他の遺構と遺物	217
(1) 竪穴住居址・建物址以外のピット	217
① P25	217
② P35	217
③ P89	218
④ P123	218
⑤ P170	219
⑥ P196	221
⑦ P194	222
⑧ P202	222
⑨ P264	222
(2) 溝 址	222
① 溝址 1	222
② 溝址 2	223
③ 溝址 3	223
④ 溝址 4	223
⑤ 溝址 5	223
(3) 暗 渠	223
3. 前田遺跡出土の炭化物、骨片、その他	224
4 まとめ	225

目 次

第 I 章～第 III 章

図 1	借馬遺跡・追分遺跡付近 園場整備事業施行図……………	2・3	図 6	大町市内遺跡分布図……………	24・25
図 2	前田遺跡・南原遺跡付近 園場整備事業施行図……………	4	図 7	借馬遺跡・追分遺跡付近 地形図……………	26・27
図 3	平地区試掘確認調査区割図……………	12	図 8	前田遺跡・南原遺跡付近 地形図……………	28・29
図 4	借馬遺跡 C 地区・追分遺跡 発掘区割図……………	14	図 9	建物趾の分類……………	37・38・39
図 5	前田遺跡・南原遺跡発掘区割図……………	14	図 10	建物趾棟方向……………	39

第 IV 章

第 1 節 借馬遺跡

図 1	借馬遺跡 C 地区全景……………	41・42	図 19	63号住居趾出土遺物 2……………	60
図 2	借馬遺跡土層柱状図……………	43	図 20	67号住居趾……………	61
図 3	借馬遺跡南北方向断面概念図……………	43	図 21	67号住居趾カマド……………	62
図 4	借馬遺跡竪穴住居趾時期区分図……………	44	図 22	67号住居趾炭化物・礫・遺物 出土状況……………	63
図 5	79号住居趾出土遺物……………	45	図 23	67号住居趾出土遺物……………	64
図 6	74・77・78・79・80・ 81号住居趾……………	46・47	図 24	70・71・72号住居趾……………	66・67
図 7	61号住居趾……………	49	図 25	71号住居趾カマド……………	68
図 8	61号住居趾カマド……………	50	図 26	71号住居趾炭化物・遺物 出土状況……………	69
図 9	61号住居趾礫・遺物出土状況……………	50	図 27	71号住居趾出土遺物……………	70
図 10	61号住居趾出土遺物……………	51	図 28	74号住居趾出土遺物……………	71
図 11	62号住居趾……………	52	図 29	77・78号住居趾礫出土状況……………	72
図 12	62号住居趾カマド……………	53	図 30	78号住居趾出土遺物……………	73
図 13	62号住居趾礫・遺物出土状況……………	54	図 31	64・68・69号住居趾……………	74・75
図 14	62号住居趾出土遺物……………	55	図 32	64号住居趾カマド……………	76
図 15	63号住居趾……………	56	図 33	64号住居趾炭化物・礫・遺物 出土状況……………	77
図 16	63号住居趾カマド……………	57	図 34	64号住居趾出土遺物……………	78
図 17	63号住居趾炭化物・礫・遺物 出土状況……………	58	図 35	72号住居趾カマド……………	79
図 18	63号住居趾出土遺物 1……………	59			

図 36	72号住居址炭化物・礫・遺物 出土状況	80	図 57	83号住居址出土遺物 2	99
図 37	72号住居址出土遺物	81	図 58	66号住居址	101
図 38	77号住居址出土遺物	82	図 59	66号住居址カマド	102
図 39	73・75・76号住居址・ 建物址33	84・85	図 60	66号住居址礫・遺物出土状況	102
図 40	75・76号住居址遺物出土状況	86	図 61	66号住居址出土遺物	103
図 41	75号住居址出土遺物	87	図 62	82号住居址・建物址35・36 不明竪穴 1	105
図 42	76号住居址出土遺物	88	図 63	82号住居址カマド	106
図 43	69号住居址出土遺物	88	図 64	82号住居址礫・遺物出土状況	106
図 44	73号住居址出土遺物	89	図 65	82号住居址出土遺物	107
図 45	65号住居址・建物址29・3290・91・92	92	図 66	建物址29出土遺物	108
図 46	65号住居址カマド	92	図 67	建物址30	108
図 47	65号住居址礫出土状況	93	図 68	建物址31	109
図 48	65号住居址出土遺物	93	図 69	建物址34	111
図 49	68号住居址出土遺物	94	図 70	建物址34出土遺物	111
図 50	70号住居址カマド	94	図 71	建物址35出土遺物	112
図 51	70号住居址礫・遺物出土状況	95	図 72	建物址36出土遺物	112
図 52	70号住居址出土遺物	96	図 73	不明竪穴 2	113
図 53	83号住居址	97	図 74	竪穴住居址・建物址以外の ビット出土遺物	115
図 54	83号住居址カマド	97	図 75	河川址 1 横断面	115
図 55	83号住居址遺物出土状況	98	図 76	発掘区外出土遺物 1	118
図 56	83号住居址出土遺物 1	98	図 77	発掘区外出土遺物 2	119
			図 78	発掘区外出土遺物 3	120

第2節 追分遺跡

図 1	追分遺跡土層柱状図	150	図 3	追分遺跡表面採集土器	152
図 2	追分遺跡発掘区全景	151			

第3節 南原遺跡

図 1	南原遺跡発掘区全景	154・155
-----	-----------	---------

第4節 前田遺跡

図 1	前田遺跡発掘区全景	157・158	図 6	6・7・8・9・35号住居址	164・165・166
図 2	前田遺跡土層柱状図	159	図 7	6・7・35号住居址 遺物出土状況	167
図 3	1・2号住居址	161・162	図 8	35号住居址出土遺物	168
図 4	1・2号住居址遺物出土状況	162			
図 5	1・2号住居址出土遺物	163			

表 目 次

第 I 章～第 III 章

表 1 調査の経過一覧……………	9
表 2 大町市の時代別遺跡数一覧……………	18
表 3 大町市内遺跡一覧……………	20

表 4 借馬遺跡・前田遺跡竪穴住居址 時期区分一覧……………	36
-----------------------------------	----

第 IV 章

第 1 節 借馬遺跡Ⅲ

表 1 借馬遺跡出土炭化物・骨片・ 金属・その他一覧……………	116
表 2 時期別カマド設置位置一覧……………	121
表 3 借馬遺跡竪穴住居址一覧……………	123
表 4 借馬遺跡建物址一覧……………	125
表 5 借馬遺跡竪穴住居址出土図示 土器一覧……………	127
表 6 借馬遺跡建物址ビット・その他の ビット出土図示土器一覧……………	143

表 7 借馬遺跡発掘区外出土図示 土器一覧……………	145
表 8 借馬遺跡発掘区外出土土玉一覧……………	148
表 9 借馬遺跡出土鉄製品一覧……………	149
表 10 借馬遺跡出土石製品一覧……………	149
表 11 借馬遺跡出土編み物用石錘一覧……………	149

第 2 節 追分遺跡

表 1 追分遺跡表面採取図示土器一覧……………	152
-------------------------	-----

第 3 節 前田遺跡

表 1 前田遺跡出土炭化物・骨片 その他一覧……………	224
表 2 前田遺跡竪穴住居址一覧……………	226
表 3 前田遺跡建物址一覧……………	229
表 4 前田遺跡遺物出土ビット一覧……………	229

表 5 前田遺跡遺構内出土図示 土器一覧……………	230
表 6 前田遺跡出土鉄製品一覧……………	244
表 7 前田遺跡出土石製品一覧……………	244

図 9	9号住居址・P186遺物出土状況	169	図 42	27号住居址出土遺物	201
図 10	9号住居址出土遺物	170	図 43	3号住居址遺物出土状況	202
図 11	10号住居址	171	図 44	3号住居址出土遺物	202
図 12	10号住居址出土遺物	171	図 45	6号住居址出土遺物	203
図 13	15・16号住居址	172	図 46	17号住居址出土遺物	205
図 14	15号住居址出土遺物	173	図 47	19号住居址出土遺物	205
図 15	16号住居址出土遺物	173	図 48	28号住居址カマド	206
図 16	36号住居址出土遺物	173	図 49	28号住居址カマド付近 遺物出土状況	207
図 17	8号住居址出土遺物	175	図 50	28号住居址出土遺物	207
図 18	13・14号住居址	176	図 51	29号住居址出土遺物	208
図 19	17・18・19・20・21号 住居址・建物址2	177・178・179	図 52	11号住居址	209
図 20	24・25・26・27・28・29・30号 住居址・建物址4	180・181	図 53	11号住居址遺物出土状況	210
図 21	12号住居址	182	図 54	11号住居址出土遺物	210
図 22	12号住居址出土遺物	182	図 55	22号住居址	211
図 23	13号住居址出土遺物	183	図 56	22号住居址出土遺物	211
図 24	18号住居址出土遺物	184	図 57	32号住居址遺物出土状況	212
図 25	25号住居址出土遺物	186	図 58	32号住居址カマド	213
図 26	32・33号住居址	187	図 59	32号住居址出土遺物	213
図 27	33号住居址出土遺物	187	図 60	31号住居址	215
図 28	34号住居址	188	図 61	建物址3	216
図 29	34号住居址出土遺物	188	図 62	P25出土遺物	217
図 30	3・4号住居址・建物址1	189・190	図 63	P35出土遺物	217
図 31	4号住居址遺物出土状況	190	図 64	P89・123	218
図 32	4号住居址出土遺物	192	図 65	P89出土遺物	218
図 33	5号住居址	193	図 66	P123出土遺物	219
図 34	5号住居址出土遺物	194	図 67	P170	219
図 35	7号住居址出土遺物	195	図 68	P25・170遺物出土状況	220
図 36	21号住居址出土遺物	196	図 69	P198出土遺物	220
図 37	23号住居址	197	図 70	P196出土遺物	221
図 38	23号住居址遺物出土状況	198	図 71	P194出土遺物	222
図 39	23号住居址出土遺物	199	図 72	P202出土遺物	222
図 40	24号住居址出土遺物	199	図 73	P204出土遺物	222
図 41	26号住居址出土遺物	200	図 74	溝2出土遺物	223

写真目次

- 写真 1 借馬遺跡Ⅲ 1. 借馬遺跡・追分遺跡周辺の地形と園場整備事業進行状況航空写真
2. 借馬遺跡C地区全景(中部電力株式会社協力、北上上空より)
- 写真 2 借馬遺跡Ⅲ 1. 借馬遺跡C地区全景(中部電力株式会社協力、西上空より)
- 写真 3 借馬遺跡Ⅲ 1. 近景(南方より) 2. 近景(発掘調査中、南方より) 3. 近景
(発掘調査中、北方より)
- 写真 4 借馬遺跡Ⅲ 1. 61号住居址(南方より) 2.3.4.5. 61号住居址カマド
3. 62号住居址竊物用石錘出土状況 4. 63号住居址(南方より)
5. 63号住居址礎・遺物出土状況(南方より)
- 写真 5 借馬遺跡Ⅲ 1. 62号住居址礎・遺物出土状況(南方より) 2. 62号住居址カマド
3. 62号住居址竊物用石錘出土状況 4. 63号住居址(南方より)
5. 63号住居址礎・遺物出土状況(南方より)
- 写真 6 借馬遺跡Ⅲ 1.2.3.4.5.6.7.8. 63号住居址カマド 7.8.9.10. 63号住居址遺物出土状況
(7.8.遺No43 9.遺No49 10.遺No23)
- 写真 7 借馬遺跡Ⅲ 1. 64・68・69号住居址(北方より) 2. 64号住居址(南方より)
3. 64号住居址礎・遺物出土状況(南方より)
- 写真 8 借馬遺跡Ⅲ 1.2.3.4.5. 64号住居址カマド 6. 64号住居址遺物出土状況
7. 69号住居址(東方より)
- 写真 9 借馬遺跡Ⅲ 1. 68号住居址(西方より) 2. 65号住居址・建物址29(南方より)
3. 65号住居址(西方より)
- 写真 10 借馬遺跡Ⅲ 1.2.3. 65号住居址カマド 4. 65号住居址P1 内立石出土状況 5. 66号住居
址(南方より) 6. 66号住居址礎・遺物出土状況(遺No52-55-63-64-65-67)
- 写真 11 借馬遺跡Ⅲ 1. 67号住居址(南方より) 2. 67号住居址炭化物・遺物出土状況(南方
より) 3.4.5.6. 67号住居址カマド
- 写真 12 借馬遺跡Ⅲ 1. 67号住居址カマド 2.4.5. 67号住居址遺物出土状況(2.遺No105・108・109
4.遺No1025.遺No103) 3. 71号住居址遺物出土状況(遺No106) 6. 70・
71・72号住居址(東方より) 7. 70号住居址(南方より) 8.9. 70号住
居址遺物出土状況(8.遺No122・133 9.遺No120・134)
- 写真 13 借馬遺跡Ⅲ 1. 71号住居址(南方より) 2. 71号住居址炭化物・竊物用石錘出土状況
(南方より) 3.4.5.6. 71号住居址カマド
- 写真 14 借馬遺跡Ⅲ 1. 72号住居址(東方より) 2. 72号住居址炭化物出土状況(南方より)
3. 73・75・76号住居址・建物址33(東方より)
- 写真 15 借馬遺跡Ⅲ 1. 73・75号住居址(東方より) 2. 75号住居址遺物出土状況(遺No177)

3. 75号住居址南壁集石 4. 76号住居址(南方より)
- 写真 16 借馬遺跡Ⅲ 1. 74・77・78・79・80・81号住居址(北方より) 2. 74号住居址(東方より)
3. 74号住居址遺物出土状況(遺No172)
- 写真 17 借馬遺跡Ⅲ 1. 77号住居址(南方より) 2. 77号住居址礎出土状況(南方より)
3. 78号住居址礎出土状況(南東方より)
- 写真 18 借馬遺跡Ⅲ 1. 79号住居址(北方より) 2. 80号住居址(北方より) 3. 81号住居址(東方より)
- 写真 19 借馬遺跡Ⅲ 1. 82号住居址(西方より) 2. 82号住居址カマド出土状況(西方より)
3.4.5. 82号住居址カマド 6.7. 82号住居址遺物出土状況(6.遺No223 7.遺No222)
- 写真 20 借馬遺跡Ⅲ 1. 83号住居址(南方より) 2. 河川址2に切られる83号住居址東壁
3. 83号住居址カマド 4.5.6. 83号住居址遺物出土状況(4.遺No251・262 5.遺No280 6.遺No255)
- 写真 21 借馬遺跡Ⅲ 1. 65号住居址・建物址29・32(南方より) 2. 建物址29(南方より)
3. 建物址30(北方より)
- 写真 22 借馬遺跡Ⅲ 1. 建物址31(北方より) 2. 建物址32(東方より) 3. 建物址33(東方より)
- 写真 23 借馬遺跡Ⅲ 1. 建物址29・32・34・65号住居址(南東方より) 2. 建物址34(南東方より)
3. 建物址35・不明竪穴1(北方より)
- 写真 24 借馬遺跡Ⅲ 1. 建物址35・36(北方より) 2. 不明竪穴1(東方より) 3. 不明竪穴2(南方より)
- 写真 25 借馬遺跡Ⅲ 61号住居址出土土器(1:3)
- 写真 26 借馬遺跡Ⅲ 62号住居址出土土器(1:3)
- 写真 27 借馬遺跡Ⅲ 63号住居址出土土器(1:3)
- 写真 28 借馬遺跡Ⅲ 63号住居址出土土器(1:3)
- 写真 29 借馬遺跡Ⅲ 64号住居址出土土器(1:3)
- 写真 30 借馬遺跡Ⅲ 65号住居址出土土器(1:3) 66号住居址出土土器(1:3)
- 写真 31 借馬遺跡Ⅲ 67号住居址出土土器(1:3)
- 写真 32 借馬遺跡Ⅲ 69号住居址出土土器(1:3) 70号住居址出土土器(1:3)
71号住居址出土土器(1:3)
- 写真 33 借馬遺跡Ⅲ 72号住居址出土土器(1:3) 74号住居址出土土器(1:3)
75号住居址出土土器(1:3) 76号住居址出土土器(1:3)
78号住居址出土土器(1:3)
- 写真 34 借馬遺跡Ⅲ 82号住居址出土土器(1:3)
- 写真 35 借馬遺跡Ⅲ 83号住居址出土土器(1:3)
- 写真 36 借馬遺跡Ⅲ 1. P86出土土器(1:3 遺No299) 2.3.4. 杯の底部ヘラ記号(1:2 2.遺No172 3.遺No260 4.遺No184) 5. 杯の底部回転ヘラケズリ(1:2 遺No92) 6.7.8. 杯内外面整形(6.遺No表採-51 7.8.遺No1)

9. 土師器装外面整形 (遺No63) 10.11 須恵器杯内外面火押 (遺No76)
 12. 底部内面の墨書? (遺No290) 13.14.15.16 鉄製品 (1:2 13. 遺No50 14. 遺No101 15. 遺No160 16. 遺No280-281) 17. 紡錘車 (1:2 遺No49)
- 写真 37 借馬遺跡Ⅲ 1. 横刃形石器 (1:2 遺No208) 2.3.4. 砥石 (1:2 3. 遺No68 4. 遺No278-279-280) 5.6.7. 編物用石錘 (1:2 5.62住 6.68住 7.71住)
- 写真 38 借馬遺跡Ⅲ 発掘調査区外出土遺物 1 (1:3)
- 写真 39 借馬遺跡Ⅲ 発掘調査区外出土遺物 2 (1:3)
- 写真 40 借馬遺跡Ⅲ 発掘調査区外出土遺物 3 (1:3)
- 写真 41 借馬遺跡Ⅲ 発掘調査区外出土遺物 4 (1:3 遺No58-59-60-61 1:2)
- 写真 42 追分遺跡 1. 近景 (東方より) 2. 発掘区近景 (西方より) 3. D-1グリット (南東方より) 4. E-1グリット (南西方より)
- 写真 43 追分遺跡 1. P4・5・6 (西方より) 2.3.4.5.6. P4・5 7.8. P6
- 写真 44 追分遺跡 1.2.3.4. P9 5. P10-13 6. P1-2 7. P9-13
- 写真 45 南原遺跡 1. 近景 (東方より) 2. 近景 (南方より) 3. 発掘区全景 (北東方より)
- 写真 46 南原遺跡 1. P2-8 (北方より) 2. P1-13 (東方より) 3. P14-15-19-20 (東方より)
- 写真 47 南原遺跡 1. 発掘区内出土遺物 (1. 剥片 1:1 2.3. 出土土器片)
- 写真 48 前田遺跡 1. 近景 (東方より) 2. 近景 (西方より) 3. 近景 (南方より)
- 写真 49 前田遺跡 1. 発掘区近景 (70R30付近より南西へ) 2. 発掘区近景 (40CL付近より南東へ)
- 写真 50 前田遺跡 1. 1-2号住居址 (西方より) 2. 1号住居址カマド 3. 1号住居址内集石 4.5.6.7.8.9. 1-2号住居址遺物出土状況 (4.6. 遺No8 5. 遺No7 7. 遺No4・6 8. 遺No2・3 9. 遺No5)
- 写真 51 前田遺跡 1. 3号住居址 (南方より) 2.3.4. 3号住居址遺物出土状況 (2. 遺No10-19 3. 遺No12-15-16-17-18 4. 遺No9-13) 5. 4号住居址 (南方より) 6. 4号住居址礎・遺物出土状況 (南方より)
- 写真 52 前田遺跡 1.2.3.4. 4号住居址遺物出土状況 (3. 遺No24-25-26-35 4. 遺No44-45) 5. 5号住居址カマド (東方より) 6.7. 5号住居址カマド
- 写真 53 前田遺跡 1. 6・7・8・9・35号住居址 (東方より) 2. 6号住居址 (南方より) 3.4. 6号住居址カマド 5.7. 6号住居址遺物出土状況 (5. 遺No64 6. 台石)
- 写真 54 前田遺跡 1. 7号住居址 (西方より) 2. 8号住居址 (南方より) 3. 9号住居址 (南方より) 4. 9号住居址出土台石 (遺No114)
- 写真 55 前田遺跡 1. 10号住居址 (南方より) 2. 10号住居址カマド 3. 10号住居址出土台石 4. 11号住居址 (南方より) 5. 11号住居址カマド

6.7. 11号住居址遺物出土状況 (6.遺No120-126 7.台石)

- 写真 56 前田遺跡 1. 13・14号住居址 (東方より) 2. 13・14号住居址 (東方より)
3. 14号住居址 (北方より) 4. 14号住居址出土台石
- 写真 57 前田遺跡 1. 15・16号住居址 (西方より) 2. 15号住居址 (南方より) 3. 15号住居址出土台石 4. 16号住居址 (南方より)
- 写真 58 前田遺跡 1. 17・18・19・20・21号住居址 (北方より) 2. 17号住居址 (東方より)
3.4. 17号住居址出土台石 5. 18号住居址 (南方より)
- 写真 59 前田遺跡 1. 19号住居址 (北東方より) 2. 20号住居址 (東方より) 3. 21号住居址 (北方より) 4.5. 21号住居址出土台石 6. 22号住居址 (東方より)
- 写真 60 前田遺跡 1. 23・24・25・26・27・28・29・30号住居址・建物址4 (東方より)
2. 23・24号住居址 (北方より) 3. 23号住居址カマド (遺No177)
4. 24号住居址 (東方より) 5. 24号住居址出土台石
- 写真 61 前田遺跡 1. 25号住居址 (東方より) 2.3.4.5.6.7. 25号住居址出土台石
8. 26号住居址 (西方より)
- 写真 62 前田遺跡 1. 27号住居址 (南方より) 2.3. 27号住居址炭化物出土状況
4. 27号住居址出土台石
- 写真 63 前田遺跡 1. 28号住居址 (西方より) 2.3.4.5. 28号住居址遺物出土状況
6.7.8. 28号住居址カマド
- 写真 64 前田遺跡 1. 26・28・29号住居址 (南方より) 2. 30号住居址 (南方より)
3. 31号住居址 (南方より)
- 写真 65 前田遺跡 1. 32・33号住居址 (南方より) 2. 32号住居址 (東方より) 3. 32号住居址炭化物出土状況 (東方より)
- 写真 66 前田遺跡 1.2. 32号住居址遺物・炭化物出土状況 (遺No219-222) 3. 32号住居址カマド 4. 32号住居址出土台石 (遺No231) 5. 33号住居址 (南方より) 6. 34号住居址 (東方より) 7. 34号住居址出土台石
- 写真 67 前田遺跡 1. 35号住居址 (東方より) 2.3. 35号住居址遺物出土状況 (遺No241・242・245) 4. 35号住居址出土台石 5. 建物址1 (南方より)
- 写真 68 前田遺跡 1. 建物址2 (南方より) 2. 建物址3 (東方より) 3. 建物址4 (東方より)
- 写真 69 前田遺跡 1. P170付近 (南方より) 2.3. P170遺物出土状況
- 写真 70 前田遺跡 1.2. P89・123 3.5. P123 4.6. P89
- 写真 71 前田遺跡 1・2号住居址出土土器 (1:3) 3号住居址出土土器 (1:3)
- 写真 72 前田遺跡 4号住居址出土土器 (1:3)
- 写真 73 前田遺跡 5号住居址出土土器 (1:3) 6号住居址出土土器 (1:3)
- 写真 74 前田遺跡 7号住居址出土土器 (1:3) 8号住居址出土土器 (1:3) 9号住居址出土土器 (1:3)
- 写真 75 前田遺跡 10号住居址出土土器 (1:3) 11号住居址出土土器 (1:3) 13号住居址

居址出土土器（1：3）

- 写真 76 前田遺跡 16号住居址出土土器（1：3） 18号住居址出土土器（1：3） 19号住居址出土土器（1：3） 23号住居址出土土器（1：3）
- 写真 77 前田遺跡 25号住居址出土土器（1：3） 26号住居址出土土器底部墨書 27号住居址出土土器（1：3） 28号住居址出土土器（1：3）
- 写真 78 前田遺跡 29号住居址出土土器（1：3） 32号住居址出土土器（1：3）
- 写真 79 前田遺跡 35号住居址出土土器（1：3） 36号？住居址出土土器（1：3） 竪穴住居址建物址以外のピット・溝址出土土器（1：3）
- 写真 80 前田遺跡 P170出土土器（1：3）
- 写真 81 前田遺跡 鉄器（1：2） 台石・石皿（1：6） 礫石・高き石（1：3） 羽口（1：2）
- 写真 82 スナップ

第I章 調査状況

第1節 調査に至るまで

1 大町市園場整備関係の経過

県営園場整備事業は、「土地改良法」に基づいて施行される大規模な農業基盤整備事業である。この事業の目的は、大型機械の導入により農業の省力化を進め、農業経営の合理化を図ることにある。土地改良法によれば、受益者15名以上の申請に基づき、受益面積60ヘクタール（60町歩）以上にわたる基盤整備事業については、事業主体は県営によることになっているものである。

事業は昭和52年度から着手し、昭和60年度までの9年間の計画で、大町・平地区については、昭和52年度と53年度に大町三日町地籍、昭和54年度から56年度にかけて平借馬地籍を中心に一部木崎地籍、昭和57年度平稲尾地籍、昭和58年度大町上花見地籍を実施する計画である。これらの事業により対象となる面積（主として水田）は132ヘクタール、対象農家戸数は354戸、総事業費4億8千7百万円（当初計画）といわれている。

また、大町市南部の社地区については、昭和54・55年度に社岡田地籍を、昭和56年度社宮本地籍の一部、昭和57年度社曾根原地籍、昭和58年度から60年度に宮本地籍を以て終了する計画である。

社地区の対象面積は189ヘクタール、対象農家戸数は368戸、総事業費9億円（当初計画）とされている。大町、平、社地区の全体計画では、対象面積321ヘクタール、農家戸数722戸総事業費13億8千7百万円に達する大事業である。これらの地域では、水路や幅員4mの農道が蒼蒼の目のように整備され、水田一区域は、ほぼ3,000㎡（3反歩）に区画される。

こうした事業に伴って、かつての地形や、水田の様は一変する。大小無数にあった小せぎやあぜ道は姿を消すことになる。

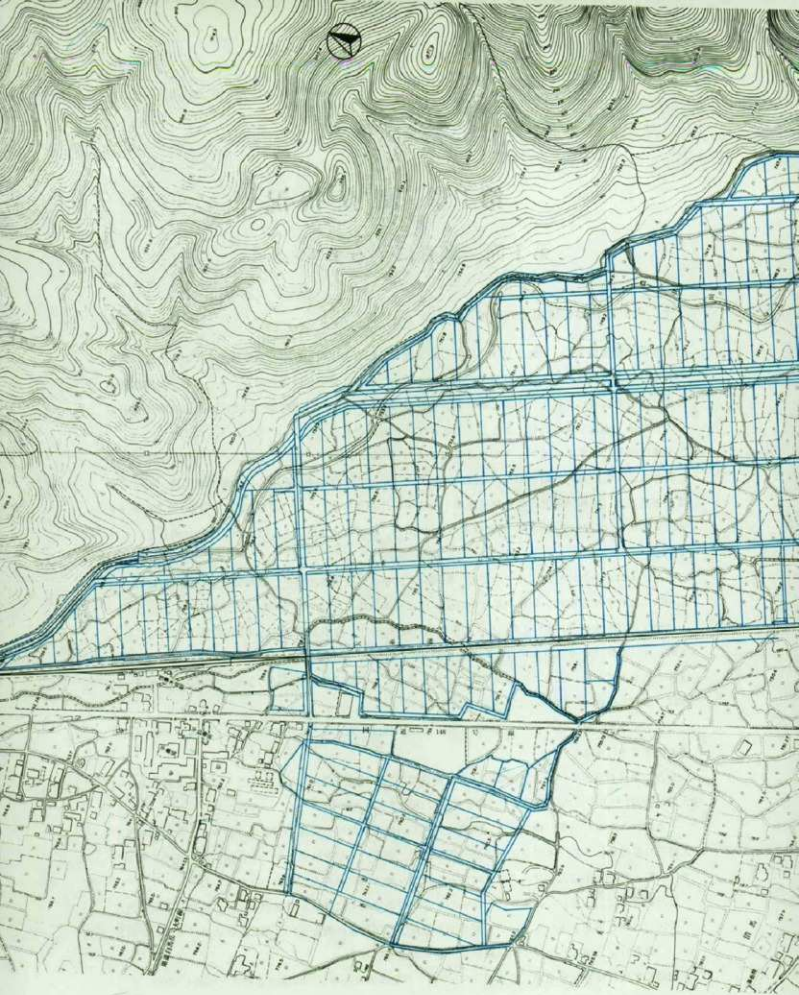
なお、事業費負担の区分は、国庫45.0%、県費27.5%、地元（農家）27.5%となっているが地元負担のうち9.5%ほどの市補助があるので、農家負担は18%ほどにあたる。

そこで、これらの事業に伴って、開発地域内での埋蔵文化財包蔵地の緊急発掘調査が、昭和52年度の大町三日町地籍にある「米見原遺跡」より開始され、本年で5年を経過した。その間、地主等の了解も得て、大町三日町・平借馬・社宮本地区にある7遺跡9地点の発掘調査が進められ終了した。

発掘調査には、市独自の組織が特でないので「大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団」を組織し、同調査団に委託して調査事業を遂行している。調査団の運営は、团长始め調査主任は地元在住の長野県考古学会員とし、調査員は広域にわたって学識経験者を集り当っている。

昭和52年度には米見原遺跡（調査費500,000円）の発掘調査を中借土地改良事務所と契約し開始した。その後大町市教育委員会事務局体制も、社会教育係に主事が増員された事は幸いした。

昭和53年度には分水遺跡（当初調査費3,600,000円）の発掘調査に着手したが、途中で予想される遺跡の範囲にかかる地域が園場整備対象区域から除外されたため、調査は小範囲（調査費500,000円）にとどめ



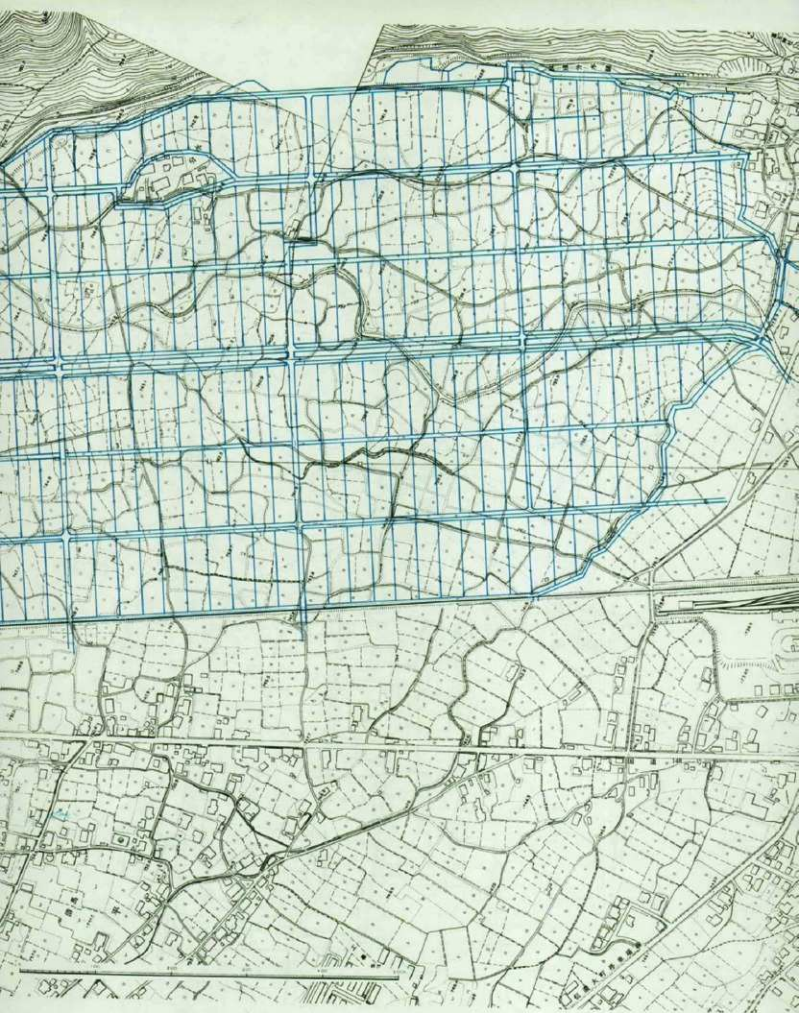


図1 信馬遺跡・追分遺跡付近圏場整備事業施行図 (1:5,000)

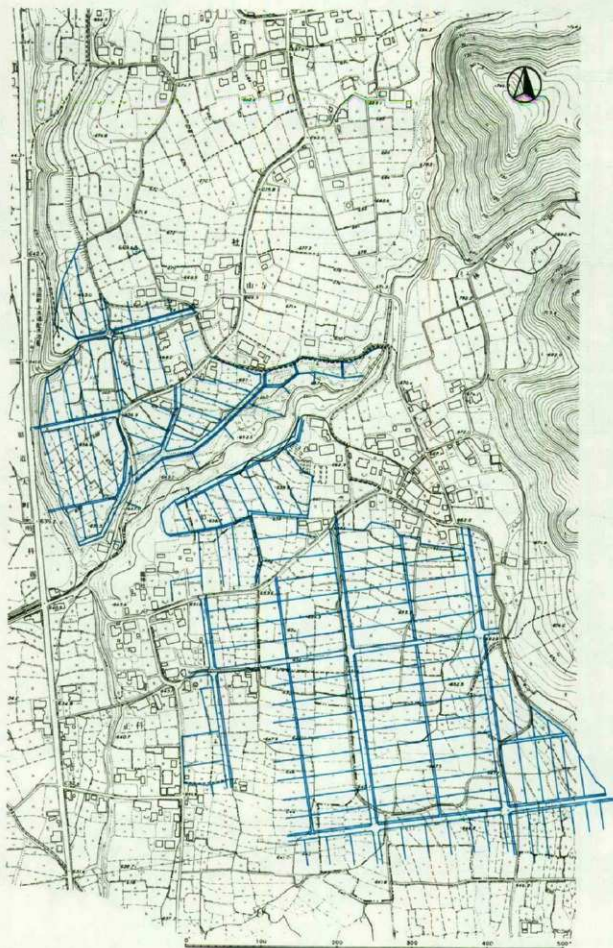


図2 前田遺跡・南原遺跡付近圏場整備事業施行図

(1 : 5,000)

止した。

昭和54年度より専任の社会教育係長を迎えた新体制のなかで始まった借馬遺跡（借馬遺跡Ⅰ当初調査費3,780,000円）は予想を上回る広範囲の発掘調査となり、借馬遺跡Ⅰでは金銭的に苦しい事態に立ち至り、中信土地改良事務所にもその実状を訴え、その解決策として調査費（600,000円）の増額を願えた。

そのような状況から昭和55年度に先立ち中信土地改良事務所と試掘確認調査（調査費2,000,000円）の契約をし、予想される遺跡の節開の見直しがされた。試掘確認調査の結果に基づき借馬遺跡Ⅱ（調査費7,500,000円）の発掘調査を実施したが、発掘調査が進められるなか、圃場整備事業の簡易水路が掘られた水路部分に加え、大町建設事務所が行なう農具川河川改良工事が進むにつれてその地区からも遺構が検出されたため追加調査（調査費3,000,000円）することとなった。しかもその後農具川河川改良工事が北上するにつれ、立ち合い調査地区として協議が終了していたトナヶ原遺跡の外郭部分からも遺構が検出されたため、相当無理な日程消化の中で調査を終了させた。

昭和56年に入ると中心となる調査員が集まらず、かなり苦しい調査体制で3年目へ入る平地区の借馬遺跡Ⅲと追分遺跡の2遺跡（調査費3,200,000円）と社地区の前田遺跡と南原遺跡の2遺跡（当初調査費3,000,000円）計4遺跡の発掘調査が開始された。そのうえ前田遺跡は、湧水地帯であるとともに粘土質の土壌のため発掘調査は難行し当初計画を大幅に遅れることとなり、その解決策として市単独の費用（調査費800,000円）を捻出するなど苦慮した年であった。しかし苦しい調査体制の中で社会教育係へ主事が増員されたことや、発掘員として当たっていた地元主婦のみなさんの3年間の豊かな経験が作業能率を高めたことは幸した。ここに、昭和52年10月より始まった来見原遺跡の発掘調査から、昭和54年4月より3年間にわたって行なわれた借馬遺跡の発掘調査並びに、追分遺跡・前田遺跡・南原遺跡の発掘調査は終了し、農業基盤整備事業も残すところ後4年間となった。

2 発掘調査委託契約

農業基盤整備事業対象地区内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、「公共開発事業等に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて（通達）」のなかで、事業施行に際しての協議を県教育委員会と事業施行者の間で行なわれることになっている。その結果、記録保存と決定、発掘調査が必要となった場合、事業施行者である長野県中信土地改良事務所は、大町市教育委員会に委託して調査を実施することになっている。そのため県教育委員会と大町市教育委員会は、中信土地改良事務所と現地協議など度重なる事務折衝の上、調査遺跡の発掘面積・調査費・調査期間・調査方法を定めた。

その後、相互の委託・受託の文書の往来があって、大町市平地区・社地区については、つぎのような発掘調査委託契約が締結された。

1) 埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書

(1) 大町市社地区

昭和56年度県営は場整備事業社地区内における埋蔵文化財包蔵地発掘調査（以下「発掘調査」という）の実施に関する業務（以下「業務」という）について委託者 長野県中信土地改良事務所 三村 敬一（以下「甲」という）と、受託者 大町市教育委員会 教育長 一志 開平（以下「乙」という）との間に、次のとおり委託契約を締結する。

(総 則)

- 第1条 乙は別紙の発掘調査実施計画書に従って業務を実施するものとする。
2. 乙は業務の実施に必要な土地所有者等の承諾を取りまとめるものとし、かつ法令の規定に基づく諸届等を甲に代って行うものとする。

(期 間)

- 第2条 乙は昭和56年6月30日までに、現場における発掘調査を完了し、昭和57年3月31日までに業務を完了するものとする。

(費 用)

- 第3条 甲は業務に要する費用として、乙に支払う金額は、金2,175,000円以内とする。
2. 前項の費用の支払方法については、乙の業務に支障のないように、甲乙協議して定める。
3. 甲は乙からの費用請求に対し、すみやかにこれを支払うものとする。

(作業の実施)

- 第4条 乙は業務の実施にあたっては、甲の施行する事業の工程に支障のないように努めるものとする。
2. 乙は業務の実施にあたっては、作業表示旗を掲げ、関係者に脱章等を着用させるものとする。

(作業日誌)

- 第5条 乙は発掘の実施中、作業日誌を作成し、甲はその提示を求めることができるものとする。

(出土品の取扱い)

- 第6条 発掘出土品の処理については、甲乙協議のうえ乙が甲の名において法令の定めるところにより処理するものとする。

(中間報告)

- 第7条 甲は必要のある場合は、乙に対して業務の進行状況について、報告を求めることができるものとする。

(決算及び精算)

- 第8条 乙は業務が完了したときは、業務に要した費用について決算を行い、決算書を甲に提出するものとする。
2. 甲は前項の決算書の提出を受けたときは、当該決算書に基づき、第3条により約定した金額の範囲内において、乙と協議して精算を行なうものとする。

(発掘調査報告書)

- 第9条 乙は業務が完了したときは、発掘調査報告書を添えて、発掘調査完了報告書を甲に提出するものとする。

(協 議)

- 第10条 この契約に定めていない事項、また契約の事項について疑義を生じた場合は、甲乙協議して定めるものとする。

この契約締結の証として、契約書2通を作成し、甲乙それぞれの署名押印の上、各自1通を保有する。

昭和56年5月1日

甲 松本市城西2丁目5番20号
長野県中信土地改良事務所
所 長 三 村 敬 一

乙 長野県大町市大字大町3,887番地
大町市教育委員会
教育長 一 志 開 平

(2) 大町市平地区

昭和56年度県営ほ場整備事業平地区内における埋蔵文化財包蔵地発掘調査（以下「発掘調査」という）の実施に関する業務（以下「業務」という）について委託者 長野県中信土地改良事務所長 三村 敬一（以下「甲」という）と、受託者 大町市教育委員会教育長 一志 開平（以下「乙」という）との間に、次のとおり委託契約を締結する。

(総 則)

- 第1条 乙は別紙の発掘調査実施計画書に従って業務を実施するものとする。
2. 乙は業務の実施に必要な土地所有者等の承諾を取りまとめるものとし、かつ法令の規定に基づく諸届等を甲に代って行うものとする。

(期 間)

- 第2条 乙は昭和56年8月31日までに、現場における発掘調査を完了し、昭和57年3月31日までに業務を完了するものとする。

(費 用)

- 第3条 甲は業務に要する費用として、乙に支払う金額は、金 2,320,000円以内とする。
2. 前項の費用の支払方法については、乙の業務に支障のないように、甲乙協議して定める。
3. 甲は乙からの費用請求に対し、すみやかにこれを支払うものとする。

(作業の実施)

- 第4条 乙は業務にあたっては、甲の施行する事業の工程に支障のないように努めるものとする。
2. 乙は業務の実施にあたっては、作業表示旗を掲げ、関係者に腕章等を着用させるものとする。

(作業日志)

- 第5条 乙は発掘の実施中、作業日志を作成し、甲はその提示を求められることができるものとする。

(出土品の取扱い)

- 第6条 発掘出土品の処理については、甲乙協議のうえ、乙が甲の名において法令の定めるところにより処理するものとする。

(中間報告)

- 第7条 甲は必要のある場合は、乙に対して業務の進行状況について、報告を求められることができるものとする。

(決算及び精算)

- 第8条 乙は業務が完了したときは、業務に要した費用について決算を行ない、決算書を甲に提出するものとする。
2. 甲は前項の決算書の提出を受けたときは、当該決算書に基づき、第3条により約定した金額の範囲内において、乙と協議して精算を行なうものとする。

(発掘調査報告書)

- 第9条 乙は業務が完了したときは、発掘調査報告書を添えて、発掘調査完了報告書を甲に提出するものとする。

(協 議)

- 第10条 この契約に定めていない事項、また契約の事項について疑義を生じた場合は、甲乙協議して定めるものとする。

この契約締結の証として、契約書2通を作成し、甲乙それぞれ署名押印の上、各自1通を保有する。

昭和56年5月1日

甲 松本市城西2丁目5番20号
長野県中信土地改良事務所
所 長 三 村 敬 一

乙 長野県大町市大字大町3,887番地
大町市教育委員会
教育長 一 志 開 平

第1章 調査状況

2) 大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団

大町市教育委員会では、直接発掘する組織を持っていないので、大町市内の埋蔵文化財包蔵地に関係する、各種調査等も処理するため「大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団」を結成し、同調査団に再委託し発掘調査に当たってきた。大町市内における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査等は、発掘調査遺跡名を用い、遺跡ごとに調査団を組織し発掘調査に当たってきたが、本年度より遺跡の名称が異なる複数の発掘調査が進められるため、昭和54年度より発掘調査を開始した借馬遺跡緊急発掘調査団の組織をその体制のまま名称の変更を行ない、上記調査団とした。

このことから、昭和54・55年度調査体制を合わせてここに載せることとした。

(1) 大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団員名簿（役職の次の算用数字は在職時年数）

団 長	篠崎健一郎（長野県考古学会々員）	54～56		
調査主任	原田 曠（長野県考古学会々員）	54～56		
調 査 員	森 義直（大町高等学校教諭）	54～56	臼井 潤（大町市文化財調査員）	54～56
	荒井和比古（大町市文化財調査員）	54・55	松倉 豊（白馬北小学校教諭）	54・55
	平林 潤郎（松川村教育委員会）	54・55	倉科 和夫（松川中学校教諭）	54
	荒沢 進（大町市社会教育委員）	54～56	三根生 茂（山光洞舎）	55
	宮野 典夫（大町山岳博物館学芸員）	54	清野 勉（大町高等学校教諭）	56
調査補助員	黒岩かおる	54	丸山 鈴加	55・56
	池田和加恵	56	吉沢三三子	56
	寺嶋 仁（専修大学学生）	56	市川 隆之（明治大学学生）	56
事 務 局	横沢 茂（大町市教育委員会教育長）	54・55	一志 開平（大町市教育委員会教育長）	56
	西沢 宗夫（教育委員会教育次長）	54	林 功（教育委員会教育次長）	55・56
	小日向吉光（教育委員会教育次長）	56	飯沢 茂雄（社会教育係長）	55・56
	小日向吉光（社会教育係長）	54		
	大久保隆司（社会教育係主事）	56	木村 隆一（社会教育係社会教育主事）	54～56

なお、現地での発掘調査及び整理作業等に当たっては、下記の教育委員事務局内職員並びに関係者の協力があつた。（順不同 役職等略）

田中 保男 伊東 四郎 荒井 要 遠山 則政 降旗 正光 西沢 要 合津今朝吉
 日下 久夫 倉科 綾子 藤山幸一郎 丸山 雅弘 相沢 文人 川上 元安 塚田 良子
 春日今朝男 寺島 皆美 小日向とみ子 武田 栄子 矢口 三男 宮沢 泰三 降旗美由紀

第2節 発掘調査の実施と経過

1 調査の経過(表1)

大町市内平地区・社地区内の4遺跡の発掘調査は、大町市教育委員会より委託を受けた調査団の、団長・調査主任・調査員・調査補助員が中心となり、現地作業は教育委員会の募集に応募された発掘作業員の方々と共に4月当初の準備期間を経て4月5日の南原遺跡の発掘調査に始まり、10月3日の借馬遺跡をもって終了した。その経過については次の項にわしいが、当初計画では立ち合い調査地区となっていた前田遺跡では、試掘調査の結果予想を上回る遺跡の規模であることが判明し、発掘調査に入ったが、湧水と粘土質の土壌のため発掘調査は難行し、当初計画を大幅に変更せざるをえなかった。しかも、金銭的、時間的制約の中で行なわれる発掘調査ではあるが、できるかぎり広範囲でかつ精度の高い調査に心がけ進められ、実働日数139日、のべ協力者805名、発掘面積9,700㎡に及んだ。

表1 調査の経過一覧

遺跡名	地目	圃場整備 対象区域面積	発掘調査 予定面積	実発掘調査 面積	発掘調査期間(月)										
					4	5	6	7	8	9	10	11~3			
社地区	南原遺跡	水田	1,890,000	500	500	3	7								遺物整理・報告書作成
	前田遺跡	水田		立ち合い調査	4,000	7			24						
平地区	追分遺跡	水田	1,446,000	170	2,400						3	7			
	借馬遺跡	水田		380	2,800						4		3		
計				1,050	9,700	3							3		

2 発掘調査日誌

1) 南原遺跡

- 4月3日 南原遺跡の現地確認と踏査、仮のBMの設定、メッシュの杭打ち作業開始。
- 4月4日 作業用倉庫、工具、記録用具の運搬と設置。
- 4月5日 東西40m南北30mの発掘区の表土除去作業と遺構の検出作業を行なう。その結果数ヶ所ピットを確認。
- 4月6日 数点の遺物を採取する。その後、ピットの掘り下げ、断面図、平面図等実測、記録写真を撮影し南原遺跡の調査を終了する。

2) 前田遺跡

- 4月5日 前田遺跡の現地確認と踏査、試掘確認調査を行ない、土師器・須恵器等の遺物を採取。数ヶ所に遺構の存在も確認する。
- 4月7日 表土除去作業を開始する。途中雨天などで作業が停滞するとともに、遺跡の立地が急斜面なためや、浸水地帯が多く、作業が難行するなか、可能な範囲を拡張する。予想を上回る整穴住居址、ピット等の遺構が検出される。

第1章 調査状況

- 5月1日 堅穴住居址の調査を始める。重複関係のある堅穴住居址が多いため、単独の5号住居址より掘り始める。
- 5月3日 作業員の一人が突風により飛ばされた波トタンによりケガをし入院するという事故が起き、作業員の集まらない現場でもある事から、苦慮する。
- 5月4日 堅穴住居址の掘り下げと、記録・実測・写真撮影等の作業を進める。この間、1号・2号・3号・5号住居址の調査を終了する。周辺の水田に水がかけられ、水位が上がったため発掘区内にも水が入り、調査が不可能な状態となり始める。
- 5月18日 。
- 5月19日 堅穴住居址の掘り下げに合せ床下などにピットが確認され、柱穴群が検出し始める。中に孤立柱建物址になるものがあり、堅穴住居址の掘り下げに合せて、孤立柱建物址の調査にはいる。この間に、建物址1・4号・11号・12号・13号・14号・15号・16号住居址の調査を終了する。
- 5月30日 市民対象の現地説明会を開催。市民約40名が参加したほか、中央道遺跡調査会より、百瀬・島田・樋口氏らが現地を訪れる。
- 6月1日 発掘調査が進行するにつれて、建物址の数も増える。この間に8号・9号・10号・17号・18号・19号・20号・21号・24号住居址、建物址2の調査を終了する。
- 6月10日 。
- 6月11日 発掘区内に浸透してきた水も、ある程度一定量となり安定してくる。この間に、6号・22号・23号・25号・28号・30号住居址の調査を終了する。
- 6月25日 。
- 6月26日 中央道遺跡調査会、樋口調査団長始め10名程度の調査員が現地を訪れる。
- 6月27日 雨天が続き、土器洗いを並行して始める。この間に26号・27号・29号・31号住居址、建物址4の調査を終了する。
- 6月30日 。
- 7月1日 墓塚と思われるピットが検出される。黒色土器の杯6 耳皿1 土師器の小形甕1 杯2 が出土する。
- 7月2日 堅穴住居址の数も残りわずかになる。この間に2回目の中央道遺跡調査会のメンバーが現地を訪れる。調査の終了した堅穴住居址は7号・26号・30号・32号・33号 建物址3となる。
- 7月8日 。
- 7月9日 遺構の掘り下げはほぼ終了し、現地で箇面の整理、遺物整理並びに土器洗い、全景写真等の撮影を行なう。
- 7月24日 前田遺跡での総ての調査を終了する。
- 3) 追分遺跡・借馬遺跡
- 8月4日 追分遺跡・借馬遺跡の現地確認と踏査、作業用倉庫・工具・記録用具の運搬と設置、表土除去作業を始める。
- 8月5日 表土除去作業を進行させるが、遺構等は検出できず、午後になって数ヶ所ピットを確認する。発掘区内の表土除去作業を終了し、重機を借馬遺跡の方へ移動させる。堅穴住居址4ヶ所検出する。
- 8月6日 借馬遺跡での表土除去作業進行に合せて、追分遺跡のピットの掘り下げ、断面図・平面図の作成、記録写真の撮影を行ない、追分遺跡での調査の総てを終了する。遺物の出土は一点もみられなかった。
- 8月7日 借馬遺跡の表土除去作業が終了する。
- 8月8日 借馬遺跡での発掘調査は、3年目を迎え、作業員も調査になれており、順調に調査が進行する。この間に61号・62号・64号・67号住居址の調査を終了する。
- 8月15日 。
- 8月16日 調査が進行するにつれて、柱穴群の中に孤立柱建物址になるものがあり、堅穴住居址にあわせて孤立柱建物址の調査も合せて行なう。この間に65号・66号・70号・77号・78号・79号住居址、建物址29・32の調査を終了する。
- 8月31日 今までに建物址の中央部分の柱穴のあるものは借馬遺跡I・IIではみられなかったが、2ヶ所より高床式の倉庫らしいものが検出され、調査に入る。この間に68号・69号・74号住居址と建物址30・31の調査が終了する。
- 9月1日 。
- 9月15日 。
- 9月16日 建物址32の調査を進行させるのに合せ、建物址32が庇付きの建物址である事が確認される。昨年度のものより大規模で柱列も整っており、昨年検出の建物址も庇付きのものであることに確信を得る。この間に一部箇面の整理を残し調査を終了したものは、63号・71号・72号・73号・75号・76号・80号・81号・82号・83号住居址、建物址33・34・35・36となる。
- 9月28日 。
- 9月29日 現地で箇面整理・写真撮影・遺物整理等の残務作業を行ない、並行して土器洗いを進める。
- 10月3日 借馬遺跡での総ての調査を終了する。
- 10月 前田遺跡より遺物の注記と、土器の検合と補修作業を行なう。借馬遺跡は注記作業のみ。
- 11月 借馬遺跡の注記作業も終了し、土器の検合と補修作業を行なう。実測図・写真・遺物カードを中心として整理をはじめ。
- 12月～2月 借馬・前田遺跡の遺物の実測・一覧表の作成・写真撮影を行ない、原稿執筆作業に入る。
- 3月 残務整理と、原稿・図・写真等刷付けを行ない印刷に回し、本年度事業の実績報告を提出し総ての事業を終了する。

3 発掘調査・整理作業協力者

発掘作業には、地元の主婦のみなさんをはじめ、市民の多くの方々や、高校生の皆さんなどの協力をいただいた。この事業はこうした皆さんの熱心なご協力に負うところが大きい。(順不同 敬称略)

平地区緊急発掘調査

伊藤 真治	海川 春江	伝刀 幸子	伝刀 幸子	伝刀かよ子	下田 大樹	太田 哲夫
伝刀 兼一	海川 良子	西沢 桐恵				

社地区緊急発掘調査

伊藤 真治	横沢 永子	横沢 愛子	横川 晶子	平林なお子	鈴木 元美	原 千代子
中島真佐子	矢口一三	矢口 恒夫	矢口 通利	西沢 桐恵	原田 恵美	飯島 郁生
猪又ユミ子	猪又 一弘	横沢雄一郎	牛越 喜雄	遠藤 陽子	山岸 弥生	松井 恒雄
矢口ふさ子	平林さち子	榎葉 秀範	榎葉 順子			

大町北高等学校社会科クラブ

園村ゆかり	小林 宏子	松沢 美加	小林久美子	吉田 敬子	岡川 幸子	傘木紀久子
宮田香穂里	太田千恵美	大阪真亀子	岸川恵美子	大久保美代子	津滝たか子	山岸 楨

大町高等学校社会科研究クラブ

山岸 洋一	臼井 邦彦	横沢 三男	大西 元晴	田中 秀明	降旗 徹馬	丸山 環
大西 一代	牛越 みき	丸山 史子	中村 暁子	丸山 京子	中島 啓介	小野沢 毅
三枝 直子	上野 美秋	石田 弘美	笠井しのぶ	降旗ゆかり	西尾 真美	三沢 義春
北原 誠	宮田 斉昭	林 征弥	勝野 学	稲田 諭司		

4. 関係地主

圃場整備対象地区にある遺跡の範囲内に、土地を所有しておられた地主のみなさんには、事業の主旨をご理解いただき快くご協力をいただいた。ご芳名を記し厚くお礼を申しあげる。(順不同、敬称略)

平地区関係地主

渡辺 文一	平林 忍	遠藤 大八	佐藤 武文	西沢 修
-------	------	-------	-------	------

社地区関係地主

横沢 文彦	横沢 啓夫	原 浩	横沢 正	横沢 武夫	鈴木 忠博	矢口省一郎
-------	-------	-----	------	-------	-------	-------

第3節 発掘調査と整理の方法

1 発掘区の設定

大町市では、市内埋蔵文化財包蔵地の分布調査が行なわれていないため、遺跡の範囲を知るために、ほとんどの場合事前に市単独の調査費により試掘確認調査を実施し、遺跡の範囲を限定しなければならない。

そこで、昭和56年度農業基盤整備事業に先立ち、過去に遺物の出土地点等を記した若干の資料を基に、平地区においては昭和55年11月に試掘確認調査（調査費100,000円）を実施した。また社地区においては南原遺跡は段丘の末端部分であることや、小規模な面積であることから、対象地区全域を発掘調査することとし、前田遺跡は急斜面な立地条件で、現在の集落の下に遺跡の中心部があると予想されたので、農業基盤整備事業が始まった時点で立ち合い調査を行なうこととした。

1) 大町市平地区

平地区の発掘は5年目を迎えており中でも、借馬遺跡は過去2年間にわたり発掘調査が進められてきたので、資料も蓄積されており遺構の検出が予想される土層が明らかとなっていたことから、昭和56年度の農業基盤整備対象地区内を磁北線を基準として10mの方眼に区切り、南東スミに一ヶ所を原則として、検土林により土壤調査を行ない、遺構検出が期待できる土層の地区を選定した。その後、選定した地区の10m方眼につき、各方眼ごとに4㎡の表土を除去し遺構検出を行ない、借馬遺跡は東西60m南北30mの区域を発掘区として設定した。また追分遺跡も国道148号線をはさみ対位するため、本来は借馬遺跡の一部として考えられたので、借馬遺跡と同様に試掘調査を行なった。その結果遺構の検出は見られなかったが中近世に属すると思われる土器片が数点出土したことから、その地点を中心に東西60m南北50mの区域を発掘区として設定した。

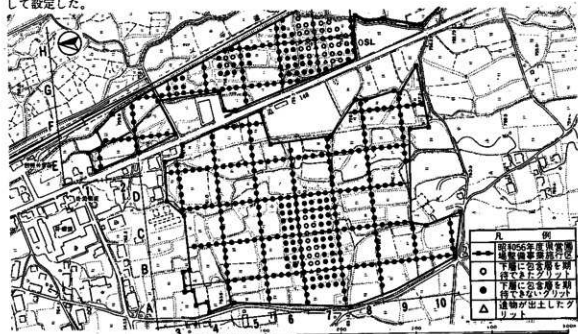


図3 平地区試掘確認調査区制図 (1:5,000)

2) 大町市社地区

社地区における発掘調査は初めてのころみであり、遺物出土地点の若干の資料があるものの、遺跡の範囲を知るためには参考とならなかった。しかし、南原遺跡は遺跡範囲の一部分が農業基盤整備事業にかかるところから、小規模な対象面積となったため東西30m南北30mの全面を発掘区として設定した。

また、前田遺跡は急斜面な立地条件となるため若干の遺物出土地点が確認されているものの、農業基盤整備事業は遺跡の範囲の外郭部分である事が予想されたため、当初計画の中では立ち合い調査として協議が終了していた。ところが南原遺跡の発掘が当初計画より大幅に短縮されたため、昭和56年4月に入り前田遺跡の試掘確認調査を試みた結果、遺物が多数出土するとともに数ヶ所に遺構が検出された。このために急遽調査団会議を開催し発掘調査を実施する方向で意見の同意が求められ、その後、発掘区の設定を行なった。しかし急斜面な立地条件に加えて、現在の集落より約100mほど南下すると湧水がみられ、試掘穴も短時間に満水になってしまうことから、東西50m南北80mの区域だけが割溝を掘るなどすれば発掘調査が可能ではないかとの調査団会議の方向付けから、同地区を発掘区と設定した。

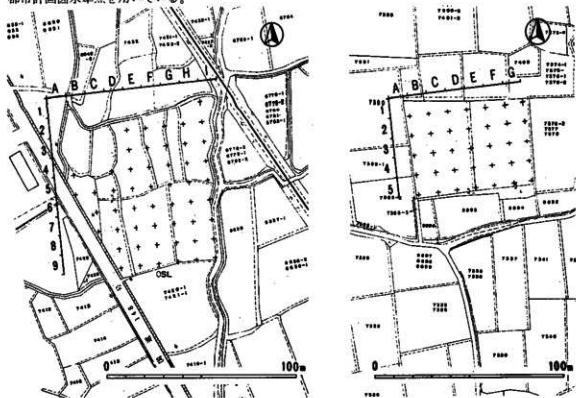
2 発掘調査の方法

農業基盤整備事業による緊急発掘調査では、ほとんどの遺跡が全面破壊からのがれられないため、工事着工前に記録保存を目的として行なうものであり、できるかぎり精密な記録化が望まれた。しかし、契約段階においては、遺跡の範囲の10分の1を調査予定面積としてトレンチ方式により試掘を行ない調査予定地区内の遺跡の広がりに合わせて発掘区を広げてゆく計画であったが、その後市独自で行なった試掘確認調査の結果により、ほぼ遺跡の範囲が限定されたことから発掘調査団により再度検討を重ね、契約範囲内での農業基盤整備事業にかかる遺跡の範囲内の全面発掘をめざすこととした。しかし、この全面発掘については平地・社地区という大町市内でも両端部分に位置し遠距離となるとともに、両地区内におおの2遺跡があり調査員等が移動するだけでも困難な実状にあった。さらに、時間的・金銭的制約や、調査員・発掘員の不足などの事情から、機械力により表土剥ぎ作業を表土下20~50cm前後まで実施した。

遺構の検出作業は従来通りの方法でジョレンにより上土を削り検出に努めている。遺構についてはできるかぎり断面図を作成した。土壌・集石土壌等は2分割を原則としたが、必要に応じて多分割による立ち割りをおこなった。遺物を持つ土壌の一部については、見通し図をとった。住居址の調査は平面観察以外に土層観察を重視し、重複関係を明らかにした。従って住居址中央に幅50cm~1mのトレンチを入れ、土層観察および床面の状況を一部確認しながら、次第に全面発掘に切り替えていった。掘立柱建物址については、平面観察により柱痕跡の確認につとめた。平面観察により柱痕跡の確認できないものについては約10cm土壌内を掘り下げ柱痕跡の確認につとめ、それでも確認できなかったものについては2分割を原則として立ち割りをおこなった。遺物の出土状態の記録はすべての遺構ごとにおこない、原則として住居址内より出土した遺物については分層された層位ごとにまとめ取り上げをおこない、床面直上のものと、完整・半完整または計測復原が可能な遺物については必要に応じて実測図とし、一部スタジア測量により点で記録した。測量は道方実測とオフセット測量とを併用した。基準点は各遺跡においてそれぞれ設定し、発掘区域内を磁北を基準として10m間隔の方眼に地区割りを行ない、それに基づき測量した。遺構実測図にあたっては、遺物の出土状況や集石・炭化物などを記録するものと各遺構全体を記録するものとに分け、必要に応じて部分的な実測図の作成をおこない、遺構の実測図は20分の1、カマド実測図や遺物の

第I章 調査状況

集中して出土した状況を記録するものについては10分の1を原則とした。土層観察の際は数名で確認し、記述にあたっては遺構担当者の記述法を原則とした。遺構番号は遺構の種類ごとに検出順につけた。しかし借馬遺跡の竪穴住居址と掘立柱建物址については、3年間の統一番号とした。絶対標高については大町市都市計画図水準点を用いている。

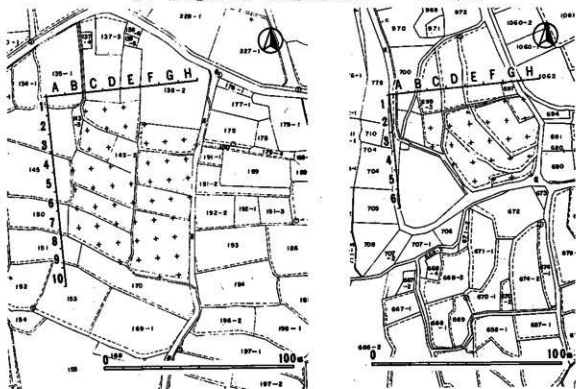


1 借馬遺跡C地区

2 追分遺跡

図4 借馬遺跡C地区・追分遺跡発掘区割図

(1:2,000)



1 前田遺跡

2 南原遺跡

図5 前田遺跡・南原遺跡発掘区割図

(1:2,000)

3 整理の方法

遺構実測図等の整理方法は発掘調査時において、あらかじめ設定した測量杭に基づき、1mm方眼(B3)の実測用紙を用いて、遺構ごとに作成した実測図をトレースしたものを4分の1に縮小して、竪穴住居址・掘立柱建物址等は80分の1、カマド部分・遺物の集中して出土した部分は40分の1にして報告書の図版とした。平面実測図と土層図は発掘調査時に合せて作成したが、断面図の一部は発掘後に作成したものである。遺構の全体図は、各実測図を縮小コピーにより100分の1の第2原図を作成しトレースしたものを、報告書の頁に合わせて縮小し図版に用いている。

遺物の整理方法は、手順として、洗浄—遺構・出土地点・層位・発掘時の取り上げ番号などの記入—分類—接合補修—実測(図化)—着色—写真—覧表作成という順序で原則として行なった。基本的には遺物で実測可能なものはできるかぎり図化するよう努め、土器類の実測図は縮小コピーを用いて2分の1の第2原図を作成、石器類や鉄器類は原図のまま第2原図を作成した。その後図版のレイアウトを行ないトレースした図を原則として報告書の頁に合せて2分の1に縮小したものを図版として用いた。

第Ⅱ章 大町市の概況

第1節 大町市の環境

この地方が、わが国の歴史の上に現われるようになったのは約900年前、伊勢の皇太神宮御領としての、仁科御厨が設定されてからである。早くからこの地方に定着していた仁科氏は、この御厨を預って神宮への神役を果たしていたことから、ようやく勢力を得、さらに進んで、大町・平・常盤の開発にも力を用いて、これを皇室御領仁科庄とし、みずからはこれをも預って支配するようになった。

当初は、社の館の内に居館し、平地区の森城を固めていたのであるが、鎌倉時代に入ってから大町に居館を移して広く糸魚川方面にまで勢力を張るにいたった。この地方が仁科と呼ばれるようになったのはこのような歴史的事情があつてのことである。仁科氏は、早くから京都や伊勢と深いつながりをもっていた関係で、先方の進んだ文化をとり入れてこの地方の開発に意をそそぎ、また、仁科神明宮本殿及び中門（国宝）等のすぐれた文化財をのこしている。しかし今から約400年前戦国時代の終り近くにいたって武田信玄のためその家系を絶っている。信玄は、その子盛信をつかわしてその名跡をつがせたが、天正9年、高遠城に去ってからまもなく松本城を管轄した小笠原氏の勢力下に入ることになり、この地方の支配関係に一大変革をきたすこととなったのである。その後、江戸時代になってからは、歴代松本藩主の最も有力な領域として明治維新に及んで北安曇地域には大町・池田・松川の3組を置いて治めていた。大町市域では、大町平（大町及び平地区11ヵ村）と八郷（社区8ヵ村）とが大町組に、常盤地区5ヵ村が松川組に、山ノ寺村が池田組に属していた。仁科氏が領有していた年時から、この地域は北方、日本海岸の北陸道ぞいの糸魚川方面と、南方、松本方面とを結ぶ千国道（後の糸魚川街道）に通じており、海産物をはじめ多くの物資が流通していたのであるが、江戸時代に入つては、信州における最も重要な経済的交通路の一つとして重視されるようになり、それらの物資や付近から多く産出した麻類その他の集散地であった大町は、かつての城下町的性格を基盤として商業都市として栄えるにいたつたのである。明治維新後大町市域は、一時松本県に属したが明治4年筑摩県の成立するに及んでその管下に入り、同9年筑摩県が長野県の管下に移ることとなった。明治8年村々の合併の議が進み大町地区の2ヵ村を大町村、社地区の9ヵ村を社村、平地区の9ヵ村を平村、常盤地区の5ヵ村を常盤村とした。同22年町村制が実施され、その後多少の推移を経て昭和29年7月1日にいたって町村合併促進法により、1町3村の間に合併の議が成立し大町市が誕生した。

大町市のある長野県北西部は、西にフォッサマグナの西線、糸魚川―静岡構造線上に発展した飛騨山脈の榑ヶ岳（3,179m）・燕岳（2,763m）、北部のいわゆる後立山連峰―蓮華岳（2,799m） 爺ヶ岳（2,670m）・鹿島榑ヶ岳（2,890m）・五龍岳（2,814m）など3,000m級の山々が屏風のようにそそり立ち、大町市街のある松本盆地北端の平地を隔てて、東には大峰山地、鷹狩山（1,149m）などの中山山地が地塁の如き様相を呈している。この東西の山地に挟まれて、南北に平坦地が伸びている。その大部分は、西山からの扇状地によって形成されており、南から神明原乳川扇状地、高瀬川扇状地、鹿島川扇状地が続いていて、大町市街地及び大町・平地区は、高瀬川・鹿島川の複合扇状地の扇尖部に発達する。常盤地区は高

瀬川の氾濫原及び神明原乳川扇状地上に立地し、社地区は東山山麓の段丘地形上に占地する。一方、平地区北部は、後立山連峰の前面に南北に伸びる仁科山地（小熊山 1,079m など）と東山との間にできた地構湖（断層湖）たる仁科三湖—木崎湖（最大水深29m）・中綱湖（12m）・青木湖（62m）一の周辺の山状な地域に集落が散在する。

大町市の地形的特徴で地域を大別してみると、以下の如くである。

- ① 西部山岳地帯
- ② 西部山麓地帯—常盤清水から平鹿島にかけての地域
- ③ 中部平坦地—常盤岩掛から平木崎にかけての地域
- ④ 東山山麓地帯及び段丘地帯—杜宮本から大町三日町にかけての地域
- ⑤ 東部低山地帯—中山山地・大峰山地
- ⑥ 北部山間地帯—平船尾から白浜・藪沢にかけての地域

これらの地形的特徴が、遺跡や集落の立地や時代的な分布に大きな影響を与えていることは申すまでもないであろう。

これらの地域を、概して北から南へ河川が流れる。いずれも北アルプスの峰々に源を発する、鹿島川・筈川は、野口付近で高瀬川と落ち合い、さらに青島付近で、青木湖北佐野坂山（887m）を堰川との分水嶺として、仁科三湖を源とする農具川が合流し、明科町押野崎付近で犀川に流れ込む。農具川は鹿島川扇状地末端部、東山山麓を流れ、沿岸には低湿地をつくるが、高瀬川は、急峻な西山から流れ出し、上流部の河川の姿を明瞭に表わしている。なお、この高瀬川の豊富な水量が注目され、高瀬ダム・七倉ダム・大町ダム等が建造され、電力開発が進みつつある。また、豊富な電源は大町市の工業・産業の発達にも一役買っている。

大町市の位置は、内陸部から海浜部へ出る時、必ず通らなければならない交通上の重要な地点であり、その重要性は古代までさか上る可能性もある。そして現在も国鉄大糸線、国道147・148号線が通じているように、その重要性は変わらない。この交通条件に、豊かな自然環境が結びついて、観光が新しい産業として発展しつつあり、今後も発達が期待されている。

第2節 大町市の遺跡

大町は、古代・中世の伊勢神宮領である仁科御厨と皇室にゆかりある荘園の仁科庄で古くから知られた地である。さらにさかのぼれば、青木湖周辺に分布するクマンバ遺跡で代表される旧石器時代の遺跡から始まり、環状列石で知られる縄文前期の上原遺跡など数多くの遺跡をみることができる。しかし、それに対して長野県下では最も考古学的調査に立ち遅れた地域であり、今後の分布調査など詳細な調査研究が期待されるところである。

このような状況の中で、長野県中信土地改良事務所により施行された、平・社地区の圃場整備事業が、仁科三湖から平地区を通り南流する農具川流域の遺跡と、社地区の段丘上に数多く分布する遺跡地帯にかかるため、次のように緊急発掘調査がなされた。

昭和52年度	平地区	来見原 (28-6-1)
昭和53年度	平地区	分水 (性格不明で未清)
昭和54年度	平地区	借馬Ⅰ (18-8-1) 借馬 (18-8-1試掘調査)
昭和55年度	平地区	借馬Ⅱ (18-8-1) トチガ原 (18-4-4立ち合い調査)
昭和56年度	平地区	借馬Ⅲ (18-8-1) 社地区——追分 (18-6-1) 前田 (44-4-2) 南原 (44-1-1)

これらの7遺跡を地域区分すると、平地区の遺跡として、来見原・分水・借馬・トチガ原・追分の5遺跡、社地区の遺跡として、前田・南原の2遺跡がある。付近にはまだ未調査遺跡が点々と連続している。

大町市の遺跡数は表1に示してあるが、表にみられる如く、縄文・52、弥生・6、古墳・奈良・平安・11、古墳・14、中近世・22、時期不詳・4、の順になっていて、やはり、縄文時代の遺跡が多数を占めている。縄文時代でも中期が多いことは、中部高地でごく普通にみられる現象であるが、それにもまして、前期遺跡の占める割合が大きいというのは、この大町・北安曇地方の特徴であると考えられる。また、早期の遺跡は、少ないながらも遺跡立地を考える上で貴重な存在である。ここで、大町市内を平・大町・社・常盤の各地区に分け比較すると、平地区

表2 大町市内時代別遺跡数一覧
(昭和54年3月現在)

時	代	遺跡数	計
縄文時代	草創期	2	52(3)
	早期	5	
	前期	13	
	中期	17(4)	
	後期	3(3)	
	晩期	3(6)	
	不明	9	
弥生時代	前期	0	6(5)
	中期	1(2)	
	後期	3(3)	
	不明	2	
古墳・奈良・平安時代	土師器	7(6)	11(2)
	須恵器	3(0)	
	灰輪陶器	1(6)	
古墳		14	14
中近世	城址・居館址	14	22
	社寺址	8	
時期不詳		4	4
合		計	109

()内数は複合しているものを記載している

区では、青木・中綱・木崎の仁科三湖周辺には縄文時代の遺跡が圧倒的多数を占めており、仁科三湖から流れ出し、鹿島川扇状地の東端を南流する農具川の両岸には古墳時代から平安時代にかけての遺跡が多くみられる。また、今まで平地区で弥生時代の遺跡がほとんど見られなかったが、昭和54年より調査の始

まった借馬遺跡からは、弥生時代の後期から平安にわたるまでの大集落が確認された。木崎湖の南より始まる断丘の上には小規模ではあるが古墳の遺築がみられ、東山から流れ出る沢などにより形成された小さな扇状地や崖線上には小規模ではあるが遺物の散布地が確認されている。灰釉陶器などは、断丘と鹿島川扇状地の接するこのような付近から過去において点々と出土していることから、鹿島川の氾濫の影響により、集落の中心が扇状地の中より山際などの小高い場所に移動したものと考えられる。大町地区は中世以後、仁科氏に開発された地域であるため、中近世の遺跡がほとんどを占めているが、周辺部や断丘上には縄文時代や、少数ではあるが平安時代の遺跡がみられる。社地区では縄文時代をはじめ、各時代の遺跡がみられる。中でも大町市内では数少ない弥生時代のもが集中している。このように各地域により時代の異なる遺跡が確認されていることは、これらの地域性の違いが各時代の人々を定着させ、各時代により移り住んでいたのか、又は分布調査が進んでいないことから、各時代の遺跡の確認がなされていないのかは、大きな課題の一つでもある。

以前より、学術調査は上原遺跡など数例にすぎず、それがかえって遺跡の保存を助長していたものの、近年の大規模開発の波の中で、今度は逆に調査の遅れが裏目に出ており、園場整備事業に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査は、時間的、金銭的な制約の中で緊急度を増し続けられ、広範囲にわたり遺跡が消えていく中で、従来このような遺跡の調査が殆ど行なわれたことはなく、遺跡のあり方を知ることに加え、文化財を保護するうえにも、ある程度成果を上げることはできたのではないだろうか、今後の研究の一助となれば幸いである。

第II章 大町市の概況

表3 大町市内遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良・平安	中・近世	備考
				草	早	前	中	後					
1-3-1	エビスマ原遺跡	大町市大字平エビスマ原(湖岸)					○?					1-8128	
1-4-1	湖西北遺跡	〃 〃 (湖底)					○?					2	
1-6-1	青木Ⅰ遺跡	〃 青木 (湖底)	○									松本県ヶ丘高校 14-8123(8)	
2-4-1	クマンバⅠ遺跡	〃 白浜青木湖北岸(湖底)	○										
2-4-2	クマンバⅡ遺跡	〃 〃 (〃)		○									
2-4-3	クマンバⅢ遺跡	〃 〃 (〃)					○?						
2-5-1	白浜Ⅰ遺跡	〃 白浜 (〃)					○?					4-8125(1)	
2-5-2	白浜Ⅱ遺跡	〃 〃 (〃)					○?					5-8129(2)	
2-5-3	白浜Ⅲ遺跡	〃 〃 (〃)					○					6-8127(3)	
2-5-4	一軒家遺跡	〃 加藤 (〃)					○?					10-81290(3)	
2-6-1	菰沢遺跡	〃 加藤菰沢 (湖湖)					○						
2-8-1	家の下遺跡	〃 〃 家の下 (湖底)		○			○	○				11-81310(2)	
2-8-2	ササナシノ遺跡	〃 〃 さきんぼ (〃)					○					12-75730(1)	
5-4-1	神谷遺跡	〃 中綱神谷20090					○					16-75710(2)	
6-1-1	青木Ⅱ遺跡	〃 青木 (湖底)					○	○				14-8123(8)	
6-1-2	大行原遺跡	〃 加藤					○?					9-5365(9)	
6-1-3	後山遺跡	〃 湖端					○	○					
10-4-1	中道遺跡	〃 海ノ口北村中道14342						○				18	
11-2-1	南入日向遺跡	〃 崩沢南入日向17512イ号					○					19-0(2)	
11-3-1	下海道遺跡	〃 一津下海道12888の1					○	○	○			20	
13-1-1	一津遺跡	〃 海のロー津					○?			○			
13-2-1	上の山遺跡	〃 稲尾上の山台地					○?						
17-2-1	森城跡	〃 森					○	○	○	○?	○	32	
17-2-2	森湖底遺跡	〃 〃					○	○					
17-2-3	下畑遺跡	〃 〃 下畑								○?			
17-4-1	鬼塚古墳	〃 〃 (山腹)							○			93	

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良-平安		中・近世	備考
				草	早	前	中	後			晩	中		
17-4-2	狐穴古墳	大町市大字平森 狐穴								○				93-5368
18-1-1	山崎神社境内	〃 平山崎					○							25- 燧
18-4-1	コボレ沢遺跡	〃 〃					○?							
18-4-2	狐久保1号古墳	〃 〃								○				
18-4-3	狐久保2号古墳	〃 〃								○				
18-4-4	トチヶ原遺跡	〃 〃			○			○						35
18-4-5	茶臼山遺跡	〃 木崎				○	○							
18-5-1	山城跡	〃 僧馬山中											○	
18-8-1	僧馬遺跡	〃 僧馬								○	○	○		大町市教委 38-(33)
18-8-2	大林遺跡	〃 〃				○								36
18-8-3	あれば遺跡	大町市大字大町三日町分水								○				46
18-8-4	かしわくずれ遺跡	〃 〃 〃								○	○	○		45
26-3-1	上原遺跡	大町市大字上原(台地)				○								大町山岳博物館 41-5371 58現設
26-3-2	石仏遺跡	〃 北条屋敷石仏1640				○								
28-3-1	来見原1号墳	大町市大字大町三日町来見原								○				105
28-3-2	来見原2号墳	〃 〃 〃								○				106
28-3-3	来見原3号墳	〃 〃 〃								○				107
28-3-4	山ノ神古墳	〃 〃 〃								○				104
28-3-5	山ノ神遺跡	〃 〃 大笹					○				○	○		50-5354 (燧)
28-6-1	来見原遺跡	〃 〃 来見原								○	○	○		48
28-6-2	大笹古墳	〃 〃 大笹								○				102-5355 (燧)
28-6-3	あま池古墳	〃 〃 〃								○				103-5356 (燧)
28-8-1	若一王子神社	〃 儀町											○	
30-2-1	天正寺跡	〃 十日町											○	
30-2-2	彈替寺跡	〃 九日町											○	
30-3-1	霊松寺山遺跡	〃 山田町				○								51-5361 (燧)

第Ⅱ章 大町市の概況

No	遺跡名	所在地	旧石器	縄文					弥生	古	奈良・平安	中・近世	備考	
				草	早	前	中	後						晩
30-3-2	妙喜庵跡	大町市大字大町九日町											○	
30-5-2	大念寺跡	〃 掘六日町											○	
30-8-1	南原城跡	〃 東若宮町											○	
30-9-1	北郷遺跡	大町市大字社松崎							○					72
31-3-1	長平遺跡Ⅰ	大町市大字大町長平(台地)			○		○							53
31-3-2	丑館遺跡	大町市大字社松崎(〃)								○	○			
31-5-1	長平遺跡Ⅱ	大町市大字大町長平(〃)			○		○							
31-5-2	長平遺跡Ⅲ	〃 〃 (〃)				○?								
32-5-1	西の原遺跡	大町市大字常盤泉				○								
32-8-1	長畑遺跡	〃 清水			○	○						○		61-5379 60
32-8-2	がにあらし遺跡	〃 〃				○								
33-3-1	松崎古城跡	大町市大字社松崎			○			○	○	○				70-5385 69
33-3-2	道端遺跡	〃 館ノ内						○?	○	○	○			76-60
33-3-3	中城原遺跡	〃 〃				○		○						73-5387 69
33-6-1	古町遺跡	〃 〃								○	○			
34-3-1	館ノ内居館址	〃 〃											○	
34-3-2	山城跡	〃 〃											○	
34-3-3	山下神社跡	〃 山下											○	
34-3-4	常福寺跡	〃 〃											○	
35-1-1	大崎遺跡	大町市大字常盤清水大崎				○								
35-1-2	九津遺跡	〃 〃				○								
35-1-3	長畑城跡	〃 〃											○	
35-1-4	北山平遺跡	〃 清水大崎北山平				○								
35-3-1	神明原遺跡	〃 〃 神明原				○								
37-2-1	前畑遺跡	大町市大字牡丹生子				○?								
37-2-2	山寺庵寺跡	〃 岡田											○	79

第2節 大町市の遺跡

No	遺跡名	所在地	旧石器	縄文					弥生	古	奈良・平安		中・近世	備考			
				草	早	前	中	後			晩	中			後	墳	土
37-2-3	丹生子城跡	大町市大字社丹生子												○			
37-4-1	北谷遺跡	〃 関田												○	○	○	
37-6-1	二本松遺跡	〃 関田二本松						○									
37-6-2	堂平廃寺跡	〃 関田												○			
39-1-1	イボ岩遺跡	大町市大字常盤神明原				○		○									
39-7-1	音の沢遺跡	〃 西山				○										66-5381(71)	
39-8-1	西山居館跡	〃 〃												○			
40-3-1	城の基城跡	大町市大字社関田												○			
40-3-2	寺畑遺跡	〃 曾根原				○										77	
40-4-1	須沼居館跡I	大町市大字常盤須沼												○			
40-4-2	中屋遺跡	〃 須沼												○			
40-4-3	須沼居館跡II	〃 〃												○			
40-6-1	五十畑遺跡	大町市大字社曾根原												○	○	87-54	
40-9-1	洞遺跡	大町市大字社宮本				○											
40-9-2	神宮寺跡	〃 宮本												○			
40-3	仁科神明宮	〃 宮本												○			
43-1-1	スズリ岩遺跡	大町市大字常盤清水				○											
44-1-1	南原遺跡	大町市大字社宮本												○	○	○	90-54
44-1-2	豊の上遺跡	〃 山の寺												○			
44-1-3	社口遺跡	〃 宮本				○		○						○			
44-2-1	榎畑遺跡	〃 山の寺												○			
44-4-1	押出遺跡	〃 山の寺押出												○			
44-4-2	前田遺跡	〃 山の寺												○	○	○	

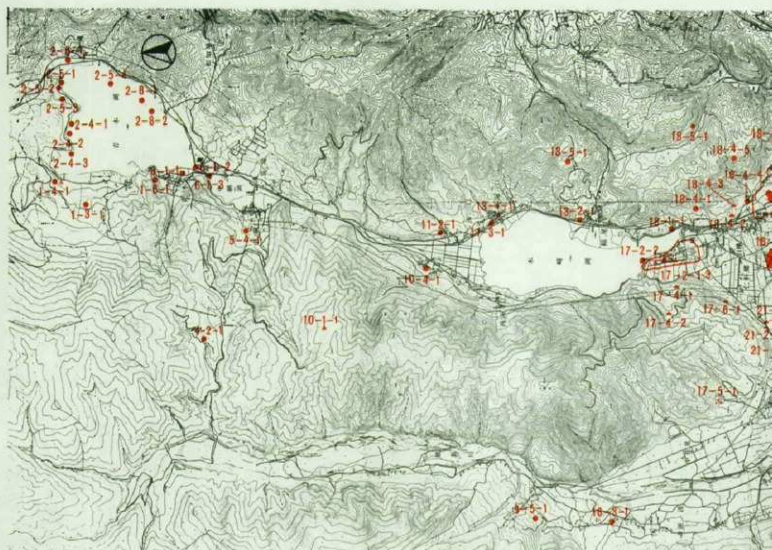
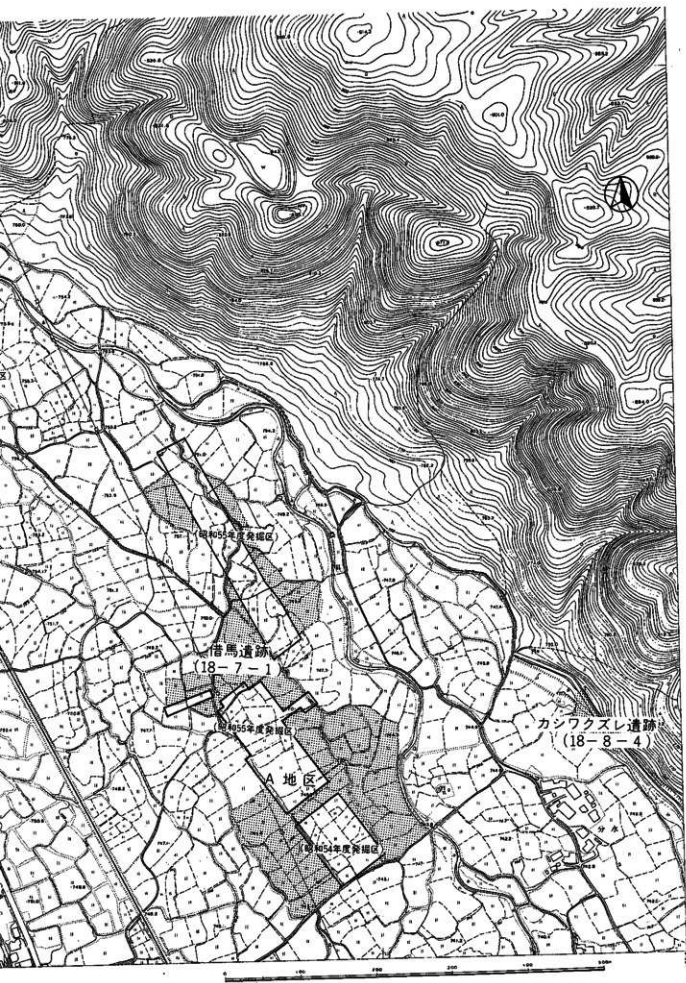


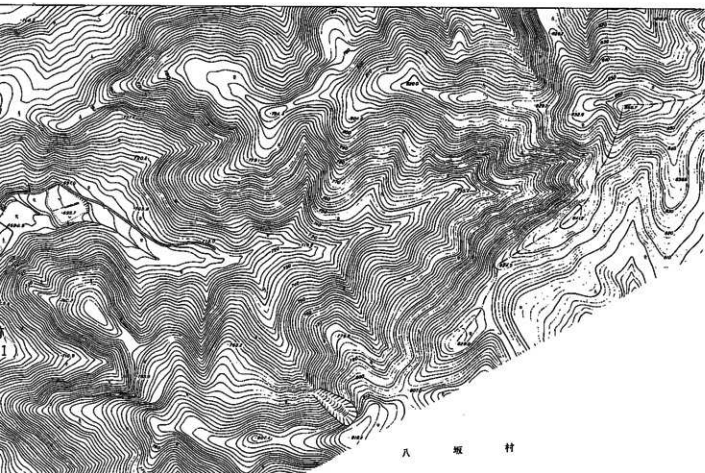


図6 大町市内遺跡分布図 (1 : 50,000)









八 坂 村



池 田 町



图 8 前田遺跡・南原遺跡付近地形図 (1:5,000)

第三章 出土遺物の分類と遺構の時期区分

第1節 出土土器の分類

借馬遺跡C地点調査によって多量に出土した遺物の主体は、古墳時代後期～平安時代前期～中期に属するものである。また、市内社前田遺跡においても古墳時代末～平安時代終末に属する遺物が多量に出土している。ここでは前田遺跡の資料も含めて、当地方の古墳時代後期～平安時代の土器を観察し、考えてみた。

1 土器の手法と変遷

土器は、粘土紐巻き上げか、粘土の輪積み、ロクロにより成形される。中には手づくわで成形されるものもある。成形後には、内外面を「ナデ」「ヘラケズリ」「ヘラミガキ」「ハケメ」等で整形される。ナデにはヘラナデ(ナデa)、ロクロナデ(ナデb)がある。ナデaは土師器製と平安時代以前の土師器、黒色土器(内面黒色処理した土器)の杯などが主で、ナデbは須恵器種ほぼ全器種と平安時代以後の土師器、黒色土器の杯、小形甕、土師器製などが主である。ヘラケズリは、手に持ってヘラケズリする(ヘラケズリa)、土器を据えたままヘラケズリする(ヘラケズリb)、底部の中央部に残るヘラ切りの痕跡の凸部のみを削り落とす(ヘラケズリc)、ロクロの回転を利用した回転ヘラケズリ(ヘラケズリd)がある。ヘラケズリaは平安時代以前の土師器が主流で、ヘラケズリbは土師器製が主である。ヘラケズリc、dは須恵器杯が主である。ヘラミガキは、細いヘラミガキ(1～3mm・ヘラミガキa)と太いヘラミガキ(4～8mm・ヘラミガキb)がある。ヘラミガキaは土師器、黒色土器杯に多く、ヘラミガキbは甕など大形のものに多い。ハケメ(ハケ整形)は、はっきりとハケの沈線が捉えられるハケメと浅く細い線(中には力の関係から深いものもある。)のハケナデがある。ハケメは板状工具及び歯状工具で器面を削る行為や強く撫でた時の痕跡、ハケナデは板状工具で器面を撫でた時の痕跡と考えられる(板状工具の器面への当る角度によってもその残る痕跡には違いがあり、その板状工具の木目の深さ、また工具にかかる力の強弱によっても違いが得られると思われるが、今回はそこまで追求して観察できなかった。)ハケメの範中にはいるかどうかははっきりとしないが、最初は須恵器で使用され、平安時代前期から、土師器製口縁部内面、小形甕胴部に使用されるロクロ回転で板状工具及び歯状工具により施される、回転ハケメとも呼べる、カキ目がある。須恵器に施されるカキ目と平安時代後、小形甕に施されるカキ目とは直接的につながるものかどうかは資料が少なくはっきりしないが、後者のカキ目は、前者のカキ目より太いものや、深く施されるものもあり、平安時代になり須恵器にカキ目手法はほとんど用いられなくなることで、後者には地域的な分布を示すこと等から前者と後者のカキ目の関係は薄いものと考えられる。他に整形手法としては、土師器にオサエ、指ナデ等、須恵器にタタキ目等がある。

時期別に見るならば、古墳時代後期では、土師器、黒色土器(内面黒色処理した土器)でナデa、ヘラケズリa、b、ヘラミガキa、b、ハケメ、ハケナデ等、須恵器でナデb、ヘラケズリa、c、d、カキ

目、タタキ目等の手法が見られるが須恵器の数量は少ない。供膳形態の土師器、黒色土器杯には無椀杯、有椀杯がある。有椀杯は後葉～終末になると椀が退化し小さくなり無椀杯と同一化していく。煮沸形態の土師器甕は長胴甕が主流であるが、一部にやや球形胴の甕が見られる。甕の成形、調整は後葉～終末になるにつれて成形痕などが残り、整形が雑になっていく。長胴甕は前葉～中葉にかけては、胴部に脹らみをもち強く外反する口縁部のものが主流であるが、後葉～終末になると口縁部が短かく外反するもの、胴部が筒形で口縁部が外反するものも多くなる。甕の底部ほとんどに木の葉痕が見られる。奈良時代になっても手法にはほとんど変化しないが、須恵器の割合が増し、供膳形態の主流を占めるようになる。土師器、黒色土器杯は、有椀杯が消滅し、丸底の無椀杯のみとなる。供膳形態の須恵器杯は、丸底、丸底的な平底、高台付等でナデb、ヘラ切り、ヘラケズリc・dの手法である。杯と組合わさる須恵器蓋も多くなり、偽宝珠の紐をもち身にかえりのないものとなる。土師器甕は口縁部を軽くクロロナデするものも見られる。平安時代になり、須恵器杯等に回転糸切り技法が出現し、前時代より平底となり、平安時代前期～中期まで供膳形態の主流を占めているが後期になると減少し、貯蔵形態が残るのみで、供膳形態から姿を消す。土師器、黒色土器の杯、小形甕等は、クロロ成形が使用されるようになり、回転糸切り技法が出現し、須恵器同様、前時代よりも平底になる。平安時代前期末～中期初からは黒色土器に施釉陶器の影響を受けた高台付の皿、杯が現われる。土師器の高台付のものは黒色土器より後出し、平安時代中期末～後期初に出現する。平安時代中期になると黒色土器は供膳形態の主要な要素を占めるようになってくる。また、内外面ヘラミガキ、底部までヘラミガキする内外面、全面黒色で良好な緻密な胎土で、堅固な焼成の畿内黒色土器の影響を直に受けたと思われる、黒色土器も平安時代中期後葉～後期で見られる。平安時代後期後半になると土師器供膳形態に中世土師器(カワラケ・土師質土器)の元祖的な小形の皿が出現する。平安時代後期になると灰釉陶器が多く搬入するようになり、後期において供膳形態の主要な一要素となる。灰釉陶器のほとんどは、折戸53号窯期のものである。煮沸形態の土師器甕は、平安時代前期末頃から成形後、口縁部にナデbを施し、口縁部内面にカキ目を施すものも現われる。これらの胴部外面にはすべて縦位のハケ目が施される。平安時代前期～中期には武蔵型甕と呼ばれる、口縁部クロロナデで、ヘラケズリア、bを多用した、薄い器壁の甕も見られる。武蔵型甕は、口縁部が「くの字」状になるものと「コの字」状になるものの2種類があるが前者が先行する。平安時代後期になると煮沸形態で今回は小破片でしか出土しなかったが羽蓋が出現する。総じて、平安時代の手法は、土師器、黒色土器でナデア、b、ヘラケズリア、b、d、ヘラミガキa、b、ハケメ、ハケナデ、カキ目等、須恵器でナデb、ヘラケズリb、d、ヘラ切り、静止糸切り、回転糸切り、タタキ目等が見られる。

2 土器の分類

土師器、黒色土器(㊸) 内面黒色処理した土器、(㊹) 内外面黒色処理した土器)、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器が出土している。器種については従来、一般に使用している器種名に従う。土師器では、供膳形態で杯、皿、鉢、高杯、煮沸・貯蔵形態で甕、小形甕・短頸壺・無頸壺・小形壺・甌がある。黒色土器は(㊸)、(㊹)二種あるが共通して供膳形態が主流で、杯・椀・皿・耳皿・鉢があり、わずかであるが煮沸・貯蔵形態で小形甕が見られる。須恵器は、供膳形態で杯・蓋・高杯・高盤・台付椀・煮沸・貯蔵形態で、横瓮・平瓮・提瓶・フラスコ形瓶・長頸瓶・長頸壺・短頸壺・四耳壺・双耳壺・把手付壺・短頸甕・甕等がある。灰釉陶器・緑釉陶器は供膳形態で、壺・皿・段皿・耳皿・蓋・貯蔵形態で長頸瓶等がある。

土師器、黒色土器の杯、椀、皿は共通性が多く、須恵器においても杯は、形態は違うものもあるが共通するものがある（笹沢、1976）。土師器、黒色土器、須恵器、3種の杯、土師器、黒色土器の椀、皿の分類は、十二ノ后分類（笹沢、1976）金鐘場分類（伴野、1976）を参照とし、A 丸底及び丸底的な平底、B 高台が付くもの、C 底部が糸切りで平底のものと統一する。土師器、黒色土器の有稜杯は杯Fとする。土師器、黒色土器、須恵器の一部器種を分類する。

杯A——土師器、黒色土器は内外面ヘラミガキされ、胴下半～底部はヘラケズリaである。ヘラケズリa後、ヘラミガキされヘラケズリを消しているものもある。中にはヘラミガキの前にハケ目で調整しているものもある。須恵器はロクロ成形で内外面ナデbで、底部がヘラ切り、ヘラケズリa、c、dで調整されているもの。

杯B——3種共にロクロ成形付け高台で、土師器、黒色土器は底部回転糸切りが主で、須恵器はI・回転ヘラケズリ、II・回転糸切り→回転ヘラケズリ、III・回転糸切りの3種がある。土師器のI部、黒色土器は外面ナデb、内面はヘラミガキa、bで調整され、須恵器は内外面ナデbで調整される。土師器で内外面ナデbで調整されるものもある。黒色土器bはナデb後内外面共ヘラミガキを施すものも見られる。

杯C——3種共にロクロ成形、回転糸切り底である。土師器、黒色土器は外面ナデb、内面ヘラミガキaで、須恵器は内外面共ナデbで調整される。

杯D——土師器のみに見られるもので、ロクロ成形で、ロクロ形成痕、特にナデbの痕跡を顕著に残すもの。底部は回転糸切り。

杯E——杯Dに高台が付いたもので土師器のみに見られる。高台は比較的高い高台が付くことが多い。

杯F——有稜杯で古墳時代の土師器、黒色土器に見られる。ほとんどがナデa、ヘラミガキa、b、ヘラケズリa、bで調整される。I～Ⅷに分けられる。すべて丸底か丸底的な平底である。

I——口縁部はやや内側に傾むき、稜を境に深い丸底の器形になるもの。

II——口縁部はほぼ直に立ち上るが外傾し、口縁端部が外反し、稜を境に丸底の器形になるもの。

III——口縁部が短かくやや外反し、稜をなすもの。

III——口縁部が稜から内湾ぎみに外反するもので、稜がはっきりしているもの。

V——杯A的な器形であるが内側に稜を残すもの。

VI——杯A的な器形であるが外面に稜を残すもので杯Aよりは平底的な丸底である。

VII——底部が小さく稜から口縁部が大きく外傾する皿状の浅い器形のもの。

VIII——口縁部が直に立ちあがり、口縁端部が気持ち外反する。やや深い丸底の器形のもの。

杯G——底部に木の葉痕を残す底部が厚い平底的な、杯Aに類似する器形のもの。

杯H——口縁部が大きく外傾する皿状の浅い器形で平底的な丸底である。

椀A——土師器、黒色土器に見られ、杯Aでも深い口径と器高の比率が約2：1のもの。調整は杯Aと変らない。

椀B——黒色土器に見られるのみで、杯Bでも深い口径と器高の比率が約2：1のもので高台付のもの。

椀C——土師器、黒色土器に見られ、杯Cでも深い口径と器高の比率が約2：1のもの。調整は杯Cと変らない。

椀D——古墳時代土師器に見られ、丸底で口縁部が外反する。口径と器高の比率が2：1以上のもの。

皿B——土師器、黒色土器に見られ、高台のつくもの。調整は杯Bと同。

皿C——中世土師器の元祖的な小皿。ロクロ成形で、ナデbで調整され、底は回転系切り。

蓋は須恵器のみである。

蓋A——つまみのつかない蓋を一括する。

蓋B——つまみのつく高さが高い蓋で、稜をもつ。

蓋C——身にかえりをもつ、つまみのつく蓋。

蓋D——偽宝珠のつまみのつく、高さの低い身にかえりをもたない蓋。

蓋E——杯蓋以外及び蓋A～D以外の蓋を一括する。

煮沸形態の土師器甕は、甕A～Gは古墳、奈良時代のもの、H～Mは平安時代のものである。

甕A——不定形な球形胴の甕でナデa、ヘラケズリa、b、ヘラミガキb、ハケメ、ハケナデ等で調整される。

甕B——不定形な球形胴のやや長胴形の甕で、ナデa、ヘラケズリa、b、ヘラミガキb、ハケメ、ハケナデ等で調整される。

甕C——長胴甕で胴部にゆるやかな脹らみをもち、口縁部は大きく外反する。ナデa、ヘラケズリa、b、ハケメ、ハケナデ等で調整される。

甕D——長胴甕で胴部がゆるやかに脹らみ、口縁部はゆるやかに外反する。調整は甕Cと同様である。

甕E——長胴甕で胴部がゆるやかに脹らむが底部にむかって小さくなる。口縁部はゆるやかに外反する。胴部が最大径となる。

甕F——長胴甕で胴部が円筒形で口縁部がゆるやかに大きく外反するか、くの字形に外反し口縁部が最大径となる。

甕G——長胴甕で胴部が円筒形で口縁部が短かく外反する。ナデa、ヘラミガキa、b、ハケメで調整されるものと、ナデa、ハケメで調整されるものがある。

甕H——長胴甕で胴上半部が最大径となり、頸部で鋭くくびれ、口縁部は外反する。ハケメ、ナデaで調整される。

甕I——長胴甕で、口縁部が最大径となり、口縁部がやや厚く、大きく外反する。底は丸底で、口縁部内面、胴上半部外面にカキ目を施している。胴部は縦位のハケメである。

甕J——長胴甕で口縁部が最大径をもち、口縁部はくの字形に外反する。口縁部はナデbで調整し、口縁部内面にはカキ目が施される。ナデbが胴上半まで及ぶものもある。胴部は縦位のハケメで調整している。

甕K——甕Jと同様であるが胴上半部に最大径があるもの。

甕L——口縁部に最大径をもち、くの字形に外反する。底部は小さく、胴部はヘラケズリを多様し、器壁は薄い。口縁部、胴内面はナデbで調整している。武蔵型の甕と呼ばれるものである。

甕M——口縁部は「コの字形」で甕L同様、底部は小さく、胴部はヘラケズリを多用し、器壁は薄い。甕L同様、武蔵型の甕と呼ばれるものである。

甕N——口縁部はゆるく外反する。甕Mに近いコの字状ヘラケズリを多様する器壁の薄い甕。武蔵型と呼ばれるもの。

小形甕A——口縁部はゆるく「くの字」形に外反し、胴部はゆるく脹らみ、底は小さい。ヘラケズリa、b、ナデaで調整されている。

小形甕B——口縁部はゆるく大きく外反し、最大径で、胴上半部に胴部の最大径がある。ヘラケズリa、

第三章 出土遺物の分類と遺構の時期区分

b、ナデa、ハケナデで調整されている。

小形甕C——ロクロ成形で内外面共にナデbで調整したものである。底部は回転糸切りである。

小形甕D——ロクロ成形で、胴部外面をカキ目で、口縁部及び内面をナデbで調整したものである。中には口縁部内面にカキ目を施すものも見られる。底部は回転糸切りである。

小形甕E——甕M・Nの小形のもの。

参考文献

- 孫崎健一郎他 「借馬遺跡Ⅰ」大町市教育委員会 1980年
孫崎健一郎他 「借馬遺跡Ⅱ」大町市教育委員会 1981年
樋口具一、笹沢浩、伴野和信他 「中央道報告書—諏訪市その4—昭和50年度」長野県教育委員会 1976年
伴信夫他 「中央道報告書—上伊那郡箕輪町—昭和48年度」長野県教育委員会 1976年
岡田正彦 「平安時代土師器等の編年試験—特に長野県中南信地方の住居址出土土器を中心として」信
野第29巻9号 信濃史学会 1977年
田辺昭三 「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古クラブ 1966年
小笠原好彦 「丹塗土師器と黒色土師器」(1X2) 考古学研究70・71 考古学研究会 1971年
吉田恵二他 「平城宮発掘調査報告Ⅵ」奈良国立文化財研究所学報第二十三冊 1975年
小笠原好彦他 「平城宮発掘調査報告Ⅶ」奈良国立文化財研究所学報第二十六冊 1976年
小林正春 「垣川遺跡発掘調査概報」信濃第31巻4号信濃史学会 1979年
笹沢浩他 「上水内郡誌歴史編」1973年
森嶋稔他 「更科埴科地方誌2」1978年

第2節 遺構の時期区分と建物址の分類

1 遺構の時期区分 (表4)

遺構の土層、出土した遺物より想定される年代は、借馬遺跡Ⅰ(1980)において、第Ⅰ期5C後半前後、第Ⅱ期8C中葉前後、第Ⅲ期9Cと想定され、借馬遺跡Ⅱ(1981)においては、住居址で第Ⅰ期3C、第Ⅱ期5C前半～中葉前後、第Ⅲ期5C後半～6C前半前後、第Ⅳ期6C後半～7C、第Ⅴ期8C、第Ⅵ期9C以降、建物址第Ⅰ期4C前後と想定された。今回は、借馬遺跡Ⅰ・Ⅱ共総括し、周辺地域の編年(笹沢1976等)、須恵器編年(田辺1966)、施釉陶器編年(橋崎1968、1971)等を参照し、第Ⅰ節の観察を踏まえ、検討し想定される年代を簡単に大別してみた。

(第Ⅰ期は弥生時代後半、箱清水式期～御屋敷式期、3C前後頃) (第Ⅱ期は御屋敷式期～五領式期、4C前後、器台、小形丸底埴、S字状口縁台付甕等新しい器種が見られる時期である) (第Ⅲ期は五領式期～和泉式期、4C終末～5C前半、第Ⅳ期和泉式～鬼高Ⅰ式期、5C後半～6C初頭・器台、小形丸底埴等はⅢ期でははまり、Ⅳ期においてはほとんど見られなくなる。Ⅳ期において埴は口縁部がやや短くなり、立ち上がる。甕はⅢ期においては球形胴であるが、Ⅳ期頃から徐々にくずれはじめる。Ⅳ期頃からカマドが一部の住居址に見られる様になる。第Ⅴ期は鬼高Ⅰ～Ⅱ式期、6C前半～後半、借馬遺跡33号住居址より陶器編年の陶器Ⅱ期、TK10～TK43窯式期頃に比定されると考えられる壺付杯が出土している) この時期からカマドをもつ住居址が多くなる。(第Ⅵ期は鬼高Ⅱ式期、6C終末～7C前半、借馬遺跡63号住居址より陶器編年の陶器Ⅱ期TK209窯式期頃に比定されると考えられる壺付杯、67号住居址より陶器TK209窯出土の台付椀に近似する台付椀が出土している。甕は長胴甕が多くなっていく。住居址にはカマドがほぼ定着する。第Ⅶ期は鬼高Ⅲ式～真間式期、7C後半、須恵器、特に供膳形態が徐々に多くなる時期である) (第Ⅷ期は真間式期、8C前後～後半、供膳形土師器が減少し、須恵器の割合が一段と増す時期である) (第Ⅸ期～第Ⅹ期は国分Ⅰ、Ⅱ式期、第Ⅸ期は8C終末～9C中葉、須恵器に回転糸切り手法が出現する時期で、供膳形態に回転ヘラ切り、回転ヘラケズリ手法と回転糸切り手法のものが共存する時期である。供膳形態で土師器はほとんど見られず、須恵器がほとんどとなる) (第Ⅹ期は9C後半～10C前半、回転糸切り手法の底がほとんどになり、土師器(杯、小形甕等)にもロクロが導入され、甕の口縁部もロクロ成形するものが見られる。第Ⅺ期は10C中葉～10C後半、供膳形態に回転糸切り底の杯C、施釉陶器の影響を受けたB、皿B等の黒色土器がはいり、須恵器が徐々に減少していく。第Ⅻ期10C終末～11C前半、供膳形態で須恵器が減少し、黒色土器が主流となる時期である。前田29号住居址より、黒位90号窯式期の新しい時期頃に比定されると考えられる灰軸陶器碗が2個体出土している。第Ⅼ期は11C後半～12C前半、供膳形態で黒色土器が徐々に減少する。中世土師器の元祖的な小形の皿(皿C)、ロクロ成形を顕著に残す土師器杯(D)、高台付杯(杯E)等が見られるようになり、特に灰軸陶器は主要な一要素となる。この期の灰軸陶器は折戸53号窯式期に比定されると考えられる。以上、古墳時代～平安時代を大まかに第Ⅰ期～Ⅷ期まで時期区分したが、問題点も多く見られ、筆者が浅学で未熟であるため、十分な区分、観察でない。今後、資料の集成をやり直し、更に資料を集積し、検討を重ねて行きたい。

第三章 出土遺物の分類と遺構の時期区分

引用・参考文献

田辺 昭正 「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古クラブ1996年

檜崎 彰一 「瓦器の道一信濃における灰釉陶器の分布」名古屋大学文学部二十周年記念論集1968年

服部敬史他 「中田遺跡資料編Ⅲ」八王子市中田遺跡調査会1968年

檜崎 彰一 「日本陶器全集6巻、白瓷」中央公論社1976年

後、参考文献は第1節と同じ。

(島田 哲男)

表4 借馬遺跡・前田遺跡竪穴住居址時期区分一覧(一部建物址、Pit含む)

時期	借馬遺跡	前田遺跡
I	45住	
II	建27	
III	10・15・24・25・26・30・36・49・56・57 59住	
IV	9・13・31・37・43・46・47・48・52・53住・建20	
V	29・33・34・42・79住	
VI	35・39・41・61・62・63・67・71・74・78住	
VII	14・16・17・18・64・72・77住	2・35住
VIII	2・6・7・8・11・12・19・50・75・76住	1・9・10・15・36住
IX	1・3・4・20・55・69・73住	8・16住
X	5・65・68・70・83住・建36	12・13・18・25・33・34住
XI	66住・建29・34	4・5・7・21・23・24・26・27住
Ⅻ	82住	3・6・17・19・28・29住
Ⅼ	建35	11・22・32住・P170
不明・備考	21・22・28・44・80・81住 (80・81住はV期以前) (28・44住はIV期頃と予想される)	14・20・30・31住 (14・20・30住はIX期頃と予想される)

2 建物址の分類 (図9・10)

3年度に渡って調査した借馬遺跡ではA・B・C地区計36棟の建物址が検出された。また前田遺跡においても4棟の建物址が検出された。借馬・前田遺跡計40棟の建物址のうち時期の分かるものは数少ない。40棟の建物址を規模、形状等から分類を試みた。


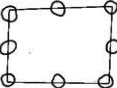
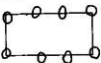
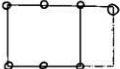
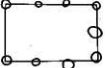

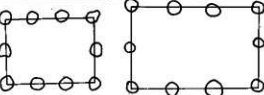
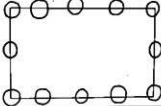
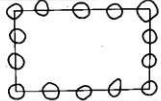
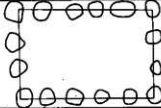
I—桁行と梁行がほぼ同じ長さで正方形及び正方形に近い形で柱穴が並ぶもの。

I	A	桁行1間、梁行1間のもの。	
	B	Aとは同じであるが、桁行の片側に柱穴がはいり、1間の長さが半分になり、片側のみ2間のもの。	
	C	桁行2間、梁行1間のもの。	
	D	Cとは同じであるが、桁行の片側、2間中の一間に柱穴がはいり、短かい1間、1間と長い1間の片側が計3間、梁行の片側に柱穴がはいり、1間の長さが半分になり、片側が2間のもの。	
	E	桁行2間、梁行2間のもの。	

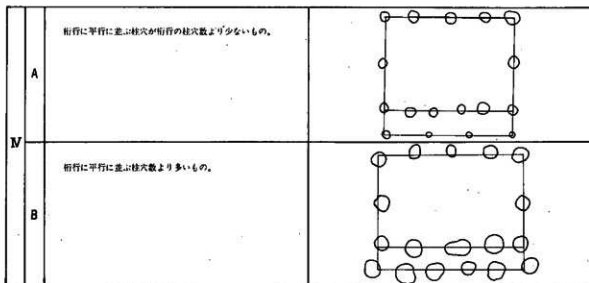
II—桁行2間で、中央に柱穴があり、田の字形に柱穴が並ぶ、総柱式のもの。

II	A	正方形及びほぼ正方形のもの。	
	B	長方形のもの。	

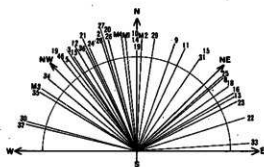
Ⅲ—桁行が長く、梁行が短かく長方形に柱穴が並ぶもの。

A	桁行2間、梁行1間のもの。	
B	桁行2間、梁行2間のもの。	
C	桁行3間、梁行1間のもの。	
D	桁行が2間と3間、梁行1間のもので、3間のP11の1ヶ が外に出るもの。	
E	桁行3間、梁行が片側1間、もう一方が中央に柱穴がはいっ た2間のもの。	
F	基本は3×2間であるが、桁行の片側に柱穴が1ヶをく2間 のもの。	
Ⅲ G	桁行3間、梁行2間のもの。	
H	桁行4間、梁行2間の大形のもの。	
I	桁行4間、梁行3間の大形のもの。	
J	桁行5間、梁行3間の大形のもの。	

V—III H、I J に開か軒と思われる柱穴が桁行の一方に平行に並んでいるもの。



建物址での棟方向（桁行方向）には規則性は見られないが、借馬A地区は北西より北向きになるものが多く、C地区では北西より西向きになるものが多い。前田遺跡では、北方向に近い方向のものが4棟中3棟ある。平面積は借馬遺跡では大小様々であるが、C地区8棟は、29・32・33・34かほぼ一致し、30・31・35・36かほぼ一致し2分割できる。前田遺跡では4棟中、3棟（1・2・4）かほぼ一致する。前田遺跡の3棟（1・2・4）は、方向、規模等が一致するので同一時期とも考えられる。借馬遺跡は、A地区で、(1)1～4、(2)6～14・16、(3)15・21～23、(4)17・19・24～26の4ブロックに分けられると考えられる。（建物址20・27は遺物より、20・5C後半、27・4C前半～後半と時期かは決定できる。）C地区でおそらく1ブロック(5)である。C地区では、形状、方向等から、(a)32と33、(b)29と34、(c)30と31の3グループに分けられる。(a)(b)は29か65住を切り、32か55住に切られていることから时期的な違いが見られる。(c)及び、35・36については(a)、(b)どちらに属するかははっきりとしない。(1)～(5)のブロックは、各時期で構成され、編制したものと考えられる。



(高田 哲男)

第IV章 調査遺跡

第1節 借馬遺跡III

1 位置と自然環境

1) 位置 (図I-1・3・4・6・7 写真1)

借馬遺跡C地点は、大町市大字平字借馬8840番地外11筆に所在し、通称「くね元」と呼ばれる地帯である。信濃大町駅より北約3.5km、信濃木崎駅より南0.5kmの地点で、標高は755m、発掘区域の両側を大糸線と国道148号線が通過している。この地域は、西方「ねこはな」付近を扇頂とする鹿島川扇状地の扇状部にあたっており、約500m東方の扇端部を木崎湖(仁科三湖)から流れ出した農具川が南流している。また松本盆地の北端で、フォッサマグナの地塁たる後立山連峰、蓮華岳(2798m)・爺ヶ岳(2699m)・鹿島槍ヶ岳(2889m)・五龍岳(2814m)等々が西にそびえ、中山山地(800~1000m)が東に続く。これより北は、松本盆地も終わり仁科三湖が並ぶ山間地であって、この遺跡は山間部と平野部の接点付近に位置しているわけである。

またC地点は、54・55年度に発掘調査の行われた借馬A地区の北西約300m、B地区の南西250mの所で、3遺跡とも一群の集落址と思われる。農具川沿いには低湿地が多く、沿岸には弥生時代以降の遺跡が分布しており、分水集落付近では借馬Aをはじめとして、かきわくずれ、あれば・清水などの遺跡が農具川を囲むように立地し、借馬B・C・とどめき遺跡も含めて広大な遺跡をつくっている。C地点は、この遺跡のほぼ西縁にあたり、規模の大きさを物語っている。

2) 自然環境と土層 (図2・3)

自然環境の概要については昭和55・56年度報告のあった『借馬遺跡I・II』の報告書を参照されたい。本年度発掘地点は、前年度発掘地点の西およそ300mの鹿島川によって形成された扇状地上にある。昨年度と異なる点は扇端でないことと、木崎湖から流れ出し、鹿島川による扇状地の扇端を削って南流する農具川の影響が殆んどないことである。したがって、扇状地堆積物の主体をなすものは後立山連峰の酸性~中性火成岩の砂礫とその風化物である。この黄褐色の砂礫を基盤として、その上にシルト~シルト質黄褐色土と黄褐色砂礫層がレンズ状又は塊状に乗ってくる。これ等は有史以前の度重なる洪水性の堆積物や、流路の首振りによる堆積物であり、堅穴住居の床面の多くはこの層にある。この層を覆うように篩分けの悪い洪水性の黒褐色砂礫土が特に7Cの住居址の床面にMN50°W方向から流入している。この層の上には、篩分けの悪い洪水性の含礫黒色土が遺跡のほぼ全面を覆い、南に行く程厚く堆積し遺跡の南150m付近では河川をも埋めて70cm程堆積している。現在の地表面は、この洪水層の上に約16cm程の厚さで覆い水田化されている。本遺跡付近は鹿島川の氾濫による破壊と建設のくり返してあり、堆積物の上から本遺跡に直接関係のある洪水は2回読みとれる。第1回は7Cの住居群を襲った中規模の洪水であり、集落はその後再建されている。第2回目の洪水は古代末頃遺跡のほぼ全体におよび、55年・56年度の発掘地



图1 偃马遗址C地区全景 (1:200)

点で確認された洪水と同一のものとみられる。中世以後の住居跡は確認されていないことから、他へ移転したものと推定される。現在のようにえん境が完備するまでは、鹿島川は猫鼻付近でしばしば氾濫した記録や言い伝えがあり、堆積物に現われたものは、その中で規模の大きなものであったと思われる。なお、発掘範囲内だけでも扇状地の斜面に沿う小河川が2本あり、南150mには河原の礫を伴う河川跡があるなど、当時は幾本もの鹿島川からの支流が消長を繰返えしながら存在していたことが確認された。

(森 義直)

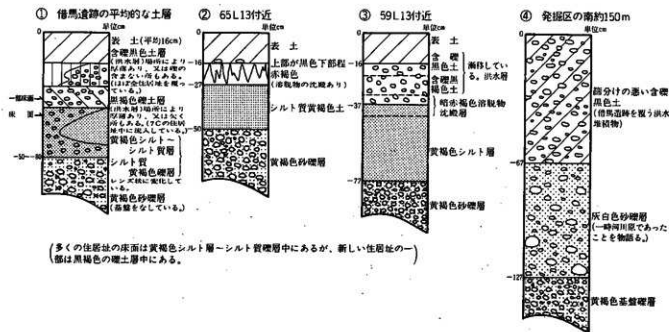


図2 借馬遺跡土層柱状図

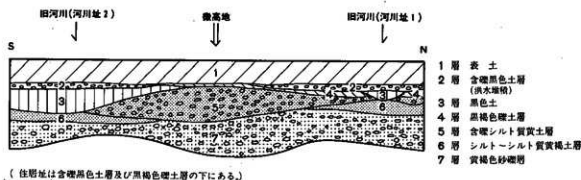


図3 借馬遺跡南北方向断面概念図

2 遺構と遺物

1) 竪穴住居址 (図4)

借馬遺跡からは、1979・1980年に調査された借馬A地点(借馬遺跡I・1980、借馬遺跡II・1981)、借馬B地点(借馬遺跡II)、農具川河川改良工事地区(借馬遺跡II)で3C~11C代の60軒の竪穴住居址が検出された。本年度新たに6C~11C代の23軒の竪穴住居址が検出され、計83軒となった。各住居址内の堆積土層と、保有された遺物等から、第三章、第2節「遺構の時期区分」で試みたとおりI期~X期に大

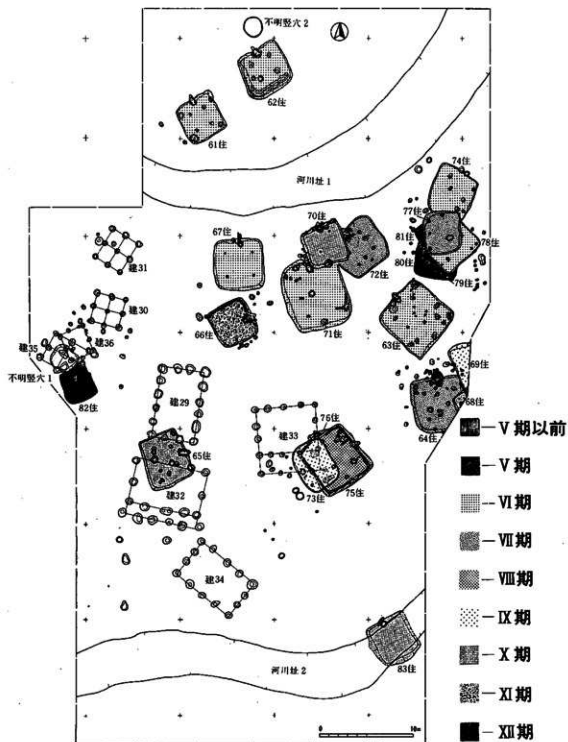


図4 借馬遺跡竪穴住居址時期区分図(1:400)

別された。本年度の23軒はV期以前2軒、V期1軒、VI期7軒、VII期3軒、VIII期2軒、IX期2軒、X期4軒、XI期1軒、XII期1軒である。借馬遺跡調査地点全体を通してみると、III・VI期はA地点北側～農具川河川改良区が中心となり、V期で一時期住居址が各地に分散し、VI期でも一部分散するが、C地点北側に集中する。VII期になると、3～4軒程度で分散し、VIII期には、分散するものも見られるが、分散ぎみにA地点に集中する。IX期でも分散的であるが2～3軒程度で分散する。X期においても、分散するが、C地点で4軒が中央～南側に集中している。XI・XII期になると所々に分散したものと考えられる。以下、今年度発掘区より検出された23軒の竪穴住居址について時期別に概要を述べる。

(島田哲男)

(1) 第V期

① 79号住居址 (図5・6, 写真16・18)

遺構 本住居址はC地区の東北隅に近い位置にて検出された竪穴住居址である。この地点には他に、74号・77号・78号・80号・81号の各住居址が重なり合う状態で検出されたが、その南端に位置し、西の80号よりは新しく、北の78号よりは古い状態で切り合うものと考えられる。

竪穴の残存部分と見られるものは、西辺が南北2.4m、東辺はわずか60cm、南辺は3mを測り、全体は不整な三角形である。

壁の深さは15cm～18cmと浅く、これは切り合い状態の中で生じた人為的なものと見られ、当初はもっと深いものであったと考えられる。

遺物 本址より床面から土師器の甕(215)が発見された。底部の破片で、小型の平底の下部に、ドーナツ状の粘土を貼り付けて高台様の底部を作ったもので、器を据え置く時に安定を考えた作りとしたものであろう。器厚は5mm～8mmを測り、色調は黒褐色で焼成良好である。

(原田 曠)



図5 79号住居址出土遺物(1:4)

② 80号住居址 (図6, 写真16・18)

遺構 80号住居址は、C地区の東北端に近く位置して発見され、この地点には、74号・77号・78号・79号・81号などの各住居址が検出された所の一角である。ここでは切り合い状態で発見されたので、その西辺と南辺がわずかに手掛かりを残すのみで、住居址全体の大きさやプランは分からないと共に、遺物も特記するものはなかった。

(原田 曠)

③ 81号住居址 (図6, 写真16・18)

遺構 本住居址はC地区の東北隅に近い位置にて検出され、この地には74号・77号・78号・79号・80号の各住居址が切り合いの状態で見られた所である為、本址の遺構としては、一群の北西隅に位置して、西辺1m、南辺1.5mが残存しているのみとなる。

竪穴内部の土層は上下2層となり、I層は多量の砂が混入した黒褐色土で30cmの深さを測り、下部II層は、わずかに砂の混入した黒褐色土が10cmの堆積を見るもので、これは本址の廃絶後の状況を示していると考え。本址付近に土砂の流れ込んだと見られる住居址などが見受けられる所であるが、本址も廃絶後

しばらくの年月を経過した後、近くの川の氾濫により上部まで堅穴が埋まったと見られるものである。

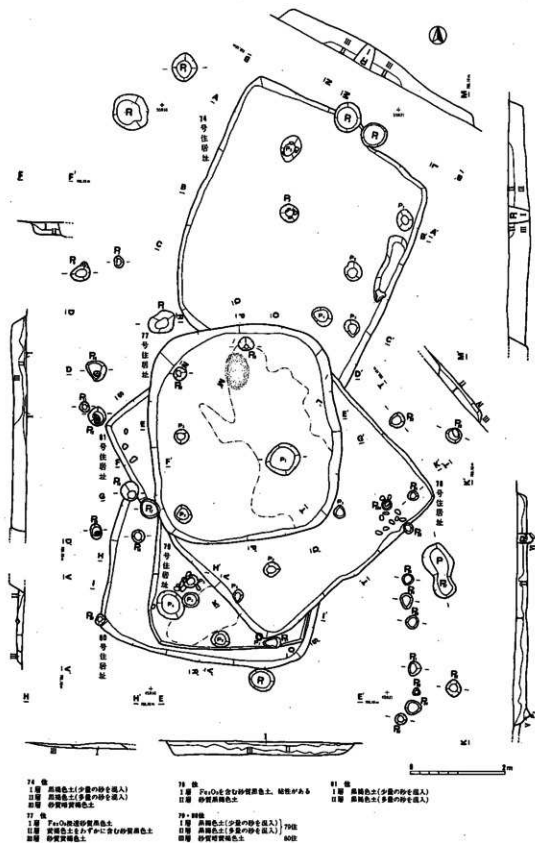


図6 74・77・78・79・80・81号住居址(1:80)

遺物 本社のII層中から黒色土器破片1個と、土師器の破片3個が発見された。黒色土器は幅1.5cm、長さ4cm、器厚1cmで杯の破片と見られるもので、表面やや荒れており仕上げ方法は不明である。内面はヘラミガキが行われ炭素吸着が施されている。土師器片は何れも甕の破片とみられるが、この中でもっとも大きな破片は幅4.5cm、長さ4.8cm、器厚8mmで胴の部分と見られる。表面はヘラミガキをされた後に筒状具にて浅い条線を縦方向におろしている。内面はやや荒れており、全体的に赤く再三の火の使用を思わせる所のある破片である。

(原田 曠)

(2) 第VI期

① 61号住居址 (図7・8・9・10, 写真4・5・36)

遺構 C地区の北端に近く検出された竪穴住居址である。東に約4m離れて62号住居址が発見されている。竪穴は東西4.2m南北4.4mとわずかに南北に長い方形に近いプランで、磁北に対し長軸は29°西に振っている。壁はほぼ90°の角度で検出面から掘り下げてあり、高さは20cm～25cmを測る。全体に遺存状態はよい。竪穴内部の土層は上部のI層からIV層まで確認されたが、I層の砂質黒褐色土が大部分を占めて堆積している状態を見ると、この竪穴は廃絶後間もない埋没が考えられる。

次に床面は平坦で中央部分を南北に長い固い部分が見られ、東西両壁に沿う面は、これに比べて軟弱気味であり、屋内の生活面がこのことから見ると、南面を出入口として北壁下のカマドへ通る所を通路として、中央が踏み固められたものであろう。

柱穴は床面に8個確認されたが、この中で中央寄りの4個は形も整い、位置から見て本住居址と直接関係の深いものであろうと考えられるも、他の4個については外部遺構との切り合いも考慮する必要がある。

カマドは北壁中央部を切って設けられており、床面より10°の角度で北壁の外側へ長さ40cm幅30cmの煙道を出している。内部は石組であったらしく、石と粘土が所々残るのが見え、カマド前面には焼土と灰が多く堆積していた。

遺物 遺物は土師器の杯1個と椀1個を始め、黒色土器の杯8個体と無頸壺1個などが出土した。

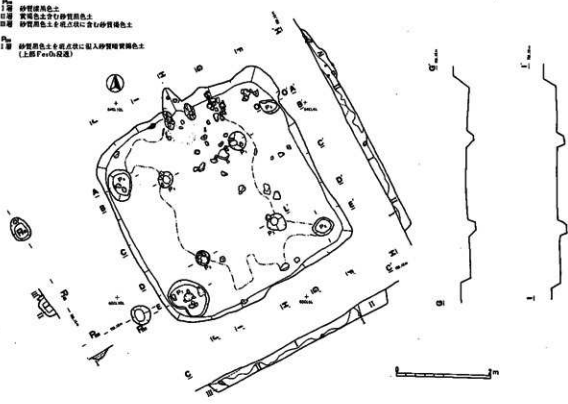
杯(7)は口径13cm、器高6.5cm、厚さは口縁部で3mmそれ以下は厚く作り底部は1.2cmである。器面整形は内外共にヘラミガキが行われている。色調は内面は炭素の吸着が良く光沢のある黒色を呈し、内黒と呼ばれる段階の所を見せているが、外面にもわずかに滲み出て黒色と褐色の斑となっている。椀に近い器形である。

甕(12)は口縁部の破片で土師器である。口径23cmと推定されるもので、口縁が外反している。内面は横方向にヘラミガキがされており、外面は頸部から上は横にヘラミガキを行い、下部はヘラケズリの後ナデが行われている。焼成よく胎土は緻密で色調は赤褐色である。

杯(5)は黒色土器で全体の半程の破片である。器厚は口縁部先端は4mmであるが、下部は厚く底部は1cmを測る。器面成形は、内面は口縁部分が1.5cmの幅に横にヘラミガキを行ない、下部は斜め右下方へヘラミガキが行われ、外面は横に全体がヘラミガキをされた後縦方向にナデが行われている。内面は黒色をしているが、外面は口縁部に沿い幅3cmの薄い黒色部分が見えるのみである。

杯(9)は土師器で口径14.2cm、器高5.5cmを測る。胴の部分によくらみを持ち椀に近い形を作っているもので、底部も高台様の台を作り出し、器の安定を考えたものか、後で述べる様に、この土器が最初から火にかける為のものとして、底部を厚くしてあるのかも知れないのである。器面の成形は明らかではないが、口縁部の内外両面に細かい薄い条痕が見えるのみであり、全体に粗製感を受ける。色調は褐色の

- P₁ 砂質黄褐色土
 P₂ 黄褐色土中に砂質黄褐色土
 P₃ 砂質黄褐色土を境に灰に含む砂質黄褐色土
 P₄ 砂質黄褐色土を境に灰に含む砂質黄褐色土
 (上部 Fe-O 浸透)



- 創設内P
 P₁ 砂質黄褐色土
 P₂ 1層に少量灰化物混入を含む
 P₃ 砂質黄褐色土
 P₄ 砂質黄褐色土を境に灰に含む砂質黄褐色土
 P₅ 創設より黄色土が少なく

- 創設
 P₁ 砂質黄褐色土
 P₂ 砂質黄褐色土を含む砂質黄褐色土
 P₃ 砂質黄褐色土を境に灰に含む砂質黄褐色土
 P₄ 砂質黄褐色土を境に灰に含む砂質黄褐色土
 P₅ 創設より砂質黄褐色土が少なく

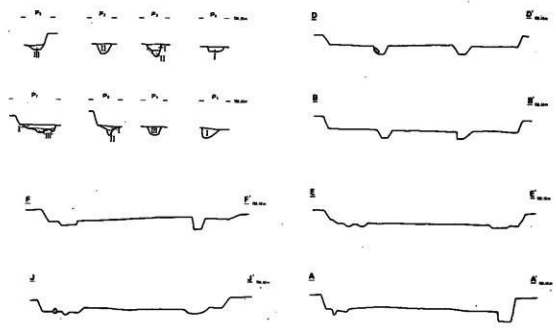


図7 61号住居址 (1:80)

第IV章 調査遺跡

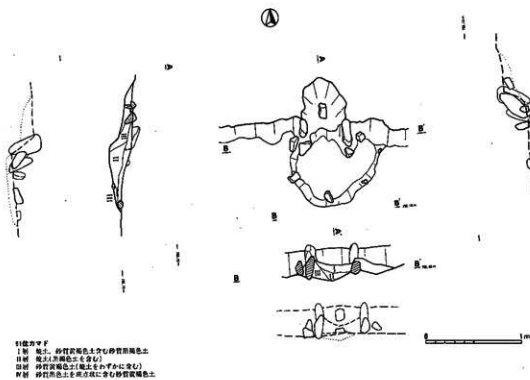


図8 61号住居址カマド (1:40)

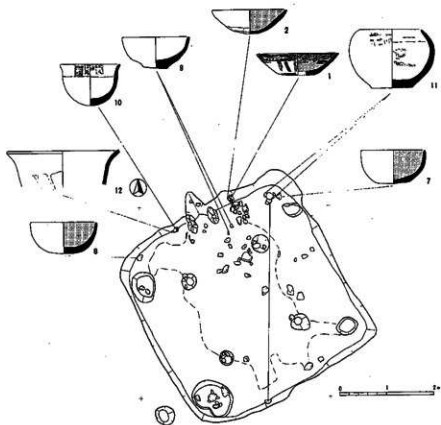


図9 61号住居址 竈・遺物出土状況 (1:80 遺物1:8)

地に煤がかかり、両面共荒れている。こうしたことから見てこの杯は火にかけたことが分かり、それはこの器を作る時に考えられたものであろうと思われる。

碗(10)は土師器で、口径12.4cm、器高8.6cm、器厚は胴部分で1cm、底部では1.7cmと比較的厚手に作られているもので、器面の成形は口縁部の内外にヨコナデが行われているのみで、他の大部分は荒く凹凸の多いケズリを加えてある程度で、粗製の感がする器である。色調は暗褐色の地に煤が全面に付着しており、これも同じく火にかけられたものと考えられよう。

杯(1)は黒色土器で、口径17.5cm、器高5cm、器厚1cmの大きさを測る。胎土は緻密で雲母と長石をわずかに混じえており、焼成良好である。約寸の大きさが遺存した。器面は内面を横にヘラミガキがなされ、外面は口縁部を横に2cmの幅でハケメを施し、それより下部は縦に部分的にハケメを付けている。色調は褐色で内面の一部を残して炭素を吸着させているもので、黒色の部分は多いものの完全とはいえない。

杯(8)は(7)とほぼ同様の椀に近い形の黒色土器で、口径13.8cm、器高6.5cm、器厚は口縁部を除き7mmを測る。胎土は緻密で焼成良好である。器面は内外共にヘラミガキがなされ、底部もヘラケズリの後ヘラミガキが行われており、全体に入念な作りである。色調は内面黒色で外面は明褐色を呈する。

無頸壺(11)は黒色土器で、口径12.5cm、胴の部分によくらみを持ち、18cmを測る。器厚は胴で1cm、底部は1.7cmと厚手に作られている。器面は口縁直下にハケメがわずかに見える程度で、他は全面をヘラミガキが行われ、入念な作りとなっている。胎土は緻密で焼成良好である。色調は内面の下半部分と外面の底部のみ黒色が見えているのみで、他は明褐色で光沢さえある程器面はなめらかである。

以上は本住居址内より出土した主要な土器であるが、全体に土器は入念な作りのものが多く、中に回転台

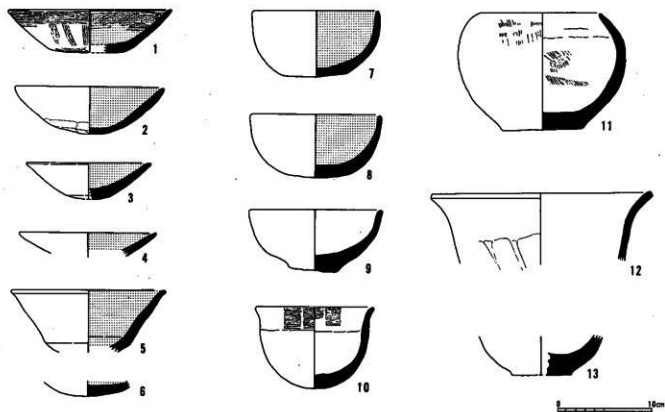


図10 61号住居址出土遺物(1:4)

の使用によって作られたと見られるものがあり、杯の(1)・(5)・(7)・(8)・(9)と無頸壺の(11)などはそれを推察させるものがある。この他重要なことは、土器の胎土が緻密で石粒などの混入がないことと、炭素吸着の程度が一定の段階にあることなどで、これなどはC地区ばかりでなく、他の地区をも含めて全体の視野の中で取り上げられる問題かと考えるものである。

(原・田 曠)

② 62号住居址 (図12・13・14, 写真4・5・36)

遺構 62号住居址は、C地区の北端中央に位置して検出された竪穴住居址で、約4m西南に61号住居址が検出されている。竪穴の形状は、南北4.9m、東西5.1mの不整な方形で、北壁が内に南壁が外に曲る特

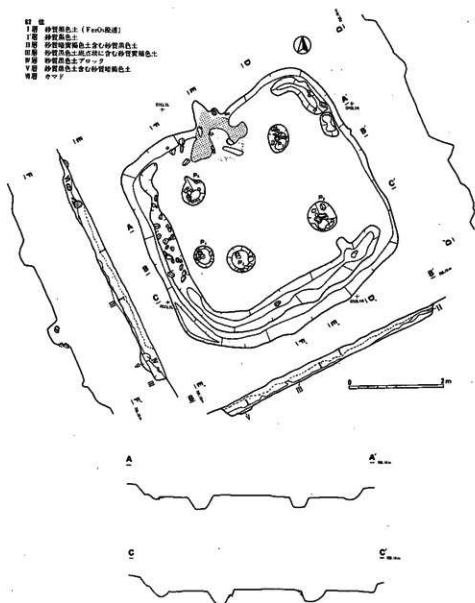


図11 62号住居址 (1:80)

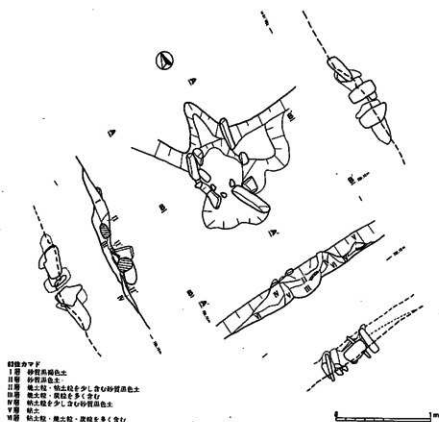


図12 62号住居址カマド (1:40)

殊な形を見せている。竪穴は東西方向がやや大きいものの、カマドの位置から見て、磁北に対して約40°西へ振ったプランである。この方向はこれまでに検出された本遺跡内の竪穴住居址に類例が多く、風向き、日照などが大きな居住の条件となることから、当時はこの方向に近い形が採用されたと考えられる。

竪穴の壁は東西両壁が60°、南壁が70°、北壁は崩落が多く30°となっていた。

竪穴内部の土層はV層まで堆積し、この中でI層からIII層にかけて、床面上まで川原の自然石が散乱し、更に床面の東南隅には萬石が11個塊状に集めた状態で発見された。こうしたことから、本住居廃絶後間もなく、西北方向から流れ込んだ強い水の勢いによって、住居址まで川原石が入ったものと考えられる。

柱穴址はP1～P5まで確認された。この中のP1は径40～60cm、深さ40cmで下底部は20cmと細くなり、根固めの石かと思われる小石が7個入っていた。以下P5までの柱穴はほぼ同様の遺構状況が見られた。

周溝と見られる溝が、床面の西壁下から南壁東端まで回っていた。幅40cm前後、深さ10cm程の所が多い。更に床面の東北隅にも40cmの幅で1m程の長さに溝があり、これも周溝の一部を示すかも知れない。

カマドは北壁中央に設けられた痕跡があり、その形態は石をほとんど抜き取っているので不明であるが、恐らく焚口部から煙道部にかけて、矢沢石を粘土で組み固めたものであったことが推察される。調査の折にカマド跡前面から多量の灰が検出された。

遺物 本住居址からは、土師器の甕5個体と黒色土器の杯4個体が検出された。

土師器の甕(22)は、口径29.6cm、器高31.2cm、器厚は口縁部から胴部へかけて1cm、底部で2.4cmを測る。全体の形は頸部でわずかに折れて口縁がわずかに付けられるもので、口径の大きい所が特徴といえる器である。器の成形調整は、表面は口縁から頸部にかけて横方向のハケメを行ない、以下胴部下方へかけてヘラ状具にて縦方向にナデが行われている。内面は器面が剥げ落ちて分らない状態である。色調は内外共に

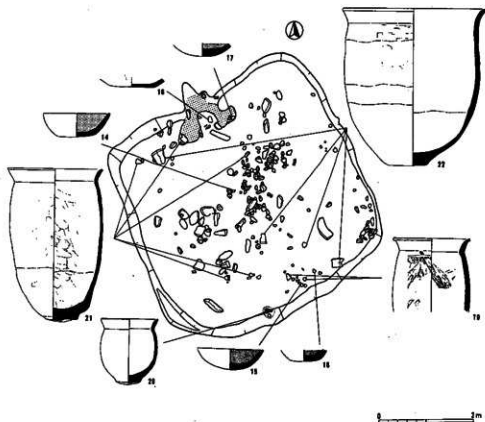


図13 62号住居址跡・遺物出土状況(1:80 遺物 1:8)

明褐色を帯びており、焼成はややもろい感じを受ける。約半分の残存部が発見された。

土師器の甕(21)は、口径19.8cm、器高30.7cm、器厚は口縁部より胴部にかけて0.7cm、底部で2.7cmを測る。頸部からゆるく折れて口縁部が作られ、すっきりとした胴部が底部まで続いているものである。器の調整は、表面は頸部から上か横方向にナデが行われ、以下は底部まで縦方向にヘラ状具又は指頭でナデであるらしい痕跡がある。内面の口縁部は横方向のナデが行われ、以下はヘラ状具にて自由な方向にナデている。色調は明褐色をしており、焼成はややもろい感じを受ける。

黒色土器(14)は、口径14.4cm、器高5cm、器厚1cmで、底部は平底であるが、外方へやや上がる形態の底部をもっている。器の調整は、表面は磨耗して分りにくく、内面はヘラミガキの後炭素質を浸透させ、内黒としている。表面は暗褐色の地に炭素の浸透が所々黒色に出ており、焼成はよい方である。

黒色土器(15)は口径13.8cm、器高4.4cm、器厚は口縁部から下向0.7cm、底部では1.4cmを測り丸底である。器の成形は、表面が入念なナデを行ない、内面はヘラでミガかれている。色調は表面が黄褐色で内面は炭素吸着で黒色をしている。焼成はややもろい。

鷹石が11個床面の東南隅にて発見された。

この地方で礫石ともいい、安山岩系の自然石である。何れも長さ10~13cm、幅4~6cm前後の角柱状の石を選んである。

(原田 肇)

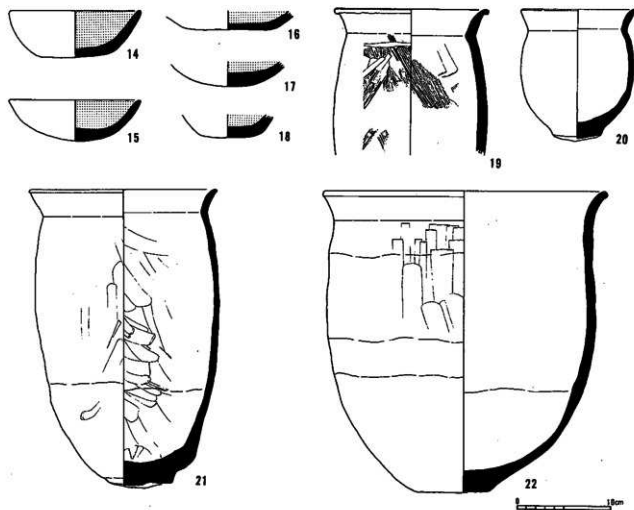


図14 62号住居址出土遺物(1:4)

③ 63号住居址(図15・16・17・18・19, 写真4・5・6・27・28・36・37)

遺構 本址はC地区の東に検出された。北には77・78・79・80・81・84号住居址、西には70・71・72号住居址、南には64・68・69号住居址が、それぞれ隣接している。東西6m、南北6.2mの方形であり、主軸方向は磁北より45°西を向く。

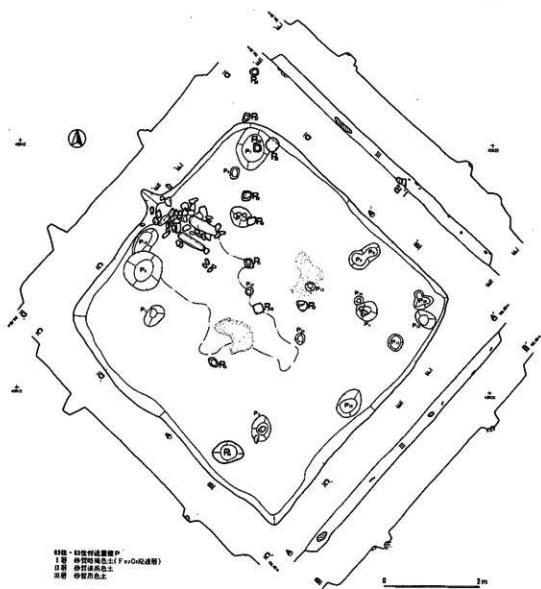
壁高は東壁20cm、西壁20cm、南壁20cm、北壁20cm程であり、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は検出されていない。

床面は住居址中央部が貼床されており、堅く良好な状態であったが、周辺では軟弱となる。住居址中央部東側及び西側には、厚さ2～4cmの焼土が検出された。

支柱穴は、P₁・P₂・P₃・P₄の4本が検出された。P₅・P₇は貯蔵穴の一種かと思われる。

カマドは北壁中央部に設けられた石組粘土カマドである。石組の遺存状態は悪く、ほとんど原形をとどめていない。

本址には、多くの炭化材及び焼土が散在している。最長の炭化材は長さ150cm、幅10cm、厚さ9cmであり、柱状のものが多い。焼土は床面に密着するが、炭化材は5cm程床面より浮いた状態で検出され



63号・砂製住居遺構
 1層 砂製陶器土(Fe₂O₃混濁)
 2層 砂製赤褐色土
 3層 砂製赤褐色土

砂製内P
 1層 砂製陶器土(炭粒・赤褐色土混濁
 赤平に黄土)
 2層 砂製赤褐色土(炭粒・赤褐色土混濁
 赤平に黄土)

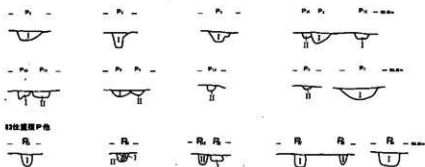
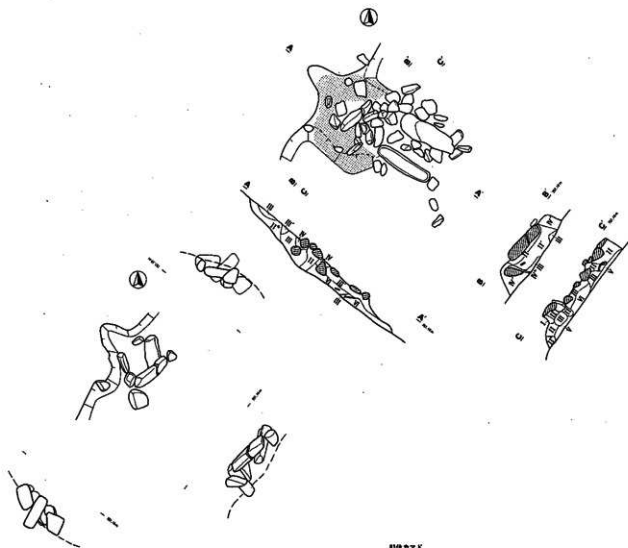


图15 63号住居址 (1 : 80)

た。火災に遇って廃絶したと思われる住居址である。

埋没土は、I層で、自然的埋没であると思われる。



- 跡地より下
- I層 黄褐色土
 - II層 赤褐色土(黒土層をわずかに含む)
 - III層 赤褐色土(黒土粒・炭粒を多く、粘土粒をわずかに含む)
 - IV層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - V層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - VI層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - VII層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - VIII層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - IX層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - X層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XI層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XII層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XIII層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XIV層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XV層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XVI層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XVII層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XVIII層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XIX層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XX層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XXI層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XXII層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XXIII層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XXIV層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XXV層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XXVI層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XXVII層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XXVIII層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XXIX層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)
 - XXX層 赤褐色土(赤土粒を多く含む)



図16 63号住居址カマド (1:40)

第IV章 調査遺跡

遺物 本址からは、多量の土師器及び須恵器が出土した。図示可能な資料は次の通りである。

土師器・杯 (28・29・30・31・32・33・34・35・36・37) 口縁部から底部に至る破片で、残存部は全体の50～20%程度である。図示可能な資料はすべて黒色土器であり、内面には横位及び斜位のヘラミガキが施される。

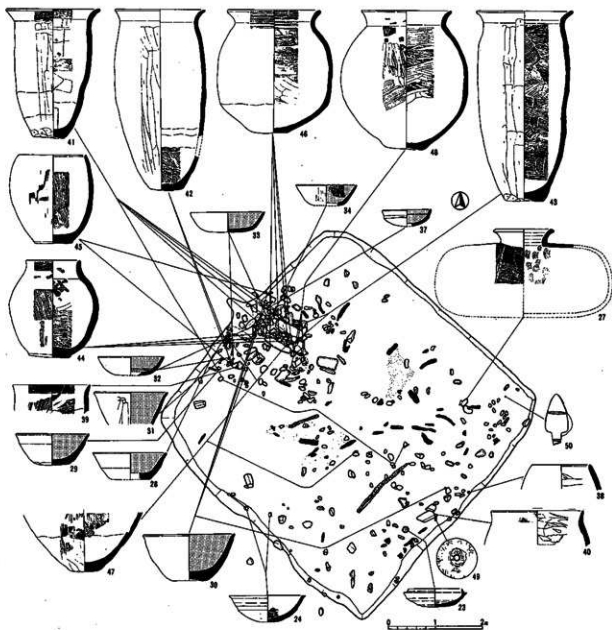


図17 63号住居址炭化物・礫・遺物出土状況 (1:80 遺物 1:8 49・50 1:4)

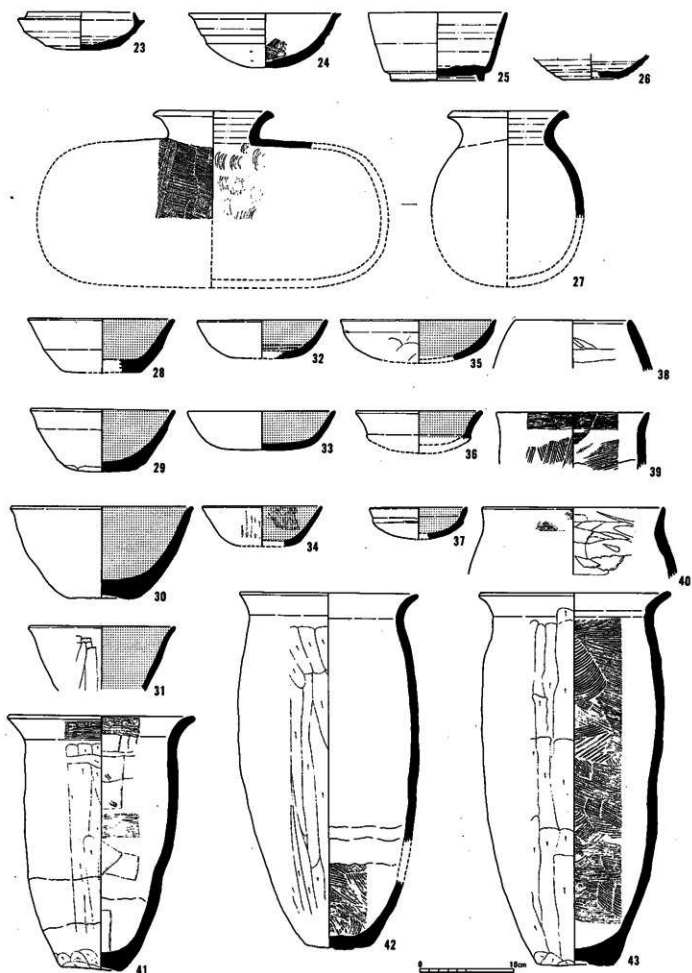


图18 63号住居址出土遗物1 (1:4)

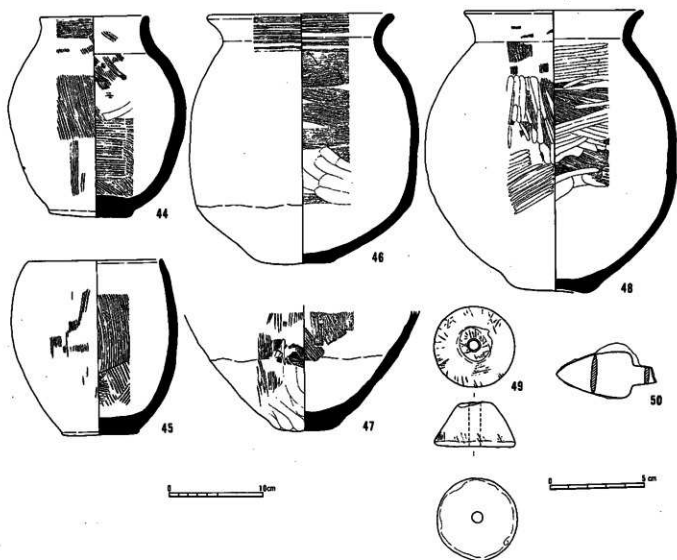


図19 63号住居址出土遺物2 (1:449・50 1:2)

土師器 甕 (39・41・42・43・45・47・48) 41・42・43・48はほぼ完形であるが、39は口縁部、47は底部の破片である。長胴の甕 (41・42・43) の外面は縦位のヘラケズリが施され、内面は横位のハケメ及びナデが施されている。45・48は内・外面共にハケメのちヘラミガキが施されている。

土師器 壺 (38・40・44・46) 38は無頸壺である。外面は斜位のヘラミガキが、内面は口縁部上半にヘラミガキのちハケメが、下半に横位のヘラケズリがそれぞれ施されている。40は短頸壺で外面は横位のハケメ、内面は斜位のハケメが施されている。38・40共に口縁部だけ残存していた。44・46は共にほぼ球形であり、外面にはヘラミガキ及びハケメ、内面には横位及び斜位のハケメが施されている。

須恵器 杯 (23・24・25・26) 23は蓋付杯である。杯蓋は検出されなかったが、杯身は完全な状態である。内外面共に左回りのロクロ整形である。24・25・26は共に破片である。25・26は内外面共にロクロ整形であるが24はロクロ整形のち、ハケメが施されている。24の底部は回転ヘラケズリが施され、25は付高台の上から回転ヘラケズリが施されている。26は回転承切りである。

須恵器 横瓮 (27) 口頸部から胴部上半にかけての破片である。口縁部にはロクロナデが、胴部上半の内外面にはタタキメが施されている。

土器のほかに紡垂車・鉄鏝が出土した。

紡垂車 (49) 紺色の滑石製で、截頭円錐形を呈し、中央に径約6mmのほぼ真円な孔があけられている。大きさは下部の径4.2cm、上部の径1.8cm、厚さ2.3cmで、上部と側面には研磨の折の条痕がついている。

出土遺物のうちカマド内及びカマド周辺より出土したものは、28・29・30・31・32・33・34・37・39・41・42・43・44・45・46・47・48であり、図示可能な遺物の61%を示める。横壁及び鉄鉢は東南隅、紡垂車及び蓋付杯は南壁中央部際よりそれぞれ出土している。須恵器杯(25)は流れ込みであると思われる。

(寺 嶋 仁)

④ 67号住居址 (図20・21・22・23, 写真11・12・31)

遺物 67号住居址はC地区中央のやや北寄りに検出された竪穴住居址で、この地点付近には66号・70号

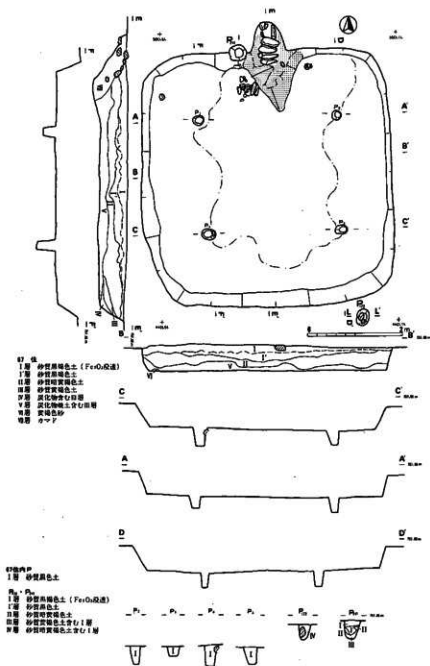


図20 67号住居址 (1:80)

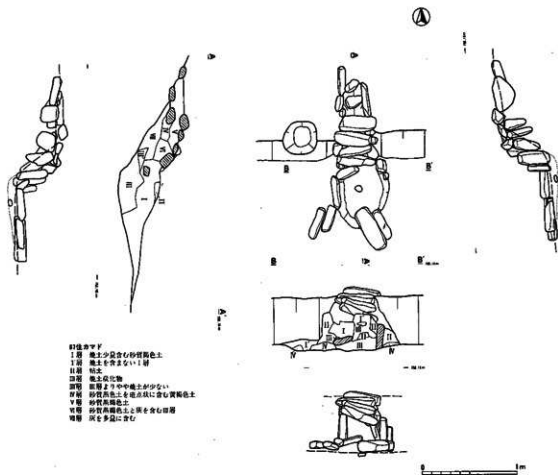


図21 67号住居址カマド (1:40)

・71号・72号・63号などの各住居址と、掘立柱による建物址の遺構が多く検出されており、長い期間にわたる居住地として利用された地帯である。

竪穴は東西及び南北の何れも5.4mの隅丸方形プランである。壁は原形が保たれ、東西両壁は75°~80°と強い角度をとり、南北両壁も60°近い角度をもって掘り込まれている。

竪穴内部の土層はⅧ層まで堆積が認められ、この中でⅤ層中に多量の炭化物が埋もれているのが分かったため、注意して検出した結果、本住居の建築材が火災によって崩れ落ちた状態で埋没したものであることが判明した。

本住居址のカマドは北壁に設けられており、家屋としては南面する建物であったと見られる所であるが、検出した炭化物も家屋の上部構造がある程度は察知出来る状態にあるものと見られる。ここで炭化した建築材を見ると、太さは4~15cm程に焼けのこり、当時の原形は推察するしか出来ないが、それぞれの検出状態と位置によって用途が分かるものもあることから、この点について見て置きたいと思う。

最初に床面の東側に南北方向に検出された炭化木は、やや太くて長いものであり、その位置や大きさから、本住居の東側にある2本の柱の上に渡された梁ではなかったかと考えられ、次に床面の中央に東西方向に検出されたおよそ10本の炭化木は、梁の上に渡された2本の桁と、屋根の檼木ではなかったかと見られるもので、更に以上の炭化木の外側に放射状に検出されたやや細めの炭化木は、垂木であったと考えら

れるものであり、これらのことを総合的に見ると、焼失当時に相当な家屋材は失われたものの、この住居は、入母屋造りの構造で建てられたことが推察されるものである。

床はカマドの所でやや深く凹みをつくる。大部分は平坦であり、その中央部はよく踏み固められている。

柱穴址は床面に4個と北壁のカマド近くに1個発見された。床面の4個は形が整然としており、建築構造を推測させるものがある。

柱穴址を見るとP₁とP₂の間隔は3mで、P₃とP₄の間隔は2.95mとこれに近く、P₁とP₄及びP₂とP₃の間隔は何れも2.4mで同じであり、これは東西にやや長い構造の屋根をつけた家であったことが考えられる。

カマドは北壁中央に位置して築かれており、カマドの焚口部が崩れた状態で発見された。このカマドは石組粘土カマドで、石組に近くの川から集めた細長い矢沢石を使用しているのが特に注意される所である。カマドの石組は、北壁から南に2列に石を立ててならべ、片側5本ずつの支え石とし、その上に同様の石を横に5本架け渡して骨組をつくり、これを粘土で厚く巻いて作ったものである。この形で当初の大きさを推測することとすれば、おおよそ焚口部の口径は縦横共に30cmの方形状で、奥行は60cm程で北壁に達し、北壁に掘られた溝を経て屋外に続き、約60cmの煙道部も小形の筒状に石と粘土で築いて連結させており、焚口と煙道部がこれによって効率のよい働きをしていたことが考えられる所である。

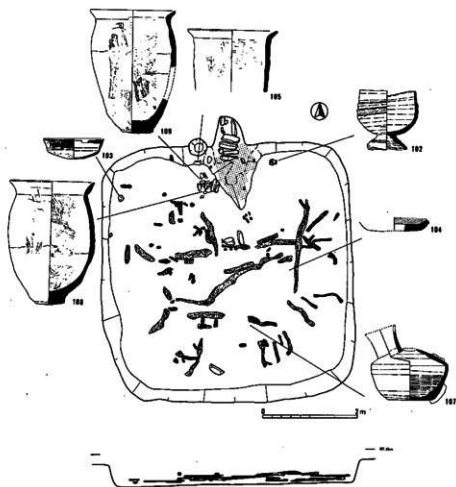


図22 67号住居址炭化物・礫・遺物出土状況(1:80 遺物 1:8)

遺物 住居址床面より30~40cm浮いたI層中に平甕(107)が出土した。これは住居址廃絶後、何らかの要因により入ったものと思われる。平甕は73号住居址から出土した破片と接合した。器の成形は体部残存部分の上半分はロクロナデとし、下半分と底部は回転によるヘラケズリが行われている。胎土は砂粒を含むも焼成はよく、色調は内面白灰色で、表面は灰色の地に緑色をした自然釉が滲み出ている。

須恵器の白付椀(102)は焼けひずみの大きい形をしており、床面のカマドの右側近くで発見されたものである。半球形の体部は最大口径12.0cm、中央でややふくらみ32.5cmを測る。椀をのせた脚部は小型であり有段であるものの、透しは見られない。全体の器高は12.6cmである。焼成はよく、色調は内面青灰色、表

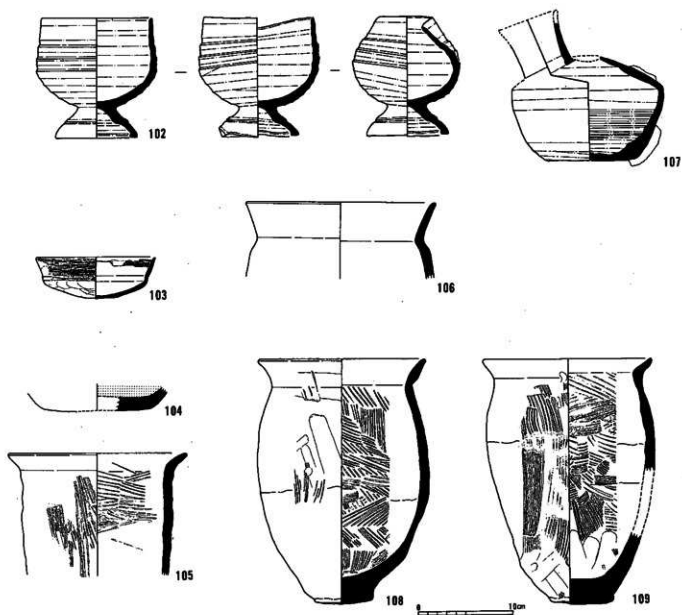


図23 67号住居址出土遺物(1:4)

面は暗緑色で自然釉が所々滲み出ている。

土師器の杯(103)は口径12.4cm、器高4.2cmで、底部は丸底である。器の成形は、内面の底部はナデが行われ、それより上部から口縁部にかけては、ヘラミガキの後一部ハケメが施され、表面は底部全体にヘラミガキが行われ、口縁部はヘラミガキの後、横方向にハケメがつけられている。器厚は平均0.3cmと薄く焼成はよい。色調は内面褐色で表面は暗褐色を呈する。

土師器の甕(109)は口径17.8cm、底部径6.5cm、器高25.3cmの大きさと、頸部で折れた口縁部が2.5cmと短かいつくりとなっている。胴部はほっそりとして下部は細く、器厚は口縁がやや薄く0.7cmとし、胴部は平均1cmを測り、底部は2.5cmと厚いつくりとしている。器の成形は、内面は6本を単位とするやや荒いハケメで自由方向に仕上げ、表面は同じ器具にて縦方向に仕上げを行っている。口縁は内外両面に横方向にナデが行われている。焼成はややもうい感じを受けるも、ほぼ完形で出土した。

次の土師器の甕(108)も、ほとんど同形品で、口径17.5cm、器高25.3cmで、内外両面に4～6本を単位とするハケメ痕が残されている。これもほぼ完形品であり、住居の火災に取り出すことの出来なかった遺品であると考えられる。

(原田 曠)

⑤ 第71号住居址 (図24・25・26・27, 写真12・13・32・36)

遺構 本址は、70・72号住居址に東北隅を切られた状態で検出された。東西6.6m、南北7.4mの隅丸方形である。主軸方向は磁北より20°西を指向し、70号住居址とほぼ同じである。

壁高は東壁35cm、西壁45cm、南壁45cm、北壁35cm程であり、西壁以外はほぼ垂直に立ち上がっている。周溝は検出されていないが、東西隅に、掘り込みが検出されている。

床面は、住居址中央部が貼床されており、堅く良好な状態であったが、周辺では軟弱となる。

主柱穴は $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4 \cdot P_7$ の4本が検出された。 P_8 は P_7 の支柱穴と思われる。 $P_3 \cdot P_5 \cdot P_6 \cdot P_9$ は壁際に掘られていた。

カマドは北壁中央部に設けられた、石組粘土カマドである。粘土部はほとんど崩れ落ちていたが、石組の遺存状態はよく、僅かに天井石が持ち去られたのみで、両袖石は完全な状態で遺存していた。

本址には、多くの炭化材及び焼土が散在している。最長の炭化材は長さ150cm、幅20cm、厚さ5cmであり、柱状のものが多い。焼土は床面に密着するが、炭化材は5cm程床面より浮いた状態で検出された。火災に遇って廃絶したと思われる住居址である。

埋没土は、自然堆積であり、III層に大別できる。

遺物 本址からは、多量の土師器及び須恵器が出土した。図示可能な資料は次の通りである。

土師器 杯 (143・144・145・146) 143・146は口縁部の破片、144・145は口縁部から底部の破片である。図示可能な資料はすべて黒色土器である。

土師器 甕 (147・148・149・150・151・154・155・156・158) 154・155の底部の破片、158の胴部から底部にかけての大きな破片のほかは、すべて口縁部から胴部上半にかけての破片である。156にはロクロによる整形が施されているが、そのほかの資料には、ナデ、ヘラミガキ、ハケメが施されている。147、149は黒色土器である。

土師器 高杯(153)脚部の破片である。黒色土器であり、外面にはヘラミガキが施され、内面には指圧痕が見られる。

土師器 甕(152)ほぼ完形である。内面には横位のヘラミガキののち一部にハケメが施され、外面には斜

位のヘラミガキのち一部にハケメが施されている。

須恵器 杯 (140・141・142)140は蓋の破片で、ロクロ整形である。141・142は共に口縁部の破片で、ロクロ整形である。

須恵器 フラスコ形瓶(157)は、反時計回りのロクロ整形である。西に隣接する67号住居址から破片が出土し、出土レベルも高いことから、住居址外からの流れ込みであると思われる。

土器のほかに砥石、不明鉄製品、俵石が出土した。

砥石(159)形は12×10×13cmの直角三角形。厚さ4cmの安山岩で三面が磨かれて凹み、表面に掻き疵と思われる細い条痕が認められる。色は灰白褐色である。

(寺 嶋 仁)

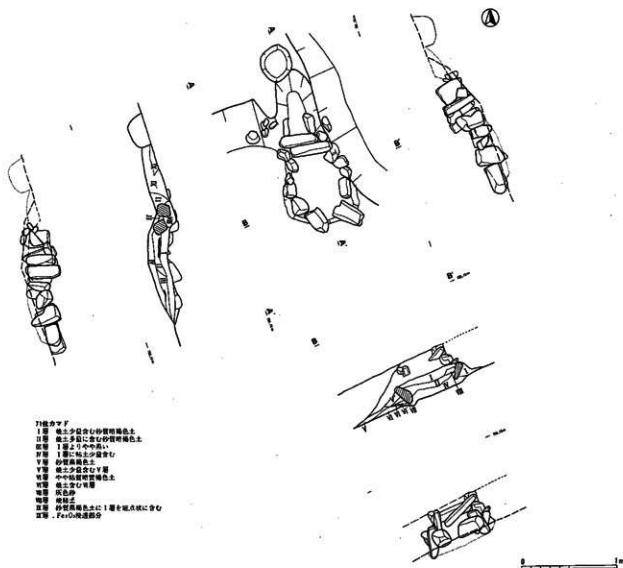


図25 71号住居址カマド (1:40)

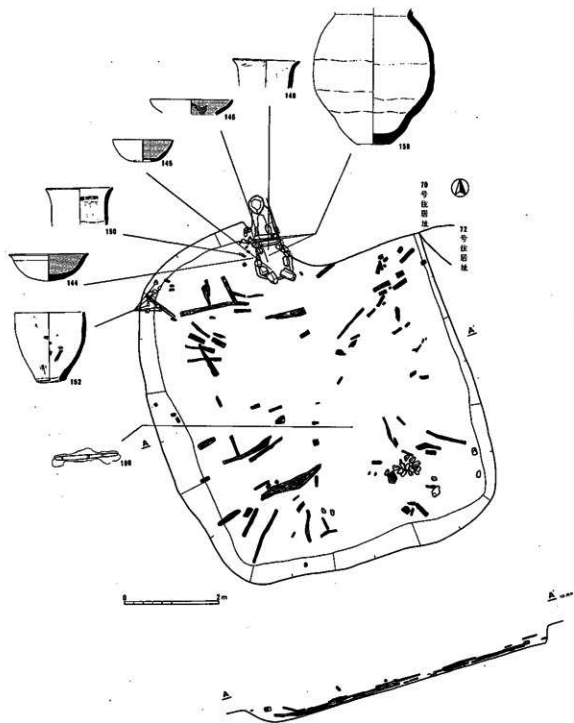


图26 71号住居址炭化物・遺物出土狀況 (1:80 遺物 1:8 160 1:4)

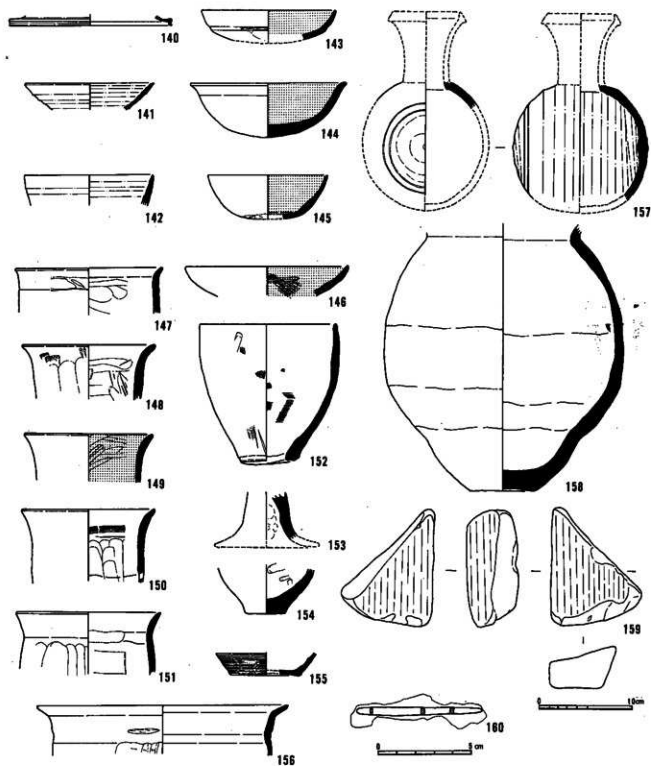


图27 71号住居址出土遺物 (1 : 4 159 · 160 1 : 2)

⑥ 74号住居址(図6・28, 写真16・33・36)

遺構 本住居址はC地区の東北隅に近い位置で検出された竪穴住居址である。竪穴の南端を77号と78号の両住居址によって切り合いとなった為、南壁の大部分は失われている。現況では、竪穴北端で東西4.2m、南側の東西両壁間で4m、西辺が5m、東辺の残存部分が4.4mと不整な長方形に近いプランである。

この竪穴は磁北に対し長軸を30°東に振っており、この近くの他の竪穴が長軸を西へ30°前後振るのに比べ、変わった形を示している。

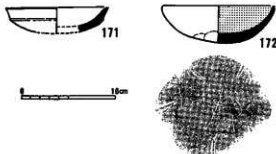
次に東・北・西の三方の壁は20°から30°の角度で床面に掘り込まれており、床面までの深さは北壁中央で40cm、両端で20cmであり、竪穴の南側では30cmを測る。総体的に西側が深い形を持った床面である。

柱穴址は床面に6個と、北壁の中央部分に2個並んで発見された。この中で北壁に設けられたものは外部の他の施設のものではないかと見られ、直接のものではないと考えたい。

この他カマドや周溝などの施設は見当らない。

遺物 遺物は比較的少なく、黒色土器の杯2個と、他に甕の破片がわずかに出土した。

杯(172)は黒色土器で口径11.7cm、高さ3.7cm、器厚5mm~1cmを測り、内面は入念なヘラミガキが行われ、外面も丸底の底部までヘラケズリの後入念なヘラミガキをされている。一見して手頃な杯である。胎土は雲母がわずかに見えるのみで、緻密で焼成良好である。炭素の吸着は内面に充分行われて黒色をしており、外面にも口縁部にわずかながら滲み出ているだけで、この部分は黒褐色を呈し、他は明褐色である。



(原田 曠)

図28 74号住居址出土遺物(1:4)

⑦ 78号住居址(図6・29・30, 写真16・17・33)

遺構 本住居址はC地区の東北隅に近い位置にて検出され、多数の竪穴住居址が切り合う状態で発見された中の一軒である。西北を77号と81号の両住居址が切っているので、全体の約寸の東南部分を残すもので、現在長は東壁4.6m、北壁2.6m、南壁3.4mで、東壁に沿う床面を中心に残存した形となっている。この竪穴の原形は、磁北より西へ45°程振った長方形であったのではないかと考えられるプランである。

竪穴内部はI層とII層に分かれて堆積しており、I層は10cmの深さで黒色土が見られ、これは粘性が有って酸化鉄を含むもので、次のII層は深さ7cm~12cmの黒褐色土で砂を含む堆積状態であった。これらを見ると、本住居址は廃絶後間もなく水害と見られる土砂の流入があり、その後長い間に適度な環境によって植物が一带を覆い、腐植土の堆積となったことが考えられる。

本址の柱穴址は4箇所に見られているが、大きさは径20cm程のもの3箇所他に、30cmのものが1箇所発見されている。

遺物 須恵器の杯蓋(209)が発見されている。約寸の破片でひずみの大きい為計測困難であるが、口径14.0cm器高6cm程のものと見られ、器厚5mmで色調は灰色を呈し、焼成良好である。器の整形は天井部の表面をヘラケズリとし、表面全体と表面の下半分はナアによる仕上げが行なわれている。天井部表面の中央につまみを付けていたものと思われる。

土師器の甕(218)の口縁部は幅5cm高さ4cmの小破片であるが、頸部で強く折れる形に特徴がある。器の

第IV章 調査遺跡

内外両面をヨコナアとし、頸部より内面はヘラケズリを施している。色調は暗褐色で、表面は黒く煤けており、所々に油煙が付着している。

鷹石が床面より11個発見された。大きさは長さ10cm~15cm、幅7cm~10cm、厚さ5cm~8cmで、重量は300g~500g程のものである。何れも近くの小川から拾った自然の転石であるが、この中で2個の石の面にわずかづつの磨き出した所が見られ、他の用途としても考えられる点、注意したい遺物である。

(原田 曠)

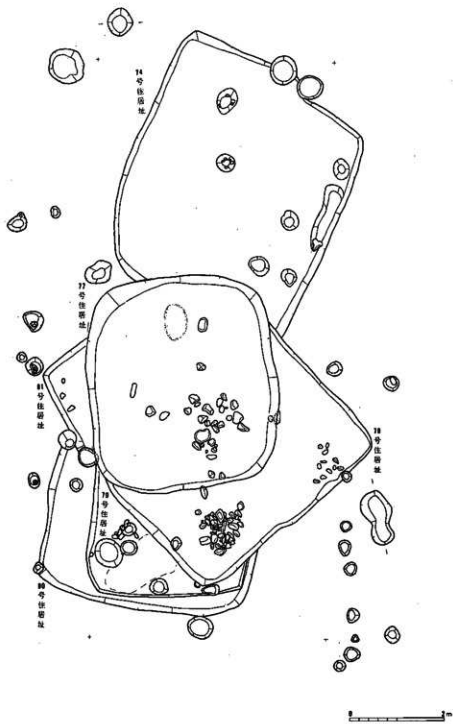


図29 77・78号住居址出土状況 (1:80)

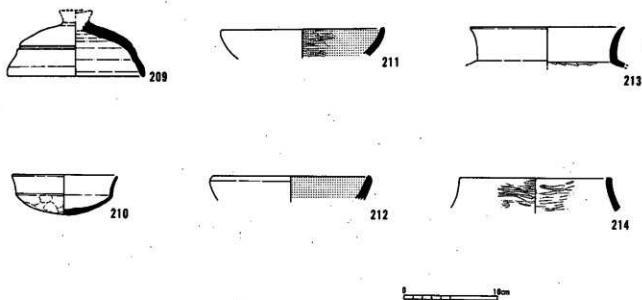


図30 78号住居址出土遺物(1:4)

(3) 第Ⅶ期

① 64号住居址(図31・32・33・34, 写真7・8・29・36・37)

遺構 本住居址はC地区中央の東端に位置して検出された竪穴住居址で、竪穴の東側に沿い68号・69号の両住居址が切り、東南隅は地区外の為に調査が及ばない所から、現況では約寸の遺構が確認出来た範囲である。竪穴の原形を推定すれば、東西6m、南北5.4mと長軸を東西にとり、カマドが北壁に設けられているので、南に面して構えた住居であったことが考えられる。

竪穴内部の土層はⅣ層まで確認され、その間Ⅳ層から床面上に相当の炭化物が遺存し、カマド付近には土器が比較的多く発見されるに至ったことから、火災を受けて放置された後埋没したものではないかと見られる。

竪穴の深さは、壁に接した床面までが30cm、床面中央が凹みもち40cmと低い。

壁は40°にて床面に達し遺存はよい方である。柱穴址は計14個発見されたが、これらの中で、P₃・P₅・P₉は主柱址と見られる。P₃は西北隅に近く、径26cm深さ30cmである。P₅はP₃に相対し西南隅で、径34cm深さ30cmで底は細い。P₉は北東隅に近く、径40-60cm深さ36cmで底は平坦である。

カマドは北壁のほぼ中央部に作られ、焚口部前面が崩壊した状態で発見された。この断面は北壁の角度が60°で掘られ、その深さが40cmに達した所で、ゆるい舟底状のたるみをとって更に30cm下降している。この面を基盤として幅90cm奥行70cmの広さに矢沢石18個と粘土を用いてカマドを築いたものと考えられる。矢沢石は近くの川から集めたもので、30cm前後の長さのものが多く、煙道部は北壁より50cm北に張出して作っている。焚口部前面に土師器の破片と少し離れて砥石1個の他に、焚口部東側に土師器の裏が4個発見された。

遺物 須恵器の提瓶(58)は約寸の破片で体部の扁平な方である。推定の器高は22.5cmで、器厚5mmである。表面に同心円状のカキ目をほどこしてあり、色調は表面青灰色で内面は赤褐色を呈し、胎土は長石粒

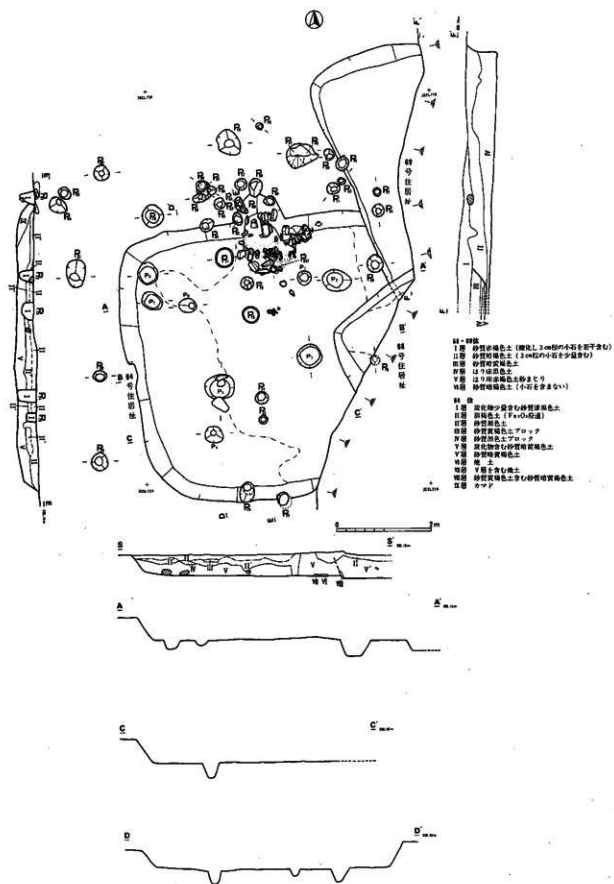
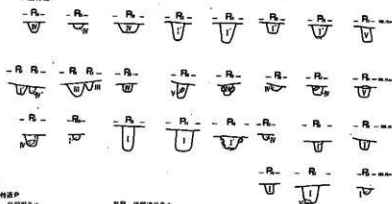


図31 64・68・69号住居址 (1:80)



鉢器片P
I層 砂引黒色土
II層 砂引暗黒褐色土 (黒色土を7)
III層 砂引暗黒褐色土 (目録より3、1)

鉢器片近P



鉢器片近P

I層 砂引黒色土
II層 砂引黒色土(上部F・Dの境)
III層 I層中心部砂引黒色土
IV層 砂引暗黒褐色土(目録より高1)

V層 砂引黒褐色土
VI層 炭化層中心部砂引黒褐色土
VII層 暗黒褐色土中心部砂引黒褐色土

を含むが焼成よくしまっている。本社のI層とII層の境より出土した。

須恵器の壺(55)は頸部から体部にかけての破片で、全体の形状や大きさは不明である。破片より察すれば、頸部は細く、体部は球形であり、その肩の所に幅1.5mmの沈線1本入れている。器厚は頸部で3mm、体部では5mmを測り、色調は内外両面に黄灰色を呈し焼成はややもろい感じを受ける。

土師器の甕(65)は口径19.7cm、器高33.6cmで、器厚は口縁部が7mm、胴部はほぼ1cm、底部は1.8cmと厚いやや大形の甕である。短かい口縁部が外反する長胴型のタイプである。器の成形は、口縁部の両面は横にナデがなされ、頸部から底部までの表面は入念な縦方向のヘラケズリを行ない、内面はナデの後にヘラ状具にて叩いてある。底部には木葉痕をつけている。色調は表面暗褐色で内面暗黄褐色を呈して焼成良好であり、ほぼ完形品で発掘された。

土師器の甕(64)は口径17.6cm、器高23.5cm、器厚は口縁部で1cm、胴部1.5cm、底部2.4cmで、やや厚手な作りである。整形仕上げは、口縁部の表面は横方向に15本のハケメ仕上げとし、頸部から胴部全面に縦方向に7本単位のハケメがなされ、内面は口縁部から頸部は横にナデとし、その下部約3cmはハケメと横方向のヘラケズリとが行なわれ、胴部の中央は縦方向のハケメをした後一部にナデやヘラケズリも行われている。底部には木葉痕を付している。色調は両面に暗褐色を呈し、焼成はややもろい感じを受ける。

砥石(68)は長さ18cmで、一辺が3～5cmの六角形の断面をもっている矢沢石である。各々の面に磨耗痕が見られる。カマドの前面右側から発見された。

(原田 曠)

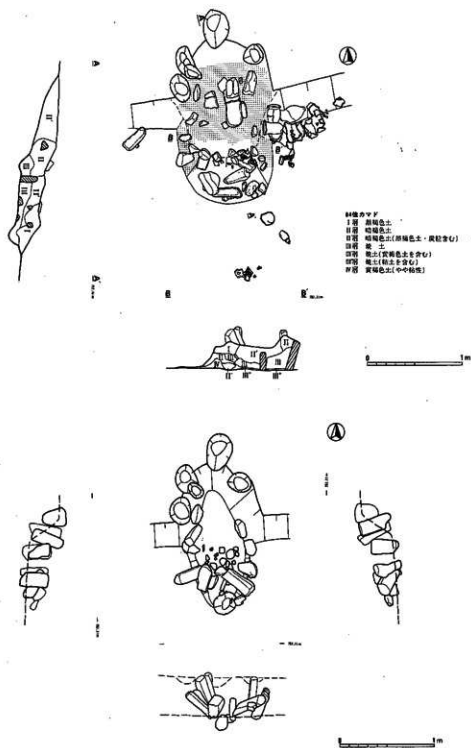


図32 64号住居址カマド (1:40)

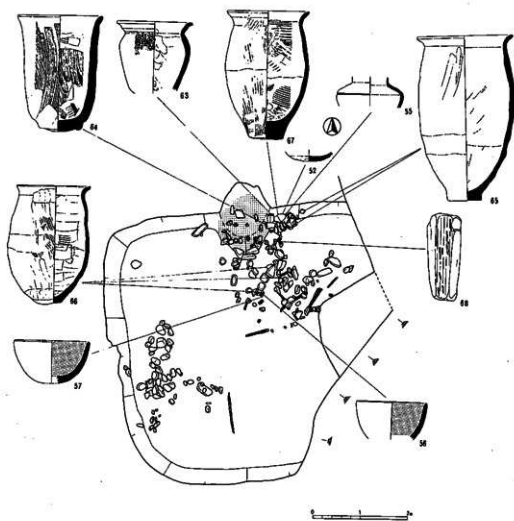


図33 64号住居址炭化物・礫・遺物出土状況（1：80 遺物 1：8）

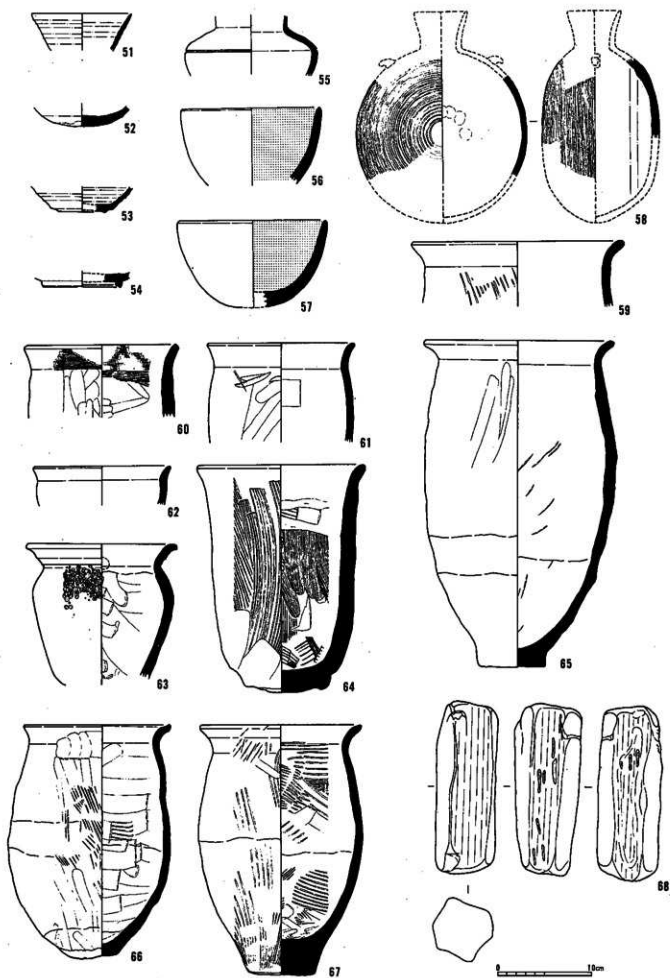


图34 64号住居址出土遗物 (1:4 68 1:2)

② 72号住居址(図24・35・36・37, 写真14・33)

遺構 本址は、70号住居址に北西隅を切られ、71号住居址の東壁を切っている状態で検出された。東西5.4m、南北4.8mの隅丸台形であり、主軸方向は磁北より36°西向きである。

壁高は、東壁10cm、西壁30cm、南壁20cm、北壁20cm程であり、南壁以外はほぼ垂直に立ち上がっている。周溝は検出されていない。

床面は住居址中央部が貼床されており、堅く良好な状態であったが、周辺では軟弱となる。

主柱穴はP1・P3・P6の3本が検出されたが、北西部の柱穴は、70号住居址との切り合いのため、検出できなかった。P2・P5・P7は主柱穴と何らかの関係があると思われる。

カマドは北壁中央部に設けられた、石組粘土カマドである。石組の遺存状態は悪く、ほとんど原形をとどめておらず、袖石、天井石が散乱しているだけである。

本址には、多くの炭化材及び焼土が散在している。最長の炭化材は長さ200cm、幅20cm、厚さ5cmであり、板状のものが多い。焼土は床面に密着するが、炭化材は5cm程床面より浮いた状態で検出された。火災に遇って廃絶したと思われる住居址である。

埋没土は1層である。

遺物 本址から出土した図示可能な資料は7点である。

土師器の甕(161・162・163・165・166・167)で161はほぼ完形であるが、162・167は底部の破片。163・



図35 72号住居址カマド(1:40)

166は口縁部から胴部上半に至る破片である。161・162は輪積であり、162は底部に木葉痕が認められる。

土師器 短頸壺(164)口縁部から胴部上半に至る破片で、口縁部は胴部に貼付けられている。

(寺 嶋 仁)

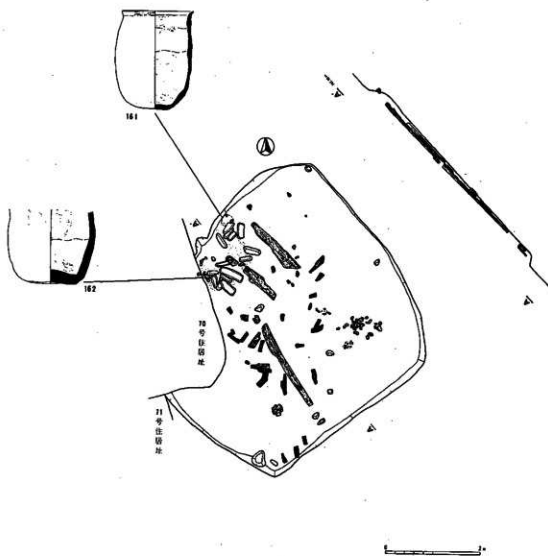


図36 72号住居址炭化物・礫・遺物出土状況 (1:80 遺物 1:8)

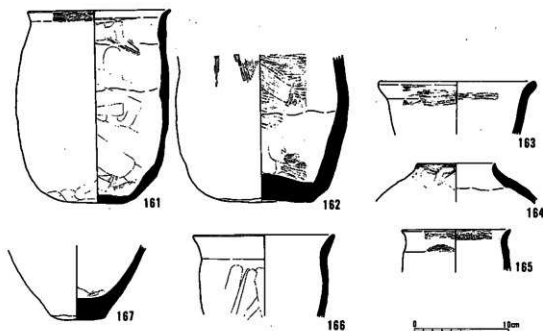


図37 72号住居址出土遺物(1:4)

③ 77号住居址(図6・29・38, 写真16・17・37)

遺構 本址は調査区東北の黄褐色砂層上で検出された。この地点は、本址、78・79・80・81・84号住居址が重複しており、これらの住居址中、もっとも新しい住居址である。本址は、Ⅳ期住居址群(64・72・本址)中では東側に位置する。

平面形は、東西4m×南北4.4mの隅丸方形で、主軸は磁北に対して1°西に向いているのみでほぼ南北である。

住居址の埋土は、3層から成っている。最下層のⅢ層は黄褐色土のわずかに黒色土を含む層で北壁～住居址中央、西壁～東壁に傾斜をもち床面上に堆積している。南壁～住居址中央にはこの層は堆積していない。Ⅱ層は黄褐色土をわずかに含む黒色土で北壁Ⅲ層上～南壁床面上、西壁～東壁床面上に傾斜をもち堆積している。Ⅰ層は酸化鉄浸透の黒色土で中央から東壁、北壁側の所々のⅡ層上に薄くレンズ状に堆積している。Ⅲ・Ⅱ層はおそらく、北及び西側から住居廃絶後、自然流入し堆積したものと考えられる。住居址東南側には、床面より5～15cm浮き30ヶの拳大～人頭大の石(集石)が堆積していた。これは人為的なものか、自然流入かのははっきりしないが、おそらくこの部分に集中しているのみであるので人為的な集石と考えられる。

壁は、東壁26cm、西壁30cm、南壁28cm、北壁30cmを測り、壁はやや傾斜をもち掘られている。床面は、ほぼ平坦で、南西側～北壁中央直前まで良好な堅い床面が見られ、周囲はやや軟弱な床面であった。ピットは床面に3個あり、そのうち主柱穴はP₂とP₃の2本と思われる。P₂・P₃の埋土は黄褐色砂粒をわずかに含む黒褐色で共者とも柱底は見られなかった。P₁は大きさ、深さ等から、用途は不明であるが別の目的で掘られたものと考えられる。P₁の埋土は砂質の暗褐色土である。

カマドは、北壁直前に80×20cmの範囲に渡り厚さ2cmの焼土が確認された。おそらく粘土カマドであったと考えられる。またこの横にあった30×18cmの扁平な方形の礎はカマドに使用されたものと考えられ、一部石を使用した粘土カマドであったと推定される。

本址よりの遺物出土状況は、ほとんどⅡ・Ⅲ層の下層に集中し約50点の土師器杯・甕の破片と少ない。床面上及びその直上(1~5cm)は図示できた杯(206)と高杯(207)の破片のみであった。208の石器はⅡ層中でおそらく混入したものと考えられる。

本址は重複関係、遺物等より7世紀後半前後と考えられる。

付記となったが、同時期の住居址は3軒(64・72・本址)であるが、64・72号住居址は焼失住居址と見られるが、本址は火災に遭っていない。これは64・72号住居址が同時に火災に遭ったが、本址は火災にならなかったか、64住、72住、本址で7世紀後半でも年代が異なり火災に遭わなかったか(本址は、遺物等から見てやや古いタイプのものである)、64住・72住が別々の時期に焼失し、本址は火災に合わなかったのか、いずれにしても3点の要因が考えられる。また3軒中2軒(64住、本址)に埋土内の集石が見られる。

遺物 遺物は横刃型石器1点の他、黒色土器の杯1と同高杯1が何れも破片で発見され、更に土師器の甕の破片5個体程かと見られるものが出土した。

横刃型石器(206)は長さ11cm、幅2.7cm、厚さ1.9cmを測る大ききで、断面三角型の一つの角を利用してこれに刃を付けたものである。

刃の部分は横剃ぎ法により両刃を作り出し、刃長8.5cmであるが先端が折損しているので全体の形状は不明である。石質は珪質頁岩で出来ている。

杯(206)は黒色土器で口縁部の破片である。口径11.2cm程で器厚5mmを測る。内面は横方向にヘラミガキがなされ、外面は横にヘラミガキの後、口縁先端に幅2mm、深さ1mmの凹線を横に入れており、それより1.5cm下って外方にふくらむ段を付けた後ゆるく底部へカーブを描いて行く形をとっている。底部は不明である。

内面は黒色を呈し、外面にも相当黒色の部分が見られるが、残部は褐色をし焼成はよい。

高杯(207)は杯の部分の破片で黒色土器である。口径11.2cm、器厚5mmを測る。内面は横にヘラミガキが行われ、外面はヘラミガキの後口縁部は横にナデが行われている。炭素は内面全体に吸着がなされ黒色であるが、外面は素地の褐色であり、胎土は余りよくない。(原田 曠)

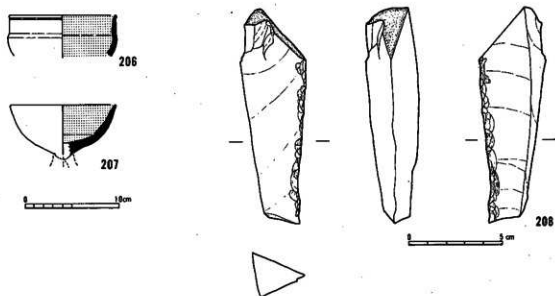


図38 77号住居址出土遺物(1:4 208 1:2)

(1) 第Ⅶ期

① 75号住居址(図39・40・41, 写真14・15・33・36・37)

遺構 本址は、発掘区のほぼ中央に位置し、73・76号住居址・建物址33と重複関係にある。76号住居址と建物址33は本址に切れられ、73号住居址は本址を切る形で検出された。この住居址の平面形は、南北辺が約6m、東西辺が6mの北辺が少し短かく、台形ともいえる隅丸方形のプランを呈し、主軸方向は、磁北より35°西を指向する。覆土はほぼ6層にわけられ、レンズ状に堆積している。

壁はやや斜めに掘り込まれ、他の住居址に切られていない、遺存状態の良い南辺で最高約50cm東辺で約40cmを測り、周溝は、カマド部分をのぞき、幅14cm～26cm、深さ10cm～40cmで全周する。そして、南辺のちょうど真中の壁ぎわに、長さ60cmぐらいの石と、人頭大の石を組み合わせた踏み台のようなものが検出された。

床は直接地山を床とし、ほぼ平坦であるが、ゆるやかに南に傾斜し、住居址中央部からやや南よりと、カマド付近が硬く踏み堅められているが、壁に近くなるにしたがって軟弱である。ピットは全部で9つ確認されているが、P4・6・9はこの住居址の主柱穴に比定できる。しかしP91あるいはP102については本址床面下より、重複関係のある建物址33のものとして検出されたが、P4付近からもP2・3などが検出されていることから数度の建て変えなおしも考えられるであろう。

カマドは、北辺の中央部分に煙道と考えられるものが80cmほど76号住居址を切って出ており、焼土が焚口と思われる付近に検出された。煙道の平面形は細長く、先端の丸いV字を呈し、斜めに掘り込まれている。カマド本体の遺存状態は悪く、他の住居址と同様に、石組みネンドカマドであったと考えられるが、カマドに使用された石や構築土もあまり残っていない。これは、住居廃棄後あまり時を移せずしてカマドが破壊され、石などが持ちさられたためと考えられる。

遺物 本址からは砥石、須恵杯、土師甕、土師高杯などが出土しているが、ほとんど完形のものはなく、大方破片であり遺物量も少なかった。

砥石(203)は砂岩製のやや胴のへこんだ長方を呈しており、長面4面すべて使用されているが、二つに欠けて出土した。

須恵杯(176)は残部が口縁だけで、ロクロ木びきの痕を残した青灰色を呈す焼成のよいものである。

須恵杯(177)は、ロクロにより成形されたもので底部に回転ヘラケズリ痕を残している。器形は、口縁から緩やかに下り底部近くでカーブをえがいて底部にとりついている。胎土に長石を多く含み、青灰色を呈し焼成は良好である。

土師甕(193)は、胎土に小石を少し含み、褐色の焼成のよいもので、口縁部と胴部の一部を残しているだけである。しかし、胴部の最大径は口縁径より大きくなり、緩やかにすぼむものと推定される。口縁部内外をヨコナデ、器内胴部を横方向の細かなハケ、器外胴部をヘラケズリで調整している。

高杯(188)は、杯部だけ残し、器内をへらで磨いた後内黒にして、器外をへらで磨いたままにしている。そして、器外の脚部との接続部近くにヘラケズリを施している。ロクロは未使用であり、外面は赤褐色を呈し焼成は良い。

土師甕(189)は、口縁部内外をヨコナデし、器内口縁部の稜直下にヘラケズリを残し、その下のクテナデがヘラケズリにかかっている。器外胴部はナデにより調整されている。胎土に多くの石英粒を含み、焼成は良い。

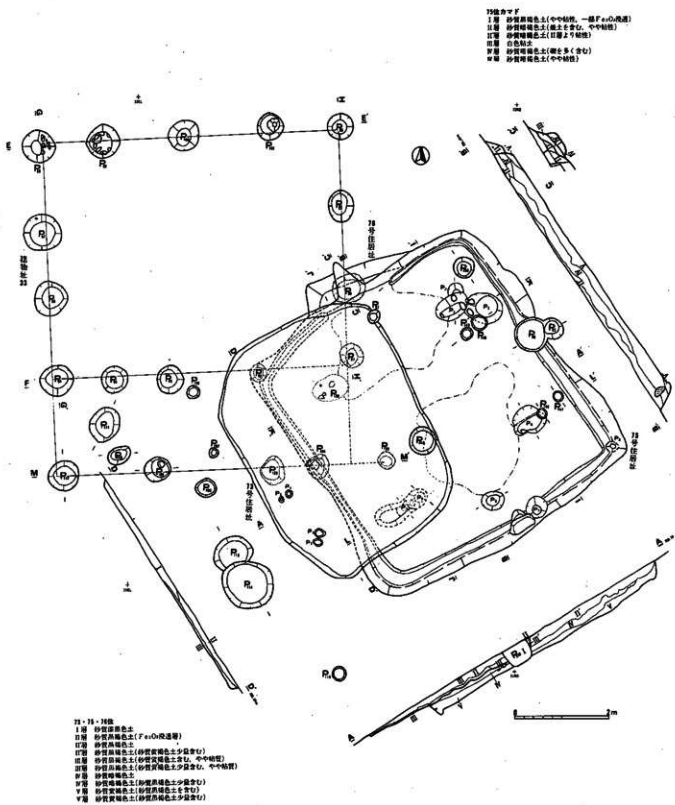


図39 73・75・76号住居跡・建物址33 (1:80)

第IV章 調査遺跡

須恵杯(175)は、灰色を呈すやや焼きの甘いもので、底部を欠いている。器面にロクロ水びきの痕を残している。

P4から出土した土師甕底部は小片だが、器外にヘラナデ、器内底部にヘラケズリを残している。底部は磨滅が著しく、調整など不明である。

これらの他、覆土中から土師甕、杯、須恵杯・大甕などの破片が出土している。そのうちには、ヘラ記合をもつ高台付き須恵杯底部破片、完形でロクロ成形、底部回転ヘラケズリのある須恵杯が含まれている。

(市川 隆之)

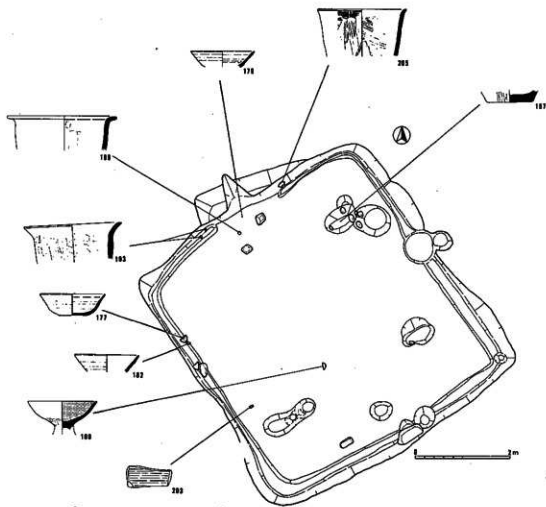


図40 75・76号住居址遺物出土状況(1:80 遺物 1:4)

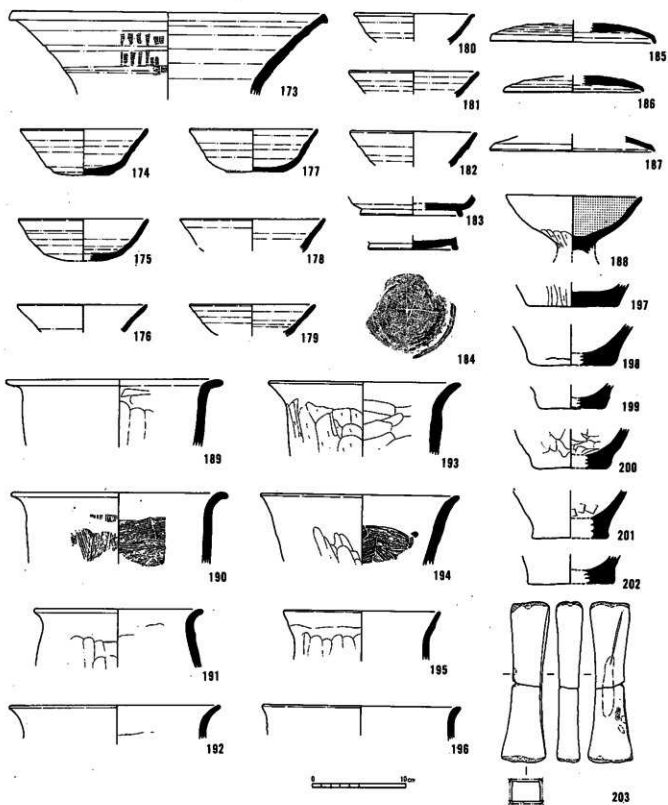


图41 75号住居址出土遺物(1:4)

② 76号住居址 (図39・40・42, 写真14・15・33)

遺構 本址は75号住居址に大半を切られ、建物址33を切った形で検出された。75号住居址の北側にごく一部残っているだけで、大部分削られている。大きさは75号住居址より出ることとはなく、おそらく隅丸方形のプランと考えられ、主軸は磁北より15°西を指向しているものと考えられる。

壁は、残っている北辺で約25cmを測り斜めに掘り込まれ、カマド、ピット、周溝などは検出されなかった。75号住内より検出されたピットのうち、本址のものが含まれているのかもしれない。

遺物 大部分75号住居に切られており、遺物はほとんど残されていない。

土師甕(205)は、75号住のカマド脇の76号住覆土を切る壁にくいこむように出土した。この甕は、口縁部から緩やかにすばみ、口縁部をヨコナデ、器外胴部をヘラケズリ、器内胴部にハケメを残している。

その他、覆土中

より須恵器(204)が出土している。
(市川 隆之)

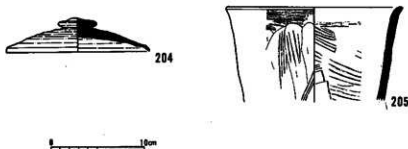


図42 76号住居址出土遺物(1:4)

(5) 第IX期

(1) 69号住居址 (図31・43, 写真32)

遺構 調査地区の東端に、69号・64号住居址と切り合って、僅かに北辺2m、西辺5mほどのぞいている竪穴住居址である。時代は9世紀の中頃と考えられる。調査可能な部分が僅かなので、遺構については、柱穴が二箇所検出され、後年になって相当量の礎が流入していることがわかっているだけである。

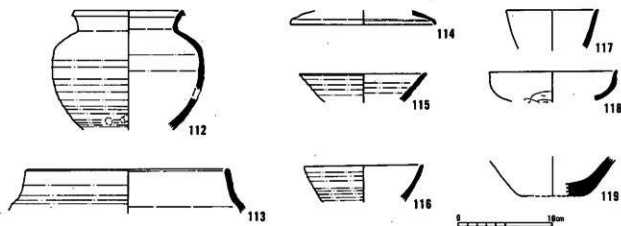


図43 69号住居址出土遺物(1:4)

遺物 遺物としては須恵器の短頸壺1、短頸甕1、杯3、杯蓋1、土師器の杯2などがあるが、短頸甕(113)を除いて小片である。口径10.2cm、腹径15.9cmで全体がまるみを帯び、ロクロ成形で表面にロクロ目を残している。焼成は良く自然釉が口縁部から肩にかけてかかっている。(篠崎健一郎)

(2) 73号住居址(図39・44, 写真14・16)

遺構 本址は、76号住居址の一部を切って、75号住居址の西側に位置する形で検出された。重機により上土をかなり削られたため、遺存状態はきわめて悪かった。

プランは、長軸を磁北より30°西に傾けて、西辺約5m、東辺約4m、北南辺約3.8mという不格好な隅丸方形をしていて、壁は先に述べたように上面をだいぶ削られているため、南で15cm、北で10cm残っている程度である。

この住居址の床は、南西から東北に延びる10cm程度の段差をもち、全体的に軟弱である。そしてこの住居址の東半分も、75号住居址の覆土である。砂質黄褐色土交る砂質黒褐色土層の上に傾斜して延びているが、若干の起伏を持っているが、貼り床とよべるほど硬くしまつてはいない。

この住居址に直接関係のあるピットは4つ検出されているが、主柱穴とよべるものはない。P103・104・105は重複関係があり、建物址33の廂の部分に当たるとも考えられる。

なお、カマド・周溝は検出されなかった。

遺物 本址は掘り込みが浅く、かなり上部は削平されているため遺物も少なく、すべて破片である。

(170)は、推定口径20.4cmの土師甕で口縁部破片である。内面口縁部にヨコ方向のナデ、少し下ってヨコ方向のハケメ痕を残す。外面は口縁部にヨコ方向のハケメ痕を残し、その下の胴部にかかる部分にヨコナデ痕を残す。

(168)は、須恵器甕であり、ロクロにより成形された後、つまみに近い外面上部にナデ的な回転ヘラケズリを行っている。推定口径15.6cmで黒灰色を呈した焼成の良い製品である。

(169)は、須恵器杯であり、口縁部のみ残すが、その形はやや直線的に口縁部から下っている。ロクロにより成形されており、

推定口径13.8cmである。

(市川隆之)

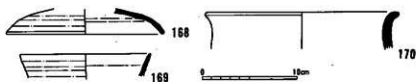


図44 73号住居址出土遺物(1:8)

(6) 第Ⅹ期

① 65号住居址(図45・46・47・48, 写真9・10・21・23・30)

遺構 本住居址は、調査地区の西部にあり、建物址32を切り、建物址29に東北隅を切られて存在する竪穴住居址である。その中心線は北東に向き、カマドを東辺にそなえた10世紀後半のものである。

遺物 遺物には須恵器と土師器がある。

須恵器は2個体分の杯(70・71)破片と杯蓋がある。いずれも灰白色を帯び、胎土も精選されており焼成

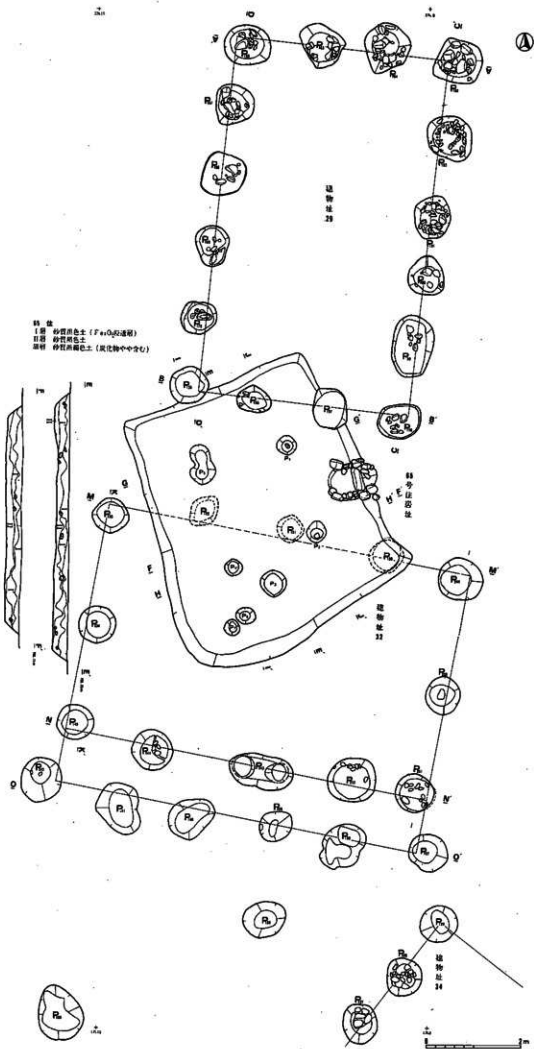
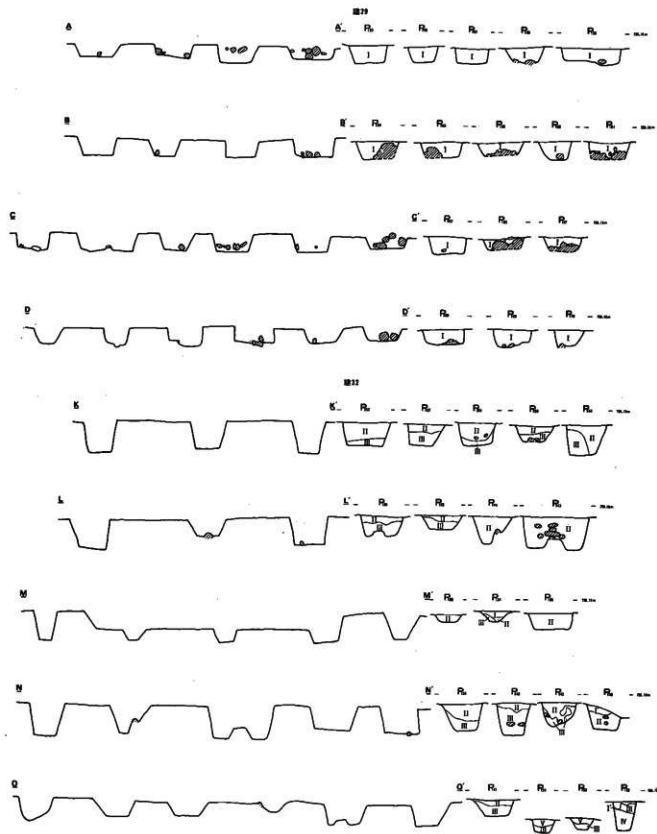
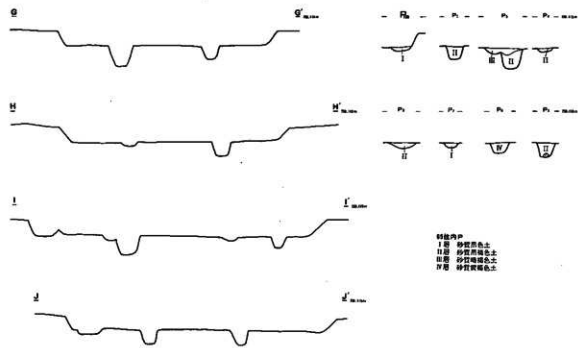


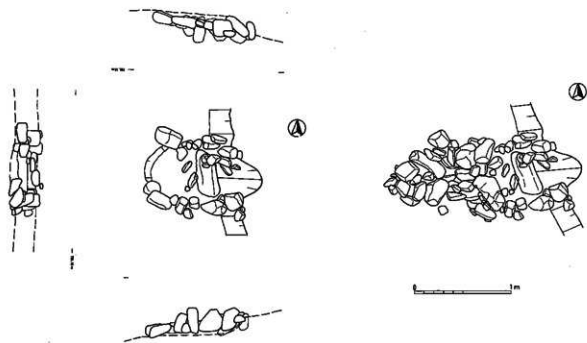
图45 65号住居址·建筑物29·32 (1:80)



圖例說明 - 11
 I 類 砂質壤土
 II 類 砂質壤土 (F₂O₃ 較多)
 III 類 砂質壤土
 IV 類 砂質壤土 (砂少)
 V 類 砂質壤土 (壤土中 F₂O₃ 較多)



圖例說明 P
 I 類 砂質壤土
 II 類 砂質壤土
 III 類 砂質壤土
 IV 類 砂質壤土



は良好である。いずれもロクロ成形である。杯蓋(69)は径15.4cm、器高3.6cm。表面をロクロ成形後、ロクロによるヘラズリをし、裏面はロクロ成形のままである。上についている宝珠形のつまみは削り出しているようである。わずかにめくれた口縁部には黒色の自然釉が生じている。

土師器は小型甕、大型甕口縁部、大型甕底部、杯2個体がある。

小型甕(73)はカマド内の出土で口径12.6cm、底径6.4cm、器高12.0cm、まるい胴に頸のほどよくしまったよい形である。底部は回転糸切り底を残し、全面にロクロによるハケメがあり、暗褐色を呈する。内面にもロクロ目を残しているが、底部はやや作りが粗く、厚い底となっている。

大甕(74)底部は7.2cmの径をもち、表面には縦方向にやや粗いハケメがあり、厚い灰の付着が見られる。内面はロクロによる調整を行わず縦方向に手でわずかになでており、そのことから手づくねによる成型→ロクロ調整という作り方であろうかと考えられる。色は外面褐色、内面は暗褐色で、焼成は良い。

(篠崎 健一郎)

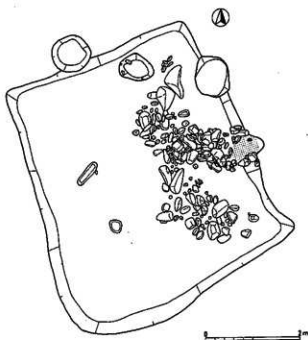


図47 65号住居址出土状況(1:80)

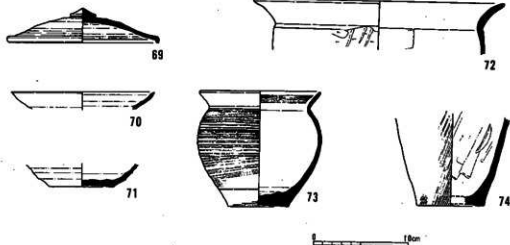


図48 65号住居址出土遺物(1:80)

② 68号住居址 (図31・49, 写真7・9)

遺構 調査地区の東端に、7世紀の64号住居址を切り、10世紀の69号とも切り合って、北西隅をわずか1m強ほどのぞかせた住居址である。従ってその中心線が南北より20°ばかり東西に偏っていることが推定されるが、その規模も内容のようすもわからない。

遺物 出土遺物も僅少で、ほんの小部分ずつ数個体分の裏があるにすぎない。それらをおよそ分けるに、胎土を精選した器厚のうすい肌のきれいなものと、砂まじりの土で作った厚く作りの粗雑なものがある。いずれもヘラケズリの後、ナデで調整している。器形もよくわからないが、粗製の裏は口縁部がわずかに開く、ずんどう型のようなものである。

(篠崎 健一郎)

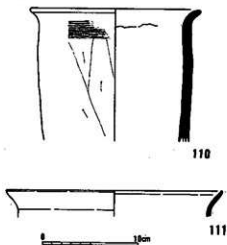


図49 68号住居址出土遺物 (1:4)

③ 70号住居址 (図24・50・51・52, 写真12・32・36)

遺構 調査地区の北部から、7世紀の71号・72号住居址の一部を切って検出された10世紀後半の住居址である。平面形は隅丸の方形であるけれども、西辺4mに対し東辺4.4mと若干長いために、やや歪んだ形になっている。

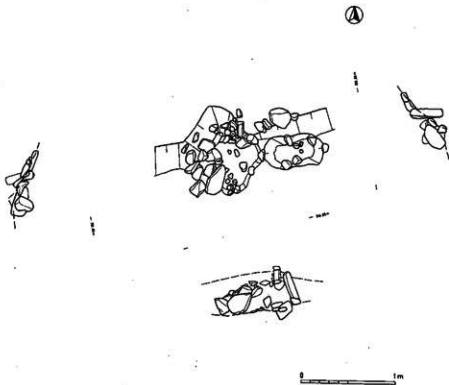


図50 70号住居址カマド (1:40)

また、この調査地区から検出された24軒の竪穴住居址の大部分が、南北の中心線を南北よりもいくらかずつ東西に振っている中の一つで、この住居址も約20°振っている。なぜこの住居址がそのようなになっているのか、理由は明らかでないが、おそらく当時ここに住んだ人たちの、方位の観念がそうであったのではないかと思われ、その観念はこの土地の地形で左右されるのではなかろうか。

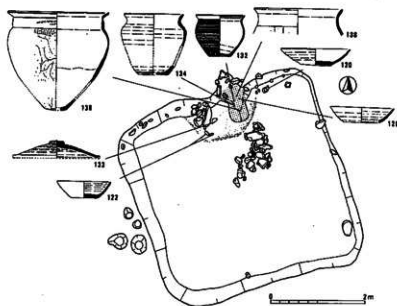


図51 70号住居址壁・遺物出土状況(1:80 遺物 1:8)

本住居址のカマドは、北中央よりやや東寄りにある。北カマドというのも他の大多数の例と同様である。これはこの地の風向きに関係あることとみられる。

住居址の深さは現存40cm強であるが、壁はやや緩傾斜で、特に東南隅の崩れが著しい。

住居址内の土層は皿状の9層になっており、埋没のようすをうかがうことができる。また床面より若干上層に、中心より少し東北に寄って30個ほどの石の堆積がみられたが、自然流入であるか、人為的なものであるかははっきりしない。

カマドは、石が抜き取られかなり破壊されているが、煙道などは確認することができるし、焚口の周辺には焼土が広がっている。カマドに向って左に散乱している10個ほどの石がカマド石の一部であろうか。

床はよく踏み固められたたたきになっているが、東南部には軟弱な部分がある。柱穴は内部に2箇確認されているが、これでは不十分なので、住居址外のものも使われていたのかも知れない。

遺物 遺物は土師器及び須恵器がカマド周辺より出土している。器形は甕と杯である。他に鉄製刀子とみられるものも出土している。

甕はいずれも土師器で7個体あり、小型の2個体を除いては手作りである。大型の5個体(135・136・137・138・139)の色調はいずれも明るい褐色であるのに対し、小型の2個体(132・134)は黒褐色を呈する。手作りのものは胴部をヘラケズリ、口縁部を横になでて調整するものが多い。ロクロ作りの2個体は、表面にロクロによる細かい調整痕を残し、内部は特に調整せずに大きなロクロ目をそのままにしている。底部は糸切りとなっている。

杯は12個体分を数えるが、いずれも焼きの甘い須恵器で、すべてロクロ成形である。ロクロは皆時計まわりで、底部も回転糸切り痕になっており、その底部は内部がわずかに上っているものが多い。また1個体(126)(破片)はよく精選された土を用い、よく焼き締められており、付高台の剥離したあとがある。

また杯蓋(133)はやや白色を呈し焼きはあまりよくない。内外面とロクロナデで先端部分は僅かに反った形になっている。上部には平たいつまみがはりつけられているが、その中央には僅かに宝珠型の名残りのような凸部がある。

杯(122)の口縁外には焼成時にみられる火傷がある。

刀子とみられる鉄器は二つの部分に折れて、厚いサビにおおわれている。いずれにも褐色の鉄サビの深みこんだ?木質のものが付着しているが、これは刀子の鞘や柄の残りの部分かも知れない。

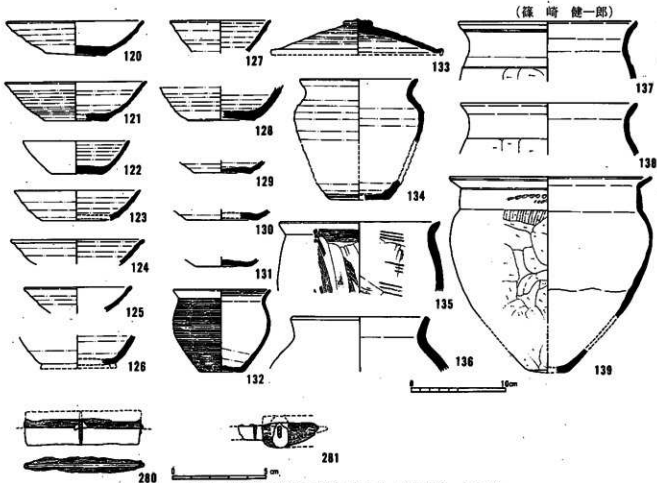


図52 70号住居址出土遺物(120・126・280・281 1:2)

④ 83号住居址(図53・54・55・56・57, 写真20・35・36・37)

遺構 調査地区の東南隅にやや離れて集落の中を、もと東西に流れていた川(せぎ)のあとにかぶられて位置する10世紀後半の竪穴住居址である。他の住居址と似て、中心線を南北より20°ほど東西に振り、カマドを北辺に設けている。約5m×5mの隅丸方形のプランを持っているが、南辺と北辺の壁が崩れて、そこだけ広がった形になっている。

カマドは北辺の中央にあるが、すっかりこわれてカマド石もわずかしが残っていない。

遺物 遺物は比較的少量で、特に杯の多いのが注目される。

甕は7個体分を数えるが、須恵器大甕1、あとは土師器である。須恵器(261)は残存部分が口縁の一部であるが、推定口径は25.7cmあり、外面がやや赤灰色ながら焼成はよい。口縁は角縁となっている。

土師器の甕のうち最大のものは、カマド内出土(276)のもので口径21.2cm、上部が褐色、下部が暗褐色を呈する。全体をヘラケズリし、頸部以上をヨコナデによって調整している。器壁はたいへん薄い。底は平底である。

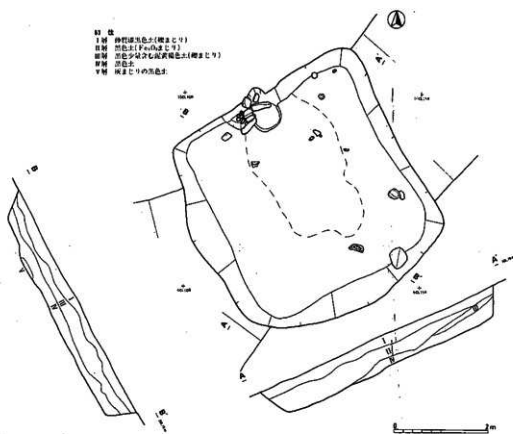


図53 83号住居址 (1:80)

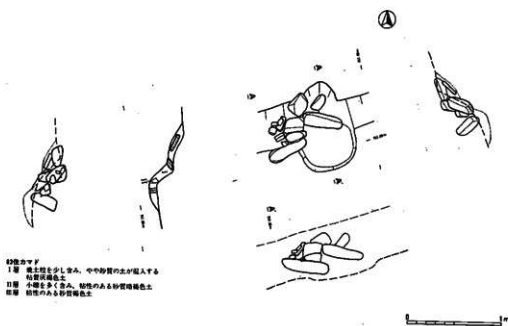


図54 83号住居址カマド (1:40)

他の寝も大小の差こそあるものの、胴のふくらんだ頸がわずかにすぼみ、口縁を短かく開かせた形は同じであるが、1個体だけロクロ調整をした小型(273)のものがある。

杯は全部で34個体分ある。高台のあるもの11、平底12、不明11という比率になっており、いずれにしてもその数の多さは異例といつてよく、この家の特殊な性格を考えさせられる。

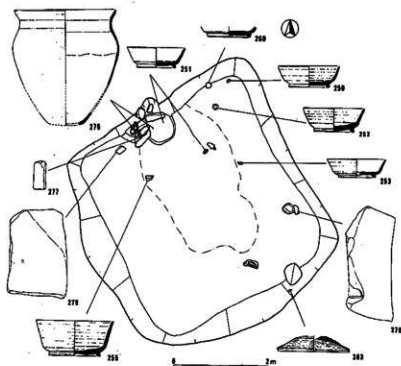


図55 83号住居址遺物出土状況(1:80 遺物1:8)

また杯は全部ロクロ作りである。多くのものは内外面に大きなロクロ目を残し、高台のないものは回転糸切りのあとをそのままに残している。

高台は全部付け高台で、本体を糸で切り離した後、粘土ひもをはりつけロクロで成形したもので、中央部には糸切り痕を残しているものもあり、ヘラケズリをしてあるもの、何の痕跡も残さずきれいにならされているものもある。また高台は付根の部分をえぐり取るように削って、高台の断面がハの字形に外に

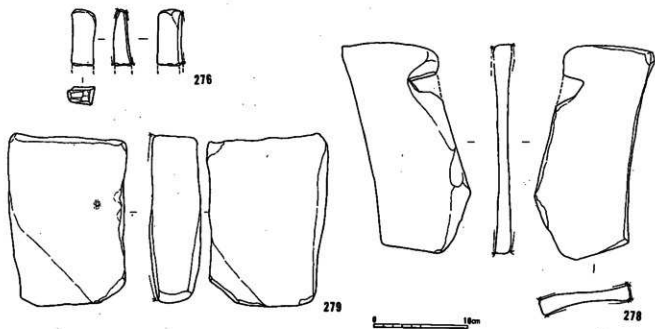
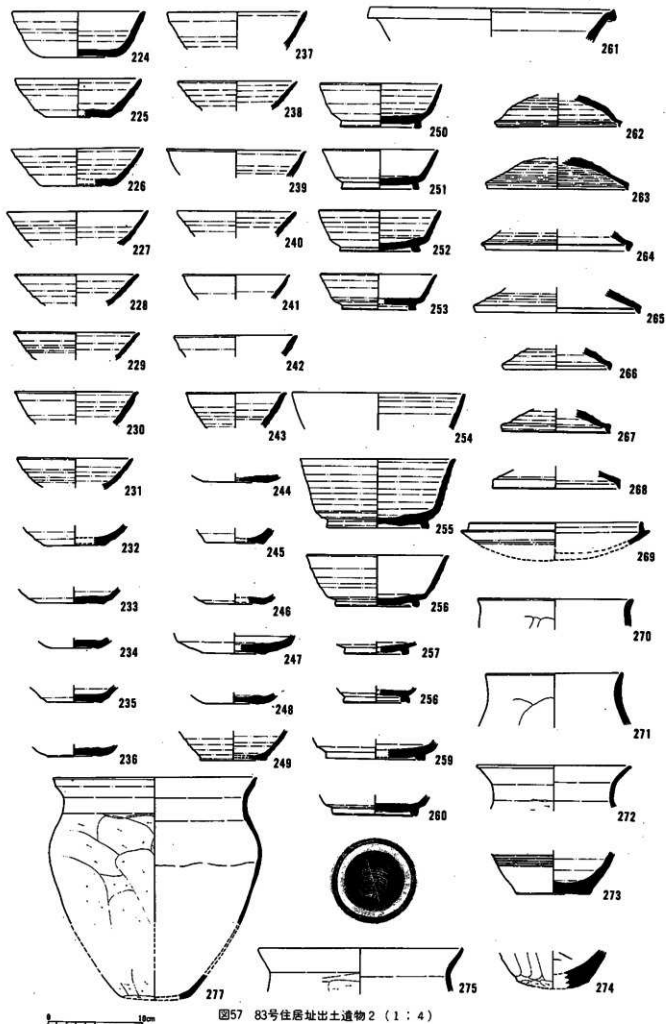


図56 83号住居址出土遺物1(1:4)



張り出す形にしており、さらに高台の底部を平にせず、わずかに凹字形に削っている点も特徴的である。いずれにしても高台は十分に広く大きく作ってあり、たいへん安定した姿になっている。形からみると高台のない糸切底の杯と高台付のもの2種類に分類できるが、大小のちがいはあるものの同型である。最大(255)のものは口径15.4cm、底部10.6cm、器高7.2cmであり、最小(251)のものは、口径12cm、底径8cm、cmである。

本住居址のカマドの向って左に床面からは砥石が2枚、さらにカマドの中からも1枚出土している。3枚とも砂岩でよく使いこまれており、先の2枚はすっかり扁平になっている。大きさは1枚(279)が17cm×12cm×4cm、他の1枚(278)は22cm×10cm×1.5cmである。カマド内出土(277)のものは、手持ちで使用する小型のものであるがこれもよく磨り減っている。

本住居址の特徴的なことは、杯の出土数が非常に多いこと、また3枚の砥石があることなどであろうが、これらによって、あるいはこの家の性格『例えば村人、一族などの共同使用の建物というような』も想定することができるかも知れない。

(篠崎 健一郎)

(7) 第Ⅱ期

① 66号住居址 (図58・59・60・61, 写真10・30・36)

遺構 調査地区ほぼ中央に位置する11世紀の竪穴住居址である。中心線を南北より西に約40°傾け、カマドを東辺に持っている。平面プランはおおよそ隅丸方形であるが、西辺が少し寸のつまった形をしている。規模は東辺及び北辺が4.2m、西辺と南辺が4m、深さ40cmである。

住居址の内部には、大小の礫(最大なるもの径約40cm)が数十箇、中央部に堆積している。おそらくある時期を経てからの人為的なものではないかと思われる。

床面の大部分は広く踏み固められており、北壁とそれに続く東壁の北半ほどの下部には周溝がある。カマドは東辺中心より少し南にはずれて作られているが、カマド石は取り除かれて前面にその一部が散乱しているばかり、ほとんど破壊されている。またこの住居址の特徴的なこととしてよいが、柱穴が住居址内部になくて、住居址外にあることである。この場合推定される家屋の構造は、樫持柱が必要になることかと思われる。

遺物 遺物の量はかなり多く、須恵器大甕1、杯13、土師器甕4、杯7、高杯1、鉄器1となっている。須恵器大甕(95)は、カマド内床面からの出土で口径40.4cmのもので、ロクロでていねいに調整しており、焼成もよく内外面とも黒灰色を帯びている。残存部分は口縁部の約半ほどであるが、全体は堂々たる大甕であったと思われる。口縁部の外方に張り出した二段口縁で、内部には成形直後に垂れ落ちた水滴の流下した痕跡とみられる、大小6条の黒色の線が口縁近くから縦にほぼ平行についており、また外面には、この器の製作者のものかと考えられる3つの指紋が残されている。

須恵器杯のうち3個体はほぼ同型同大のものである。その1(77)は口径13.4cm、底径6.7cm、器高3.8cm、ロクロ調整回転糸切底である。胎土は緻密であるが砂を少し含み、焼成はよいが、須恵器の色調ではなく灰褐色を呈する。口縁外に一条の黒色帯の火跡がみられるが、焼成の際の焰の加減によるものであろうか。その2(75)は口径13.3cm、底径6.6cm、器高3.8cm、ロクロ成形で、底には鮮かな回転糸切痕が残る。胎土は砂粒がやや多いが、焼成は悪くなく色調は黒灰色半分ほど、半分ほどは灰褐色を呈する。底部には両端に、平行して一方は凸線、一方は沈線がみられるが、成形してすぐ置いた所の、下に敷かれたものかであろう。また底部の中心から少し端によって、「東」という文字が墨書されている。だいぶあすれているが、

端正な筆跡である。須恵器の杯の3(76)は、口径14.1cm、底径6.4cm、器高4.0cm、ロクロ調整回転永切りである。胎土は緻密であるが砂粒が少し混じっている。焼成はやや甘く、色調は灰白色を呈する。器の内外面には縦横に導状に黒色の線がみられるが、あるいは細縄でからげたまま焼成したのか、縄や墨が付着したまま焼成したあどかと思われる。また底部には炭化物の付着がみられる。

本住居址からは、須恵器の杯の底部で高台を持つものが2点(83・84)ある。いずれも黒灰色を呈し、焼成はたいへんよい。高台は付け高台で、外部に開き広いので器の安定はよい。高台内部は自由方向のヘラケズリになっている。

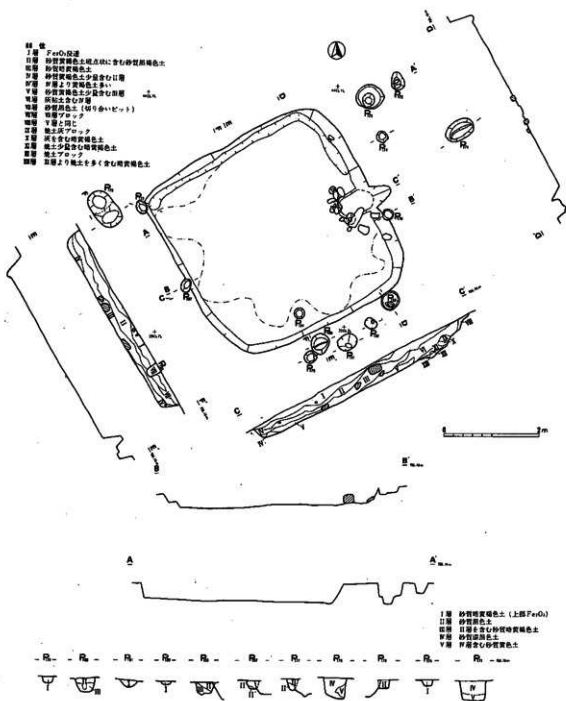


図58 66号住居址(1:80)

特色カマド
 I層 F.O. 灰遺跡
 II層 砂質褐色土層の底に赤心形褐色土
 III層 砂質褐色土層
 IV層 砂質褐色土層
 V層 粘土状アーク
 VI層 灰を含有した褐色土
 VII層 粘土少量を含む褐色土
 VIII層 粘土アーク
 説明 粘土層より多く含む

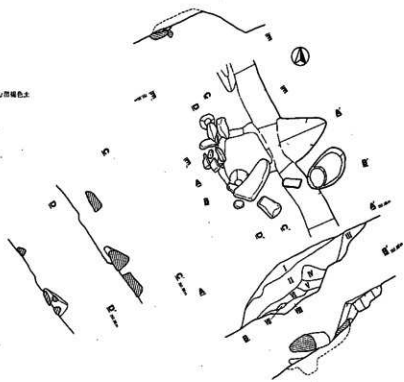


図59 66号住居址カマド (1:40)

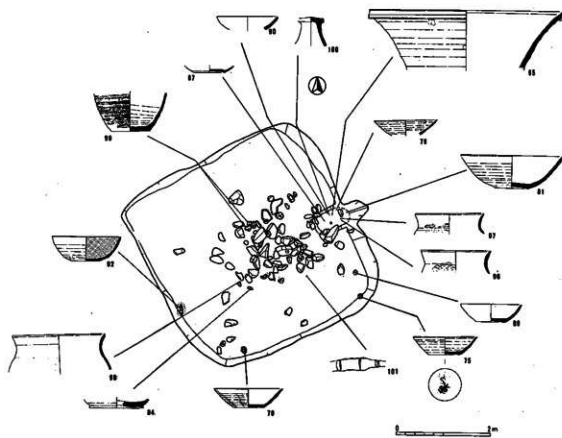


図60 66号住居址・遺物出土状況 (1:80 遺物 1:8 101:1:4)

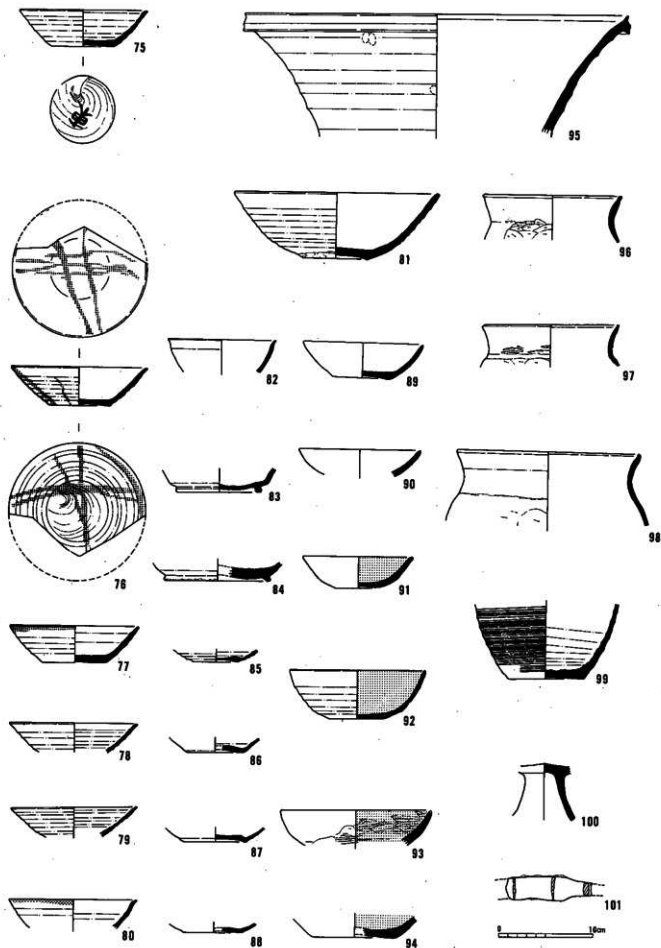


图61 66号住居址出土遺物 (1:4 101 1:2)

土師器甕はいずれも小破片になっているが、そのうち口縁部の形のわかる2個体についてみると、どちらもよく精選された土で、念入りにたいへん丁寧に作られている。その1(97)は口径約14.2cm、その2(98)は口径約19.2cmでどちらも型かわずかに外反した口縁を持ち、ていねいにヨコナデによる調整がなされている。また、どちらにも外面に炭化物の付着がみられる。

土師器甕の2(99)は、底径7.9cmの底部で、内部には大ぶりのロクロ目が残り、底にも渦文状となって残る。外面はロクロによるハケメがあり、底も回転糸切りである。精選された土で、薄くていねいな作行きで(器壁2mm~3mm)焼成もよい。内外面ともに炭化物の付着がみられる。

土師器鉢(81)は口径21.3cm、底径6.5cm、器高6.8cmこの遺跡の出土品の中では稀にみる大ぶりなものである。大きさの割には底が小さく、不安定の感ほまぬがれない。ロクロ成形されており、外面にはロクロ目が残され、少し上った底には糸切り痕がある。胎土はよく精選されており、焼きもよい。上部は黒色、下部は褐色を呈する。

杯その2(92)は口径14.4cm、器高51.0cm、丸底で胴も丸くふくらんだ器である。ロクロ成形で底部は回転ヘラゲズリになっている。胎土は精選されており焼きもよく、作行きはていねいである。色調は外面暗褐色を呈し、内面は煤を吸着させた内黒土器である。内面は念入りに研磨されて光沢があり、研磨したあとが中心から放射状にかすかに見られる。

杯その3(91)は口径11.6cm、底径4.7cm、器高3.3cm内外面とも黄褐色を帯び、ロクロ成形回転糸切り底である。胎土には微粒の雲母が入っているらしく、また焼成はやや甘い。底部には成形直後についたとみられる。枯草らしいもの圧痕がつけられているのは、成形作業をする場所の環境がうかがわれる。

杯その4(93)は口縁部を含む腹部の小片であるが、径15.8cmになるやや厚手の器である。ロクロ成形により焼成もよい。外面褐色、内面は黒色である。内面には研磨の痕が少しずつ交差をしながらも横についている。この痕跡からすると、研磨具の材質はわからないにしても先の丸く、なめらかな道具で、例えばなめらかな石なども用いられたのかも知れない。

土師器高杯(100)は脚部のみで、古く破損したらしく磨滅している。底径は約7cmほどと推察される。上部の底までの高さは約5.5cmである。ロクロ成形されており、胎土も焼成もよい。上部の内底はよく研磨されている。これはカマドから出土しており、支脚に再利用されたものと考えられる。

鉄器(101)は極小部分であるので、全部の姿を推察できにくい、刀の柄もとの部分ではないかと考えた。

(藤崎 健一郎)

(8) 第Ⅷ期

① 82号住居址(図62・63・64・65、写真19・34)

遺構 調査地区西端に位置する10世紀末から11世紀にかけての頃とみられる竪穴住居址である。南北3.8m、東西3.2mのやや不整な隅丸の長方形のプランである。深さは25cmある。中心線は南北より約30°ほど東西に偏っており、東辺にカマドを設けてある。住居址内部はよく踏み固められ、四隅に近よって柱穴が3、東南の柱穴はやや内部に寄って掘られている。特長としては、いずれの柱穴にも石がつまっているが、これは柱の横をしめるために打ちこまれたものであろう。また北東隅と南東隅にもそれぞれ径60cm~80cmのビットがあるが、用途はわからない。東辺中央より僅かに南よりに設けられたカマドは、残存状態が比較的良好で、カマド石の組み方をうかがうことができる。

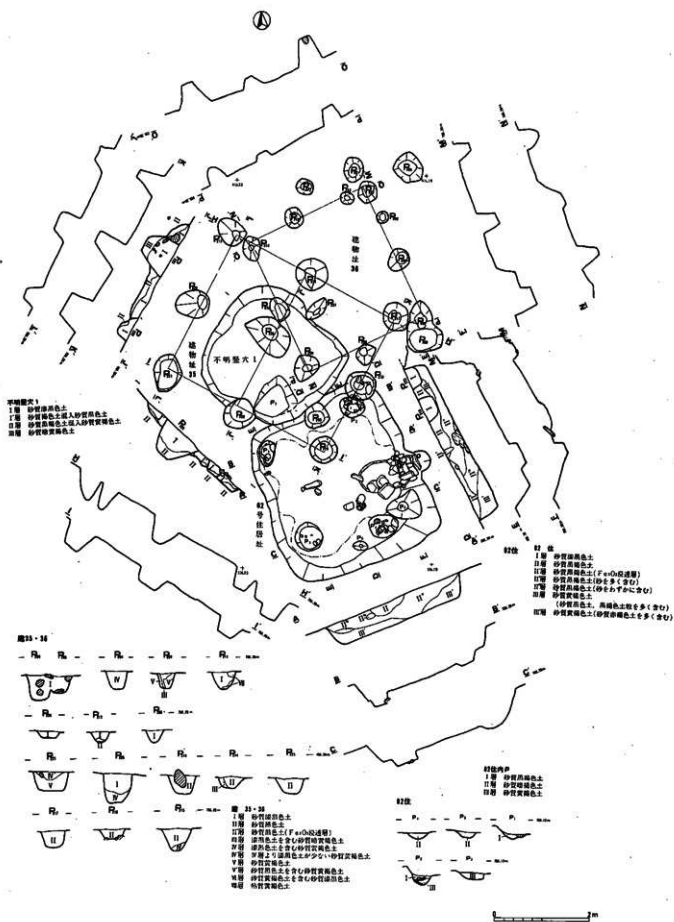


图62 82号住居址・建物址35・36・不明竪穴1 (1:80)

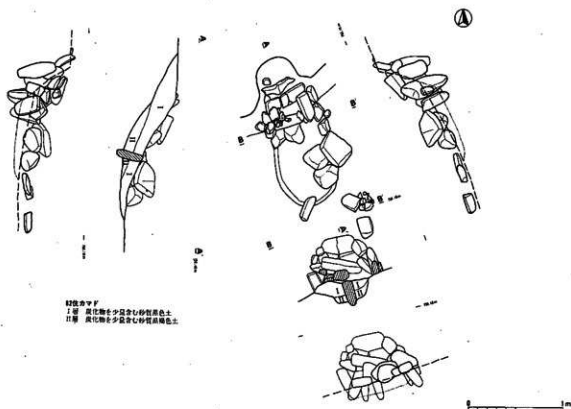


図63 82号住居址カマド (1:40)

なお、本住居址の北辺には獨立柱の建物址35号の隅が重複し、性格不明の竪穴が接している。

遺物 82号住居址よりの出土遺物は3個体の甕(221・222・223)と6個体ほどの杯である。甕はいずれも小型の土師器で内外ともにロクロ調整を施しており焼きは良好である。色調は暗褐色を呈する。P1内出土(221)のものについて底部をみると、糸切りをした上をなでて、そのあとを消しており、内部は中心が厚く盛り上り、へそ状の部分を残している。

杯のうち3個体は須恵器である。いずれも胎土にはかなり砂を含みやや粗製の感をまぬがれない。ロクロ成形で腹部には数条のロクロ目を残し、底部も回転糸切りである。焼きも甘くいわゆる生焼け状となっている。そのうち(216)のものは口径13.0cm、底径5.7cm、器高4.2cmで底部外面が黒色を呈する他は灰白色である。口縁はわずかの部分が外反している。他の杯に比べて作りはいいである。

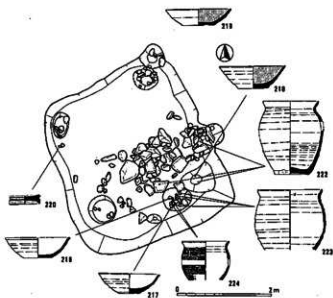


図64 82号住居址礎・遺物出土状況 (1:80 遺物 1:8)

4個体の土師器の杯(217・218・219・220)は、黒色土器を作ろうとしたらしいが、(217・218・219)は成功しなかったようで、部分的に黒色になったにすぎない。

(篠崎 健一郎)

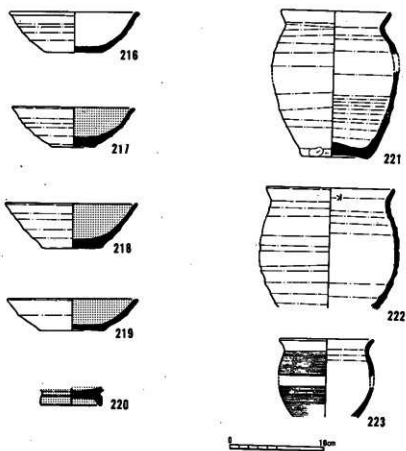


図65 82号住居址出土遺物(1:4)

2) 建物址

① 建物址29(図45・66, 写真9・23・21)

遺構 本建物址は調査地区の西部に、住居址63号の北東隅を切って位置する。最大(径1.2m)から最小(径60cm)のものまで、16箇の柱穴が整然と長方形に並び、中心線は南北より20°ほど東西に偏る。これらの柱穴により東西3間、南北5間の獨立柱の建物の存在を知ることができる。建物の性格について断定することはできないが、例えば高床の倉を想定することもできよう。

本建物址の時期については、10世紀前後に比定される65号住居址を切っていることから、それ以後とだ

けは言えるだろう。柱穴から出土した若干の須恵器杯の破片、及び土師器の甕の破片があるが、柱を埋め立てる折に混入したのか、建物の使用時のものか明らかでないので、建物の時期の判定にはあまり役立たない。



(藤崎 健一郎) 図66 建物址29出土遺物(1:4)

② 建物址30 (図67, 写真21)

発掘区西端北寄りに位置し、北側2mに建物址31、西側1mに建物址36、4mに建物址35、不明竈穴1、南西5mに82住がある。形態は桁行2間×梁行2間で、中央に柱穴がある田の字形(建物址分類II A)で、桁行方向はN74°Wを示す。規模は桁行全長3.6m、梁行全長3.6mで、柱間寸法は、桁行一間1.6m、梁行一間、1.5mを測り、平面積は12.96㎡である。柱穴は黄褐色砂層を掘っており、柱穴はどれもほぼ円形で、規模は平均60×63cm、深さ40cmを測る。柱穴はどれもU字形である。柱穴内の埋土は、どれも黒色土が主体で、含有物の違い、わずかな色の違いからII層に分けられるものが大半である。柱根は検出されなかったが、P189・190で柱痕と思われるU字形の土層のはいり込みが見られた。これが柱痕だと推定すると、柱は、約20cm前後だったと思われる。遺物は全く検出されなかった。

(島田 哲男)

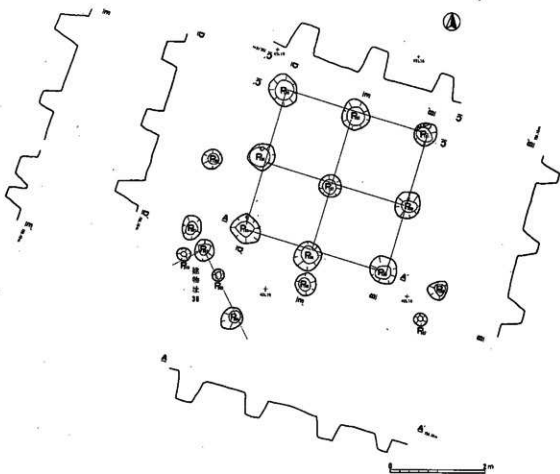


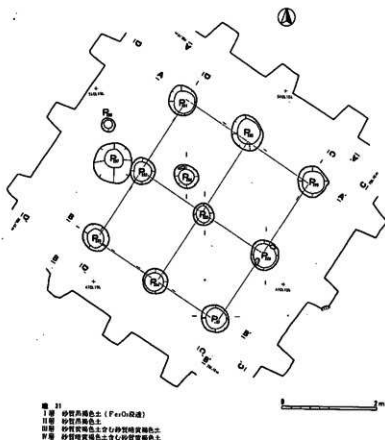
図67 建物址30(1:80)

③ 建物址31 (図68, 写真22)

発掘区西端北寄りに検出され、南2mには建物址30、南西7~11mに建物址35・36、不明竪穴1、82号住居址がある。形態は、桁行2間×梁行2間で、中央に柱穴がある田の字形(建物址分類II A)で、桁行

方向(棟方向)はN34°Eを向く。しかし、本址は南隣の建物址30と形態、大きさとも、ほぼ同じであるので建物址30と似た方位のN56°Wとも想定される。規模は、桁行全長4.0~4.2m、梁行全長3.7~3.9mで、柱間寸法は、桁行一間1.7m、梁行一間1.55mを測り、平面積は15.58㎡である。柱穴は、黄褐色砂層を掘り込み、掘り方は、ほぼ円形で、規模は、ほぼ平均的で63×65cm、深さ40cmを測る。柱穴はほぼU字形で、底はほぼ平垣である。柱穴内の埋土は、どれも砂質黒褐色土で、II層に分けられるものが大半である。P231には、礫の混入が多く見られた。柱根は検出されなかった。遺物は全く検出されなかった。

(島田哲男)



■ I 黄褐色砂層土 (Fe₂O₃混入)
 ■ II 砂層土
 ■ III 砂層土中に黄褐色砂層土混入
 ■ IV 黄褐色砂層土中に黄褐色砂層土混入

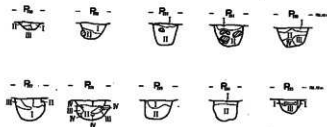


図68 建物址31 (1:80)

④ 建物址32 (図45・69・70, 写真21・22・23)

発掘区西側南寄りに位置し、P150、151、152を65号住居址に切られている。南東1.5mに建物址34、北2.5mに建物址29がある。形態は、桁行4間×梁行2間で南側に廂と思われる柱穴が6ヶ(5間)が平行に並ぶ(建物址分類IV B)もので桁行方向はN77°Wを向く。規模は、桁行全長8.1~8.4m、梁行5.2~5.5mで、廂と思われる柱穴列の全長は9.1mで、柱間寸法は、桁行一間1.5~2m、梁行一間2.1m、廂と思われる柱穴列一間1.5~1.7mを測り、本体のみの平面積は、44.28㎡、廂と思われる柱穴列を含めた平面積は、57.18㎡である。柱穴は、黄褐色砂層を掘り込み、掘り方はほぼ円形で、規模はほぼ平均的で80×77cm、深さ50~70cmを測るが、廂と思われる柱列の柱穴は、掘り方、大きさはほぼ同じであるが、深さが25~40cmと本体の柱穴よりは浅い。P145は切り合いかどうかは、埋土が一層のみではっきりとしなかった。柱穴はほ

はU字形に掘られている。柱穴内埋土は、本体、廂と思われる柱列共、P139・144・145を除き、黒褐色土を含有物の違いで、二層に分層できた。P145には礫の混入が多く見られ、P151・152には、軟弱であったが砂層の貼床が見られた。柱痕はどれからも検出されなかった。遺物は全く検出されなかった。

本址は、65号住居址に切られていることから、10C以前（X期前）と考えられる。

（島田 哲 男）

⑤ 建物址33（図39、写真14・22）

本址は調査区、中央やや南に位置する。P90・91・92を、73・75号住居址に切られている。76号住居址との関係ははっきりしない。西6mに建物址29・32・65号住居址、東10mに4号住居址、北7mに71号住居址、南西10mに建物址34がある。形態は、桁行4間×梁行3間で南側に廂と思われる柱穴列が5ヶ（P103・104・105・109・112）が平行に並ぶ（建物址分類ⅣB）ものである。やや南にずれるがP106も関係しているとも推定される。本址の桁行方向はN86°Eを向く。規模は、桁行全長6.8～7.0m、梁行全長5.2～5.4mで、廂と思われる柱穴列の全長は7.3mで、柱間寸法は、桁行一間1.3～1.8m、梁行一間1.4～1.7mで、廂と思われる柱穴列は一間1～2mと不揃いである。本体の平面積は、36.75㎡、廂と思われる柱穴列を含めた平面積は、49.965㎡である。柱穴は黄褐色砂層を掘り、掘り方はほぼ円形で、規模は、本体のものはほぼ平均的で63×60cm、深さ45cmを測る。廂と思われる柱穴列の柱穴は、規模はやや小ぶりであり、本体と同規模の64×60cm、小さいものは37×37cm、深さは本体よりやや浅く、25～40cmで、P112は深さ70cmと深い。柱穴はほぼU字形に掘られている。柱穴内埋土は、1～3分層された各柱穴に、堆積物の違いが見られたが、主体は黒褐色土である。柱穴の半数には拳大の礫が多く見られた。柱痕はどれからも検出されなかったが、P99には柱痕状のU字形の黒色土が見られた。遺物は小片のみで特に検出されなかった。

本址は、83号住居址（第Ⅱ期、9C代）、85号住居址（第Ⅳ期、8C）に切られているので8C及び、それ以前と考えられる。

本址及び、建物址32、借馬A地区建物址25（借馬遺跡Ⅱ、1980）など廂と思われる柱穴が附属すると考えられる建物址は、借馬遺跡においては3棟目である。建物址の分類で述べられている様に、この建物址（建物址分類Ⅳ）は、桁行の柱穴数より、廂と思われる柱穴列の柱穴数が多いものと少ないもの2種類に分けられるが、建物の建て方自体には、さほど関係しないと思われ、廂の大きさの違いと考えられる。

（市川 隆 之）

⑥ 建物址34（図69・70、写真23）

本址は調査区、中央南寄りに位置する。北西1.5mに建物址32、北西6.5mに65号住居址、北西10.5mに建物址29、北東10mに建物址33・73・75・76号住居址、南東13mに83号住居址がある。形態は、桁行4間、梁行3間（建物址分類ⅣI）で、棟方向はN51°Wを示す。規模は、桁行全長7.9m、梁行全長5mで、柱間寸法は、桁行一間1.7～2m、梁行一間1.5mを測り、平面積は、39.5㎡である。柱穴は黄褐色砂礫層を掘り込み、掘り方は、ほぼ円形で、規模は、最大107×95cm、最小70×65cm、深さ60cmを測る。柱穴はほぼU字形に掘られている。柱穴埋土は、ほとんど一層で黒褐色土で、P129は混入物の違いで2層に分層できた。柱穴の大半には礫が多く見られた。柱痕はどれからも検出されなかった。遺物は、P124より、須臾器高台付杯（杯B）の底部（284）が出土した。

本址はP124から出土した須恵器杯から想定して、10C（第Ⅹ期）頃と考えられる。

（島田哲男）

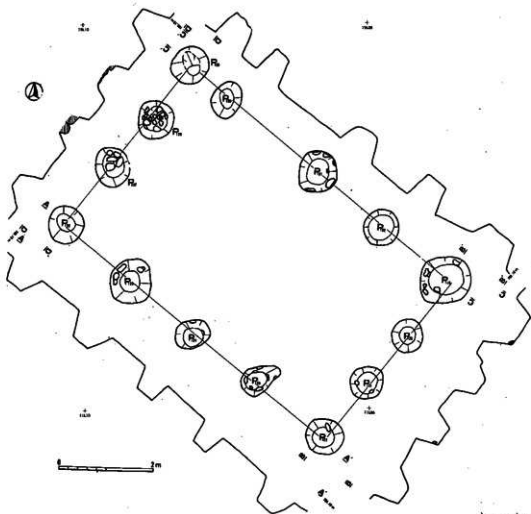


図69 建物址34 (1:80)



図70 建物址34出土遺物(1:4)

⑦ 建物址35 (図62・71, 写真23・36)

発掘区西端中央に位置し、P218・P219・P220・P223は、82号住居址、不明竪穴1を切る。建物址36と切り合っているが、柱穴の切り合いが見られないのははっきりしないが、出土遺物から見て本址の方が新しい。東4mに建物址30、北9mに建物址31、東8mに建物址29がある。形態は桁行2間×梁行2間で、中央に柱穴があるやや長方形の田の字形（建物址分類ⅡB）で、桁行方向はN59°Wを示す。規模は桁行全長4.6～5.0m、梁行3.5～3.8mで、柱間寸法は、桁行一間1.85～2.0m、梁行一間1.6mを測り平面積は17.76㎡である。柱穴は黄褐色砂層を掘り込み、柱穴はほぼ円形で、規模は最大97×63cm、最小55×55cmで深さ30～60cmを測る。柱穴は、ほぼどれもU字形に掘られている。柱穴内の埋土は黒色土で、混入物の違い等から1～3分層される。柱底は検出されなかった。

遺物はP223より多く出土した。須恵器杯が4個体(285～288)、大甕の破片(289)、小形壺の底部(290)が出土した。285～289は埋土Ⅰ層下層～Ⅲ層で、290はⅠ層表面近くから出土した。285～289は8C～9C代(Ⅶ期～Ⅷ期頃)、290は10C後半～12C頃(Ⅸ～Ⅹ期頃)のものと考えられる。289は口縁部のみが図示

できたのみであるが、胴部破片も見られ、不明竪穴1から出土した破片と接合した。このことから、285は不明竪穴1の遺物で、P223が掘られた時点において混入したものと考えられる。確実に本址に伴なうと考えられる遺物は290のみである。280は内面に壘帯状のものが見られるが、内面であることやましか残存していないことから現時点では図示するのみで、結論はさけない。

本址は、82号住居址を切っていること、280が出土していること等から、11C～12C頃と考えられる。

(馬田 哲男)

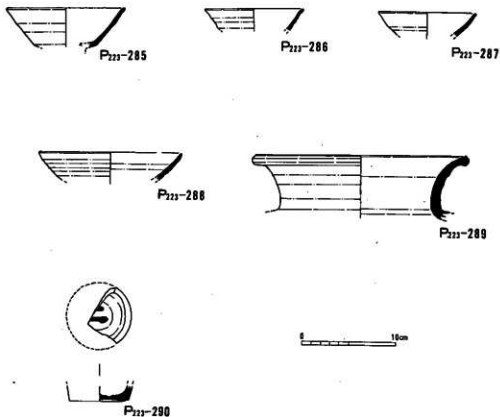


図71 建物址35出土遺物(1:4)

⑧ 建物址36(図62・72, 写真24)

発掘区西端中央に位置し、P209、210は不明竪穴1を切っている。建物址36と切り合っているが、柱穴の切り合いがなく、はっきりしないが、出土遺物より見て本址の方が古い。形態は桁行2間×梁行2間のほぼ正方形(建物址分類IE)で、桁行方向はN27°Wを向く。規模は、桁行全長3.3m、梁行全長3.1～3.2mで、柱間寸法は、桁行1間1.4～1.5m、梁行1間1.2～1.6mを測り、平面積は10.4㎡である。柱穴は黄褐色砂層を掘っており、柱穴はどれもほぼ円形で、規模は平均して50×40cm、深さ40cmを測る。柱穴はどれもほぼU字形である。柱穴内の埋土は総じて黒色で、含有物で分層される。柱根は検出されなかった、P206、P202と並ぶP201は東側桁の共通の同じ位置に掘られているので本址にかかわるものと考えられる。

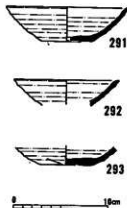


図72 建物址36出土遺物(1:4)

遺物はP205から須恵器杯C(291)、P211から須恵器杯C 2点(292・293)が出土した。

本址はP205・P211の遺物、切り合い関係等より、9C~10C代(第X期前後)と推定される。

(篠崎 健一郎)

3) その他の遺構と遺物

(1) 不明竪穴

① 不明竪穴1(図62, 写真23・24)

調査区西端中央に、82号住居址、建物址35・36に切られて検出された。

遺構は、黄褐色砂層を掘り込んでいる。埋土は2層で、下層は、砂質の黒色土が混入する黄褐色土(II層)、上層は砂質褐色土混入黒色土(I層)である。プランは不整形丸方形で、規模は東西2.6×南北2.7mである。壁はゆるやかな傾斜をもって掘られており、壁高は東壁30cm、西壁28cm、南壁20cm、北壁16cmを測る。床面はやや軟弱で、やや南東へ傾斜している。南東コーナー直下に95×85cm、深さ12cmの浅い楕円形のピットが検出された。炉及びカマド、柱穴、周溝等は見られなかった。

遺物は、土師器甕の破片、須恵器大甕の破片(P233と接合)が少量見られるのみである。また本址を切っているP223に本址の遺物と考えられる須恵器が5点(285~289)と土師器片が出土している。

本址は、82号住居址、建物址35・36に切られていること、遺物等から8C前後(Ⅶ期前後)と考えられる。

(篠崎 健一郎)

② 不明竪穴2(図73, 写真24)

調査区北端中央に位置し、南1mに62号住居址、

南東7mに61号住居址がある。

遺構は、黄褐色砂層を掘り込んでおり、埋土は5層に分層され、自然堆積を示す。I層は砂質の黒色土で中央に傾斜をもって堆積している。II層は暗黄褐色土を少量含む砂質の黒色土でI層の下にI層と同じく中央に傾斜をもって堆積している。III層は黒色土を少量含む暗黄褐色土で東側、北側から中央に向い傾斜をもって堆積している。VI層は砂質の暗黄褐色土で、西側~中央に向って堆積しているものと、南側壁際にII層上、I層の端に堆積しているものが見られる。V層は砂質の漆黒色土で東・西から中央に向って底面に傾斜をもって堆積している。本址の堆積は、始めは東西から、次に西から、次に東、北側、次に東西・北側から堆積したものと思われる。南側からの堆積はなかったと考えられる。プランは、ほぼ円形で規模は200×190cmである。壁は、東西南壁はほぼ直であるが、北壁はゆるやかな傾斜をもって掘られてい

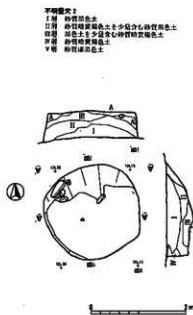


図73 不明竪穴2(1:80)

る。壁高はほぼ均一で50cm、深さは最深部で58cmである。底面は中央部がやや凹んでいる。ピット他の施設は見られない。北壁には40×15cmの長い礎、拳大の4ヶの礎、北壁直下には25×7cmの長い礎が見られた。本址はおそらく、貯蔵穴的なものであったと考えられる。

遺物は、土師器製胴部の破片がI・II層から出土した。本址は遺構、遺物等から、61・62号住居址と同じVI期頃と推定される。

(島田 哲男)

(2) 竪穴住居址・建物址以外のピット

借道遺跡C地区に於ては、住居址、建物址以外に160基の大小のピットが検出された。これらのピットは、古墳時代～近世、近代までであると考えられるが区分がむずかしい。最大は126×104cm、最小は20×20cmである。ここではピット内から実測及び復元実測でき得る遺物を出土したものを記述する。

① P1 (図5・74)

本址は80号住居址に切られて検出された。黄褐色砂層を掘り込み、プランはほぼ円形で、規模は44×44cm、深さ20cmを測る。埋土は砂質の黒色土である。

遺物は礎の口縁部(294)で、5C後半(第IV期)と考えられる。

② P2 (図5・74)

本址は74号住居址の中央に位置し、住居址埋没後掘り込まれたものである。プランは、ほぼ円形で規模は、37×36cm 深さ44cmを測る。埋土は黄褐色砂粒を少量含む黒褐色土である。

遺物は、小形製口縁部～胴上半部(295)、杯底部(296)、土師器製、杯の破片が10数片出土した。これらの遺物は8C前後(第VIII期)と考えられる。

③ P17 (図5・74)

本址は、80・81号住居址を切る状態で検出された。黄褐色砂層を掘り込み、プランはほぼ円形で、規模は40×40cm 深さ20cmを測る。埋土は、黄褐色砂粒を少量含む黒褐色である。

遺物は、須恵器の高古付杯の底部の破片(297)で、8C(第VIII期)と考えられる。

④ P84 (図30・74)

本址は、64号住居址西側1.8mに検出された。黄褐色砂層を掘り込み、プランはほぼ円形で、規模40×28cm、深さ45cmを測る。埋土は上部に酸化鉄(Fe₂O₃)の浸透が見られる砂質の黒色土である。

遺物は、中世土師器の小皿の底部の破片(298)である。

⑤ P86 (図30・74, 写真36)

本址は、75号住居址東壁際中央に位置し、住居埋没後掘り込まれたものである。東隣にはP85があり本址を切っている。プランはほぼ円形で、規模は62×51cm、深さ55cmを測る。埋土は、黄褐色砂粒を含む黒色土である。

遺物は、回転ヘラ切り後ヘラズリした須恵器の杯(299)で、8C～9C(第VIII～IX期)と考えられる。

⑥ P114 (図39・74)

本址は73号住居址の西側1mにP113と切り合って検出された。本址はP113を切っている。P113・P114共プランはほぼ円形で、規模はP114は、126×104cm、深さ24cmの北側がやや深い丸底状である。P113は85×65cm、深さ17cmの丸底である。P114の埋土は4層に分層され、P113は1層のみであった。P113・P114に共通するIII層の灰褐色土は分層できなかったが、平面形状から見て、分層されるものと考えられる。

遺物はP114から土師器甕(283)須恵器杯3点(300・301・302)・蓋(303)・短頸壺(304)の5点で、8C代(第VIII期)と考えられる。

時期はP114は8C、P113はそれ以前と推定される。

⑦ P148 (図39・74)

本址は75号住居址の東壁中央北寄り、住居址埋土上に検出された。住居址埋没後、掘り込まれたものである。プランは円形で、規模は30×30cm、深さ26cmを測る。埋土は、漆黒色土である。

遺物は、図示しなかったが、中世の青磁碗の胴部破片が出土した。釉色はコバルトブルーで、釉の厚さは1mmを測るものである。

(島田哲男)

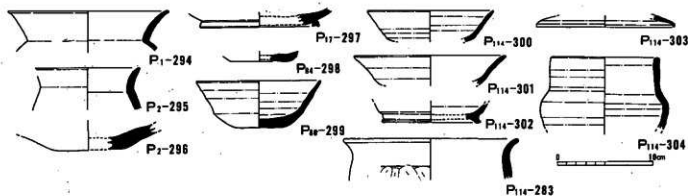


図74 竪穴住居址・建物址以外のピット出土遺物(1:4)

(3) 河川址(図75、写真20)

本年度の発掘により、河川址が発掘区の北側(河川址1)と南側(河川址2)の2箇所に見られた。借馬遺跡では、借馬A地点で3箇所(I、II計)、農具川河川改良区で1箇所、B地区で1箇所、計5箇所検出されている。河川址1・2共に蛇行し、(河川址1は蛇行の一部分)西~東へ流れていたと思われる。堆積状態は1・2共同であるし断面図は河川址1のみ提示した。河川址2は83号住居址(9C後半~10C前半)を切っている。河川址1は幅3.5~7m、深さ30cm、開いたU字形をしている。河川址2は、幅3.5~5m、深さ20cm、開いたU字形をしている。河川址1・2は鹿島川分流か、農具川の分流かの2種類が考えられるが、おそらく鹿島川の分流と思われる。河川址1の時代ははっきりしないが、河川址2は83号住居址を切っていることから10C以後と考えられる。おそらく河川址1も堆積状態がほぼ同じことからこれに前後する頃と考えられる。

(島田哲男)

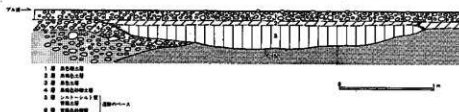


図75 河川址1横断面図(1:40)

3 借馬遺跡出土の炭質物・骨片・その他 (表1)

炭質物の鑑定については前田遺跡出土のものと同様で、双眼実体顕微鏡を用い20倍～40倍で木口面と径目面を調べ決定した。炭化材であるので変形や灰化寸前のものが多くコナラ亜属は断定できるもののみ種まで記載す。千を越える炭化物を調べた結果、本遺跡付近はコナラ亜属に覆われており前田遺跡付近と比較して、大部植物相が異なっている。(前田遺跡の項を参照されたい)骨は全て焼かれており焼かれたときのヒビ破れの結果全て破片となっていた。中にニホンジカの角の破片も混在しており、足の緻密な部分の遺存が多かった。金属については破面を金属顕微鏡により調べた。

(森 義直)

表1 借馬遺跡出土炭化物・骨片・金属・その他一覧

住居址番号	竪穴住居址内出土の炭質物・骨片・金属など
63 住	構造物の炭化物(ミズナラ材、コナラ材、ハルニレ材)、クリ材、中型哺乳類の骨片
64 住	ミズナラ材、コナラ材、クリ材 中型哺乳類の骨片
66 住	刀子(中心に芯鉄、その外側に4層の滲炭層あり、鍛造品)
67 住	柱状の炭化物はミズナラが多く次いでコナラ、クヌギ、ナラガシワなど全てコナラ亜属の材である。少量のヤナギ材、エノキ材、モミ?材の炭化物であり……火災住居
68 住	トリの足骨片(ヤマドリ大)
70 住	ナラ材
71 住	柱状の炭化物の全てナラ材(ミズナラ、コナラ)、ケヤキ材、ヤナギ材、クリ材
72 住	ニホンジカの骨片
75 住	ニホンジカの角片と骨片、環状鉄製品(鍛造し、外側に滲炭層あり)

4 発掘区域外出土遺物 (図76・77・78, 写真38・39・40・41)

借馬遺跡は、1979年～1981年3年度に渡って、A・B・C地区と調査して来たが、調査区域を改めて概観すると当時の予想される集落範囲の、五分の一にも及んでいないのではないかと考えられる。短期間のうちに実施される大規模な園場整備事業は調査団における力の及び得るものではなく、未調査部分があったと考えられることは、まことに大変残念なことである。

ここにあげる遺物は、発掘区遺構外及び、発掘区域外での採集及び、借馬 丸山好一氏が借馬遺跡中で採集し、所蔵している遺物である。借馬遺跡の全貌を知るうえでの一資料である。

1は縄文時代晩期前半に比定されると考えられる深鉢である。2は弥生時代中期か後期と考えられる壺で、表面には指圧痕が残る雑な作りである。3～6は第1期、3は全面赤色塗彩した片口土器、4は雑な櫛波状文を施文した甕、5は頸部に櫛波状文を、口縁部、胴部に櫛波状文を施文した甕である。4・5共に櫛波文は中部高地型櫛波文(笹沢1978)である。6は全面赤色塗彩した高杯である。7～11、40、47は第II期、7は高杯、8は東海系(欠山式?)の壺の口縁部である。40も東海系、S字口縁台付甕の口縁部である。11は幾内、布留式系の杯である。9、10は全面赤色塗彩した器台、47はやや小形の甕である。17、26、41、42は第III期、26は器台、41は口縁部がほぼ直立する甕、42は粗雑な調整の甕である。17は底部中央に凹をもつ小形の杯である。33、39は第VI期、33は丁寧なヘラミガキをされた光沢をもつ良好な焼成の埴、39は外面に擬位のハケメをもつ甕である。12、16、27、36、43、44、46、51は第V期である。12、51は有稜杯、16は底面をきれいにヘラケズリし、内外面ヘラミガキした底面が小さい平底風の杯、27は脚部が短く、杯部に稜をもつ黒色土器の高杯、36は底面ヘラケズリした、やや球形胴の小形甕、43、44、46は球形胴を残す甕である。13、14、15、18、19、25、34、35、38、45、49、52、53は第VI期、13、14、15、18は有稜杯、19は杯Aに類似する内面にゆるい稜をもつ有稜杯で、14、15は土師器、15、18、19は黒色土器である。25は脚部が高く、杯部内面にゆるい稜をもつ、黒色土器の高杯、34は黒色土器の短頸壺、35は土師器の短頸壺、38は土師器の小形甕、45はややゆるい球形胴の土師器甕、59、53は、胴中央部が最大径となる土師器甕、52はやや球形胴を残す長頸甕である。20、21、22、28、37、48、50は第VII期、20は杯A(無稜杯)、21は内面にゆるい稜をもつ有稜杯で、20、21共黒色土器である。22は須恵器のつまみのつかない杯蓋、28は須恵器の杯部が盤に近い高杯、37は口縁部が最大径の小形甕、48、50は、調整が冗く、積み上げ痕が残り、口縁部が最大径となる長頸甕である。23、24、29、54、55、56は第VIII期、23、24は偽宝珠つまみのつく杯蓋(蓋D)、29は高台の付いた甕、54は口縁部が最大径の長頸甕で底部には2枚分の木葉痕が残っている。55は胴上半部が最大径の口縁部がくの字に開く甕、56は表面をタタキメ後、カキ目を施し、内面には内型の青海波文が明瞭に残る小型の大甕である。30、57はIX期、30は回転糸切り底の黒色土器杯(杯C)である。57は隣接する分水遺跡から出土した黒釜90号窯式の新しい時期頃に比定されると考えられる手付甕で、特色はやや深い黄緑色で、把手の表面には文様が刻まれている。31、32は第X期、31、32共、折戸53号窯式に比定されると考えられる埴である。32は隣接するトチケ原遺跡出土のものである。58～61は土玉でおそらく土錘と思われる。(個々の遺物の調整等詳細については遺物観察表を参考されたい。)

(島田哲男)

参考文献

笹沢 浩「中部高地型櫛波文の系譜」『中部高地の考古学』長野県考古学会1978年

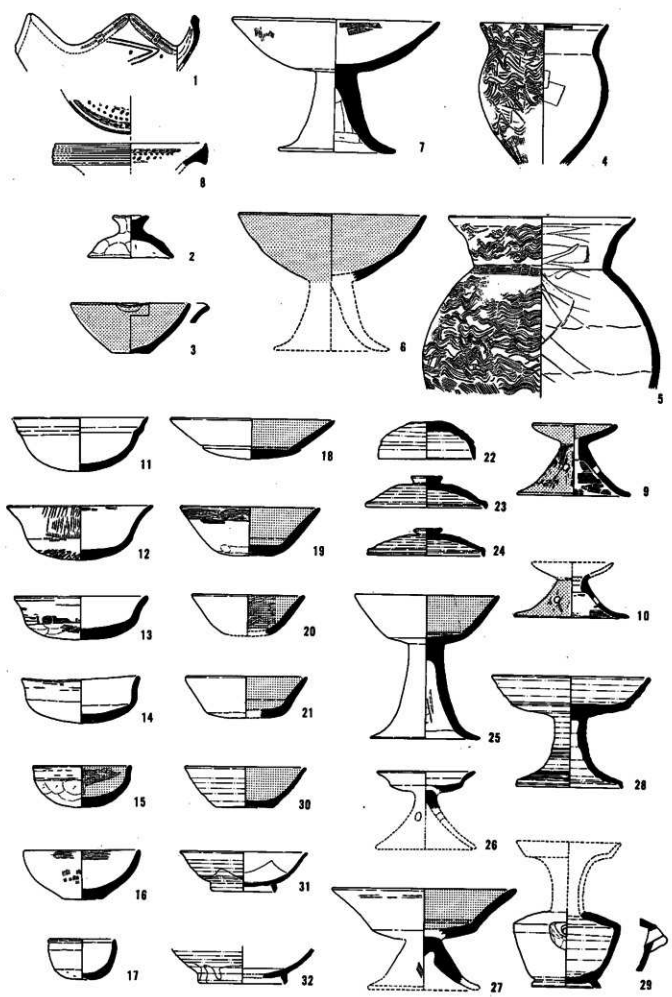


图76 发掘区域外出土遗物 1

0 10cm

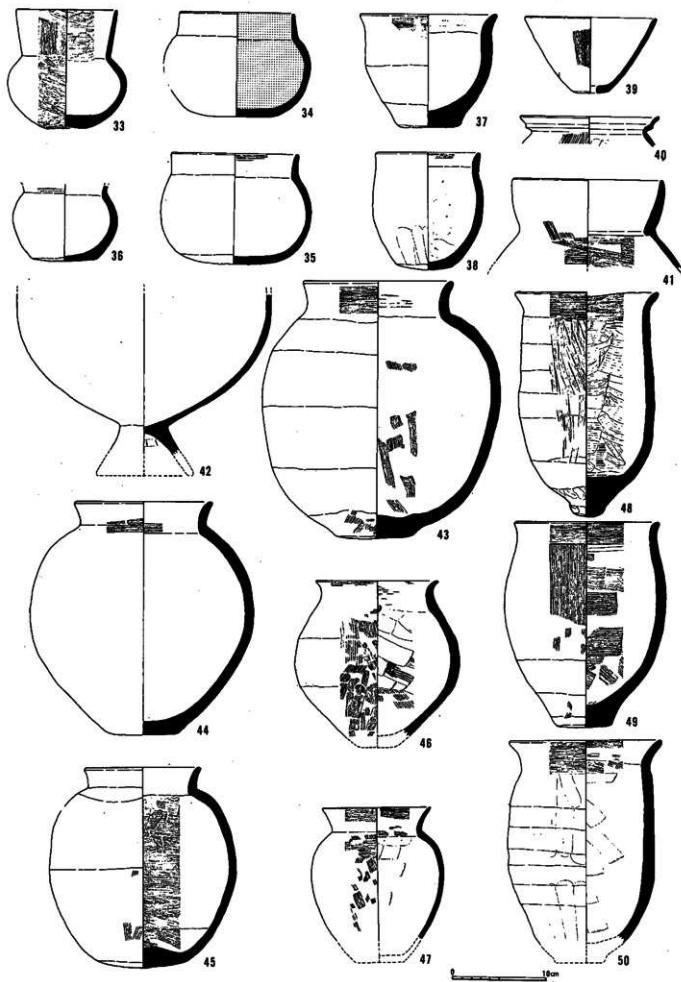


图77 兔埕区域外出土遗物2

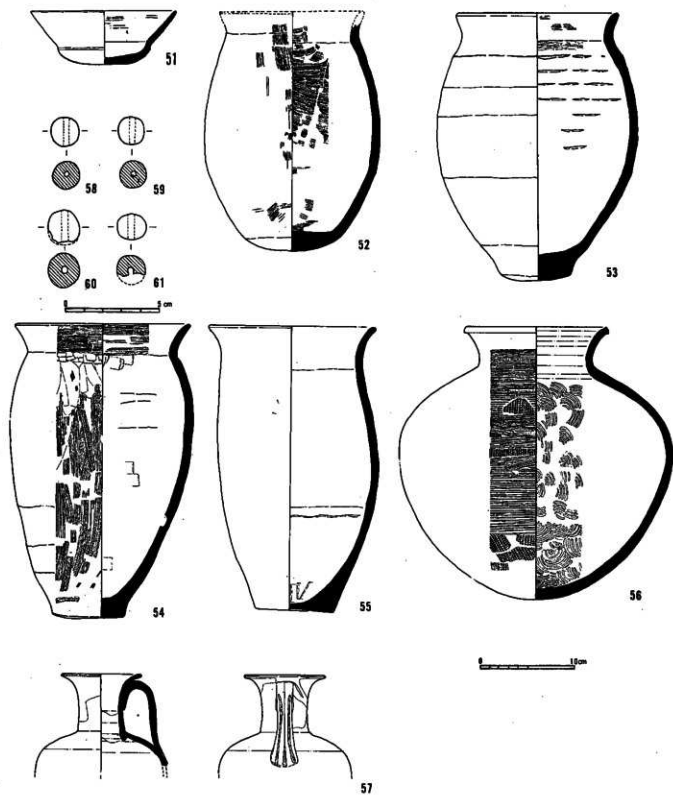


图78 发掘区域外出土遗物 3

5 まとめ(表2)

昭和56年度における借馬遺跡の調査区域は、54年度および55年度が東方の山麓に近い地域を南流する農具川の右岸地帯であるのにくらべ、ずっと西北方に寄った微高地に位置する。西は国道158号線に接し、すぐ東には国鉄大系線が走っており、200mほど北には信濃木崎駅がある。少し高いので、先に調査した地点をはるかに望むことができる。54年度の地点とは約1kmほどの距離、55年度の地点とは700mほどの距離がある。松本盆地北端にあった古代農村の西北隅に当たっているかと思われる。

調査地区内からは23軒の竪穴住居址と、7軒の独立柱の建物址が検出されている。竪穴住居址はV期以前2、V期1、VI期7、VII期3、VIII期2、IX期2、X期4、XI期1、XII期1という内訳になるが、建物址の年代については29、34、36が10世紀とみられる他はわからない。ただ建物址35については、82号住居址が切っているところからみて、11世紀代以降のものであり、建物址33号は8世紀に属する75号住居址に切られているところから、それ以前であることがわかる。

この集落の北部を切るようにして一すじ、南部を区切るようにして一すじの、いずれも幅5mほどの川(堰)が西から東に向い屈曲して流れているのが検出されたが、南部の川に83号住居址が切られていることから、南のものは少くとも10世紀以降のものとみられる。これらの川は、おそらく鹿島川方面から扇状地上を流れおちてくる自然流であり、すぐ東方を南流する農具川に入ったのではないかと考えられる。この集落の人たちは、この川の水を飲み、また水田を作るのにも利用していたにちがいない。

竪穴住居址の分布をみると、北部の川をはさんで古墳時代後期のものが集中しており、規模の大きいものが多い。13軒のうち、さらに時期別にすると、前葉3軒、中葉7軒、後葉3軒になる。このうち前葉のものは川の南にあり、あとは川の南北にある。やや想像を強くすることになるが、はじめに川の南に住んだ人たちが、改築の時期を迎えたとき、川をへだてて20mほどの南東方へ家の位置を移し、しかも大型の家63号と71号を建て、さらに74号の家に分れる者もあった。さらに7世紀の後半になると分家をしていくものがあつたと考えられなくもない。

建物址についてみると、北西部にある4軒はいずれも2間×2間の小規模なもので、そのうち3軒は中心の柱を持っているのが特徴である。10世紀及びそれ以降の建築になるとみられる2軒のうち、北部に位置する29号の建物は東西3間、南北5間の南北に長い建物である。34号はおよそ東西に長く、正確にはその長辺を南東～北東に向けており、長辺が4間、短辺が3間になる。32号・33号は前面に柱穴列を持っており、これはおそらく廂の付く建物と考えてよいであろう。以上のような独立柱の建物は、遺物をほとんど伴わないところから、住居址ではなく、おそらく個人かあるいは共同の倉庫であろう。床があつたかどうか証拠がないが、多分米を貯蔵するのが目的であろうから、湿気や鼠害を防ぐために、かなり高い床があつたのではないだろうか。

また住居址のカマドの位置をみると、かならず北壁か東壁であり、南や西に設けたものはない。これは3回にわたる調査で検出された竪穴住居のうち、カマドの位置の判明したものについて、時期別にその位置を示すと次のようになる。これによると時期によりその位置が北あるいは東におよそ偏っていることがみられるが、その理由はわからない。ま

表2 時期別カマド設置位置

カマド設置位置	時期						
	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀
北壁	カマド無し	4	12	8	0	3	0
東壁		0	0	1	4	2	1
その他		0	0	0	0	0	0

た5世紀の住居址がカマドもなく、炉もない理由もわからないが、想像としては火を焚く施設を他に設けてあったのか（借馬遺跡の場合はそういう施設を見出すことができなかつた）あるいは当時の家に床があり、床上に炉を設けていたのではないかと考えたい。

さらに住居址の分布をみると、東方の現農具川ぞいに5世紀頃住んだグループのうち、時代がすすむにつれ多くの部分が西方へ移転していったとみられる分布を示している。もしそうだとすれば、その理由としては鹿島川の氾濫をあげることができるのではないかとと思われる。古代末の頃大きな氾濫が、この村を襲ったことが調査の上からわかっている。その時点はいつのことかまだ細かい検討を要するにしても、その結果住みにくい場所ができ、次第に西方の高みへ移っていく人たちがあつたと考えることは不自然ではない。現在の借馬集落には、もと村はもっと東方の農具川に近いところにあつたのだが、鹿島川の氾濫をさけて現在地へ移つたという伝承がある。そのもとの位置と、発掘調査であつた住居址群とは直接の関係がなく、その間には時間のギャップがあり、位置もさらに移っていることであろうが、移転の原因となつた氾濫については、遺跡の土層調査の上にもあつており、その時期は平安時代末とみられ、伝承と一致する。村がだんだんと高処へ移って行くきざしを住居址分布に見られるように思う。

さてここにあつた古代の農村は、なんと呼ばれる集落であつたろうか。文献もなく、現在残されている小字名などの地名から推定するより他はないが、仮に現借馬集落が、住居群につながりがあり、そのすじを引くものであれば、これらの古代農村も「かるま」と称する村であつた公算が大きい。またこの名は古代に生じた名にふさわしい響きをもつように思われるのである。

（篠崎 健一郎）

表4 伊勢湾沿岸地一覽

(1尺=30cm, 1坪=3.3㎡, 尺・坪に關しては、小数第2位で切り捨て)

地 区 号	分 區	種 類	展 開		展 開		面 積 (坪)	方 向 (磁北より)	建 物	備 考
			縦 長 (尺)	横 長 (尺)	縦 長 (尺)	横 長 (尺)				
A 1	I E	2 × 2	約3.5m	約3m	?	?	?	?	?	写真の如く固し
A 2	F	3 × 2	7.4~7.5 (24.5~25)	4.4~4.5 (14.5~15.0)	2.2~2.4 (7.5~8.0)	2.0~2.3 (6.5~7.5)	33.15 (10.0)	N 18° W	なし	最大85 × 85、最小56 × 56 深さ54、柱状門幅、16)
A 3	C	3 × 1	5.7~5.8 (19.0~19.3)	2.9~3.7 (9.6~12.3)	2.4~3.1 (8.0~10.3)	2.4~3.2 (8.0~10.6)	18.81 (5.7)	N 35° W	なし	44 × 44、深さ40 柱状門幅、12)
A 4	B A	2 × 1	3.4~3.5 (11.3~11.6)	3.0 (10.0)	1.5 (5.3)	2.5~2.7 (8.5~8.0)	10.35 (3.1)	N 40° W	なし	20 × 20、深さ? 柱状門幅、10)
A 5	I A	1 × 1	3.7~3.8 (12.3~12.6)	3.4~3.7 (11.3~12.3)	3.0 (10.0)	3.0~3.2 (10.0~10.6)	13.32 (4.0)	N 37° W	なし	52 × 52、深さ32 木製門幅、10)
A 6	B B	2 × 2	5.9~6.1 (19.6~20.3)	4.1~4.3 (13.6~14.3)	2.5 (8.3)	2.0 (6.6)	25.21 (7.6)	N 40° W	なし	70 × 72、深さ64 柱状門幅、12)
A 7	I C	2 × 1	3.2~3.4 (10.5~11.3)	3.3 (11.3)	1.4 (4.6)	2.5 (8.3)	9.24 (2.8)	N 34° W	なし	最大55 × 40、最小28 × 28 深さ37、柱状門幅、12)
A 8	I C	2 × 1	2.7~2.8 (9.0~9.3)	2.6 (8.6)	1.25 (4.1)	2.3 (7.6)	7.15 (2.1)	N 50° E	なし	32 × 25、深さ32 木製門幅、10)
A 9	I D	東2 × 西2 南1	3.1~3.3 (10.3~11.0)	2.9 (9.6)	東0.9~1.4 北1.3~1.4 西1.3~4.6 南2.7 (9.0)	東0.9~1.4 北1.3~1.4 西1.3~4.6 南2.7 (9.0)	9.28 (2.8)	N 19° E	なし	20 × 18、深さ21 柱状門幅、10)
A 10	F	3 × 2	5.4 (18.0)	4.2 (14.0)	1.6 (5.3)	1.8 (6.0)	22.68 (6.8)	N 0°	なし	20 × 17、深さ52 柱状門幅、12)
A 11	B E	3 × 2 南1	5.1 (17.0)	3.1~3.2 (10.3~11)	1.4~1.7 (4.6~5.6)	北1.4 (4.6) 南2.9 (9.6)	16.32 (4.9)	N 25° E	なし	最大72 × 55、最小28 × 28 柱状門幅、10)
A 12	I E	2 × 1	2.6 (8.6)	2.5 (8.3)	1.2 (4.0)	1.2 (4.0)	6.5 (1.9)	N 31° W	なし	最大38 × 32、最小20 × 20 深さ30、柱状門幅、12)
A 13	I A	1 × 1	2.9 (9.6)	2.5~2.7 (8.5~8.0)	2.2 (7.5)	2.1 (7.0)	7.66 (2.3)	N 61° E	なし	最大54 × 65、最小44 × 42 深さ38、柱状門幅、10)
A 14	I E	2 × 2	4.4 (14.6)	4.2~4.6 (14.0~15.3)	2.0 (6.6)	1.8~2.0 (6.0~6.6)	19.36 (5.8)	N 0°	なし	64 × 57、深さ40 柱状門幅、10)
A 15	I C	2 × 1	3.8~3.9 (12.6~13)	3.8 (12.6)	1.6 (5.3)	3.4 (11.3)	14.63 (4.4)	N 34° E	なし	48 × 48、深さ55 柱状門幅、13)
A 16	B G	南3 × 北3 南5 × 北5	4.1~4.4 (13.5~14.6)	3.9 (13.1)	北0.9~2.0 南1.9~5.6	北1.4 (4.6) 南4.6 (14.6)	14.02 (4.2)	N 59° E	なし	44 × 40、深さ33 柱状門幅、10)
A 17	I E	2 × 2	3.9 (13.0)	3.8~3.9 (12.6~13.0)	1.7~1.8 (5.6~6.0)	1.8 (6.0)	15.02 (4.5)	N 40° W	なし	48 × 45、深さ32 柱状門幅、11)
A 18	I C	2 × 1	1.9 (6.3)	1.9 (6.3)	0.7 (2.3)	1.5 (5.0)	3.61 (1.0)	N 58° E	なし	40 × 35、深さ22 柱状門幅、11)
A 19	B C	3 × 1	5.0~5.2 (16.6~17.3)	2.3~2.5 (7.8~8.3)	1.4~1.8 (4.6~6.0)	1.8~2.0 (6.0~6.6)	12.24 (3.7)	N 0°	なし	最大52 × 52、最小40 × 32 深さ28、柱状門幅、12)
A 20	B D	南3 × 北3 南2 × 北2	6.1 (20.3)	3.4 (11.3)	1.9 (6.3)	3.1 (10.3)	20.74 (6.2)	N 15° W	なし	南側等より、5C抜き前後 2 × 1での平面図 14.28 m (4.3坪)

地区番号	番分	屋		柱		平面積 (㎡)	地方向 (新方向) (旧上より)	遺物	備考
		新行全長 (尺)	覆行全長 (尺)	新行一間 m, (尺)	覆行一間 m, (尺)				
A 21	I C	2 × 1	2.7~5.0 (8.0~5.0)	2.5~2.6 (8.3~5.0)	1.1~1.2 (3.5~4.0)	7.14 (2.1)	N 26° W	なし	
A 22	II A	2 × 1	5.2~5.7 (17.3~19.0)	3.8 (11.3)	2.4~2.8 (8.0~5.3)	20.71 (6.2)	N 73° E	土器器片	41 × 37, 高さ23 柱行間, (10) 最大50 × 41, 最小32 × 21 高さ33, 柱行間, (13)
A 23	I B	1 × 1 高2	2.8~2.9 (9.3~5.5)	2.4~2.6 (8.0~5.5)	2.5 (8.3) 高1.1 (3.6)	7.125 (2.1)	N 64° E	なし	42 × 39, 高さ30 柱行間, (12)
A 24	I A	1 × 1	3.0 (10.0)	2.6~2.8 (8.5~5.5)	2.7 (9.0)	8.1 (2.4)	N 25° W	なし	32 × 31, 高さ不明 柱行間, (10)
A 25	II A	5 × 2 高4	7.4~7.8 (24.5~26.0)	5.4 (18.0)	1.3~2.0 (4.3~5.5)	45.14 (13.6) 94 本体:(12.4)	N 49° E	なし	最大88 × 68, 最小38 × 36 高さ33, 柱行間, (5)
A 26	I C	2 × 1	3.2 (10.3)	3.1 (10.3)	1.3~1.8 (4.3~5.3)	9.92 (3.0)	N 15° W	土器器片	最大45 × 45, 最小31 × 20 高さ45, 柱行間, (6)
A 27	II A	2 × 1	3.8 (12.5)	3.3 (11.0)	1.7 (5.5)	12.54 (3.8)	N 17° W	土器器, 器片 柱2, S字蓋1	48 × 45, 高さ32 間行板, (柱板) (器片) (もの8)
B 28	II A	2 × 1	4.8~4.7 (15.3~15.6)	3.4 (11.3)	2.0~2.3 (6.0~7.5)	18.91 (4.7)	N 18° W	なし	最大68 × 48, 最小34 × 25 高さ30, 柱行間, (12)
C 29	II J	5 × 3	8.0~8.4 (26.5~28.0)	5.4~5.6 (18.0~18.6)	1.2~1.5 (4.0~5.0)	45.1 (13.6)	N 9° E	土器器 器器器片	80 × 78, 高さ40 柱行間, (10)
C 30	II A	2 × 2	3.6 (12.0)	3.5~3.6 (11.6~12.0)	1.6 (5.3)	12.95 (3.9)	N 76° W	なし	63 × 63, 高さ40 柱行間, (11)
C 31	I A	2 × 2	4.0~4.2 (13.3~14.0)	3.7~3.9 (12.3~13.0)	1.7 (5.6)	15.98 (4.7)	N 34° E	なし	63 × 65, 高さ40 柱行間, (10)
C 32	II B	4 × 2	8.1~8.4 (27.0~28.0)	5.2~5.5 (17.3~18.3)	1.5~2.0 (5.0~6.5)	57.18 (17.3) 28 本体:(13.4)	N 77° W	なし	80 × 77, 高さ70 柱行間, (10)
C 33	II B	4 × 3	6.5~7.0 (21.5~23.3)	5.2~5.4 (17.3~18.0)	1.3~1.8 (4.3~5.0)	48.985 (15.1) 57 本体:(11.0)	N 86° E	なし	63 × 60, 高さ45 柱行間, (10)
C 34	II I	4 × 3	7.9 (26.3)	5.0 (16.5)	1.7~2.0 (5.6~6.6)	39.5 (11.9)	N 51° W	銅器器片器器	最大107 × 95, 最小70 × 65 高さ50, 柱行間, (10)
C 35	II B	2 × 2	4.6~5.0 (15.3~16.6)	3.5~3.8 (11.6~12.6)	1.85~2.0 (6.1~6.6)	12.76 (3.7)	N 59° W	銅器器器器	67 × 66, 高さ0.5 柱行間, (10)
C 36	I E	2 × 2	3.3 (11.0)	3.1~3.2 (10.3~10.6)	1.4~1.5 (4.6~5.0)	18.4 (5.1)	N 27° W	銅器器器片3 土器器片	50 × 40, 高さ40 cm 柱行間, (10)

※ A地区1~4は、1979年度調査、伊馬渡部1(1980)所収

A地区5~27、B地区28は1980年度調査、伊馬渡部1(1981)所収

C地区29~36は、1981年度調査、伊馬渡部1(1982)本報告書

表5 徳島建設型穴住居址出土土器一覽

H-1土器群 Ko-黒色土器 S-須恵器 Ka-灰胎陶器 R-磁胎陶器

No.	図番号	出土地点	器種・器形	法		量		色		質	胎	土	成	形状上の特徴		備考
				口径 ϕ	底径 ϕ	最大径 ϕ	底径 ϕ	外	内					外	内	
1	9	61号住居址 カマド内	Ko・杯H	(17.5)	(5.0)	-	(4.7)	赤褐色	黒色一部赤褐色	細石炭粉、砂粒をわずかに含む。	細石炭粉、砂粒をわずかに含む。	口縁部ヘラミ(黒) 以下ヘラミ(赤)とヘラミガキ	ヘラミガキ(黒・赤)			
2	9	61号住居址 No.6	Ko・杯H	15.7	-	-	(4.9)	褐色	黒色	細石炭粉、砂粒をわずかに含む。	細石炭粉、砂粒をわずかに含む。	底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ			
3	9	61号住居址	Ko・杯H	(13.0)	(4.5)	-	3.9	暗黄褐色	黒色	細石炭粉、砂粒をわずかに含む。	細石炭粉、砂粒をわずかに含む。	底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ			
4	9	61号住居址	Ko・杯H	(14.4)	-	-	-	上部：黒色 下部：暗黄褐色	黒色	砂粒をわずかに含む。	砂粒をわずかに含む。	ヘラミガキ(黒)	ヘラミガキ			
5	9	61号住居址 I層	Ko・杯A	(16.3)	-	-	-	赤褐色	黒色	砂粒をわずかに含む。	砂粒をわずかに含む。	口縁部ヘラミガキ(黒) 以下ヘラミガキ(赤)	口縁部ヘラミガキ(黒) 以下ヘラミガキ(赤)			
6	9	61号住居址	Ko・杯	-	-	-	-	暗黄褐色	黒色	石英粒、長石粒、砂粒を含む。	石英粒、長石粒、砂粒を含む。	底部：ヘラケズリ(9)	ヘラミガキ			外面磨削はげしい。
7	9	61号住居址 No.7	Ko・杯A	13.0	6.5	-	6.9	明褐色	黒色	細石炭粉、砂粒をわずかに含む。	細石炭粉、砂粒をわずかに含む。	底部：円筒心ヘラケズリの後ヘラミガキ	ヘラミガキ			
8	9	61号住居址 No.7	Ko・杯A	13.8	-	-	6.5	黒色 底部：暗黄褐色	黒色	細石炭粉、砂粒をわずかに含む。	細石炭粉、砂粒をわずかに含む。	底部：ヘラケズリ 後ヘラミガキ	ヘラミガキ			
9	9	61号住居址 No.4	H・杯G	14.2	5.4	-	5.5	暗褐色	暗褐色	石英粒、砂粒を多く含む。	石英粒、砂粒を多く含む。	底部：木炭灰をヘラケズリで削ぎ	ヘラケズリ			
10	9	61号住居址	H・杯D	12.4	-	-	8.6	暗褐色	暗褐色	石英粒、長石粒、砂粒を多く含む。	石英粒、長石粒、砂粒を多く含む。	底部：黒いヘラケズリ すり面ヘラケズリ	口縁部ヘラケズリ(黒) 以下ヘラケズリ、ヘラケズリ			
11	9	61号住居址	H・無脚盤	12.5	8.5	-	12.1	明褐色	底面黒色土の部明褐色	長石粒、砂粒を含む。	長石粒、砂粒を含む。	ヘラミ(赤)の後ヘラミガキ	ヘラミ(赤)の後ヘラミガキ			
12	9	61号住居址 No.2	H・盤F	(23.0)	-	-	-	赤褐色	赤褐色	長石粒、砂粒を多く含む。	長石粒、砂粒を多く含む。	口縁部ヘラミガキ(黒) ヘラミ(黒)と右ツナ ヘラミ(黒)と右ツナ	口縁部ヘラミガキ、胴部ヘラミガキの境(右ツナヘラミ下)			
13	9	61号住居址 I層	H・盤	-	(6.2)	-	-	赤褐色	黒灰色	長石粒、砂粒を多く含む。	長石粒、砂粒を多く含む。	底部：木炭灰	ナデ			
14	13	62号住居址 No.8	Ko・杯A	14.4	-	-	5.0	明褐色上面 色のまだら	黒色	長石粒、砂粒を多く含む。	長石粒、砂粒を多く含む。	底部：ヘラケズリ 後ヘラミガキ	ヘラミガキ			
15	13	62号住居址 No.2	Ko・杯A	(13.8)	-	-	-	暗黄褐色	黒色	長石粒、砂粒を多く含む。	長石粒、砂粒を多く含む。		ヘラミガキ			
16	13	62号住居址	H・杯	-	(9.8)	-	-	暗黄褐色	明黄褐色	長石粒、砂粒を含む。	長石粒、砂粒を含む。		ヘラミガキ			
17	13	62号住居址	Ko・杯	-	-	-	-	暗黄褐色	黒色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。	長石粒、石英粒、砂粒を含む。		ヘラミガキ			

No	図番号	出土地点	形状・器形	法		量		色		質		胎土	成形	整形上の特徴		備考
				口徑cm	底徑cm	最大径cm	容積cm ³	外	内	外	内					
18	13	60号住居址 No.2	Ko・杯	-	(5.5)	-	-	褐色	褐色	褐色	褐色を含む。		底面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ		
19	13	60号住居址 No.5	H・壺C	14.2	-	14.1	-	暗黄褐色	褐色	黄褐色	長石散、砂粒を多く含む。		口縁部ナデ、胴部ツム(ゴコ)肩部以下ヘラツリ工具によるナデ(四方とも右ナデ方向)	口縁部ナデ、胴部ツム(ゴコ)肩部以下ヘラツリ工具によるナデ(四方とも右ナデ方向)		
20	13	60号住居址 H・小型壺A	H・小型壺A	(11.8)	4.9	(11.9)	13.2	赤褐色	黒色、暗褐色	黒色、暗褐色	長石散、砂粒を多く含む。		底面：木槌底をへラツリ	ヘラナデ		器壁内側のみ
21	13	60号住居址 H・壺C	H・壺C	19.8	6.6	19.2	30.7	明褐色	明褐色	明褐色	長石散、砂粒を多く含む。		底面：窪いナデ	口縁部ナデ、胴部以下ヘラツリ工具と指によるナデ(ナデ)		
22	13	60号住居址 No.3 No.4	H・壺F	29.5	7.0	28.1	31.2	明褐色	明褐色	明褐色	長石散、砂粒を多く含む。		底面：ヘラナデ	口縁部ナデ、胴部以下ヘラツリ工具によるナデ(ナデ)		
23	17	60号住居址 No.24	S・有蓋杯	11.2	-	-	3.8	灰色	灰色	灰色	長石散、砂粒を多く含む。		底面：凹転ヘラツリ切の後のコロンナデ	コロンナデ		反時計回転
24	17	60号住居址 No.25 No.26 No.27	S・杯A	(16.8)	-	-	5.6	灰色	灰色	灰色	長石散、砂粒をわずかに含む。		底面：凹転ヘラツケツリ	口縁部コロンナデ以下凹転ヘラツケツリ		器壁厚みがばい。
25	17	60号住居址 棟脚	S・杯B	14.4	9.8	-	6.9	暗灰色	暗褐色	暗褐色	長石散、砂粒をわずかに含む。		底面：凹転ヘラツケツリ後付蓋	コロンナデ		器入遺物
26	17	60号住居址 棟脚	S・杯C	-	(5.8)	-	-	暗灰色	暗灰色	暗灰色	長石散、砂粒を含む。		底面：凹転赤塗り	コロンナデ		器入遺物
27	17	60号住居址 No.14	S・壺(変)	(11.8)	-	-	-	灰色	灰色	灰色	長石散、砂粒を含む。			口縁部コロンナデ、胴部以下ナデ(帽子目状文)		
28	17	60号住居址 No.5	Ko・杯A	(13.2)	(7.6)	-	5.6	明褐色	黒色	黒色	長石散、砂粒を含む。		底面：ヘラケズリ後ヘラナデ	ヘラミガキ(ゴコ)		器壁厚みがばい。
29	17	60号住居址 P ₁ 内 No.5	Ko・杯A	15.0	7.7	-	6.6	明褐色	黒色	黒色	砂粒を含む。		底面：ヘラケズリ	ヘラナデ、ヘラケズリ		
30	17	60号住居址 No.1 No.2 No.5 No.21	Ko・瓶A	19.1	7.2	-	9.7	明褐色	黒色	黒色	長石散、石英粒、砂粒を含む。		底面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ		
31	17	60号住居址 P ₁	Ko・瓶A	(15.2)	-	-	-	明黄褐色	黒色	黒色	長石散、石英粒、砂粒を含む。			口縁部ヘラツリ以下ヘラツリ工具によるナデ(ナデ)		
32	17	60号住居址 No.5 カマド内	Ko・杯A	(13.4)	(5.3)	-	(4.0)	明褐色	黒色	黒色	長石散、石英粒、砂粒を含む。			ヘラミガキ(ゴコ)		

No.	図番	出土地点	砂礫・砂	数量			色	土質	形状	外	上部	特徴	備考
				口徑 ϕ	底徑 ϕ	長さ ϕ							
33	17	69号住居址 P ₁ カマド内	Ko・杯A	(15.4)	(6.6)	4.1	明褐色	黒色	底層：ヘラケズリ 後ヘラミガキ	ヘラミガキ(黒・銅)	ヘラミガキ(銅)		
34	17	69号住居址 カマド内	Ko・杯A	(12.6)	-	-	褐色	黒色	底層：ヘラケズリ 後ヘラミガキ	ナズ(黒) 柳広いハケム(ナズ)	ハケム(ナズ) ヘラミガキ		
35	17	69号住居址 I部	Ko・杯理	(16.3)	-	-	明褐色	黒色	口縁部ヘラケズリ(黒) 以下ヘラケズリの後ヘラミガキ	口縁部ヘラケズリ(黒)	ヘラミガキ(黒)		
36	17	69号住居址	Ko・杯理	(13.2)	-	-	明褐色	黒色	口縁部ヘラケズリ(黒) 以下ナズ	ヘラケズリ(黒)後層(ヘラミガキ)	ヘラケズリ後ヘラミガキ(黒)		
37	17	69号住居址 No.1	Ko・杯理	(10.2)	-	-	口縁部黒色 以下黄褐色	黒色	口縁部ヘラケズリ(黒) 以下ナズ	口縁部ヘラケズリ後ヘラミガキ(黒)	ヘラミガキ(黒)		
38	17	69号住居址	H・燻硝	(12.0)	-	-	明褐色	明褐色	口縁部ヘラミガキ(黒) 以下ヘラミガキ(石ナナメ下方向)	口縁部ヘラミガキ(黒)	口縁部ヘラミガキ(黒) 以下ヘラケズリ(黒)		
39	17	69号住居址 No.5	H・燻F	(16.0)	-	-	明褐色	明褐色	口縁部ヘラケズリ(黒) 口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)		
40	17	69号住居址 No.23	H・燻硝	(18.9)	-	-	明褐色	明褐色	口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	使用は少し、	
41	17	69号住居址 No.2 No.3 No.4 No.5 No.9 No.19 No.20 カマド内	H・燻F	19.4	(6.4)	16.0	21.3	明褐色	明褐色	口縁部ヘケム(ナズ) 口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)
42	17	69号住居址 No.5	H・燻C	19.0	7.2	20.2	(37.4)	暗赤褐色	底層：木炭灰 以下ナズで消す。	口縁部ヘケム(ナズ) 口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	
43	17	69号住居址 No.4	H・燻C	20.0	8.8	19.1	39.9	暗赤褐色	底層：木炭灰 以下ナズで消す。	口縁部ヘケム(ナズ) 口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	
44	18	69号住居址 No.4 No.5	H・燻硝	11.4	8.8	18.7	20.1	赤褐色	底層：木炭灰 以下ナズで消す。	口縁部ヘケム(ナズ) 口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	
45	18	69号住居址 No.1 P ₁ 内 No.5	H・燻硝	14.0	7.9	16.4	18.1	明褐色	底層：木炭灰 以下ナズで消す。	口縁部ヘケム(ナズ) 口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	
46	18	69号住居址 No.4 No.5	H・燻A	19.7	(6.8)	24.1	26.2	明褐色	底層：ヘラケズリ 口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	口縁部ヘケム(ナズ)	

No.	採番号	出土地点	産種・産形	法		量	色		調	土	変	形	重		考
				口部	底部		外	内					外	内	
47	18	63号住居址 No.5 No.12 No.17	H・環	-	5.6	-	明褐色	明褐色	長石散、石英散、砂粒を多く含む。	底面：木炭粒をナ テで噴す。		胴部ハナメ(ナメ)とハナメ	胴部ハナメ(ナメ)、以下ナメ		
48	18	63号住居址 No.4 No.10	H・環A	19.6	7.3	29.4	明褐色	暗褐色	長石散、石英散、砂粒を多く含む。			ハナメの後ヘラミガキ 底部ナメ	ハナメの後ヘラミガキ 底部ナメ		
51	33	64号住居址	S・杯	(10.5)	-	-	灰色	灰色	長石散、砂粒を含む。			ワタロナメ	ワタロナメ	時付印瓦 底面遺物	
52	33	64号住居址 No.6	S・杯	-	-	-	灰褐色	灰色	長石散、砂粒を含む。	底面：手押ちヘラ ケスリ		ワタロナメ	ワタロナメ		
53	33	64号住居址	S・杯C	(4.8)	-	-	灰色	灰色	長石散、砂粒を含む。	底面：凹形片切り		ワタロナメ	ワタロナメ	時付印瓦 底面遺物	
54	33	64号住居址 No.6	S・杯B	(8.1)	-	-	灰色	灰色	長石散、砂粒を含む。	底面：凹形ヘラケ スリ板付高台		ワタロナメ	ワタロナメ	底面遺物	
55	33	64号住居址 No.6	S・壺	-	(14.0)	-	黄灰色	黄灰色	長石散、砂粒を含む。			ワタロナメ	ワタロナメ	時付印瓦 底面に穴掘	
56	33	64号住居址	Ko・碗A	(14.6)	-	-	暗黄褐色・ 赤褐色	黒色	長石散、石英散、砂粒を 含む。			ヘラミガキ	ヘラミガキ	表面磨削はげし い。	
57	33	64号住居址 No.3 灰皿	Ko・碗A	(7.6)	-	(8.6)	暗黄褐色	黒色	長石散、石英散、砂粒を 含む。			ヘラミガキ	ヘラミガキ	表面磨削はげし い。	
58	33	64号住居址 I層 I層	S・盥洗 I層	-	-	(12.7)	青灰色	青灰色	長石散、砂粒を含む。			ワタロナメ	ワタロナメ		
59	33	64号住居址 I層	H・環F	(22.0)	-	-	褐色	明褐色	長石散、石英散、砂粒を 多く含む。			ワタロナメ	ワタロナメ		
60	33	64号住居址 No.5	H・環F	(15.5)	-	-	明褐色	明褐色	長石散、石英散、砂粒を 多く含む。			口縁部ハナメ(ヨコ) 以下ナメの後ハナメ	ナメ(ヨコ)		
61	33	64号住居址	H・環D	(15.0)	-	-	暗褐色	褐色	長石散、石英散、砂粒を 多く含む。			口縁部ハナメ(ヨコ) 以下ナメの後ハナメ	口縁部ハナメ(ヨコ) ナメ(ヨコ)	ヘラミガキ、ハケ状工具による ナメ(ヨコ)	
62	33	64号住居址 I層	H・碗D	(4.2)	-	-	赤褐色	黒褐色	長石散、砂粒を含む。			口縁部ハナメ(ヨコ)	口縁部ハナメ(ヨコ)		
63	33	64号住居址 No.1	H・小形盥 B	15.4	(8.2)	14.8	暗褐色	暗褐色	長石散、石英散、砂粒を 多く含む。			口縁部ハナメ(ヨコ) 口縁部ハナメ(ヨコ) 口縁部ハナメ(ヨコ)	口縁部ハナメ(ヨコ) 口縁部ハナメ(ヨコ) 口縁部ハナメ(ヨコ)	口縁部ハナメ(ヨコ) 口縁部ハナメ(ヨコ) 口縁部ハナメ(ヨコ)	

No	図号	出土地点	器種・器形	高さ		口径		重量		色		土	成形	裏形上の特徴		備考
				口徑	底徑	最大径	底径	外	内	面	面					
64	33	64号住居址 No.5	H・ⅡG	17.6	9.0	15.5	23.5	23.5	15.5	23.5	暗褐色	灰石、石英粒、砂粒を多く含む。	底部：木炭灰	口縁部ハケナツ(ヨコ)、肩以下ハケナリ(ヨコ)と、底部ハケナリ、胴部ハケナリ(多少)、底部ハケナリとハケナツ、ヘラケズリ	口縁部ハケナツ(ヨコ)、肩以下ハケナリ(ヨコ)と、胴部ハケナリ、胴部ハケナリ(多少)、底部ハケナリとハケナツ、ヘラケズリ	
65	33	64号住居址 No.2	H・ⅡE	19.7	7.3	20.2	33.6	33.6	20.2	暗褐色	灰石、石英粒、砂粒を多く含む。	底部：木炭灰	口縁部ナツ、肩以下ハケナツ、ハケナツ(多少)	口縁部ナツ、肩以下ハケナツ、ハケナツ(多少)	口縁部ナツ、肩以下ハケナツ、ハケナツ(多少)	
66	33	64号住居址 I層 I層 灰皿	H・ⅡE	15.2	6.8	17.1	24.0	24.0	17.1	明褐色	灰石、砂粒を多く含む。	底部：ヘラナツ後 オヤニ	口縁部ハケナツ(ヨコ)と肩以下ハケナツ、肩以下ハケナリ(多少)の残	口縁部ハケナツ(ヨコ)と肩以下ハケナツ(横)一帯ハケナリとハケナツ(多少)の残	口縁部ハケナツ(ヨコ)、肩以下ハケナリ(多少)とハケナツ(ヨコ)	
67	33	64号住居址 No.4	H・ⅡE	16.4	7.0	17.3	25.9	25.9	17.3	褐色	灰石、石英粒、砂粒を多く含む。	底部：木炭灰	口縁部ナツ(ヨコ)、肩以下ハケナリ(多少)と上部ナツ	口縁部ナツ(ヨコ)、肩以下ハケナリ(多少)とハケナツ(ヨコ)	口縁部ナツ(ヨコ)、肩以下ハケナリ(多少)とハケナツ(ヨコ)	
69	48	65号住居址 S・ⅡD	S・ⅡD	15.4	-	-	3.6	3.6	-	灰色	灰石、砂粒を含む。		口縁部ハケナツ	口縁部ハケナツ	口縁部ハケナツ	反時計回転
70	48	65号住居址 S・ⅡC	S・ⅡC	(15.0)	-	-	-	-	-	灰色	灰石、砂粒を含む。		口縁部ハケナツ	口縁部ハケナツ	口縁部ハケナツ	時計回転
71	48	65号住居址 S・ⅡC	S・ⅡC	-	(6.6)	-	-	-	-	黄灰色	灰石、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	口縁部ナツ	口縁部ナツ	口縁部ナツ	時計回転
72	48	65号住居址 H・ⅡM	H・ⅡM	(26.3)	-	-	-	-	-	暗褐色	灰石、砂粒を含む。		口縁部ナツ(ヨコ) 肩部ハケナツ(ヨコ)	ナツ(ヨコ)	ナツ(ヨコ)	武器器
73	48	65号住居址 H・小皿盤 D	H・小皿盤 D	(2.6)	6.4	(3.0)	12.0	12.0	6.4	暗褐色	灰石、石英粒、砂粒を多く含む。	底部：回転糸切り	口縁部ハケナツ	口縁部ハケナツ	口縁部ハケナツ	口縁部ハケナツ
74	48	65号住居址 H・Ⅱ	H・Ⅱ	-	(7.2)	-	-	-	-	褐色	灰石、砂粒を含む。		ヘナリ(多少)	ヘナリ(多少)	ヘナリ(多少)	肩下半部、灰が 多く付着
75	61	66号住居址 S・ⅡC	S・ⅡC	13.3	6.6	-	3.8	3.8	6.6	灰色	灰石、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	口縁部ナツ	口縁部ナツ	口縁部ナツ	器「真」
76	61	66号住居址 No.1	S・ⅡC	14.1	6.4	-	4.0	4.0	6.4	灰褐色	灰石、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	口縁部ナツ	口縁部ナツ	口縁部ナツ	火箸
77	61	66号住居址 I層 S・ⅡC	S・ⅡC	13.4	6.7	-	3.8	3.8	6.7	灰褐色	灰石、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	口縁部ナツ	口縁部ナツ	口縁部ナツ	口縁部ハケナツ
78	61	66号住居址 I層 S・ⅡC	S・ⅡC	(3.4)	-	-	-	-	-	白灰色	灰石、砂粒を含む。		口縁部ナツ	口縁部ナツ	口縁部ナツ	陶片回転
79	61	66号住居址 S・ⅡC カマド内	S・ⅡC	(3.2)	-	-	-	-	-	白灰色	灰石、砂粒を含む。		口縁部ナツ	口縁部ナツ	口縁部ナツ	
80	61	66号住居址 I層 S・ⅡC	S・ⅡC	(3.4)	-	-	-	-	-	黒灰色	灰石、砂粒を含む。		口縁部ナツ	口縁部ナツ	口縁部ナツ	
81	61	66号住居址 H・ⅡC カマド内	H・ⅡC	21.3	6.6	-	6.8	6.8	6.6	赤褐色 口縁部：黒紫色	灰石、石英粒、砂粒を わずかに含む。	底部：回転糸切り	口縁部ナツ	口縁部ナツ	口縁部ナツ	口縁部ナツ後ヘラナツ

No	取寄券 出土地点	標識・標型	法		量		色		調	土	成	形		上		内	特	備	考
			口徑(φ)	底面(φ)	最大径(φ)	厚さ(φ)	外	内				外	内	外	内				
82	61号住居址 S・杯C	灰面	01.4	-	-	-	黄灰色	黄灰色	黄灰色	灰石、砂粒を含む。			ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				
83	61号住居址 S・杯B	灰面	-	0.8	-	-	灰色	灰色	灰色	灰石、砂粒を含む。	底部：面縁へナゲ スリ縦行高巻	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					陶針回版
84	61号住居址 S・杯B	灰面	-	01.0	-	-	灰色	灰色	灰色	灰石、砂粒を含む。	底部：面縁へナゲ スリ縦行高巻	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					陶針回版
85	61号住居址 S・杯C	灰面	-	4.8	-	-	灰色	灰色	灰色	灰石、砂粒を含む。	底部：面縁未切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					陶針回版
86	61号住居址 I層	灰面	-	6.2	-	-	黄灰色	黄灰色	黄灰色	灰石、砂粒を含む。	底部：面縁未切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					陶針回版
87	61号住居址 S・杯C	灰面	-	6.8	-	-	黄灰色	黄灰色	黄灰色	灰石、砂粒を含む。	底部：面縁未切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					陶針回版
88	61号住居址 I層	灰面	-	5.1	-	-	黄褐色	黄褐色	黄褐色	灰石、砂粒を含む。	底部：面縁未切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					陶針回版
89	61号住居址 No.3	灰面	12.5	6.1	-	3.6	明褐色	明褐色	明褐色	灰石、砂粒を含む。	底部：面縁未切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					陶針回版
90	61号住居址 S・杯	灰面	02.7	-	-	-	褐色	褐色	褐色	灰石、砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					陶針回版
91	61号住居址 I層	灰面	01.6	4.7	-	3.3	暗褐色	暗褐色	暗褐色	灰石、砂粒を含む。	底部：面縁未切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					陶針回版
92	61号住居址 No.7	灰面	14.4	5.6	-	5.1	明褐色	明褐色	明褐色	灰石、砂粒をわずかに 含む。	底部：面縁へナゲ スリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	下下部面縁へラケズリ	ヘラミガキ			陶針回版
93	61号住居址 I層	灰面	05.0	-	-	-	明褐色	明褐色	明褐色	灰石、石灰、砂粒を 含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部へラケズリの縁へラミガ キ、以下へラケズリ	ヘラミガキ			陶針回版
94	61号住居址 No.5	灰面	-	8.7	-	-	明褐色	明褐色	明褐色	灰石、石灰、砂粒を 含む。	底部：面縁未切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ			陶針回版
95	61号住居址 灰面	灰面	40.4	-	-	-	灰色	灰色	灰色	灰石、砂粒を多く含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			陶針回版
96	61号住居址 H・小部屋 E	灰面	04.6	-	-	-	明褐色	明褐色	明褐色	細石、石灰、細長石、細 砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部ロクロナデ 以下へラケズリ	ロクロナデ			陶針回版
97	61号住居址 H・小部屋 E	灰面	04.2	-	-	-	明褐色	明褐色	明褐色	細石、石灰、細長石、細 砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部ナデ(ロコ) 口縁部以下部分のみにへラケズリ	ナデ(ロコ)			陶針回版
98	61号住居址 No.5	灰面	09.2	-	-	-	黄褐色	黄褐色	黄褐色	細石、石灰、細長石、細 砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部ロクロナデ(ロコ) 以下へラケズリ(石ナゲ下)	ロクロナデ			陶針回版
99	61号住居址 No.6	灰面	-	7.9	-	-	黄褐色	黄褐色	黄褐色	砂粒を含む。	底部：面縁未切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			陶針回版

No	図番号	出土地点	器種・器形	法		量		色		土	成	形		備考
				口徑	底徑	容積	重量	外	内			外	内	
100	61	66号住居址 カマド内	H・酒杯	—	—	—	茶褐色	茶褐色	細砂粒を含む。			口径ナナ 杯部内面ヘライガキ	口径ナナ 杯部内面ヘライガキ	口径ナナ 杯部内面ヘライガキ 底面後算利用
102	22	67号住居址	S・台付燗	12.0 (5.5)	9.0	12.6	黒灰色	黒灰色	長石粒、砂粒を含む。 自然褐色、淡緑色			口径口口口口口、ヘライガズリ	口口口口口、ヘライガズリ	杯底時の砂が、 激しい。
103	22	67号住居址 No.2	H・杯 F I	12.4	—	4.2	暗褐色	褐色	砂粒を含む。			口径口口口口口後ヘライガキ 以下ヘライガズリの後ヘライガキ	口径口口口口口後ヘライガキ 以下ヘライガズリ	
104	22	67号住居址 No.6	Ko・杯	—	11.0	—	明褐色	黒色	石灰粒、長石粒、砂粒を 含む。			ヘライガキ 底面ヘライガズリの後ヘライガキ	ヘライガキ	
105	22	67号住居址 No.5	H・甕 F	18.6	—	15.8	明褐色	明褐色	砂粒を含む。			口径口口口口口 胴部ヘライガキ (口口)	口径口口口口口 胴部ヘライガキ (口口)	
106	22	67号住居址 I 階	H・甕	19.8	—	—	褐色	明褐色	砂粒を含む。			ヘライガキ	口径口口口口口 (口口) ヘライガキ	
107	22	67号住居址 No.3 I 階	S・平盃	—	9.8	16.0	灰白色	灰白色	長石粒、砂粒を含む。 自然褐色、淡緑色			胴部口口口口口 底面口口口口口	口口口口口 底面口口口口口	73号住の破片と 適合
108	22	67号住居址 No.4	H・甕 E	17.5	6.0	18.1	褐色	褐色	長石粒、石灰粒、砂粒を 含む。			口径口口口口口 (口口) 胴部以下ヘライガキ (口口) 胴部以下ヘライガキ (口口)	口径口口口口口 (口口) 胴部以下ヘライガキ	
109	22	67号住居址 No.4	H・甕 E	17.8	6.5	17.8	明褐色	明褐色	長石粒、石灰粒、砂粒を 含む。			口径口口口口口 (口口) 胴部以下ヘライガキ (口口)	口径口口口口口 (口口) 胴部以下ヘライガキ	
110	49	68号住居址	H・甕 G	(17.7)	—	(16.0)	褐色	暗褐色	砂粒を含む。			口径口口口口口 (口口) 胴部以下ヘライガキ (口口)	口径口口口口口 (口口) 胴部以下ヘライガキ	
111	49	68号住居址	H・甕 M	(22.4)	—	—	暗褐色	明褐色	砂粒を含む。			口口口口口	口口口口口	灰褐色
112	43	69号住居址	S・短明蓋	(10.2)	—	(15.9)	灰白色	灰白色	長石粒、砂粒を含む。			口口口口口	口口口口口	明褐色
113	43	69号住居址 I 階	S・短明蓋	(21.0)	—	—	灰白色	灰白色	長石粒、砂粒を含む。			口口口口口	口口口口口	明褐色
114	43	69号住居址 I 階	S・蓋	(15.3)	—	—	灰白色	黒灰色	長石粒、砂粒を含む。			口口口口口	口口口口口	明褐色
115	43	69号住居址	S・杯	(13.4)	—	—	白灰色	白灰色	長石粒、砂粒を含む。			口口口口口	口口口口口	明褐色
116	43	69号住居址	S・杯	(12.4)	—	—	黄灰色	黄灰色	長石粒、砂粒を含む。			口口口口口	口口口口口	明褐色
117	43	69号住居址	S・杯	(9.7)	—	—	白灰色	白灰色	長石粒、砂粒を含む。			口口口口口	口口口口口	明褐色
118	43	69号住居址	H・杯 F I	(13.8)	—	—	明褐色	明褐色	砂粒を含む。			口径口口口口口 (口口) 以下ヘライガズリ (口口)	口径口口口口口 (口口) 以下ヘライガズリ (口口)	口径口口口 ヘライガキ

No	図番号	出土地点	標高・標的	法		量	色		土	成	形状		内		備考
				口徑	底徑		外	内			外	内			
119	43	60号住居社 1層	H・覆	-	(5.8)	-	明褐色	褐色	砂粒を含む。		ヘラケズリ		ナブ		
120	52	70号住居社 No.3	S・杯C	14.2	6.3	-	3.4	灰色	長石、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	回転ナブ		回転ナブ		
121	52	70号住居社 1層	S・杯C	(5.0)	(6.9)	-	(5.2)	灰色	長石、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	回転ナブ		回転ナブ		崎村回転
122	52	70号住居社 No.2	S・杯C	11.0	5.3	-	3.4	灰色	長石、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	回転ナブ		回転ナブ		火事有
123	52	70号住居社 S・杯C	S・杯C	(3.9)	(7.8)	-	3.2	茶褐色	長石、砂粒を含む。		回転ナブ		回転ナブ		
124	52	70号住居社 1層	S・杯C	(4.0)	-	-	-	褐色	長石、砂粒を含む。		回転ナブ		回転ナブ		
125	52	70号住居社 1層	S・杯C	(1.8)	-	-	-	黄灰色	長石、砂粒を含む。		回転ナブ		回転ナブ		崎村回転
126	52	70号住居社 1層	S・杯B	-	-	-	-	灰色	長石、砂粒を含む。	底部：ヘラケズリ の捺付痕台	回転ナブ		回転ナブ		崎村回転
127	52	70号住居社 1層	S・杯C	(1.0)	-	-	-	黄灰色	長石、砂粒を含む。		回転ナブ		回転ナブ		崎村回転
128	52	70号住居社 1層	S・杯C	-	(7.2)	-	-	暗黄灰色	長石、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	回転ナブ		回転ナブ		崎村回転
129	52	70号住居社 1層	S・杯C	-	6.5	-	-	黄灰色	長石、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	回転ナブ		回転ナブ		崎村回転
130	52	70号住居社 1層	S・杯C	-	(7.8)	-	-	黄灰色	長石、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	回転ナブ		回転ナブ		崎村回転
131	52	70号住居社 1層	S・杯C	-	5.7	-	-	灰色	長石、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	回転ナブ		回転ナブ		崎村回転
132	52	70号住居社 1層	H・小室 D	10.2	4.7	10.2	8.5	暗灰色	長石、石英、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	口縁部回転ナブ 周部以下カケム		口縁部カケム		
133	52	70号住居社 No.1	S・蓋D	-	-	-	-	黄灰色	長石、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	回転ナブ		回転ナブ		崎村回転
134	52	70号住居社 1層	H・小室 C	(3.1)	(6.4)	(1.2)	-	黒褐色	長石、石英、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	回転ナブ		回転ナブ		
135	52	70号住居社 1層	H・覆C	(1.8)	-	-	-	黄褐色	砂粒を多く含む。		口縁部ヘケナブ 周部ナブ(カケム)の後ハシム		口縁部ヘケナブ 周部以下カケズリの後ヘケム		粗入遺物
136	52	70号住居社 1層	H・覆A	(4.8)	-	-	-	明褐色	砂粒を含む。		ヘラミガキ		ヘラミガキ		粗入遺物

No.	国番号	出土地点	器種・器形	法		量		色		土	成形	外形		特徴	備考
				口径(φ)	底径(φ)	底径(φ)	高さ(φ)	外	内			外	内		
137	52	70号住居址	H・壺N	(19.4)	-	-	-	明褐色	明褐色	石英散、長石散、砂粒を含む。		口縁部ロクロナデ 肩部ヘラケズリ	口縁部ロクロナデ 以下ヘラナデ	実産型	
138	52	70号住居址 カマド内	H・壺N	(19.2)	-	-	-	明褐色	明褐色	石英散、長石散、砂粒を含む。		口縁部ロクロナデ 肩部ヘラケズリ	口縁部ロクロナデ 以下ヘラナデ	実産型	
139	52	70号住居址 カマド内	H・壺M	(22.2)	(4.5)	(21.2)	-	明褐色	明褐色	石英散、長石散、砂粒を含む。		口縁部ロクロナデ、口縁部下部に ヘラを押しあてた痕跡あり 肩部以下ヘラケズリ	口縁部ロクロナデ 以下ヘラナデ	実産型	
140	26	71号住居址 I層	S・蓋D	(17.0)	-	-	-	灰色	灰色	長石散、砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	復入遺物	
141	26	71号住居址 I層	S・杯	(13.6)	-	-	-	黄灰色	黄灰色	長石散、砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	復入遺物	
142	26	71号住居址 灰層	S・杯	(13.5)	-	-	-	赤灰色	赤灰色	長石散、砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	復入遺物	
143	26	71号住居址 I層	Ko・杯F1	(14.2)	-	-	-	黒褐色	黒色	砂粒を含む。		ヘナケナデ(ヨコ)の痕ヘラミガキ ナ、底部ヘラケズリ	ヘナケナデの痕ヘラミガキ		
144	26	71号住居址 カマド内	Ko・杯F1	16.4	-	-	5.5	暗黄褐色	黒色	長石散、石英散、砂粒を含む。		口縁部ハナケナデの痕ヘラミガキ 以下ヘラケズリ	口縁部ハナケナデの痕ヘラミガキ 以下ヘラミガキ(ヨコ)		
145	26	71号住居址 カマド内	Ko・杯F1	(12.6)	-	-	-	明褐色	黒色	長石散、石英散、砂粒を含む。		口縁部ハナケナデの痕ヘラミガキ 以下ヘラケズリ	口縁部ハナケナデの痕ヘラミガキ 以下ヘラミガキ		
146	26	71号住居址 カマド内	Ko・杯A	(17.2)	-	-	-	明褐色	黒色	長石散、石英散、砂粒を含む。		ヘラミガキ	ヘラミガキ		
147	26	71号住居址	H・壺G	(15.5)	-	-	-	赤褐色	黒色	大粒の砂粒を含む。		口縁部ハナケナデ(ヨコ) 肩部ヘラミガキ	口縁部ハナケナデ(ヨコ) 肩部ヘラミガキ(ヨコ)		
148	26	71号住居址 カマド内	H・壺F	(14.0)	-	-	-	褐色	褐色	大粒の砂粒を含む。		ナデ	口縁部ナデに接ヘケナ(ヨコ) 肩部ナデ(ヨコ)		
149	26	71号住居址 I層	H・壺F	(13.4)	-	-	-	明褐色	黒色	砂粒を含む。		肩部はげしく不明	ヘラミガキ		
150	26	71号住居址 P11	H・壺F	(13.9)	-	-	-	暗黄褐色	褐色	砂粒を含む。		口縁部ハナケナ(ヨコ)の痕ヘラミガキ ナゲキ、肩部以下ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ 口縁部ヘラミガキの痕ヘケナ 肩部以下ナデ(ヨコ)		
151	26	71号住居址	H・壺F	(14.8)	-	-	-	黒褐色	黒褐色	砂粒を含む。		口縁部ナデ(ヨコ)の痕ヘケナ (ヨコ)、以下ナデ(ヨコ)	口縁部ナデ(ヨコ)の痕ヘケナ (ヨコ) 以下ヘラ工具によるナデ(ヨコ)		
152	26	71号住居址 No.1	H・壺	14.4	5.8	-	14.0	褐色	暗黄褐色	石英散、長石散、砂粒を含む。		口縁部ハナケナデ(ヨコ) 以下ヘケナミガキ	口縁部ハナケナデ(ヨコ) 以下ヘケナミガキ		
153	26	71号住居址 灰層	H・高杯	-	-	-	-	明褐色	黒色	石英散、長石散、砂粒を含む。		ヘラミガキ(ヨコ)	ヘラミガキ(ヨコ)		

No	図号	出土地点	形制・形状	法		色		土	成	形状		備考
				口徑	底徑	外	内			外	内	
154	26	71号住居址	H・壘	-	(4.2)	-	赤褐色	黒色	砂粒を含む。	底部：回転糸切り	ヘラナデ	オヤニとヘラケズリ
155	26	71号住居址	H・小型壘D	-	(7.2)	-	褐色	黄褐色	砂粒を含む。	底部：回転糸切り	タケノ(ヨコ)	ヘラケズリ
156	26	71号住居址 I 階	H・壘M	-	(26.4)	-	明褐色	明褐色	砂粒を含む。	口縁部ナデ(ヨコ) 以下ヘラケズリ(ヨコ)	ナデ(ヨコ)	ナデ(ヨコ)
157	26	71号住居址 I 階	S・フラスコ形壘	-	-	-	灰色	灰色	灰石粒、砂粒を含む。 自然褐色：黄褐色	口縁部ナデ(ヨコ) 以下ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ
158	26	71号住居址 カマド内	H・壘B	-	6.8	(26.2)	赤褐色	明褐色	砂粒を含む。	底部：ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ(ヨコ)、底部ナデ
161	37	72号住居址 カマド内	H・壘G	15.3	6.5	16.5	褐色	暗黄褐色	灰石粒、石英粒、砂粒を含む。	底部：ヘラケズリ 以下ヘラケズリ後ヘラミガキ	口縁部ヘラナデ 以下ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘナメ、ヘケ杖工具によるナデ
162	37	72号住居址	H・壘	-	10.4	-	褐色	明褐色	大粒な砂粒を含む。	底部：木蓋底の後 オヤニ	ヘナメ、ヘラナデ	ヘナメ、ヘケ杖工具によるナデ
163	37	72号住居址 カマド内	H・壘? (17.0)	-	-	-	赤褐色	明褐色	大粒な砂粒を含む。	口縁部ヘラミガキ 口縁部ヘケ杖の後ヘラミガキ 以下ヘラミガキ(ヨコ、右ナデ 以下)	ヘラミガキ、1部ヘケメ	
164	37	72号住居址	H・壘壘型 (8.0)	-	-	-	明褐色	明褐色	砂粒を含む。	口縁部ヘナメ(ヨコ)とナデ 別部ヘラケズリ(右ナメ下) 別部ナデ(右ナメ下)又はヘ ラケズリ	口縁部ヘナメ(ヨコ)とナデ 別部ヘラケズリ(右ナメ下)又はヘ ラケズリ	口縁部ヘナメ(ヨコ) 別部ナデ(右ナメ下)又はヘ ラケズリ
165	37	72号住居址 カマド内	H・壘G (12.0)	-	-	-	赤褐色	黒色	砂粒を含む。	口縁部ヘナメ(ヨコ) 以下ヘラミガキとナデ	口縁部ヘナメ(ヨコ) 以下ヘラミガキ	口縁部ヘナメ(ヨコ) 以下ヘラミガキ
166	37	72号住居址 カマド内	H・壘F (15.4)	-	-	-	暗褐色	暗黄褐色	砂粒を含む。	口縁部ヘナメ(ヨコ) 以下ヘラミガキ	ヘラナデ(オチ)	ヘラナデ(ヨコ)
167	37	72号住居址 カマド内	H・壘	-	5.1	-	暗褐色	黄褐色	砂粒を多く含む。	底部：木蓋底をナ ヤニで消す。	ナデ(オチ)(工具不明)	ヘケ杖工具によるナデ(ヘケ ナデ)
168	44	73号住居址	S・壘E (15.6)	-	-	-	黒灰色	黒灰色	灰石粒、砂粒を含む。	上部部回転ヘラケズリ 口縁部ヘラナデ	口縁部ヘラケズリ	口縁部ヘラケズリ
169	44	73号住居址	S・杯	-	(13.8)	-	白灰色	白灰色	灰石粒、砂粒を含む。		口縁部ナデ	口縁部ナデ
170	44	73号住居址	H・壘 (20.4)	-	-	-	黄褐色	暗黄褐色	砂粒を含む。	口縁部ヘケ杖(ヨコ) 以下ナデ(ヨコ)	口縁部ヘケ杖(ヨコ) 以下ナデ(ヨコ)	口縁部ナデ(ヨコ) 以下ヘケ杖(ヨコ)
171	27	74号住居址	Ko・杯型 (10.8)	-	-	-	明褐色	黒色		口縁部ヘケ杖(ヨコ) 以下ヘラケズリ後ヘラミガキ	口縁部ヘケ杖(ヨコ) 以下ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ

No	原番号	出土地点	器種・形状	口径	法		量		色		土	形状	形状上の特徴		備考
					底径	最大径	容積	重量	外	内			外	内	
172	27	74号住居址	Ko・杯A	11.7	-	-	3.7	明褐色	黒色				口縁部へラミガキ(ヨコ) 底部へラミガキの痕へラミガキ		
173	41	75号住居址	S・大甕	33.4	-	-	-	青灰色	暗褐色	長石散、砂粒を含む。 自然褐色；灰褐色			ワラコナダの後タン水工具による列成文	ワラコナダ	
174	41	75号住居址 覆土1層	S・杯A	13.2	0.0	-	4.7	暗青灰色	暗青灰色	長石散、砂粒を含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
175	41	75号住居址 覆土1層	S・杯A	13.0	-	-	4.3	明青灰色	明青灰色	長石散、砂粒を含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
176	41	75号住居址 覆土1層	S・杯A	13.3	-	-	-	青灰色	青灰色	長石散を多く含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
177	41	75号住居址 No.3	S・杯A	13.6	5.1	-	4.6	青灰色	青灰色	長石散、砂粒を含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
178	41	75号住居址 覆土1層	S・杯	15.2	-	-	-	青灰色	青灰色	長石散、砂粒を含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
179	41	75号住居址 カマド内	S・杯A	15.0	-	-	-	灰色	灰色	長石散、砂粒を含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
180	41	75号住居址 覆土1層	S・杯	12.0	-	-	-	灰色	灰色	長石散、砂粒を含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
181	41	75号住居址 1層	S・杯	14.0	-	-	-	赤褐色	赤褐色	長石散、砂粒を含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
182	41	75号住居址 No.2	S・杯	13.0	-	-	-	青灰色	青灰色	長石散、砂粒を含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
183	41	75号住居址 1層	S・杯B	-	-	-	-	青灰色	青灰色	長石散、砂粒を含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
184	41	75号住居址 1層	S・杯B	-	-	-	-	明青灰色	明青灰色	長石散、砂粒を含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
185	41	75号住居址 1層	S・甕D	17.1	-	-	-	青灰色	青灰色	長石散、砂粒を含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
186	41	75号住居址 1層	S・甕D	14.5	-	-	-	青灰色	青灰色	長石散、砂粒を含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
187	41	75号住居址 1層	S・甕D	17.0	-	-	-	赤青灰色	赤青灰色	長石散、砂粒を含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
188	41	75号住居址 床面	Ko・高杯	14.0	-	-	-	赤褐色	黒色	長石散、石灰質、砂粒を含む。			ワラコナダ	ワラコナダ	
189	41	75号住居址 カマド内	H・甕F	24.4	-	-	-	暗赤褐色	暗褐色	砂粒を含む。			ワラコナダ(ヨコ)	ワラコナダ(ヨコ)	

No.	図番号	出土地点	産種・形状	法		重量	色		質	賦	土	産	量		備	考
				口部	底部		外	内					外	内		
190	41	75号住居址 Ⅰ層	H・薬F	(22.8)	-	-	褐色	暗褐色	砂粒を含む。				口縁部ハナナジ(ヨコ) 周部ハナナジ(ヨコ)	口縁部ハナナジ(ヨコ) 周部ハナナジ(ヨコ)		
191	41	75号住居址 Ⅱ層	H・薬D	(08.0)	-	-	褐色	暗褐色	大粒な砂粒を含む。				口縁部ハナナジ 周部ヘラケズリ(多ク)	口縁部ハナナジ 周部ヘラケズリ(多ク)		
192	41	75号住居址 Ⅲ層	H・薬F	(22.8)	-	-	暗褐色	暗褐色	砂粒を含む。				口縁部ハナナジ 周部ヘラケズリの底ナジか?	口縁部ハナナジ 周部ヘラケズリ(多ク)		
193	41	75号住居址 No.4	H・薬F	(20.3)	-	-	褐色	褐色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。				口縁部ハナナジ(ヨコ) 以下ハナナジ一部ハナナジ(多ク)	口縁部ハナナジ(ヨコ) 周部ハナナジ(多ク)		
194	41	75号住居址 Ⅲ層	H・薬F	(22.2)	-	-	赤褐色	赤褐色	砂粒を含む。				口縁部ハナナジ(ヨコ)	口縁部ハナナジ(ヨコ) 周部ハナナジ(多ク)		
195	41	75号住居址 Ⅲ層	H・薬F	(16.0)	-	-	暗褐色	暗褐色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。				口縁部ハナナジ(ヨコ)	口縁部ハナナジ(ヨコ) 周部ハナナジ(多ク)		
196	41	75号住居址 Ⅲ層	H・薬G	(22.0)	-	-	赤褐色	赤褐色	砂粒を含む。				ヘラナジ(ヨコ)	ヘラナジ(ヨコ)		
197	41	75号住居址 P.	H・薬	-	10.8	-	薄、暗褐色	少し赤味の かかった暗 褐色	長石粒、砂粒を含む。				底面：木炭灰をナ ジで削す。	ヘラナジ		
198	41	75号住居址 Ⅲ層	H・薬	-	-	-	暗褐色	暗褐色	長石粒、砂粒を含む。				底面：木炭灰	ナジ(工具不明)		
199	41	75号住居址 Ⅲ層	H・薬	-	(6.8)	-	赤褐色	黒褐色	砂粒を含む。				底面：木炭灰	ヘラケズリ		
200	41	75号住居址 Ⅲ層	H・薬	-	(7.0)	-	暗赤褐色	暗赤褐色	長石粒、砂粒を含む。				底面：木炭灰	ヘラケズリ		
201	41	75号住居址 Ⅲ層	H・薬	-	(7.8)	-	暗褐色	暗褐色	砂粒を含む。				底面：木炭灰	ヘラナジ		
202	41	75号住居址 Ⅲ層	H・薬	-	(9.0)	-	赤褐色	暗赤褐色	砂粒を含む。				底面：木炭灰	ナジ(工具不明)		
204	42	76号住居址 Ⅱ層	S・薬D	(15.0)	-	3.5	白灰色	白灰色	長石粒、砂粒を含む。				口縁部コロナジ 上面凹陥ヘラケズリ	コロナジ		時計目版
205	42	76号住居址 No.1	H・薬G	(18.0)	-	-	明褐色	明褐色	砂粒を含む。				口縁部ハナナジ 以下ハナナジ、ハナナジ	口縁部ハナナジ 以下ハナナジ、ハナナジ		
206	38	77号住居址	Ko・杯F	(11.2)	-	-	明褐色	褐色	砂粒を含む。				ヘラミガキ	ヘラミガキ		
207	38	77号住居址	Ko・杯F	(11.2)	-	-	明褐色	褐色	砂粒を含む。				ヘラミガキ	ヘラミガキ		
209	29	78号住居址	S・薬B	(14.0)	-	-	灰色	灰色	長石粒、砂粒を含む。				口縁部コロナジ、上面凹陥ヘ ラケズリ、凹陥部に花模	コロナジ		反対目版 模様の小かみ が深い。
210	29	78号住居址	H・杯F	(11.2)	-	(4.0)	黄褐色	黄褐色	砂粒を含む。				底面ハナナジ 口縁部ナジの後ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ		

No	図番号	出土地点	製種・砂形	法		量		色		調	土	成	量		備考
				口徑 ϕ	篩目 ϕ	最大 ϕ	篩目 ϕ	外	内				外	内	
211	29	70号住跡並	成田	Ko・杯A	(17.3)	-	-	明褐色	黒色	砂粒を含む。			ヘラミガキ(300)		
212	29	70号住跡並	成田	H・杯	(16.5)	-	-	暗黄褐色	明褐色	砂粒を含む。			ナブ(300)		
213	29	70号住跡並	成田	H・壘	(16.0)	-	-	黒褐色	黒褐色	砂粒を含む。			ナブ(300)		個人遺物
214	29	70号住跡並	成田	H・壘	(16.0)	-	-	明褐色	明褐色	砂粒を含む。			ヘラミガキ(300)		
215	4	70号住跡並	成田	H・壘	-	5.6	-	黒褐色	黒褐色	砂粒を含む。			ヘラミガキ, 一部ハケキ		
216	65	80号住跡並	成田	S・杯C	13.0	5.7	-	灰色	灰色	長石散, 砂粒を含む。			ロクロナブ		
217	65	80号住跡並	成田	No.1 Ko・杯C	(12.0)	4.4	-	明褐色	黒色	砂粒を含む。			ロクロナブ		
218	65	80号住跡並	成田	No.2 Ko・杯C	13.6	6.2	-	明褐色	黒色	砂粒を含む。			ロクロナブ		
219	65	80号住跡並	成田	No.2 Ko・杯C	(13.0)	(6.0)	-	明褐色	黒色と明褐色	砂粒を含む。			ロクロナブ		焼付面皿
220	65	80号住跡並	成田	Ko・杯B	-	(6.5)	-	黒色	黒色	砂粒を含む。			ロクロナブ		
221	65	80号住跡並	成田	P ₁ H・小型壘	(11.2)	6.9	13.4	(15.0)	暗褐色	褐色	長石散, 石英散, 砂粒を含む。		ロクロナブ 底部一部ヘラミガキ		
222	65	80号住跡並	成田	P ₁ H・小型壘	(13.0)	-	-	暗褐色	暗黄褐色	長石散, 石英散, 砂粒を含む。			ロクロナブ		焼付面皿
223	65	80号住跡並	成田	P ₁ H・小型壘	(9.0)	-	(10.1)	-	暗褐色	暗黄褐色	長石散, 石英散, 砂粒を含む。		口縁部ロクロナブ, 以下ハケキ		
224	56	80号住跡並	成田	S・杯C	13.8	(7.0)	-	暗灰色	暗灰色	長石散, 砂粒を含む。			ロクロナブ		
225	56	80号住跡並	成田	S・杯C	(13.2)	(7.0)	-	灰色	灰色	長石散, 砂粒を含む。			ロクロナブ		焼付面皿
226	56	80号住跡並	成田	S・杯C	(14.0)	(7.0)	-	黄灰色	黄灰色	長石散, 砂粒を含む。			ロクロナブ		焼付面皿
227	56	80号住跡並	成田	S・杯C	(15.5)	-	-	黄灰色	黄灰色	長石散, 砂粒を含む。			ロクロナブ		
228	56	80号住跡並	成田	S・杯C	(13.5)	-	-	上部: 灰色 下部: 黄灰色	灰色	長石散, 砂粒を含む。			ロクロナブ		
229	56	80号住跡並	成田	S・杯C	(13.7)	-	-	灰色	灰色	長石散, 砂粒を含む。			ロクロナブ		
230	56	80号住跡並	成田	S・杯C	(13.2)	-	-	灰色	灰色	長石散, 砂粒を含む。			ロクロナブ		
231	56	80号住跡並	成田	S・杯C	(12.6)	-	-	灰色	灰色	長石散, 砂粒を含む。			ロクロナブ		

No.	図番号	出土地点	器種・形状	法	量		色		土	底	土	特		備
					口径	底径	外	内				形	外	
232	56	88号住居址 Ⅲ層	S・杯C	-	(6.2)	-	灰色	灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
233	56	88号住居址 Ⅲ層	S・杯C	-	7.0	-	黄灰色	黄灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
234	56	88号住居址 Ⅲ層	S・杯C	-	5.0	-	灰色	灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
235	56	88号住居址 Ⅲ層	S・杯C	-	5.7	-	灰色	灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
236	56	88号住居址 Ⅲ層	S・杯C	-	5.5	-	灰色	黄灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
237	56	88号住居址 Ⅰ層	S・杯	(14.7)	-	-	黄灰色	黄灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
238	56	88号住居址 Ⅲ層	S・杯C	(13.0)	-	-	白灰色	白灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
239	56	88号住居址 Ⅰ層	S・杯	(14.8)	-	-	黄灰色	黄灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
240	56	88号住居址 Ⅲ層	S・杯C	(12.8)	-	-	灰色	灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
241	56	88号住居址 Ⅰ層	S・杯C	(11.6)	-	-	灰色	黄灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
242	56	88号住居址 Ⅲ層	S・杯	(13.4)	-	-	黄灰色	黄灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
243	56	88号住居址 Ⅰ層	S・杯	(10.8)	-	-	黄灰色	灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
244	56	88号住居址 Ⅲ層	S・杯C	-	6.4	-	灰色	灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
245	56	88号住居址 Ⅰ層	S・皿	-	(6.0)	-	白灰色	黄灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径へラナズリ	口径ロナナ	陶片回版
246	56	88号住居址 Ⅰ層	S・杯C	-	(6.1)	-	灰色	灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
247	56	88号住居址 Ⅰ層	S・杯C	-	(6.4)	-	灰色	灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
248	56	88号住居址 Ⅲ層	S・杯C	-	(6.7)	-	黄灰色	黄灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
249	56	88号住居址 Ⅲ層	S・杯C	-	7.0	-	灰色	黄灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
250	56	88号住居址 №9	S・杯B	(12.5)	(8.2)	-	4.3	灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
251	56	88号住居址 №4 カマド内	S・杯B	12.0	8.0	-	4.0	灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版
252	56	88号住居址 №2	S・杯B	12.1	8.1	-	4.0	灰色	灰石散、砂粒を含む。			口径ロナナ	口径ロナナ	陶片回版

No.	図番号	出土地点	器種・器形	法		量		色		土	成	形		上		内	面	備	考	
				口徑	底徑	最大徑	容積	外	内			外	内							
253	56	83号住居址 №.3 灰函	S・杯B	(12.0)	(7.0)	-	3.7	灰色	灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り の縁高台つけて クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ						
254	56	83号住居址	S・杯B	(18.9)	-	-	-	黒灰色	黒灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り 縁の高台をつけて クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ						時計皿版
255	56	83号住居址 №.5	S・杯B	(15.4)	10.5	-	7.2	暗灰色	暗灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り 縁の高台をつけて クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ					時計皿版
256	56	83号住居址 ■	S・杯B	(15.0)	(9.7)	-	5.3	灰色	灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り 縁の高台をつけて クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ					時計皿版
257	56	83号住居址 I層	S・杯B	-	(6.8)	-	-	灰色	灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り の縁高台の縁 クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ					
258	56	83号住居址 I層	S・杯B	-	(6.8)	-	-	灰色	灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り の縁高台の縁 クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ					
259	56	83号住居址 I層	S・杯B	-	(10.4)	-	-	暗灰色	暗灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ					時計皿版
260	56	83号住居址 №.1	S・杯B	-	8.7	-	-	灰色	灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り の縁高台の縁 クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ					へう記号有り 「1」
261	56	83号住居址	S・蓋	(25.7)	-	-	-	赤灰色	赤灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ					
262	56	83号住居址 I層	S・蓋D	(13.5)	-	-	-	黄灰色	黄灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ					時計皿版
263	56	83号住居址 №.8	S・蓋D	(15.4)	-	-	-	赤褐色	赤褐色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ					時計皿版
264	56	83号住居址 灰函	S・蓋D	(15.6)	-	-	-	暗灰色	暗灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ					
265	56	83号住居址 I層	S・蓋D	(15.9)	-	-	-	黄灰色	黄灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ					
266	56	83号住居址 灰函	S・蓋D	(11.6)	-	-	-	灰色	灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ	クロナダ					

No	図番号	出土地点	器種・器形	法		量		色		土	成	形		備考
				口徑	底徑	口徑	底徑	外	内			外	内	
267	56	80号住跡址 Ⅱ層D	S・盥D	(11.8)	-	-	-	灰色	灰色	長石散、砂粒を含む。		口縁部ロクロナデ 上部凹部ヘラケズリ	ロクロナデ	
268	56	80号住跡址 灰面	S・盥D	(13.9)	-	-	-	黒灰色	黒灰色	長石散、砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	
269	56	80号住跡址 I層	S・有蓋杯	(19.0)	-	-	-	黒灰色	黒灰色	長石散、砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	個人遺物
270	56	80号住跡址 灰面	H・壺G	(16.3)	-	-	-	明褐色	明褐色	砂粒を含む。		口縁部ヘラケズリ(口コ)、以下 ヘラケズリ(右ナデ、下方角)	ナデ(口コ)	個人遺物
271	56	80号住跡址 Ⅱ層D	H・壺D	(14.2)	-	-	-	明褐色	明褐色	長石散、石英散、砂粒を含む。		口縁部ヘラケズリ 胴部ヘラケズリ(口コ)	ヘラケズリ	
272	56	80号住跡址 I層	H・壺N	(16.2)	-	-	-	明褐色	明褐色	長石散、石英散、砂粒を含む。		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	武蔵型
273	56	80号住跡址 Ⅱ層D	H・小壺D	-	7.7	-	-	赤褐色	赤褐色	長石散、石英散、砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り	カヤハ、ロクロナデ	ロクロナデ	
274	56	80号住跡址 Ⅱ層	H・壺M	(21.4)	-	-	-	明褐色	明褐色	長石散、石英散、砂粒を含む。		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
275	56	80号住跡址	H・壺	-	0.0	-	-	褐色	明褐色	長石散、石英散、砂粒を含む。	底部：ヘラケズリ	ヘラケズリ(口コ)の残ナデ	ナデ	
276	56	80号住跡址 カマド内	H・壺M	(21.2)	0.0	(22.1)	-	上部：褐色 下部：明褐色	褐色	長石散、石英散、砂粒を含む。		口縁部ロクロナデ 胴部ヘラケズリ	ロクロナデ、ヘラケズリ	武蔵型

表6 借馬遺跡建物址ピット・その他のピット出土土器一覽

No	図番号	出土地点	器種・器形	法		量		色		土	成	形		備考
				口徑	底徑	口徑	底徑	外	内			外	内	
282	66	遺29 P ₁₁₄	S・杯	(14.4)	-	-	-	灰色	灰色	長石散、砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	
283	74	P ₁₁₄	H・壺D	(18.2)	-	-	-	明褐色	明褐色	砂粒を含む。		口縁部ナデ(口コ) 以下ヘラケズリ(口コ)	ナデ(口コ不明)	
284	70	遺34 P ₁₁₄	S・杯B	-	(5.7)	-	-	白灰色	白灰色	長石散、砂粒を含む。	底部：糸切りの縁 付高台ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	陶片回収
285	71	遺35 (雑土内) P ₁₁₄	S・杯	(12.0)	-	-	-	黒灰色	黒灰色	長石散、砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	
286	71	遺35 (雑土内) P ₁₁₄	S・杯	(10.4)	-	-	-	灰色	灰色	長石散、砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	

No.	図番号	出土地点	器種・器形	底		高		色		土	成	形		備考
				口径(=)	底径(=)	最大径(=)	器底(=)	外	内			外	内	
287	71	建36 (堆土内) P ₁₃₃	S・杯	(10.2)	-	-	-	黄灰色	黄灰色	長石散、砂散を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	陶片回収
288	71	建36 (堆土内) P ₁₃₃	S・杯	(16.0)	-	-	-	黒灰色	黒灰色	長石散、砂散を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	
289	71	建36 (堆土内) P ₁₃₃	S・大壺	(22.2)	-	-	-	灰色	黒灰色	長石散、砂散を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	
290	71	建36 (装 面) P ₁₃₃	S・小型壺	-	(5.2)	-	-	暗褐色	暗赤褐色	長石散、砂散を含む。	底面：凹縁糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	底面下部に磨痕？ ある
291	72	建36 P ₁₃₄	S・杯C	(12.7)	(5.4)	-	3.5	灰色	白灰色	長石散、砂散を含む。	底面：凹縁糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	
292	72	建36 P ₁₃₁	S・杯C	(9.8)	-	-	-	灰色	灰色	長石散、砂散を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	
293	72	建36 P ₁₃₁	S・杯C	-	5.1	-	-	白灰色	白灰色	長石散、砂散を含む。	底面：凹縁糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	陶片回収
294	74	P ₁	H・壺	(16.9)	-	-	-	黒褐色	暗褐色	石炭散、長石散、砂散を含む。		ナデ(ヨコ)	ナデ(ヨコ)	
295	74	P ₁	H・小型壺 A	(11.0)	-	-	-	赤褐色	暗赤褐色	長石散、砂散を含む。		ナデ(ヨコ)	ナデ(ヨコ)	
296	74	P ₁	H・杯	-	(6.8)	-	-	暗褐色	暗褐色	砂散を含む。		ヘラミガキ	ヘラミガキ	
297	74	P ₁₇	S・杯B	-	(12.2)	-	-	黄灰色	黄灰色	砂散を含む。	底面：凹縁ヘラミ ガキ後付高台	ロクロナデ	ロクロナデ	
298	74	P ₁₄	H・杯C	-	(6.2)	-	-	褐色	褐色	砂散を含む。	底面：凹縁糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	
299	74	P ₁₄	S・杯A	12.8	5.0	-	4.9	灰色	灰色	長石散、砂散を含む。	底面：ヘラミガキ後 一部ヘラミガキ	ロクロナデ	ロクロナデ	
300	74	P ₁₁₄	S・杯	(13.2)	-	-	-	黄灰色	黄灰色	長石散、砂散を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	陶片回収
301	74	P ₁₁₄	S・杯	(11.3)	-	-	-	灰色	灰色	長石散、砂散を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	
302	74	P ₁₁₄	S・杯B	-	(0.3)	-	-	灰色	赤褐色	長石散、砂散を含む。	底面：凹縁ヘラミ ガキ後付高台	ロクロナデ	ロクロナデ	
303	74	P ₁₁₄	S・壺D	(14.4)	-	-	-	黄灰色	黒灰色	長石散、砂散を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	
304	74	P ₁₁₄	S・壺南窓	(11.4)	-	(3.4)	-	灰色	灰色	長石散、砂散を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	陶片回収

表7 信馬達跡発掘区外出土回示土器一覽

No	図番号	器種・器形	量		色		土	成	形	量		考
			口部径	底部径	外	内				外	内	
1	76	J・碟鉢	(19.2)	-	明褐色	明褐色	長石散、石英散、炭粒散、砂粒を含む。	口縁部に炭屑粘付、平縁竹管文で平行状縄文黒文ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部	縄文晩前期末	
2	76	Y・壺	9.4	-	明褐色	明褐色	砂粒を含む。	底面：ナデ	ナデ	外	弥生中期～後期	
3	76	Y・片口土器	13.0	3.9	赤褐色	赤褐色	長石散、砂粒をわずかに含む。	底面：ナデ	ナデ	外	内外面赤色塗彩	
4	76	Y・壺	(19.5)	-	暗褐色	赤褐色	長石散、石英散、砂粒を含む。	ナデ、ハケム、ヘライガキ 脚部文(縦状文)	ナデ、ハケム、ヘライガキ	外	内外面赤色塗彩	
5	76	Y・壺	(19.6)	-	明褐色	明褐色	長石散、石英散、砂粒を含む。	ナデ、ハケム 脚部文(縦状文、横状文)	ナデ、ハケム	外	内外面赤色塗彩	
6	76	Y・高杯	19.8	-	朱色	朱色	長石散、石英散、砂粒を含む。	ヘライガキ	ヘライガキ	外	内外面赤色塗彩	
7	76	H・高杯	21.8	11.7	赤褐色	赤褐色	長石散、石英散、砂粒を含む。	ハケム→ヘライガキ 脚部内面ヘライガキ、ナデ ヘライガキ	ハケム→ヘライガキ 脚部内面ヘライガキ、ナデ ヘライガキ	外	内外面赤色塗彩	
8	76	H・壺	(16.4)	-	赤褐色	明褐色	長石散、石英散、チャート粒、砂粒を含む。	ヘライガキ、4本の垂方向の凹線	ヘライガキ	外	東面系(矢山式系?)	
9	76	H・器台	9.4	12.4	赤褐色	赤褐色	長石散、石英散、砂粒を含む。	台座ヘライガキ 脚部ハケム→ヘライガキ	台座ヘライガキ 脚部ハケム→ヘライガキ	外	内外面赤色塗彩 脚部内面乳3	
10	76	H・器台	-	12.4	赤褐色	赤褐色	長石散、石英散、砂粒を含む。	脚部ハケム→ヘライガキ	脚部ハケム→ヘライガキ	外	内外面赤色塗彩 脚部内面乳3	
11	76	H・杯	14.4	-	淡黄褐色	淡黄褐色	細長石散、細石英散、細砂粒を含む。	ヘライガキ 底面ヘライガキ	ヘライガキ 底面ヘライガキ	外	布面式系	
12	76	H・杯F1	15.8	-	明褐色	明褐色	石英散、長石散、砂粒を含む。	ヘライガキ 底面：黒いハケム→ヘライガキ	ヘライガキ 底面ヘライガキ	外	底面黒付着	
13	76	H・杯F1	12.7	-	淡赤褐色	淡赤褐色	石英散、長石散、砂粒を含む。	底面：ヘライガキ ヘライガキ	底面ヘライガキ 以下ヘライガキ	外	底面黒付着	
14	76	H・杯F1	14.5	-	淡赤褐色	淡赤褐色	石英散、長石散、砂粒を含む。	底面：ヘライガキ ヘライガキ	底面ヘライガキ 以下ヘライガキ	外	底面黒付着	
15	76	Ko・杯F1	10.4	-	暗黄褐色	黒色	長石散、石英散、砂粒を含む。	底面：ヘライガキ ヘライガキ	底面ヘライガキ 以下ヘライガキ	外	底面黒付着	
16	76	H・杯	12.6	2.3	明褐色	明褐色	長石散、炭粒散、石英散、砂粒を含む。	底面：ヘライガキ ヘライガキ	底面ヘライガキ 以下ヘライガキ	外	底面黒付着	

No	図番号	形名・形状	量		色		調	土	成	形		特		備
			口径φ	底径φ	高さφ	外径φ				内	面	上	内	
17	76	H・手づく ね上座(杯)	7.2	1.8	-	4.3	淡黄褐色	石英粒、砂粒を含む。	底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ 胴下半部→底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	底部に凹が見ら る。	
18	76	Ko・杯FH	(17.7)	-	-	4.3	淡黄褐色	長石粒、石英粒、黄砂粒、砂粒を含む。	底部：ヘラケズリ→ ナブ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			
19	76	Ko・杯F1	(15.2)	-	-	5.2	暗茶褐色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。	底部：重いヘラナブ	口縁部ヘラナブ、以下ナブ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		
20	76	Ko・杯A	(12.2)	-	-	(4.5)	明褐色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。		ヘラミガキ	ヘラミガキ			
21	76	Ko・杯F1	(13.0)	-	-	(4.5)	茶褐色	長石粒、石英粒、黄砂粒、砂粒を含む。	底部：ヘラケズリ→ ヘラミガキ	ヘラミガキ 胴下半部以下ヘラケズリ→ヘラミ ガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		
22	76	S・壺A	10.6	-	-	4.0	淡青灰色	長石粒、砂粒を含む。		口縁部ナブ 胴上半部→底部ヘラケズリ	口縁部ナブ	口縁部ナブ		
23	76	S・壺D	13.2	-	-	3.2	淡青灰色	長石粒、砂粒を含む。		口縁部ナブ 胴上半部→底部ヘラケズリ	口縁部ナブ	口縁部ナブ		
24	76	S・壺D	12.6	-	-	2.8	淡青灰色	長石粒、砂粒を含む。		口縁部ナブ 胴上半部→底部ヘラケズリ	口縁部ナブ	口縁部ナブ		
25	76	Ko・高杯	15.2	10.7	-	15.2	淡黄褐色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。		ヘラミガキ	ヘラミガキ	杯部ヘラミガキ 胴部ヘラケズリ、ナブ		
26	76	H・壺台	10.7	-	-	-	淡黄褐色	砂粒をわずかに含む。		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		
27	76	Ko・高杯	19.8	-	-	-	黄褐色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。		口縁部ヘラミガキ 以下ヘラミガキ 胴部ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		
28	76	S・高杯	17.0	11.4	-	12.0	灰色	長石粒、砂粒を含む。		口縁部ナブ 杯下半部→底部ヘラケズリ 胴部下半部ナブ	口縁部ナブ	口縁部ナブ	杯部外面に1本の 花痕 胴部外面に3本の 花痕	
29	76	S・環	-	7.6	11.6	-	灰色	長石粒、砂粒を多く含む。	底部：凹部ヘラケズリ り後付高台	胴部ナブ	胴部ナブ	胴部ナブ		
30	77	Ko・杯C	13.0	6.0	-	4.5	明褐色	石英粒、長石粒、砂粒を含む。	底部：凹部ナブ	胴部ナブ	胴部ナブ	胴部ナブ	胴部ナブ	
31	77	Ka・碗	13.8	6.8	-	4.3	灰白色	長石粒をわずかに含む。 釉色：白色	底部：凹部ナブ → 凹部ヘラケズリ→付 高台	胴部ナブ	胴部ナブ	胴部ナブ	胴部ナブ	

No	図番号	型番・型形	法			量		色		調	胎	土	成	形	量 形 上 の 特 徴		備 考	
			口部 ^{mm}	底径 ^{mm}	身径 ^{mm}	体積 ^{mm³}	外	内	外						内			
32	77	Ka・滑	-	(9.2)	-	-	灰白色	灰白色	灰白色	灰石粒を含む。 褐色；黄褐色。		底部：凹陥ヘラケズ 体部下半凹陥ヘラケズリ	口部コナナ コナナ	コナナ				
33	77	H・増	10.8	4.3	12.7	12.5	赤褐色	暗褐色	暗褐色	細長石粒、細石英粒、細砂粒を含む。		底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		表面強く光沢をもつ	
34	77	Ko・型両窓	12.4	7.0	16.0	11.0	淡赤褐色	黒色	黒色	灰石粒、砂粒を含む。		底部：ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			
35	77	H・型両窓	13.7	7.8	16.3	11.6	茶褐色	茶褐色	茶褐色	細長石粒、細石英粒、細砂粒を含む。		底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	口縁部ヘラケナナ 以下ヘラミガキ	ヘラミガキ		
36	77	H・小形覆A	-	7.0	11.2	-	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	石英粒を多く含む。砂粒を含む。		底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	口縁部ヘラケナナ 以下ヘラミガキ	以下ヘラミガキ		
37	77	H・小形覆A	(14.8)	6.8	(13.8)	12.0	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	砂粒を含む。		底部：ナデ	ナデ	口縁部ヘラケナナ 以下ヘラミガキ	口縁部ヘラケナナ 以下ヘラミガキ	口縁部ヘラケナナ 以下ヘラミガキ		
38	77	H・小形覆A	(11.0)	6.1	(12.0)	12.5	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。		底部：ヘラケズリ	ヘラケズリ	口縁部コナナ 以下ヘラケズリ	口縁部コナナ 以下ヘラケズリ	口縁部コナナ 以下ヘラケズリ		
39	77	H・覆孔徑：1.2	(14.4)	3.9	-	6.0	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	長石粒、石英粒、砂粒を多く含む。		底部：ナデ	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		
40	77	H・台付覆	(15.2)	-	-	-	茶褐色	茶褐色	茶褐色	灰石粒、砂粒を含む。		底部：コナナ	コナナ	口縁部コナナ	口縁部コナナ	口縁部コナナ	S字状口縁 裏面式 裏面保存者	
41	77	H・覆	16.1	-	-	-	淡黄色	淡黄色	淡黄色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。		底部：コナナ	コナナ	口縁部コナナ 以下ヘケメ	口縁部コナナ 以下ヘケメ	口縁部コナナ 以下ヘケメ		
42	77	H・台付覆	-	-	(27.6)	-	赤黄褐色	赤黄褐色	赤黄褐色	長石粒、石英粒、雲母粒、砂粒を含む。		底部：ナデ	ナデ	ヘラケズリ 以下ヘケメ	ヘラケズリ 以下ヘケメ	ヘラケズリ 以下ヘケメ		
43	77	H・覆A	(8.1)	8.4	26.2 (27.4)	26.2 (27.4)	褐色	褐色	褐色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。		底部：ナデ	ナデ	口縁部ヘラケナナ 以下ナデ(工具不明)	口縁部ヘラケナナ 以下ナデ(工具不明)	口縁部ヘラケナナ 以下ナデ(工具不明)		
44	77	H・覆	(14.6)	7.8	24.1	25.1	褐色	褐色	褐色	長石粒、砂粒を含む。		底部：ナデ	ナデ	口縁部ヘラケナナ 以下ヘケメ	口縁部ヘラケナナ 以下ヘケメ	口縁部ヘラケナナ 以下ヘケメ		
45	77	H・覆A	12.2	-	20.3	21.5	赤褐色	赤褐色	赤褐色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。		底部：ヘラナデ	ヘラナデ	口縁部ヘラミガキ 以下ヘケメ	口縁部ヘラミガキ 以下ヘケメ	口縁部ヘラミガキ 以下ヘケメ		
46	77	H・覆	(13.4)	-	(18.0)	-	暗褐色	暗褐色	暗褐色	長石粒、雲母粒、石英粒、砂粒を多く含む。		底部：ヘケメ	ヘケメ	口縁部ヘケメ 以下ヘケメ	口縁部ヘケメ 以下ヘケメ	口縁部ヘケメ 以下ヘケメ		外面一部に煤付着
47	77	H・覆	(11.6)	-	(14.4)	-	白灰色	白灰色	白灰色	長石粒、石英粒、雲母粒、砂粒を含む。		底部：ヘケメ	ヘケメ	口縁部ヘケメ 以下ヘケメ	口縁部ヘケメ 以下ヘケメ	口縁部ヘケメ 以下ヘケメ		

No.	図番号	器種・形状	径		重量	色		胎土	成形	形状		備考
			口径	底径		外面	内面			外面	内面	
48	77	H・壺F	15.2	3.9	14.8	24.1	褐色	褐色	石灰、長石、砂粒を含む。	底面：木蓋底 器ハ上付の脚に殘る	口縁部ハナナデ(低位)、以下ハナナデ(高位)、斜位一部ハナナデ(低位)、斜位一部ハナナデ(低位)	
49	77	H・壺E	15.4	7.1	17.6	22.2	淡黄褐色	淡黄褐色	細石、長石、細長石、砂粒を含む。	底面：木蓋底	口縁部ハナナデ、器ハ上付半蓋ハナナデ、器ハ上付半蓋ハナナデ	
50	77	H・壺E	-	-	-	-	明褐色	明褐色	石灰と多く含む、長石散り砂粒を含む。	器ハ上付頂部脚に殘る	口縁部ハナナデ、器部ハナナデ 以下斜位ハナナデ	
51	78	H・有縁杯	15.6	-	-	5.4	赤褐色	赤褐色	石灰、長石、砂粒を含む。	底面：ヘラケズリ ヘラミガキ	口縁部ハナナデヘラミガキ 以下ヘラミガキ	
52	78	H・壺D	-	-	(19.4)	-	淡黄灰色 一部外面底面に黒斑	淡黄灰色	石灰、石炭、砂粒を含む。		ヘケムヘケムヘラミガキ	
53	78	H・壺E	(17.4)	7.6	(22.1)	-	褐色	褐色	石灰、石炭、砂粒と多く含む。	底面：ナデ	口縁部ヨコナデ(工具不明) 以下ヘラケズリヘラミガキ	
54	78	H・壺C	19.1	7.8	9.9	31.5	赤褐色	赤褐色	石灰、石炭、砂粒と多く含む。	底面：ナデ	口縁部ハナナデ 器部底状工具によるケズリ 以下ヘラケズリヘラミガキ	
55	78	H・壺D	18.2	9.5	17.6	-	赤褐色	赤褐色	石灰、石炭、砂粒を含む。	底面：木蓋底2枚	ヘラケズリヘラミガキ	
56	78	S・大壺	(6.2)	-	(30.0)	(28.2)	青灰色	青灰色	石灰、砂粒を含む。	底面：ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、ガキ 器部多キメヘケム	
57	78	Ka・手付瓶	8.8	-	14.2	-	灰褐色	灰褐色	石灰と多く含む。 褐色：灰褐色		口縁部ヨコナデ 器部ヨコナデ	把手に付着で文様 化腐文。

表8 借馬達弥栄地区外出土土一覽

器物番号	図番号	長さ(cm)	胴径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
58	78	3.1	3.0	0.6	24.5	完形
59	78	2.9	2.95	0.65	23.0	完形
60	78	2.7	3.1	0.65	(19.5)	$\frac{1}{4}$ 欠損
61	78	(3.6)	3.65	0.7	(28.0)	$\frac{1}{4}$ 欠損

()内は現状の値

表9 借馬遺跡出土鉄製品一覧

遺物番号	出土地点・層位	鉄器名	遺存状態	現存計測数値 (cm) (g)			備考	
				長さ	幅	厚さ		
50 18	63号住居址	鉄鍔	茎先端部欠損	5.2	2.9	0.2	9.3	
101 61	66号住居址床面	刀子	先端部及び、茎端部欠損	9.0	2.5	0.5	22.5	
280 52	70号住居址	爪鍔?	踵部欠損 $\frac{1}{2}$	6.1	1.35	0.2	5.6	木質部残る
281 52	70号住居址	刀子	先端部及び、茎部端部欠損	4.3	0.7	0.2	7.1	木質部残る
160 26	71号住居址	不明	完形	6.7	0.5	0.2	7.4	刺突器状の形状

表10 借馬遺跡出土石製品一覧

遺物番号	出土地点・層位	種別名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	備考
49 18	63号住居址	紡錘車	4.3	4.2	2.3	47.8	完形	滑石	
68 33	64号住居址	砥石	18.2	7.1	6.6	1,300	完形	安山岩	
159 26	71号住居址床面	砥石	11.9	9.65	5.5	623	完形	花崗斑岩	
203 41	75号住居址 No.7	砥石	16.8	4.3	3.1	227	完形	粗粒砂岩	中央部で欠損
208 38	75号住居址	棒刃礫石器	11.3	2.7	1.9	82.85	完形	硬質頁岩	混入遺物か?
278 57	83号住居址 No.7内	砥石	5.8	2.4	1.9	37	$\frac{1}{2}$ 欠損	細粒砂岩	
279 57	83号住居址床面 No.7	砥石	22.1	10.0	1.9	494	略完形	細粒砂岩	
280 57	83号住居址床面 No.6	砥石	17.5	12.6	5.3	1,530	完形	粗粒砂岩	

表11 借馬遺跡出土編み物用石錘一覧

番号	図版番号	住居址番号	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備 考
1	37-1	62号住居址	119	68	35	641	
2			121	91	43	776	
3			138	84	52	734	
4			174	75	39	650	
5			158	59	47	815	
6			137	59	63	875	
7			127	76	35	532	
8			140	64	60	1,030	
9			135	66	55	730	
10			142	65	45	746	
11			136	69	53	774	
12			105	82	40	536	
13			139	77	50	1,030	
14			163	67	49	742	
15			148	81	53	678	
16	37-2	71号住居址	120	80	54	754	小さい孔多し
17			130	74	55	847	
18			141	73	45	658	
19			140	68	60	825	
20			125	77	47	762	
21			123	82	43	652	
22			123	67	62	1,070	
23			147	77	62	909	
24			169	71	54	944	
25			139	72	24	460	
26			117	83	65	840	
27			138	73	52	720	
28			146	66	50	815	
29			98	62	66	885	
30			134	67	46	778	
31			121	71	66	974	物けた跡炭化物付着
32	37-3	78号住居址	128	84	45	680	
33			127	79	58	744	
34			109	61	46	548	
35			151	77	36	642	
36			163	67	45	624	
37			141	80	55	722	
38			120	60	31	388	
39			155	79	46	820	
40			152	73	42	810	
41			120	78	43	880	
42			153	74	50	851	

第2節 追分遺跡

1 位置と環境 (図1-III 2・5・6・8, 写真42)

(1) 位置

追分遺跡は、大町市大字平字借馬7384番地外7筆の地籍に所在する。本遺跡は、借馬遺跡C地点の西約300mと隣接しており、借馬遺跡に含まれ、借馬遺跡C地点と同様に遺跡の西縁部に立地しているとみられるので、第1節「借馬遺跡C地点の位置」の項を参照されたい。なお標高は763mである。

追分遺跡付近を旧糸魚川街道が通過しているが、ここで木崎湖西岸ルートとの2つに分かれる。著名な北佐久郡軽井沢町、南安曇郡穂高町の場合と同様、ここでも道路の分岐点に関わる地名として「追分」が使用されているのは注目すべきであろう。

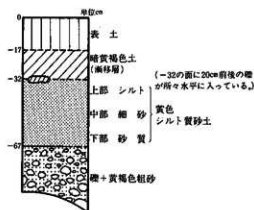


図1 追分遺跡土層柱状図

(2) 環境 (図1)

自然環境については、借馬遺跡に隣接しており同様であるので、第1節1を参照されたい。ここでは柱状図のみを提示するにとどめる。

0～-67cmまでは小石の殆どない篩分けの良好な堆積物であり、洪水時に本流となったことはないと考えられる。-32cm付近に所々に存在する偏平な礫は、自然堆積としては不自然であり、人為的なものであると推定される。P1～P14もこの面に埋り込まれている。(森 義直)

2 遺構 (図2, 写真43・43・44)

調査区中央北側にP1～14が、黄色シルト質砂層上に検出された。P1・2・7・8・14は、平面形がほぼ円形で、規模が径20～30cmで深さが10cm前後と浅いビットである。P12は前者と同じ大きさであるが深さが40cmと深く柱状である。P3・11・13は、平面形がほぼ円形で、規模が径50～80cm、深さ10～30cmの中型なビットである。P5は、平面形が120×110cmの方形で深さ10cmのやや大形のビットである。P5はP4と重複しP4に切られている。P5の50cm北には20×20cmの円形の偏平な石が見られる。P10は平面形が110×100cmのほぼ楕円形のビットで深さは10cmである。P4・6・9は、礫を多く含むビット(集石ビット)である。P4は150×140の不整形な平面形のビットで、深さ15cmの皿状のビットで、拳大～人頭大の礫が26ヶ集積されている。P6は60×60cmの円形、深さ10cmのビットである。上面には、人頭大の礫3ヶ、拳大の礫2ヶが見られる。P9は100×100cmのほぼ円形、深さ5cmの大形の浅いビット内には、16ヶの礫が集積されている。P1～14すべて埋土は黒色土が主体となっている。遺物はどれからも検出されなかった。

3 追分遺跡表面採集の遺物 (図3)

1～5の土器は借馬、丸山好一氏が調査前に追分遺跡で表面採集し、所蔵している遺物である。

1は第VI期頃の杯蓋、2は第VII期の須恵器杯B、3、4は第VIII期、折戸53号窯式に比定されると考えられる灰釉陶器の甕である。5は口縁部がやや外反する中世(15C前後頃)の内耳鍋である。1～5の遺物から考え追分遺跡は、借馬遺跡に含まれるか、連続する一遺跡と考えられる。

(島田 哲男)

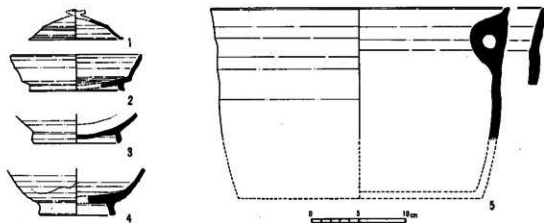


図3 追分遺跡表面採取土器(1:4)

4 まとめ

今回の調査では、出土遺物は何もなく、14ヶのピットが検出されたのみである。14ヶのピット中、3ヶには礫の集積が見られ、集石を伴うピットであった。他のピットは何も見られなかったが、P12は柱穴状である。これらの用途は不明であるが、周辺で表採された遺物等より考えて、借馬遺跡と同じく、土層の良好な地区を選び生活していたと考えられる。今回の調査区は遺跡の中でも端の部分に当るものと考えられ、工事区外(調査区外)南側、借馬遺跡、トドメキ遺跡寄りに遺跡の中心があったと考えられる。

(鎌崎 健一郎)

表1 追分遺跡表面採取出土器一覧

層番号	器種・器形	法量 (cm)			色	調	胎土	成形・整形上の特徴		備考
		口径	底径	高さ				外	内	
3-1	S・蓋O	(10.4)	—	—	灰白色	長石粒・砂粒を含む	ロクロナデ	ロクロナデ		
3-2	S・杯B	(14.4)	(10.4)	3.8	青灰色	長石粒・砂粒を含む	底部回転ヘラケズリ後付高台・ロクロナデ	ロクロナデ	自然釉色：灰白色	
3-3	Ka・甕	—	(9.0)	—	灰白色	長石粒・砂粒をおわずかに含む	底部回転ヘラケズリ後付高台・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	釉色：灰緑色	
3-4	Ka・甕	—	(8.3)	—	灰白色	長石粒をわずかに含む	底部回転糸切り後回転ヘラケズリ後付高台・ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	釉色：灰緑色	
3-5	H・内耳鍋	(32.8)	—	—	茶褐色	石英粒・長石粒・砂粒を多く含む	ロクロナデ・一部ナデ	ロクロナデ・一部ナデ		

法量 ()内は復元実測、H—土師器・S—須恵器・Ka—灰釉陶器

第3節 南原遺跡

1 位置と環境 (図1~III2・5・6・8, 写真45)

南原遺跡の位置は、大町市大字杜字宮本小字南原にある。大町市の東方に連なる中山山地は、新生代になると海底火山の活動と地盤隆起によって、現在見るような複雑な山容を形成した。この西縁に南北に走り連なる大峰山は、西側一帯に崖錐地形を発達させ、それらは高瀬川などの強い侵蝕を受け、現在では細長く連続する段丘地形となっている。南原遺跡はこうした段丘端にあり、海拔640~645mに立地している。南原遺跡の東方約1kmには、7世紀より12世紀にわたり、35戸の竪穴住居址と多数の建物址やピットなどと、多くの遺物が出土した前田遺跡や、北方約800mには、日本最古の神明造りとして、国宝に指定されている仁科神明宮があり、南原遺跡はこうした環境の所にある。仁科神明宮の仁科という地名は、埴色をした段丘地形から名付けられた古名であること、仁科神明宮を中心としたこの段丘一帯が、平安時代後期より、伊勢神宮(内宮)領となっていることなど、歴史上から見ても重要な地域であるといえる。

2 遺構と遺物

(1) 遺 構 (図1, 写真45・46)

本遺跡の遺構としては、柱穴址と見られるピットが総数20箇所検出された。これはP₁よりP₈までの1群、P₉からP₁₃までの1群、P₁₄とP₁₅の1群、P₁₆からP₁₈までの1群、P₁₉とP₂₀の1群で計5群のピット群によっていることが判明した。それぞれ各ピットの計数値は表示した通りである。ピットは特別大型のものは確認されなかった。又、ピット内部の土層はI層が黒色土で、次のII層はI層よりやや赤みのある黒色土で、III層は黄褐色を含む黒色土である。そこで5群に分れたピット群であるが、これらは特定の建物址として考えるにはやや困難である。中でもP₁からP₈までのピット群が集合体を取り、何らかの建物址とも考えられないことはないが、これはとても完全とはいえない。強いて考えれば、耕作地の近くに設けられた小屋という見方も考えられる。これらの決定は後考を待ちたいと思う。

(2) 遺 物 (写真47)

本遺跡から出土した遺物としては、黒曜石片4、土師器の小破片5、須恵器の甕破片1、灰釉陶器小破片2、常滑壺口縁部破片2、染付陶破片1である。

3 まとめ

前述の如く、本遺跡は段丘端に立地した遺跡であり、柱穴址と考えられるものが、5群で20箇所を数えるのみで、遺物としても、古代から江戸時代に至る遺物が出土したものの、何れも小破片で量的にも少ない。これらを考えると、本遺跡は生活本拠の場と考えるより、日常生活の農作業に附随した柱穴群として見た方がよいのではないかと思われる。

第四章 調查遺跡

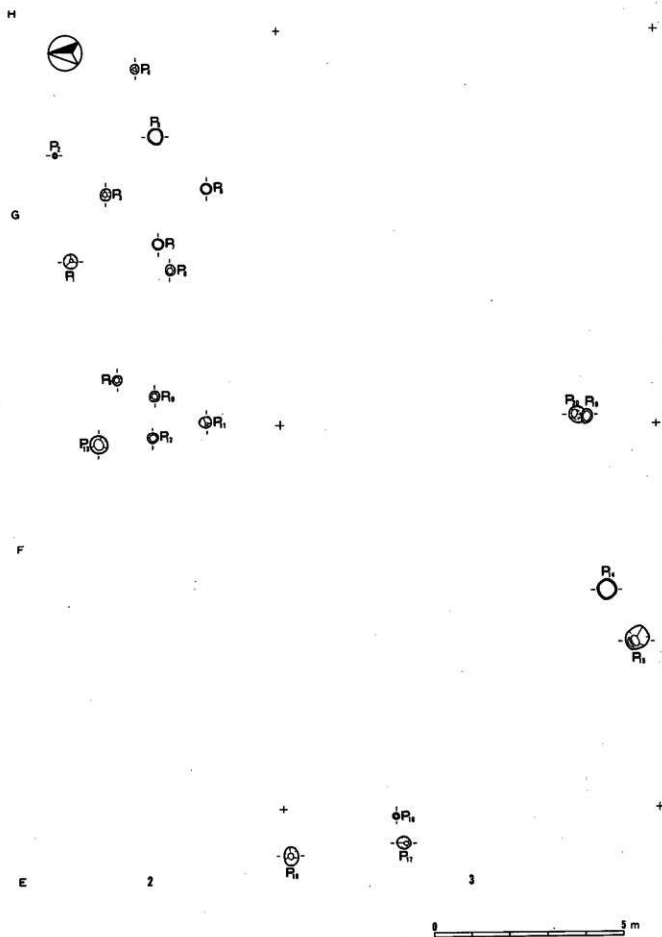
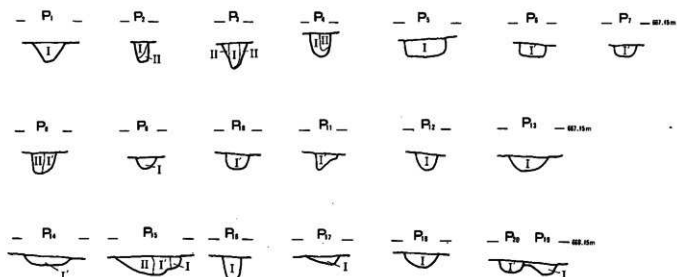


圖1 南原遺跡發掘區全景 (1:100 Pit断面 1:40)



I層 砂質黒色土
 I'層 砂質黒褐色土
 II層 砂質黄褐色土含む砂質黒色土

ピット形 縦横 大きさ (長軸×短軸)	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
深さ	20	21	27	23	18	13	12	21	11	15	18	17	14

単位(cm) : 横定

P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀
49×44	62×52	20×19	38×35	50×39	30×25	(40)×39
8	19	23	8	13	11	12

第4節 前田遺跡

1 位置と遺跡付近の自然環境 (I~III, 図2・5・6・8)

本遺跡は、大町市社・前田地区にあり、北安曇郡のいわゆる安曇平の東端で、高瀬川によって作られた左岸の館の内段丘面に、東山の崖壁が沢によって押し出されてできた小扇状地の緩い斜面上にある。本段丘付近の地形は、安曇平が南北方向に高瀬川に沿って開け、西は飛騨山地の3,000m級の後立山連峰にさえぎられている。東側はフォッサマグナ西縁の第三紀層よりなる1,000m前後の中山山脈と接している。

(1) 高瀬川と段丘

北安曇平を作った高瀬川は、源を槍ヶ岳の北側に発して東筑摩郡の明科付近で合流するまで、全長は70km以上流域面積は400km²を越し、旧第三発電所付近で河川の勾配は急に変わり、それより上流は急勾配である。したがって安曇平を出ると急に緩やかになるので、土砂の運搬力が劣ろえ、広い扇状地を作っている。その他多くの支流を合しているが、いずれも急流である。そのため水量の変化は屈指で、大洪水と冬期の渇水とをくり返し、膨大な土砂を運び出し安曇平を形成している。礫の岩質は上流の地質により決まり、火成岩では花崗岩が一番多く石英斑岩、流紋岩、安山岩、珩岩などとなっており、堆積岩は火成岩の1/3程度でチャート、硬砂岩、粘板岩などと熱変成岩のホルンフェルスなどである。しかし、流入する支流の流域の地質により場所毎に多少変化しているのは当然である。

この高瀬川水系によって形成された段丘は、東部山地の山麓に二段あり、上から海拔800m前後の所に一部残っている大町公園面と、その下の750m前後の所によく残っている館の内面とである。大町公園面は乗越沢から大町公園、松崎を通り南へ伸びているが現在では所々しか残っていない。ロームの状態から洪積世末頃の形成と推定されている。

館の内面は、大町公園面より50m~60m下位にあり南へ行くにしたがって段丘面は広がり、社地区の集落の多くはこの段丘面上にあり、前田遺跡もこの段丘面上にある。現在の高瀬川の河床との比高は、大町市の東側で約20m、南へ行くに従って低くなり前田付近では10数mとなっている。この段丘面が形成された時期はロームが乗っていないことから、沖積世(約1万年以降)になってできたものとみられる。この段丘面の東側は、フォッサマグナ西縁の新生代第三紀層よりなる中山山脈が南北に連なっている。この段丘面上に崖壁として、また小扇状地として押し出している。中山山脈の地質は、この山脈の中央を南北に走る中山断層により東と西では異なり、本遺跡に関係する西側は、大峯層と呼び、礫岩を主体とし東側に約30度傾斜した単斜構造をなし、その間に火成活動による石英安山岩と凝灰岩をはさみ、石英安山岩地帯は浸食が遅く鷹狩山などの残丘となっている。この中山山脈には所々に旧河床である平坦面が残っており、その上に西山から運ばれてきた花こう岩を主体とする旧河床礫(山砂利とも云う)の巨礫が乗り、更にその上にロームがかぶっている。この旧河床礫の分布は、鷹狩山、南鷹狩山付近に多く大峯山付近には少ない。

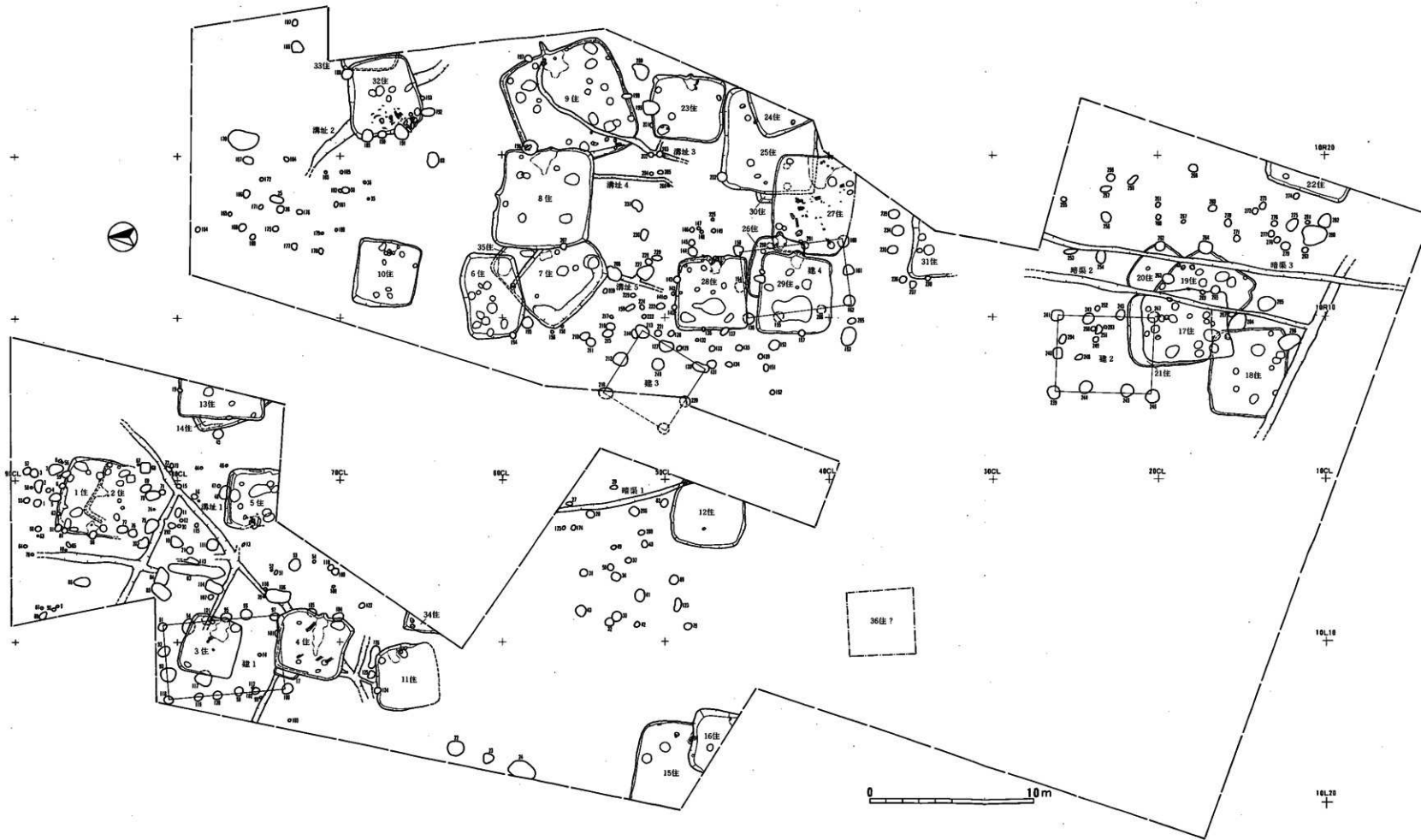


図1 前田通勝宛摺居全景 (1:200)

(2) 前田遺跡について

発掘地点は館の内段丘面上に、林道山寺線に沿って中山山脈から西流する沢により形式された小扇状地状の台地にあり、海拔は659m前後で南西方向に緩く傾斜している。現在この小扇状地を形成した沢は、本遺跡のある扇状地及び段丘面を切って西流し、高瀬川の河床面に微小な扇状地を形成しつつある。遺跡での堆積物は、前述した中山山脈の主体をなす大峯累層と、中にはさまれている石英安山岩の礫とそれ等の風化物、及び大峯累層上に乗っているロームなどにより混成された有機物の多い堆積物となっている。堆積物の供給源が近く、沢の水量が年間を通じて不安定なため、洪水時の堆積物は特に層分けが悪く、その他の時期の堆積物は、ある程度層分けられている。このため堆積物は数mも離れば大きく変化している所もあり一定せず、地下1.5mまでの深さに湧水性地下水が2面～3面存在している。

生活面は現地表面ができるまで何面もあるが差性質扇状地の常として、場所がわずかに異なっただけで土層が異なり一定していない。一般的な土層柱状図は次のようになる。

(森 義直)

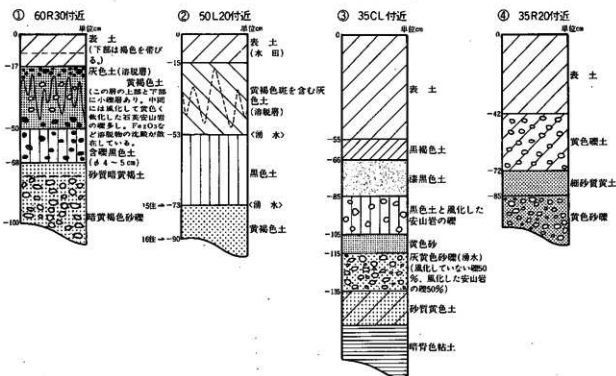


図2 前田遺跡の土層柱状図

2 遺構と遺物

1) 竪穴住居址

前田遺跡の発掘区内からは、竪穴住居36軒を始め建物址4その他約300に及ぶピットなどが検出された。各竪穴住居址検出土層と保有された遺物等から判断し、各住居址の営まれた時期を大別した結果、第三章第2節遺構の時期区分で試みた通り、借馬遺跡の時期区分と重複することが判明し、この地方の時期区分を考えるうえで、よい資料の蓄積となり、第I期から第VII期の大別の一例をまとめることができた。以下、前田遺跡に該当する第VIII期から第XII期を時期別にその概要を述べる。

(1) 第VIII期

① 1号・2号住居址(図3・4・5, 写真50・71)

遺構 1号及び2号住居址は、本遺跡において検出された竪穴住居址で、両住居址は切り合い状態であることと、南側の部分が上層擾乱の為不明であることなどにより、1号住居址は第VIII期と考えられる竪穴住居址ではあるが、ここで一括して述べることにしたい。

1号住居址は北辺が4.5m、西辺の残存部分3.7m、東辺の残存部分3.9mで、これからすれば全体は、方形又は長方形であったと考えられる。竪穴内部は北辺の深さ10cmを測るも、東西両辺は南行するに従って浅くなり、6cmから次第に不明となる。内部の土層は1層からVII層まで認められたが、強粘土地層の為土層確認は困難をきたした。

カマドは西壁中央部を切って設けられた痕跡がある。幅60cmで先端を細く三角形に長さ40cmの切り込みをつくり、煙道部分としている。カマドの石組などは抜き取られて見えないが、前面に焼土が1.5m×1.5m程の広さに堆積していた。

2号住居址は、1号住居址の床面とはほぼ同レベルに焼土の残存のみられ、その後の検出から周溝等も確認されたので竪穴住居址の痕跡として認める状況のもので北辺が3.6m、西辺の残存部分はわずか1mであり、東辺は消失した状態である。住居址のプランは隅丸方形と考えられ、その後の重複したピットなども多数あることから規模や主柱穴などにおいても不明な点が多い。なお周溝は壁の残存する部分には確認されていることから全周していたものではないかと考えられる。

遺物 1号住居址の床面より多くの土器が出土した。土師器の甕(7)は口径15.5cm、器高23cm、器厚0.8cmを測る大きさである。全体の形状は、口縁の少し開いた長胴で丸底である。器の整形は、表面の口縁部は横に、それ以下は底部までハケメ痕が縦方向に残っており、内面は口縁部をハケメが横走し、以下は全面にナデが行われている。色調は表面が暗褐色を呈し、内面は明褐色である。胎土は砂粒を含んでいるものの焼成は良好である。

須恵器の杯(3)は口径13.5cm、器高4.8cm、底径6.5cmで器厚は口縁部が0.2cm、底部では0.4cmを測る。丸底気味の下底部はタタキメがわずかに見られ、一段くびれて直線状に口縁が立上がる形をとっている。胴から口縁部にかけて三段に巻き上げ成形がなされ、内面共にナデによる仕上げが行われている。胎土に砂が混入されており、色調は白色を呈して焼成不良である。次に須恵器の高盤(5)は脚部が欠失して出土したが、口径20.5cm、底径12cm、器厚は底部で1cm、口縁部で0.5cmである。全体の高さは不明であるが、やや小形の脚部が付けられていたものであろう。器は巻き上げ成形の後クロコ仕上げが行われている。両

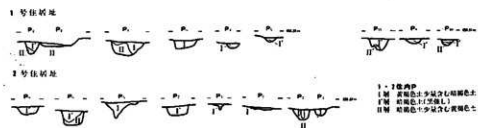
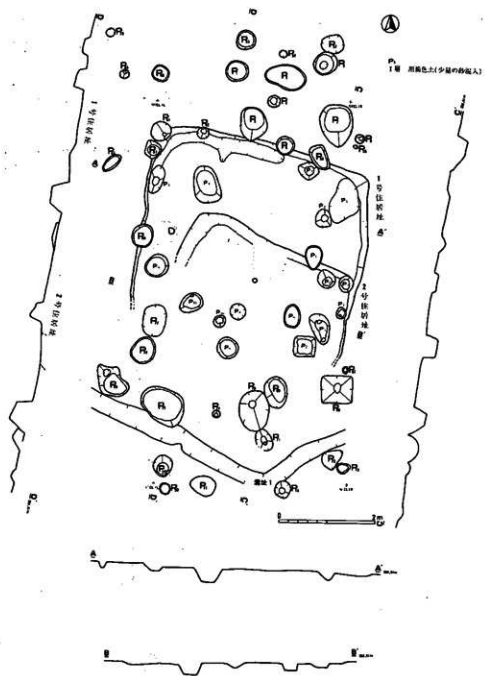


图3 1·2号住居址 (1:80)

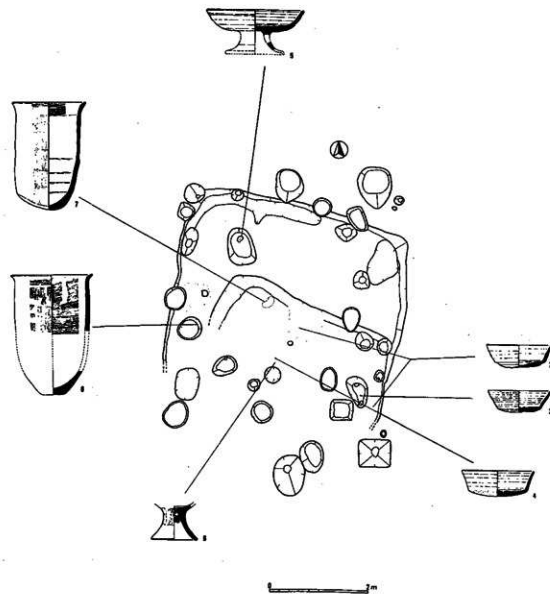
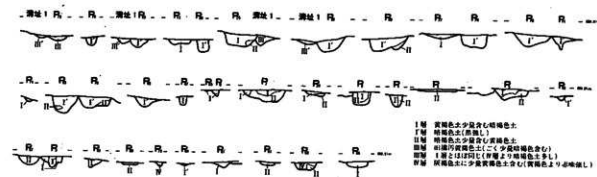


图4 1·2号住居址遗物出土状况 (1:80 遗物1:8)

面にナデ仕上げ痕が残り、前者同様に形は整っているものの色調は灰色をして焼成不良である。以上の他須恵器の杯2個、杯蓋1個の破片が出土し、2号住居址から土師器の高杯の脚部(6)が出土した。

(原田 曠)

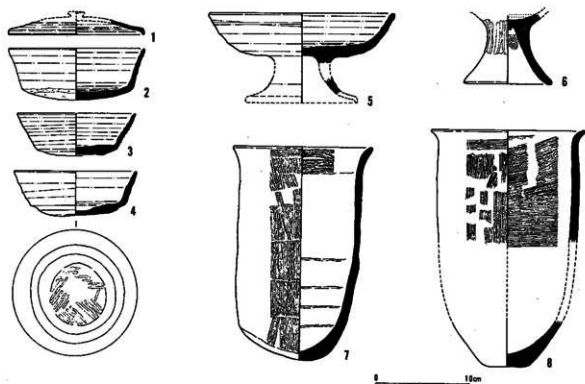


図5 1・2号住居址出土遺物(1:4)

② 35号住居址(図6・7・8、写真53・67・79)

遺構 本址は調査区中央やや北寄りに位置し、北側は6号住居址に、西側及び南側は7号住居址、東側は8号住居址に切られる形で重複し、北及び西壁の一部とコーナーが残る形で検出された。住居址は砂礫層を掘り込んでいる。埋土はI層で、砂礫をわずかに含む黒褐色土が堆積していた。

壁は北及び西壁の一部が残っているのみであるが、ほぼ垂直で壁高は西壁15cm、北壁30cmを測る。床面はやや堅く、ほぼ平坦であるが、わずかに南西に傾斜している。床面からは、北壁より約1m、南西に95×50cm、深さ10cmのゆるやかな丸底の楕円形のピットが見られる。カマドは重複し7住か、9住に削り取られた部分にあったと思われ、見られなかった。

遺物 須恵器杯3点(236~237)、須恵器高盤脚部(246)、須恵器短頸甕(242)、土師器椀(239)、土師器高杯脚部(241)、土師器瓿略丸形品(245)、口縁部~胴上半部(復元実測できたもの)2点(243、244)であった。

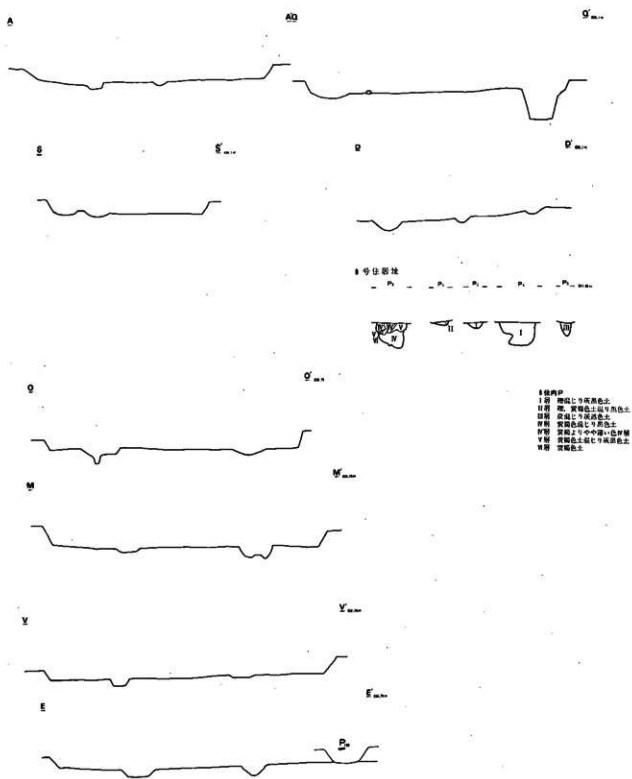


图6 6·7·8·9·35号住居址 (1:80)

遺物の出土状態は重複しているにしては、床面残存部には良好に残っていた。241の高杯はコーナーから80cm南の床面で立った状態で、242の短頸甕はコーナー直下に口縁部を上にして、245の甕は口縁部が北にあり、横たわって潰れた状態で、239、の碗は245の東横から出土した。241、242は床面、245、239は床面より3～5cm浮いた位置に見られた。

本址は重複関係、遺物等から7C後半～8C前半（第七～八期前半）と考えられる。

（島田哲男）

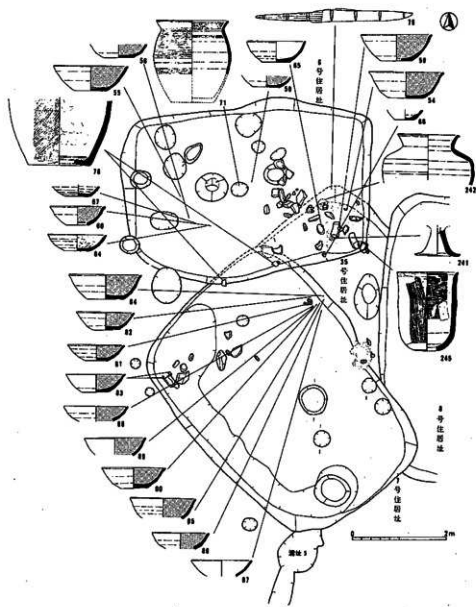


図7 6・7・35号住居址遺物出土状況（1：80 遺物 1：8 79 1：4）

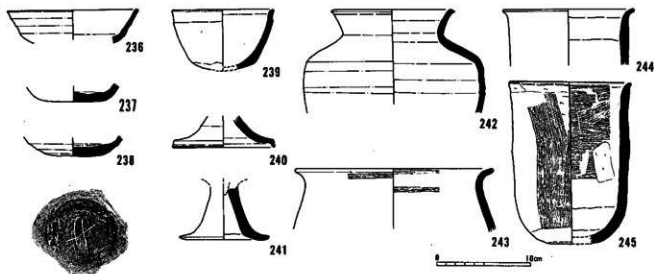


図8 35号住居址出土遺物(1:4)

(2) 第Ⅶ期

① 9号住居址(図6・9・10, 写真53・54・74・81)

遺構 9号住居址は発掘区の中央部で東端にて検出された竪穴住居址で、竪穴の西北隅を8号住居址が切っている為、南北7.3m、東西7.2mの隅丸方形に近いプランであったと考えられるものである。竪穴内部はⅤ層まで分けられるが、Ⅴ層は本址の東壁中央付近の床面を西南に向かい掘られた溝である。Ⅰ層は地表より床面まで竪穴の大部分に充満した黒褐色土で、炭が混入しており、Ⅱ層も南と東の壁に付着した層で、炭が混入していた。壁は強い角度で上がり一部分はえぐられたようになっている所と、丸みを持っている所などがある。壁に沿い床面に周溝が掘られている。

先づ北壁から東壁にかけてのものは、幅20cm強にて、深さは中央で10cmを測り九底となっており、長さ6mである。次に南壁から東壁中央近くまでのものは、幅20cm、深さ10cmで長さ7mを測る。更に西壁に沿う所にも幅10～30cmの溝が認められたが8号址にて切られていた。床面に主柱穴と見られるものを含めて、23個のピットが検出された。カマドは東壁中央部につくられた痕跡があり、外部に幅40cm、長さ約80cmで先端の細い切り込みが見られた。これは煙道部であったと考える。尚床面に1m×1mの広さの焼土・灰・炭などが検出された。カマドの石組は抜き去ったのか、わずかに3個程遺存しただけである。

遺物 土師器の甕(113)は、口径21cm、底径7cm、器高は破片より推定して32cm、胴径20cm、器厚0.7cmの大きさである。器の成形後口縁部から胴部にかけての内面は、ハケ状工具にてヨコナデが行われ、表面は縦にナデを行なっている。又底部の表面は縦にヘラケズリとし、内面は粗雑なナデを施している。胎土は長石や雲母をわずかに含み、茶褐色で焼成は良好である。土師器の杯(105)は口径12.6cm、器高4.8cm、器厚0.9cmの大きさで、丸底から大きく口縁部まで開く形をとる。胎土に長石や砂粒を多く含み、色調は黄褐色で焼成は悪い。

須恵器の甕(108)がⅠ層より出土した。口縁部から胴部の上までの破片である。口径19.5cm、器厚1cm

程で、胴部で大きく球形となるらしい。巻き上げ成形の後、胴部の表面はタタキ締め痕があり、口縁部から内面にかけてはロクロナデが行われている。色調は黄灰色で焼成は悪い方である。須恵器の杯蓋(107)はつまみの取れたもので、径17cm、器高4cm、器厚は天井部で1cm、下の方では0.5cmである。成形後は表面の上部5cm幅に回転ヘラケズリとし、下部はロクロナデを施している。胎土は長石や砂粒を含み、色調は赤褐色で焼成は悪い。黒色土器(106)は内黒の高杯で、脚台部の欠失したものである。口径13cm、杯部の長さ4.5cm、器厚0.4cmである。胎土に石英粒を多く含み、色調は内面に炭素質を吸着させて漆黒色を呈し、表面は赤褐色で焼成は良い。尚全面にヘラミガキがなされている。以上の他、本址から土師器の甕の底部や須恵器の壺の底部など多数の破片が出土した。

台石(114)は石皿とも考えられる凹みを持ち、表面に磨滅痕のあるもので、長径28.5cm、短径21cm、厚み最大で8cm、中央で7cmを測り、ゆがんだ円盤状をなしている。石質は花崗岩である。この用途については、藁などを叩く台石とした場合は中央の凹みが問題で、むしろ中央は凸形に丸く高くなっていなければならない、そのことから見れば石皿とした方がよいかも知れない。

鉄器(114)は刀子と見られるものであるが、長さ6cm、幅0.7~1cm、厚さ0.4cmを測る。腐れが多く遺存状態は悪い。

(原田 曠)

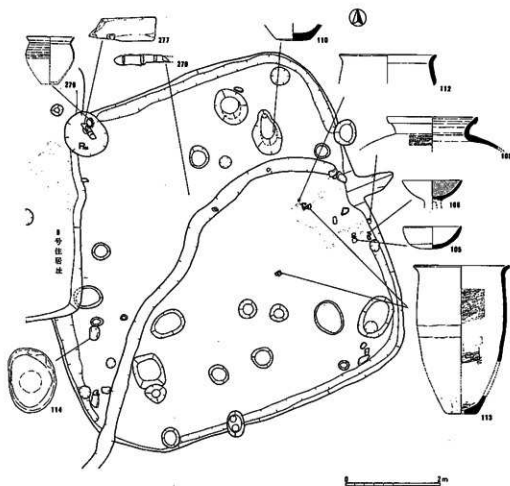


図9 9号住居址・P196遺物出土状況(1:80 遺物 1:8 270・277 1:4 114 1:16)

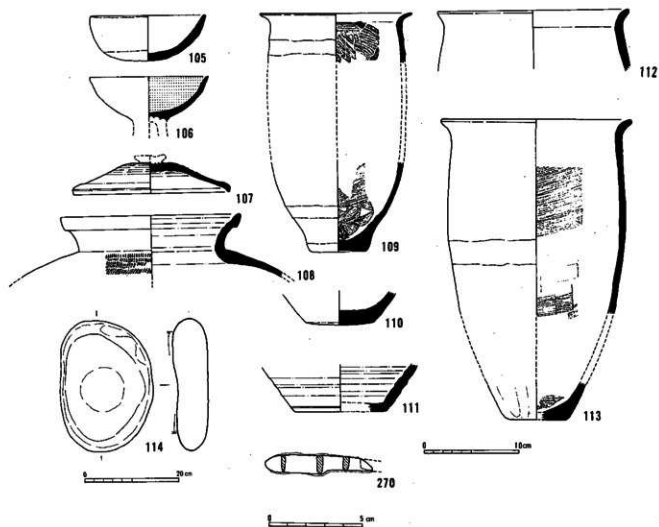


図10 9号住居址出土遺物(1:4 114 1:8 270 1:2)

② 10号住居址(図11・12、写真55・75)

遺構 10号住居址は発掘区中央よりやや北側に寄って検出された竪穴住居址で、東・西・南・北の四辺共に4mを測り、隅丸方形に近い形でやや歪んだ形状をしている。

竪穴内部の土層はI層からIV層まで分けられるが、この中でII層の下に細分してIIとII'の2層があり、更に下のIII層ではIII層が細分層に細分されることが確認された。この堆積状況より見れば、自然ではなく人為的に埋められた可能性が大きいと考えられる。

4辺の壁はよく残存するものの、西壁の北側半分と北壁の西側半分に若干の崩落が見られる。

床面に柱穴址が検出された。P₁~P₁₁まであり、この中で、P₁・P₂・P₇・P₉の4個が主柱穴ではないかと見られる。この他カマドについては見当らなかった。

遺物 須恵器の壺(119)が発見され、破片の為全体の大きさは推定であるが、口径17cm、器高3.5cm、器厚

0.5cmである。全体にゆるく内湾し未端にかえりを作っている。器は成形の後ロクロの回転により、上部はへラケズリとし、表面下部から内面にかけてナデが行われている。色調は灰色で焼成は良い。次の須恵器の杯(116)は破片で、大きさは推定すれば口径13cm、器高3cm程と考える。底部からゆるい角度で口縁部まで上る形とし、上部は0.3cmと薄くなる。器の両面にロクロナデが施されている。色調は黄灰色で焼成は良い方ではない。須恵器の杯(117)も破片である。口径14.6cm、底径10.4cm、器高3.6cm程の大ききで、器厚は下部で0.4cm、口縁先端で0.2cmとなる。底部は平底でここに厚さ0.5cm、高さ0.7cmの高台を付けてある。口縁部の表面はロクロ回転でナデが行われている。色調は灰色で焼成は良好である。

(原田 曠)

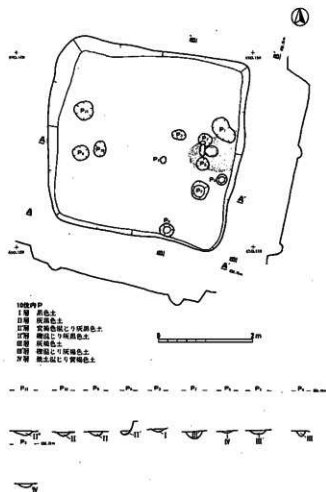


図11 10号住居址 (1:80)

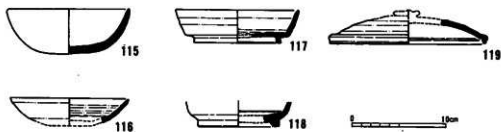


図12 10号住居址出土遺物 (1:4)

③ 15・16号住居址 (図13・14・15、写真57・76)

遺構 15号及び16号住居址は、発掘区中央の西端にて検出された竪穴住居址で、15号址の南に16号址が設けられた為に、切り合い状態となり、更に両址の西から南にかけて調査の地区外となっているので、全体の遺構については不明であることから第Ⅱ期で述べるべきである16号住居址についても、ここでとりあ

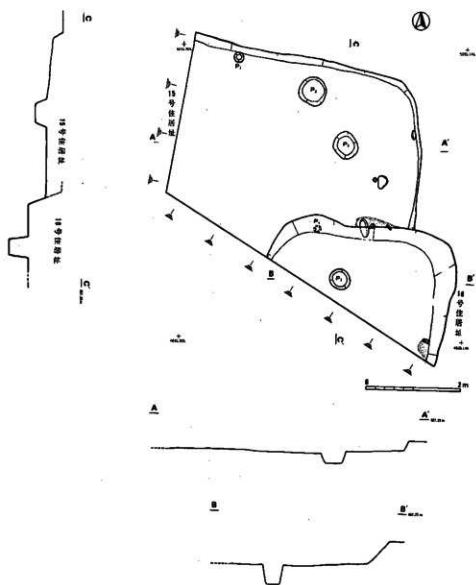


図13 15・16号住居址 (1:80)

けることとした。

15号住居址は北辺が4.7m、東辺が2.8m遺存するのみで全体のプランは不明である。竪穴内部は地表より30cmの深さに褐色土が充満し、北壁は45°の角度を保ち、東壁がやや崩れた状態である。床面に2個のピットが検出された。何れも平面は円形で、直径60cm、深さ30cmで底部は平坦である。

16号住居址は15号住居址の南側を切ってつくられたもので、遺構としては前記のように地区外の中に大部分が入っており、不完全の調査となった。遺存部分は北辺3.2m、東辺2.2m、西辺はわずかに60cmを測

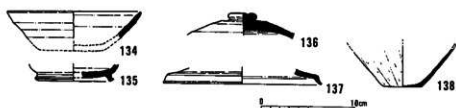


図14 15号住居址出土遺物(1:4)

るのみとなっている。竪穴内部は60cmの深さに褐色土が充満しており、人為的に埋められた可能性が大きい。壁は40°の角度で掘られており、床面に径40cm、深さ40cmのビットが1個検出された。

遺物 15号址から土師器の甕の底部(138)が出土した。平底で底部の径4cmで、底から40°に開いて胴部に移行している。器の表面は斜状にケズリが行われ、内面は縦にナデが行われている。胎土は長石と石英粒が混入され、色調は赤褐色で焼成良好である。

須恵器の杯蓋(136)は上部の破片である。器のつまみはボタン状の形のが付けられ、ロクロナデが行われており、続く表面の2.5cm幅では回転ヘラケズリで、次はロクロナデとなり、内面は全体にロクロナデがなされている。色調は灰白色で焼成は良くない。以上の他、本址から須恵器の杯蓋の破片や杯類の破片が出土した。

16号址から須恵器の杯蓋(140)が出土した。口径10cm、高さ3cm、器厚0.5cmを測り、宝珠形つまみがつけられている。器は成形の後全面にロクロナデが行われている。胎土は砂粒を多く含み、色調は青灰色にて焼成は良い。この他本址から杯と杯蓋の破片が出土した。

(原田 暁)

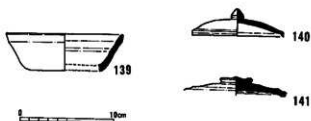


図15 16号住居址出土遺物(1:4)

④ 36号?住居址

(図16, 写真79)

遺構 調査地区の西北隅にある住居址であるらしい。らしいというのは調査のはじめ、土の色から住居址とみてチェックしておいたところ、その後地下水の湧出のため水没してしまい、調査不可能となってしまったのである。それでも水底の泥

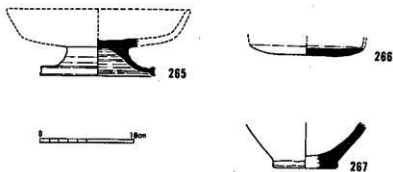


図16 36号住居址?出土遺物(1:4)

の中から僅かながら遺物を拾得している。また、炭も多く見られた。

遺物 遺物は須恵器片4、土師器片4である。須恵器は高盤底部と杯底部、杯蓋、甕である。

高盤(265)は底径12.5cm、脚部の高さ4cmで、焼成はよく青灰色を帯びる。盤の形状はわからない。

杯(266)は暗褐色のものでロクロ成形し焼成もよい。底径12cmほどのものらしい。底部もロクロ調整をしており、高台はない。

杯蓋は表面に黒色の自然釉がかかり焼成が良い。

甕は生焼けの腹部で灰白色を帯び、平行タクキメがある。土師器は厚手の大型の甕(267)らしく、表面には炭化物が多く附着する。

(篠崎 健一郎)

(3) 第IX期

① 8号住居址 (図6・17、写真53・54・74・81)

遺構 8号住居址は発掘区の中央部よりやや東寄りに検出され、東に9号西に7号の各壁穴住居址と切り合いで検出された壁穴住居址である。東西6.1m、南北6mの隅丸長方形プランと考えられ、磁北に対して長軸を東に95°振っている。壁穴内部の土層はI層よりV層まで確認されたが、最下部のV層はわずかに堆積し、その上に礫の多い黒褐色土のIV層が東南方向より流入し、東壁中央近くのカマド前面から壁穴中央部まで埋没して、その上に炭のIII層と焼土のII層が形成され、更に最上部の黒褐色をした混雑層となっていた。これを見ると、本来の壁穴住居による生活面が最初にあつて、その後東南方向よりの土砂の埋没があつた後、その中央付近で更に火を燃やした行為があつたことである。床面にビッドが8個検出され、この中でP₁からP₅までが主柱穴ではないかと見られ、ほぼ4箇所に対応する位置と考えられた。カマドは東壁中央にあつたと考えられ、この部分の壁が外方に約10cm出ているのが見られる。カマドの前面と見られる位置に焼土塊が堆積しており、東西1.2m、南北1.4m、厚さ約10cmが確認された。

遺物 土師器の甕(99)は口縁部から胴部にかけての破片である。口径14.4cm、器厚0.8cmを測り、短い口縁部が外反し、球形の胴部に移行する形である。器の調整は、内面は口唇部がナデを行ない、以下は横方向にケズリを施し、表面は横方向にミガキを行っている。胎土に砂粒が混入され、色調は茶褐色で焼成は良い。

須恵器の甕(100)は肩から胴部にかけての破片で、肩の部分の径13cm、器厚は0.5cmを測る。巻き上げ成形で両面ナデが行われている。胎土は長石粒を含み、色調は赤褐色で焼成良好である。

須恵器の杯(96)は口径9cm、底径5.5cm、器高4.5cmを測り高台付の器形をしている。ロクロによる巻き上げ整形を行ない、仕上げを美しくしている。色調は褐色を呈し焼成良好である。

須恵器の短頸甕(101)は、下半部が欠失したもので、口径26.5cm、器厚0.7cmを測る。肩の部分が張り、短かい頸部が外反する器形である。器は巻き上げ成形後、表面の頸部と胴部にタクキメを入れ、その上をロクロナデを行っている。色調は赤褐色で焼成は不良である。

須恵器の杯(263)は口径13.5cm、器高3.6cm、器厚0.4cmを測る。巻き上げ成形の後、底部は糸切りを行ない、内面全部と表面の口縁部はロクロナデを行っている。胎土に長石を含み、色調は青灰色で焼成は良い。

須恵器の甕(102)は下部の破片である。器厚は胴部1cm、底部で0.8cmを測る。巻き上げ成形後に表面はロクロナデを行っている。胎土に長石粒などが含まれ、色調は灰色地に黄黒色の自然釉がかかり、焼成良好である。

鉄製品で(104)が出土した。鎌の先端が膏口の先の部分と見られるもので、腐食も相当に進んでいる。現在の寸法は、長さ4.5cm、幅の最大で2cm、厚さ0.5cmである。次の(105)は鉄釘ではないかと見られるもので、0.4cmの角柱状で長さ3.5cmを測り、両端を欠いている。

他に類品が5点出土した。

(原田 曠)

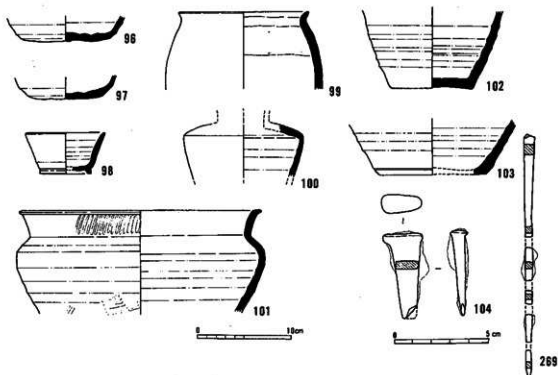


図17 8号住居址出土遺物(1:4 444 1:2)

② 14号住居址(図18, 写真56)

遺構 調査区の北西側の東隅に検出された。本址は13号住居址に大半を切られ、一部は発掘区外に入っている。褐色土層を掘り込み、平面形は、東側を13号住居址に切られているのではっきりしないが方形を呈すると思われる。住居址の南北は4.9mを測る。

住居址埋土は1層で、砂質の礫混入黒褐色土である。東側の上層は客土された土層の黄褐色土層が見られた。

壁はほぼ垂直に掘られ、残存している北壁6~13cm、東壁6~12cmを測る。床面は西から東へやや傾斜しており、やや軟弱である。床面には柱穴は検出されなかった。西壁北側から北壁にかけて、幅7~10cm、深さ2~3cmの周溝が見られた。本址床面西側中央、13号住居址に切られる部分の直上には36×25cmの楕円形の台石が1個見られた。カマド等は検出されなかった。

遺物 遺物は少なく、破片のみで、平行叩き目文が施された黒灰色の焼成の良好な須恵器製の破片、須恵器製の口縁部の小片、土師器の小片の3片のみであった。これはおそらく平安時代のもと考えられる。

本址は、13号住居址に切られていることから考えて、Ⅹ期以前、Ⅸ期頃に推定される住居址と考えられる。

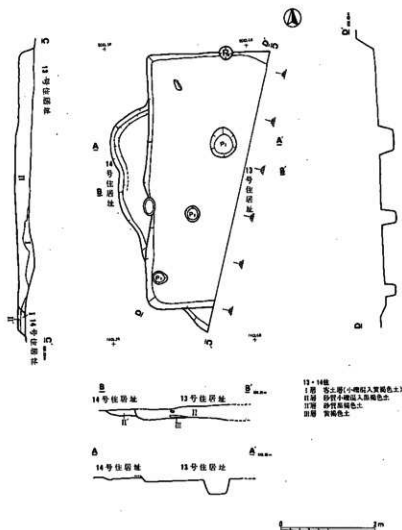


図18 13・14号住居址 (1 : 80)

③ 20号住居址 (図19, 写真58・59)

遺構 調査区南側中央に、17・19・21号住居址に切られて検出された住居址である。西壁を暗渠2、東壁、北壁を暗渠3に切られている。本址は褐色砂礫層を掘り込み、平面形は、西側、南側を切られているのははっきりしないが、隅丸方形を呈すると思われる。住居址東西は3.4mを測る。

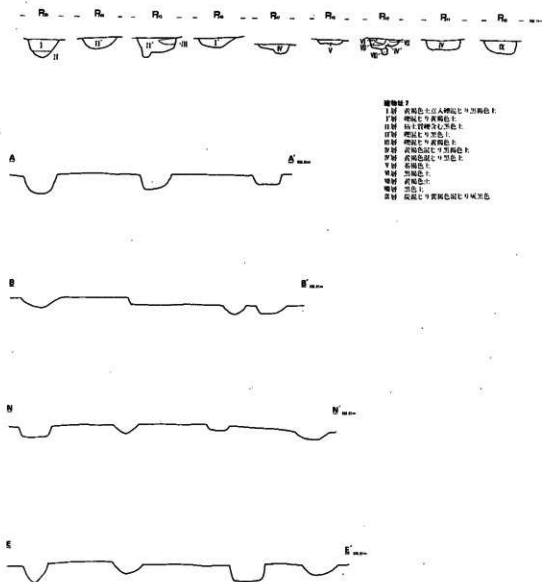
住居址埋土は、I層のみで砂礫混りの黒褐色である。

壁は西、南壁は、19・21住に切られており不明であるが北壁6cm、東壁6cmを測る。床面は平坦であるがやや軟弱である。床面には北側中央にピットが1個検出された。規模は25×25cm、深さ20cmでおそらく主柱穴と考えられる。カマドは検出されなかった。周溝等の施設も検出されなかった。

遺物 遺物は少なく、須恵器甕の小片2点、須恵器杯の小片2点、土師器杯の小片2点で、おそらく平安時代のもと考えられる。

本址は、17・19・21住に切られていることから考えて、Ⅱ期以前、Ⅹ期かⅨ期に比定される住居址と推定される。

(篠崎 健一郎)



④ 30号住居址 (図20, 写真60・64)

遺構 調査区東側中央に位置し、東側を25号住居址に南側を27号住居址に切られ、北西コーナーのみが残存する住居址である。本址は黄褐色砂層を掘り込み、壁高は30cmを測る。カマド等の施設は25・27号住居址に切られた部分にあつたらしく検出されなかった。床面は平坦であるがやや軟弱である。出土遺物は何も見られない。Ⅰ期の25号住居址、Ⅱ期の27号住居址に切られていることから、本址はⅠ期以前と考えられる。

(藤崎 健一郎)

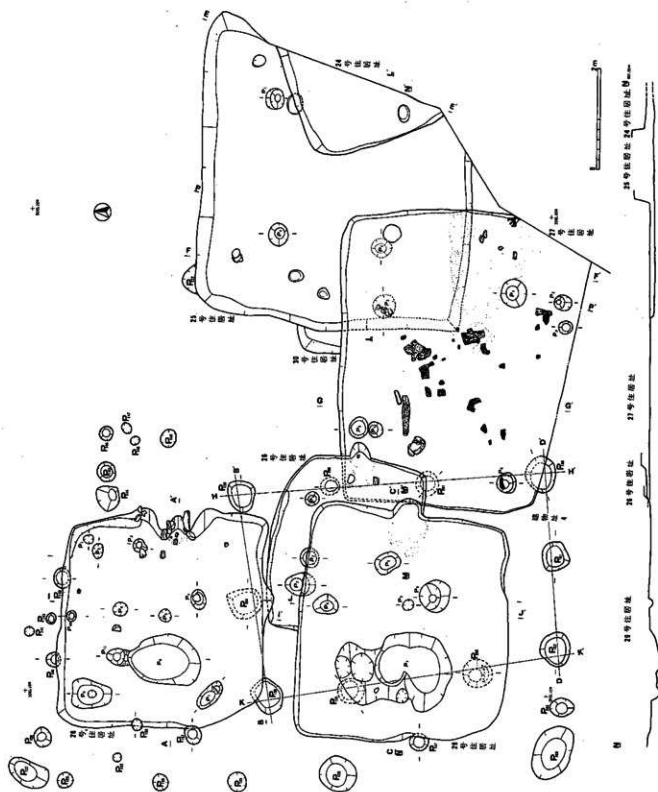
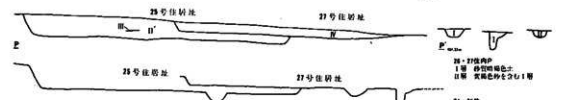
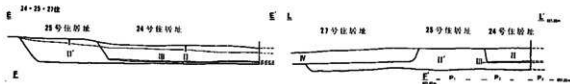
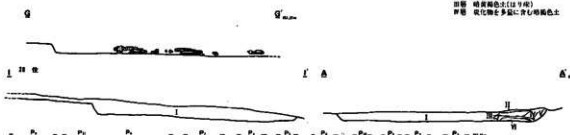


图20 24·25·26·27·28·29·30号住居址·建物址4 (1:80)



25・27位内砂
 1層 赤褐色砂土
 2層 灰褐色砂土之砂1層

24・25位
 1層 赤褐色土(F₁₀₀の砂混)
 2層 少量赤褐色粘質土
 3層 灰褐色土(少量赤褐色)
 4層 灰褐色土(少量赤褐色)
 5層 灰褐色土(少量赤褐色)
 6層 灰褐色土(少量赤褐色)
 7層 灰褐色土(少量赤褐色)
 8層 灰褐色土(少量赤褐色)
 9層 灰褐色土(少量赤褐色)
 10層 灰褐色土(少量赤褐色)



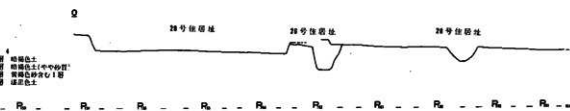
24位
 1層 赤褐色土
 2層 赤褐色土(少量赤褐色)
 3層 赤褐色土(少量赤褐色)
 4層 赤褐色土(少量赤褐色)
 5層 赤褐色土(少量赤褐色)
 6層 赤褐色土(少量赤褐色)
 7層 赤褐色土(少量赤褐色)
 8層 赤褐色土(少量赤褐色)
 9層 赤褐色土(少量赤褐色)
 10層 赤褐色土(少量赤褐色)



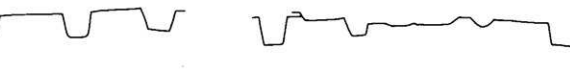
24位
 1層 赤褐色土
 2層 赤褐色土(少量赤褐色)
 3層 赤褐色土(少量赤褐色)
 4層 赤褐色土(少量赤褐色)
 5層 赤褐色土(少量赤褐色)
 6層 赤褐色土(少量赤褐色)
 7層 赤褐色土(少量赤褐色)
 8層 赤褐色土(少量赤褐色)
 9層 赤褐色土(少量赤褐色)
 10層 赤褐色土(少量赤褐色)



24位
 1層 赤褐色土
 2層 赤褐色土(少量赤褐色)
 3層 赤褐色土(少量赤褐色)
 4層 赤褐色土(少量赤褐色)
 5層 赤褐色土(少量赤褐色)
 6層 赤褐色土(少量赤褐色)
 7層 赤褐色土(少量赤褐色)
 8層 赤褐色土(少量赤褐色)
 9層 赤褐色土(少量赤褐色)
 10層 赤褐色土(少量赤褐色)



24位
 1層 赤褐色土
 2層 赤褐色土(少量赤褐色)
 3層 赤褐色土(少量赤褐色)
 4層 赤褐色土(少量赤褐色)
 5層 赤褐色土(少量赤褐色)
 6層 赤褐色土(少量赤褐色)
 7層 赤褐色土(少量赤褐色)
 8層 赤褐色土(少量赤褐色)
 9層 赤褐色土(少量赤褐色)
 10層 赤褐色土(少量赤褐色)



(4) 第 X 期

① 12号住居址 (図21・22)

遺構 調査地区のほぼ中央部に、他のグループから少し離れて一軒だけであり、南東隅及び東壁を調査不可能地域に切られている竪穴住居址である。南北の長径は4.6m、東西もその位かと思われる。平面形は隅丸方形というより、四壁が外部にふくらんだ形で異例といつてよい。深さは30cmで礫混りの黒色土が入っていた。床面には柱穴もなく長径20cmほどの楕円形の石が置かれているばかりである。カマドの有無は不明。

遺物 出土した遺物は須恵器の小片10個ほどと、20個ほどの土師器片である。須恵器は甕の口縁部一片と底部一片を含むバラバラな個体である。そのうち口縁部は外反する角のある口縁で、径およそ26cmに及ぶ大甕である。胎土には長石粒をかなり多量に含むが、焼成良好で灰色を呈し、外面には自然釉がかかっている。他の破片にも自然釉の出たものが多い。時期は11世紀とみられる。

(篠崎 健一郎)

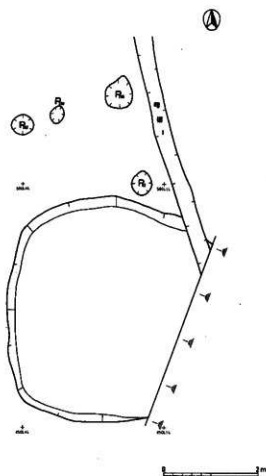


図21 12号住居址 (1 : 80)

② 13号住居址 (図18・23,

写真56・75)

遺構 調査地区の北部にある住居址群の東端に14号住居址をほとんど覆うように、またそのおよそを調査区域外に出している方形の竪穴住居址である。南北は長さ5.2mであるから本遺跡で検出された住居址の中では大型の部類に入る。東西の北側は2.6m、南側は1.2mが残存している。深さは35cmほどで小礫の混った砂質の黒色土が入っていた。柱穴も3箇が残存していた。

遺物 遺物では須恵器の杯および杯蓋が主なところであるが、他に須恵器の甕や杯の底部の小片がある。



図22 12号住居址出土遺物 (1 : 4)

杯(132)は径12.3cm、器高3.7cm、底径7cmの比較的浅く底の大きい形である。器腹の下部は六きく二条にクロコでヘラケズリをおこなっている。底部には糸切痕があり、少し上り底となっている。色調は灰黒色で焼成はよい。

杯蓋(131)径13cmのかぶせ蓋で、前記の杯と対になるものではない。上のつまみは平たく中心に小突起をわずかに残している。色調は灰黒色で焼きは良好である。土師器の小破片はおよそ30片ほどであり、杯や甕の中に内黒の杯の破片もある。

(篠崎 健一郎)

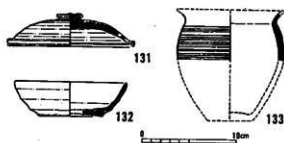


図23 13号住居址出土遺物(1:4)

③ 18号住居址(図19・24, 写真58・76)

遺構 調査地区の最南端に位置し、東北隅を17号住居址に、南西隅を溝状遺構に切られている10世紀後半に属する竪穴住居址である。大きさは北辺4.6m、南辺5.6m、東辺4.6m、西辺4.0mの東南隅の広がった長方形の形になっており、東壁の中心部あたりにカマドを設けてある。床面のピットは10箇所をかぞえるが、柱穴址とみられるのはそのうち7箇所ほどであろうか。特に南東隅のものは広く浅いものであるいは物置などの用途も考えられる。

遺物 遺物は土師器と須恵器で灰釉陶器などは見られない。

土師器はほとんど甕で、杯の小片がわずかある。

甕(153)は口径22.5cm、器高は33cmほどの大型のものである。底はけずってまるく小さく作られており、自ら立つことはできない。穴に据えるか、支えて置いたものであろう。口縁は短かいがかなり強く外反する。外面は上部に於ては横方向に、下部では縦方向にハケメを残し、口縁部はきれいにナデで調整している。内部はかなり自由な方向にハケメをつけており、ナデはおこなっていない。胎土には相当量の砂がみられるが、焼成はよく全体の色調は黄褐色を呈する。また内外面に炭化物の付着がみられる。

甕(151)はわずかの底部を含む一片で、底径はおよそ10cmほどとみられる。底には圧痕らしい線がみられるが、何の痕であるかわからない。外面は縦方向のハケメが残り、内面はナデで調整している。焼成はよく黄褐色を帯びている。

甕(150)の底部である。底径は6.5cmで器壁が厚手なのと対応して、底部もいじりしく厚い。また底部には朴の葉の圧痕がついているが、かなり磨滅している。外面はかなり大きく削ったあとがはっきりと残り、内部には粗っぽい撫でがこれも大きく明瞭に見える。胎土にはかなり多量の砂がまじっているが、焼成はよく赤褐色を呈する。もう一点の底部破片も厚手なもので、内部にはやはり朴の葉の圧痕が鮮明に残されている。朴の葉表面の右上方の部分であるが、底部全体には葉の主脈も痕がついていたものであろう。

このように他の家には無く、この家だけに木の葉の圧痕を持つ甕が2個体あるということの意味をどのようにとらえたらよいであろうか。ひとつには甕の製作者の習慣というか、成型したものを運く癖のような問題があり、さらにそのようにして作ったものの分布範囲のことも考えられよう。また見方を変えると、木葉痕をぜひつけなければならないという信仰的な問題もあるのかも知れない。

須恵器は壺3個体分以上、杯4個体分以上がある。壺(148)は底の一部であるが長頸壺であるかと思われ

る。底径7.2cmで糸切り後に高台をつけており、内外面ともきれいにロクロナデをおこなっているが、内面は紐作りのあとがはっきり残る。胎土は比較的良好に精選されており、焼成も良好で内外面とも青灰色を呈する。

長頸壺(149)であろうが、前者と同じ手法によっている。しかしたいへん厚手で、内部の調整はやや粗雑である。底径は8.7cmである。

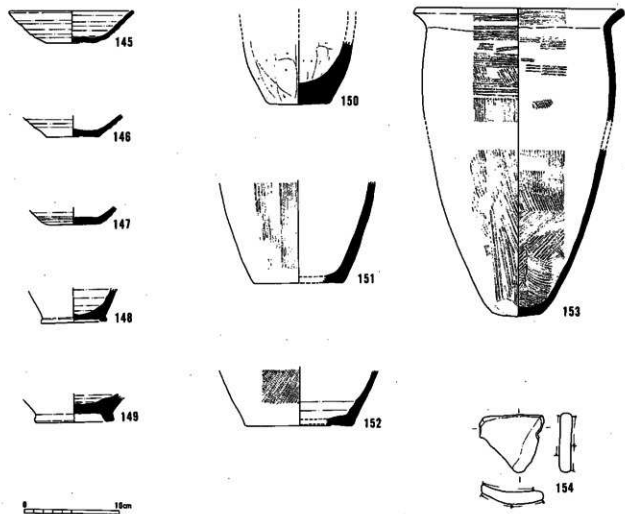


図24 18号住居址出土遺物(1:4)

壺(152)は高台のない平底で、円盤状の底を作り、その上に粘土ひもを巻き上げて後、ロクロによる調整、叩きしめて作ったようである。底径は12cmである。

杯は全形の復元できるものが1個体、あとは破片である。

(145)のものは口径13.6cm底径5.5cm、器高3.4cm、口縁の開いた浅い形である。底は糸切りの平底で、内外面ともロクロ調整をおこなっている。焼成はまず良く、灰白色を呈する。

(146)は薄手のやや粗雑な作りのもので、生焼けて灰白色を呈する。底径5.7cm、糸切り底で外面のみロクロナデを行っている。

杯(147)は底径6cm、糸切り底で内外面ともロクロ調整、灰黒色を呈しており、焼成は良好である。

本住居址の出土遺物としては他に砂岩の砥石(154)がある。破片であるが研磨のあとがみられる。

(篠崎 健一郎)

④ 25号住居址 (図20・25、写真60・61・77・81)

遺構 調査地区の南東部に位置し、その東辺を24号住居址のために切られている住居址で、中心線はわずかに東に偏る。南北5.8m、東西6mの規模で、部分的には少しの出入りはあるがほぼ正方形のプランであったと考えられる。東辺の大部分を24号に切られているが、24号の対角線が、非調査地区との境界になっており、もし調査範囲が広げられれば、24号住居址は、25号住居址の中にすっぽりと入ったかたちになるものと見られる。従っておそらく東辺に作られていたと考えられる本住居址のカマドは見ることができない。深さは現存40cm、内部はよく固められている。柱穴とみられるものは4箇所あるが、南西隅に近いものには6箇の礎が入っているのは、根詰め石かも知れない。本住居址は10世紀代のものと考えられる。

遺物 遺物は土師器及び須恵器と一点の鉄製品がある。

土師器は数個体分の甕と若干の杯の破片である。甕はみじかく口縁が外反した、薄手のていねいな作りものが多い。

甕(185)は口径15cm程の胴のまるいものらしく、腹部にはロクロによるカキメが残り、頸部から上部はロクロによるナデが見られる。表面は褐色、内面は暗褐色を呈する。杯はいずれも小片で全形がつかみにくい。中の内黒のものが3片ある。

須恵器は大甕破片約5個体分程である。どれを見ても作り方はていねいで、焼成もよく焼きの甘いものではなく、青灰色あるいは黒色を呈する。

(188)のものはロクロ成形のあと肌を叩き締めているが、肩から下方に残る縦の平行タキメは、意識的に並び揃えて叩いているようである。頸部及び口縁部はロクロによるナデを行ない、腹部内面にはおさえのあとが見られる。他にも平行タキメが多いが、一片だけ格子目のものがある。

杯もいずれも焼成がよく青灰色あるいは黒色を呈する。杯の底は糸切り痕をそのままにしてあるもの、それを消してあるもの、糸切り底に高台をつけてあるものがある。

(183)の杯は口径13cm、底径6.3cm、器高3.5cm、の大きさと、青灰色を呈し、焼成はやや悪い。表面はロクロナデをしてあるが、底部は糸切り痕を鮮に残す。

杯蓋は6個体分6片がある。うち4片は縁が下方に折れ曲っているものである。また上部のつまみの有無はわからないが、1片だけつまみの剝離したあとを残している。どれもロクロ成形を行なっているが、1点はその上をロクロによるヘラケズリをしている。

ただ一点の鉄器(189)は現状長さ5.5cm、幅平均5mm、厚さ3mmほどのもので、断面は長方形を呈するが、

先端は薄く刀の切先状となっている。この形状からは用途その他明らかでない。

(篠崎 健一郎)

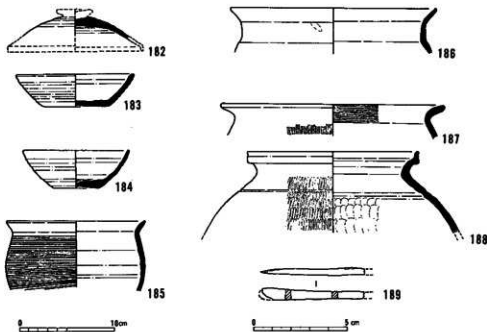


図25 25号住居址出土遺物 (1:4 189 1:2)

⑤ 33号住居址 (図26・27, 写真65・66・81)

遺構 調査地区の東北隅に、32号住居址に切られてわずかにあらわれた竪穴住居址である。隅丸方形のプランらしいが、詳しいことはわからない。

遺物 遺物は土師器甕及び杯の小片、須恵器甕の小片がそれぞれ10片ほど、古瀬戸瓶子の小片が1片、砥石破片1がある。

土師器甕は手づくねのていねいな作行のもので、口縁部は横ナデ、腹部は横あるいは斜方向のナデによって仕上げている。薄手で褐色を呈する。

須恵器は格子目及び平行の甲き文を持つものと、そうでないものがあり、また焼成の甘いものが目立つ。

古瀬戸瓶子は肩の部分であるが、内部のロクロ調整もていねいであり、表面に施された灰釉もよく定着し、斑状の黄緑色が美しい。おそらく後世の混入であろう。

砥石(233)は8cm×9cm×3cmほどの硬砂岩で上下の部分は割れ口になっているが、表裏と左右には使用痕が残されている。殊に左右の木口部分は、たとえば刀子か鎌でも研いだような減りかたであり、一方の面には例えば鎌のような細い刃物の先を研いだような、線状の痕跡がある。

(篠崎 健一郎)

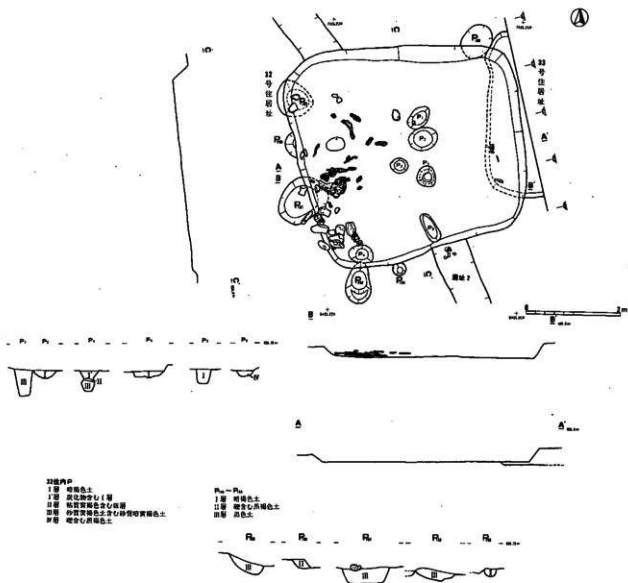


图26 32·33号住居址 (1:80)

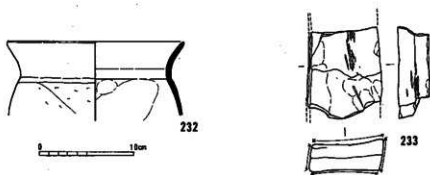


图27 33号住居址出土遺物 (1:8)

⑤ 34号住居址 (図28・29, 写真66)

遺構 調査地区の西端に近く、11号住居址に近接して、北辺約1m、西辺約2mほどをのぞかせている堅穴住居址である。北西よりに中心線を向けているらしく、カマドもあらわれていないが、多分他の住居址と同じく東辺にあるのかと思われる。平面形は、ただひとつあらわれている北西隅でみる限りでは、やや不整な隅丸方形ではないかとみられる。北西隅の壁面に接するようにして、二箇の柱穴がある。

時期は9世紀から10世紀にかけての頃とみられる。

遺物 遺物は少量で須恵器と土師器がある。

須恵器では特長のなものとして高盤(235)の破片がある。盤の底部から脚部にかけての部分であるが、原型の大きさや形はわからない。さらにこの器の持主は、破損した盤の底部を削り磨いて、径7.2cmのまるい台を作り、再利用しているようであるが、果してどのようなことに使用したのかはわからない。

須恵器としては他に大甕の小片3個体と、杯の小片2個体分がある。いずれも厚手で表面に平行タタキメがあり焼成も良好、一片には黒色の自然釉がある。

土師器は甕の小片1個体と内黒の杯1個体がある。

甕(234)は砂の多い粘土で焼成もよいといえないもので、底部は褐色、腹部は灰褐色を呈し、一部には黒色の部分もある。成型は手づくねで、表面には縦方向のハケメがついている。(篠崎健一郎)

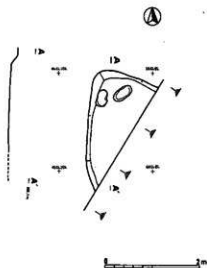


図28 34号住居址 (1:80)

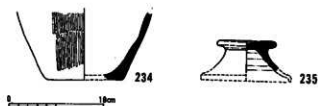


図29 34号住居址出土遺物 (1:4)

(4) 第Ⅱ期

① 4号住居址 (図30・31・32, 写真51・52・72・81)

遺構 調査地区の東北隅にあり、溝状遺構を切って作られた堅穴住居址である。付近には東北方6mをへだてて同じ10世紀の5号住居址、北2mの所には11世紀の3号住居址、南2mの所には12世紀の11号住居址がある。また本住居址は北西隅をわずかに建物址1に切られるかっこうになっている。本住居址

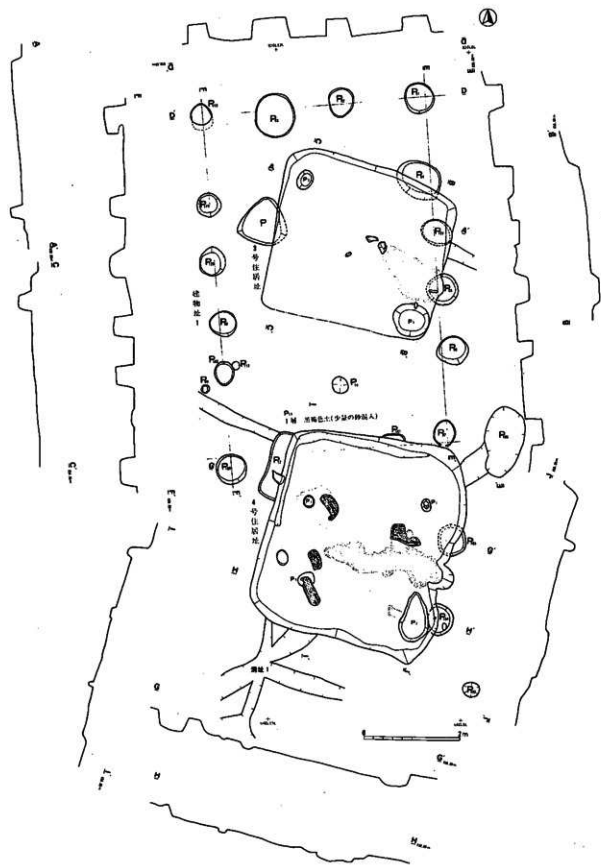


图30 3·4号住居址·建物址1 (1:80)



1 器内P
 1 器 褐色土少量赤心褐色土
 2 器 褐色土少量赤心褐色土
 3 器 赤心褐色土
 4 器 赤心褐色土

4 器内P
 1 器 赤心褐色土
 2 器 赤心褐色土
 3 器 赤心褐色土
 4 器 赤心褐色土

■ 1 器 赤心褐色土
 2 器 赤心褐色土
 3 器 赤心褐色土
 4 器 赤心褐色土
 5 器 赤心褐色土
 6 器 赤心褐色土
 7 器 赤心褐色土
 8 器 赤心褐色土
 9 器 赤心褐色土
 10 器 赤心褐色土
 11 器 赤心褐色土
 12 器 赤心褐色土
 13 器 赤心褐色土
 14 器 赤心褐色土
 15 器 赤心褐色土
 16 器 赤心褐色土
 17 器 赤心褐色土
 18 器 赤心褐色土
 19 器 赤心褐色土
 20 器 赤心褐色土
 21 器 赤心褐色土
 22 器 赤心褐色土
 23 器 赤心褐色土
 24 器 赤心褐色土
 25 器 赤心褐色土
 26 器 赤心褐色土
 27 器 赤心褐色土
 28 器 赤心褐色土
 29 器 赤心褐色土
 30 器 赤心褐色土
 31 器 赤心褐色土
 32 器 赤心褐色土
 33 器 赤心褐色土
 34 器 赤心褐色土
 35 器 赤心褐色土
 36 器 赤心褐色土
 37 器 赤心褐色土
 38 器 赤心褐色土
 39 器 赤心褐色土
 40 器 赤心褐色土
 41 器 赤心褐色土
 42 器 赤心褐色土
 43 器 赤心褐色土
 44 器 赤心褐色土
 45 器 赤心褐色土
 46 器 赤心褐色土
 47 器 赤心褐色土
 48 器 赤心褐色土
 49 器 赤心褐色土
 50 器 赤心褐色土
 51 器 赤心褐色土
 52 器 赤心褐色土
 53 器 赤心褐色土
 54 器 赤心褐色土
 55 器 赤心褐色土
 56 器 赤心褐色土
 57 器 赤心褐色土
 58 器 赤心褐色土
 59 器 赤心褐色土
 60 器 赤心褐色土
 61 器 赤心褐色土
 62 器 赤心褐色土
 63 器 赤心褐色土
 64 器 赤心褐色土
 65 器 赤心褐色土
 66 器 赤心褐色土
 67 器 赤心褐色土
 68 器 赤心褐色土
 69 器 赤心褐色土
 70 器 赤心褐色土
 71 器 赤心褐色土
 72 器 赤心褐色土
 73 器 赤心褐色土
 74 器 赤心褐色土
 75 器 赤心褐色土
 76 器 赤心褐色土
 77 器 赤心褐色土
 78 器 赤心褐色土
 79 器 赤心褐色土
 80 器 赤心褐色土
 81 器 赤心褐色土
 82 器 赤心褐色土
 83 器 赤心褐色土
 84 器 赤心褐色土
 85 器 赤心褐色土
 86 器 赤心褐色土
 87 器 赤心褐色土
 88 器 赤心褐色土
 89 器 赤心褐色土
 90 器 赤心褐色土
 91 器 赤心褐色土
 92 器 赤心褐色土
 93 器 赤心褐色土
 94 器 赤心褐色土
 95 器 赤心褐色土
 96 器 赤心褐色土
 97 器 赤心褐色土
 98 器 赤心褐色土
 99 器 赤心褐色土
 100 器 赤心褐色土

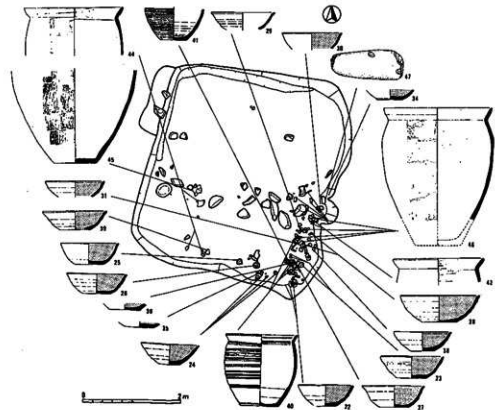
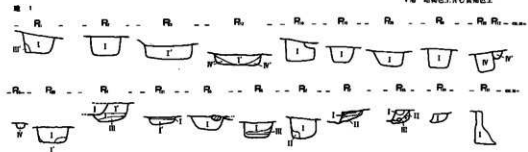


图31 4号住居址遺物出土状況 (1:80 遺物 1:8)

の方向は北より約15°ほど東に振り、規模は南北4.3m、東西3.9mの隅九で、東南隅が少し張り出した形の方
形である。カマドは東辺の中心より南よりに作られている。住居址の床面には全面に炭や灰の堆積があり、
柱あるいは梁材とみられる炭化物が4点もあることから、火災にあった家と見ることができる。なお柱次
と炭化物との関係からみて、柱などは南東方向に焼亡倒伏したものと考えられる。

遺物 遺物の出土量はかなり多量であるのは、あるいは火災にあってこの家の住人たちが、器物を持ち
出すいとまがなかったためとも考えられる。また遺物はカマドを中心とした住居址の東壁の下に集中して
出土している。

遺物は土師器が多く、若干の須恵器とごく少しの灰釉陶器が加わる。

土師器は杯が約20個体分、甕が約7個体分である。杯は内面黒色のものが大部分を占め、そうでない杯
は少量である。また高台をもつものも2点にすぎない。

杯(28)は最も大ぶりなものである。口径17.5cm、底径7.5cm、器高5.5cmで、やや浅めの杯である。胎土に
は相当量の砂が含まれているが焼成はよい。内面はよく研磨してあり黒色である。外面もロクロ調整をお
こない、なめらかになっている。底は糸切り底、外面の色は灰褐色を呈する。

杯(27)は胎土へ砂の混入も多く、やや粗製の感のあるもので、内面黒色、外面は灰褐色を呈するが、口
縁より器腹にかけて黒色を帯びる。ロクロ調整をし底は糸切りになっている。器腹の下部は幅2cmほどの
段状を呈しているが、あるいは削っているのかも知れない。また口縁部は他の杯に比べて外反が強い。

杯(25)は口径12.3cm、底径5.7cm、器高4.5cmのわずかに小ぶりなもので、胴部によくらみを持ち、口縁が
少し外反する形である。ロクロ調整をし、糸切り底、内面黒色である。

杯(22・23・24)はほぼ同形同大の品である。口径12.5cm、底径5.2cm、器高4.8cmほどでロクロ調整、糸切
底である。

甕(45)は底径8.8cm、底が小さく背の高い甕のようである。胎土にはかなり多量の砂を含み、焼成はよく、
外面は明るい褐色、内面は褐色を呈する。外面にはかなり磨滅してはいるが縦方向のハケメが残り、内面
にはナデが見られる。底は磨滅してはつきりしないが、糸切り痕などはないようである。

甕(46)は口径22.8cmの大型のもので、焼成はよいが、胎土にはかなり多量の砂を混入している。外面は
上部が灰褐色、下部は黒色を帯びる。内面は褐色だが黒色の部分もある。外面の頸部から下は縦のハケメ、
内面はナデで調整し、外反する短かい口縁部は、内外面ともヨコナデを行っている。

甕(40)は小型のもので、口径14.9cm、底径7.9cm、器高15.4cm、まるくふくらんだ胴を持つ形のよい甕で
ある。口縁部は短かく外反している。胎土にはかなりの量の砂を含むが、焼成はよい。色調は内面が灰褐
色、外面は黒色を呈する。器面の調整には櫛歯状の工具を用いているらしく、ロクロ調整のあとは粗いロ
クロ目が外面全部から口縁部の内部にまで及ぶ。内面の口縁部から下は普通の布?によるロクロナデにな
っている。底部は糸切りである。

須恵器は10数片の小破片が、全部ちがう個体のものとみられる。

長頸壺2個体はいずれも頸の付根の部分で、胴部と頸部を別にして接着する手法がみられる。あとは
甕および杯である。甕には叩き文のあるものが多く、平行、格子目、斜格子、内面に青海波がみられる。
また1片は平行タタキメの上をさらにロクロナデをしている。

灰釉陶器は壺の胴部一片で、紐作りの上をロクロ整形しており、内面には紐のあとがみられる。焼成は
よく胎土もよく精選されており、灰白色を帯びる。釉はやや黒ずんだ黄緑色で、器の上部だけにハケぬり
をしている様に見られる。

本住居址からは長さ18.5cm、径5cmの直方体状の石(47)が出ている。両端には敲打痕もあり、磨った痕跡もみられることから、道具として使用されたものと考えられる。(篠崎 健一郎)

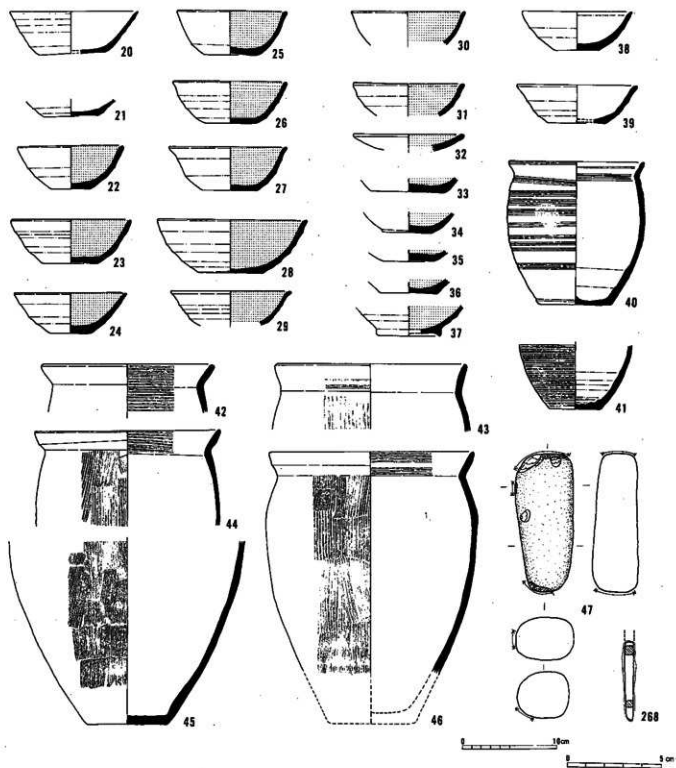


図32 4号住居址出土遺物 (1:4 268 1:2)

② 5号住居址 (図33・34, 写真52・73)

遺構 本住居址は調査地区の北部に、その南辺を非調査地区に入れた形で、まっすぐ南北に向っている10世紀から11世紀にかけての頃の竪穴住居址である。1辺が3.5mほどのやや不整形の隅丸方形のプランであったらしい。ピットは住居址内に大小7つあるが、そのうち4つが柱穴となるであろう。カマドの位置は明らかでないが、西辺あたりにあったのかも知れない。

遺物 遺物は土師器、須恵器その他がある。

土師器はいずれも小片で、器の全形をうかがうことができないが、甕およそ10個体分、杯等は個体数の

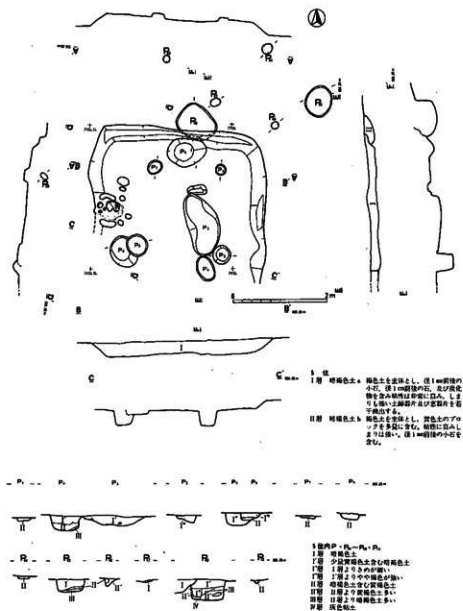


図33 5号住居址 (1:80)

見当もつきかねる。甕にはロクロ成形、回転糸切り底のもと、全くロクロ目をとどめないものがある。

須恵器は四耳壺2個体を含む、甕あるいは壺の多いが目立ち、皿1個体、杯片僅少、杯蓋2個体、それに混入かと思われる灰釉古瀬戸（壺？）片がある。

四耳壺(52)は、底部及び頸部以上を失っているため全形を明らかにしない。肩の部分に断面三角形の凸帯をめぐらし、長さ3cmの不整形の耳を凸帯に吊り下げような形に貼りつけている。外面は平行叩き文を磨り消しており、内面には押えのあとがある。全面暗褐色を呈する。

四耳壺(53)もやはり肩と腹部の一部分だけである。肩の部分に貼りまわした凸帯は断面三角形であるが、耳の形は知ることができない。外面は平行叩き文を磨り消しているかと思われ、内面には押えと、上方にロクロによるナデがみられる。胎土には砂がかなり入っているようだが、焼きはよく一部に不十分なから自然釉が見られる。色調は内面が灰色外面は暗灰色を帯びる。

甕(51)は底径推定13cmのもので、内外面ともロクロ成形をしており、殊に内面の底部に近い部分は、粗っぽいロクロ目が残されている。焼成はよく内面は灰色、外面には黒色の自然釉が一面にムラなくかかっている。

杯蓋はいずれもロクロ成形してあり、ひとつには端のめくれ上った、平たい宝珠形のつまみがつけられている。他はやや粗製の厚手のもので甕の底かも知れない。 (篠崎 健一郎)

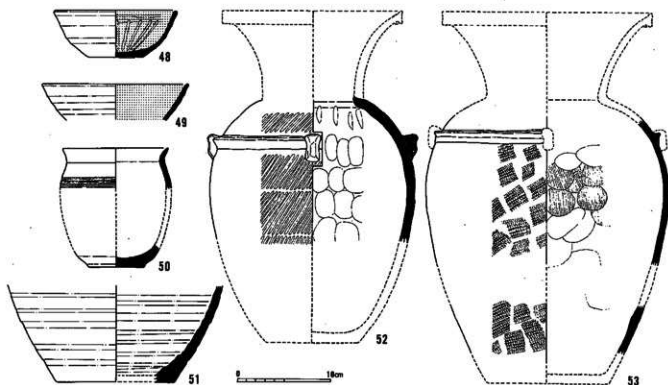


図34 5号住居址出土遺物(1:4)

③ 7号住居址 (図6・7・35、写真53・54・74・81)

遺構 7号住居址は、本遺跡中央のやや北寄りに検出された竪穴住居址で、6号・8号・9号・35号の各住居址と切り合い状態で発見された。本址の北端を6号住居址が切り、東壁から南壁東側は8号住居址を切り、東壁北側は35号住居址を切っている。竪穴は東西4.3m、南北5.8mで隅丸長方形プランをとり、磁北に対し長軸を42°東に振っている。床面のレベルはゆるい傾斜を見せて、南側が約9cm低い。内部はI層よ

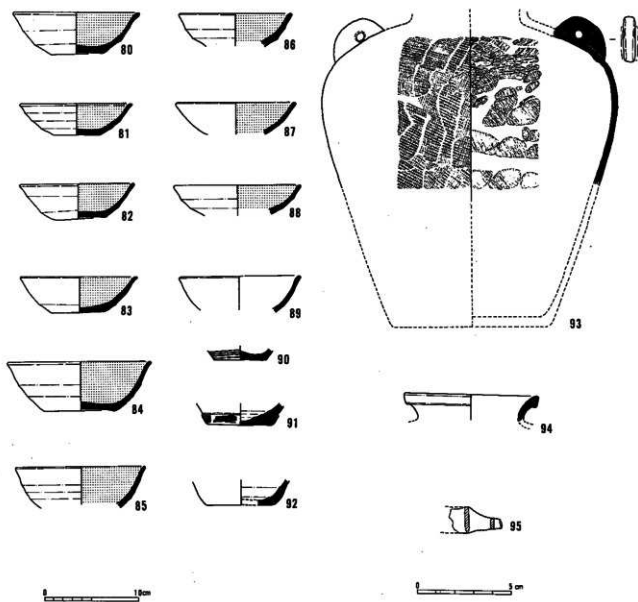


図35 7号住居址出土遺物 (1:4 95 1:2)

りVI層まで確認されたが、主体はI層で、小礫を多量に混入した黒褐色土であることから、住居廃絶後に人為的か自然の力によって表土が多量に入り、竪穴が没したものと考えられる。このことは、近くの住居内部の土層とも関係するので、比較して考察すべき問題であろう。床面に南壁下から西壁下の南端にかけて、周溝とも考えられる帯状の凹みが検出された。幅は一定しないものの、一方は壁に沿い30cmから1m程で、深さは10cm前後である。この凹帯の土層は礫のない黒褐色土で底は軟弱である。床面にピットが6個検出されたが、この中で大きいP5は楕円形で、長径70cm、短径60cm、深さ65cmを測り平底である。又、東壁のほぼ中央部にカマドがあり、東西40cm、南北60cmの広さに焼土が堆積していた。

遺物 黒色土器杯(81)は内黒で、口径12.4cm、器高3.4cm、器厚0.5cmである。ロクロ成形が行われ、底部は糸切りがなされている。内面ロクロナデの後炭素の吸着を行っている。表面は茶褐色で焼成は普通である。

黒色土器碗(84)は内黒で、口径16cm、器高5.5cm、器厚0.5cmで、底部中央がやや上げ底とし、普通の杯より深めに成形され、口唇部が杯よりやや大きく外反する。調整はロクロ仕上げとし、内面は炭素の吸着により黒色を呈し、外面は褐色の地に煤状の付着物が見えている。胎土中に砂が混入されており、焼成は普通である。

須恵器の双耳壺(93)と思われる破片は、肩の部分から胴部にかけてのもので、縦18cm、横20cmの大きさの破片である。全体の器高は36cm程になるかと思われる。器厚は肩の部分で、0.8cm、胴部で0.6cmとなる。表面はタタキメが全面に見られ、肩に1個の丸い穴のある耳が付けられている。内面はタタキメに以た器具の跡がやはり全面に見られる。胎土は長石粒などを含み、色調は、表面が暗緑灰色の自然釉がかり、内面は灰色で、器の断面は赤紫色を呈して焼成は良好である。

鉄鏝(95)と見られるものが出土した。腐食が多いので全体の大きさは不明であるが、残存の大きさは、長さ、3cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmを測る。(原田 曠)

④ 21号住居址(図19・36、写真58・59)

遺構 調査地区の南端に近く、他の住居址に切られて北壁と西壁をわずかに残す。隅丸方形の竪穴住居址で、その中心線はほぼ磁北を指している。規模は一辺約4.4mほどである。柱穴やカマドなどは残存部分にはないが、おそらく東カマドであろう。

遺物 遺物はいずれも破片で、原型をうかがうことのできるようなものはない。須恵器は9片(9個体分)で甕の破片7片(うち口縁部2片、底部1片)、杯2片(底部、口縁それぞれ1)である。土師器は甕の小片約10(うち口縁部1、底部1)杯の破片9片(うち黒色土器3)であるが、個体数はわからない。

須恵器底部(169)は高台の径9cmで付高台であり、底に糸切り痕を残している。胎土も精選されており焼成も良く黒灰色を呈する。口縁部の一片は丁字形の口縁をもつやや薄手のもので焼成良く外面には自然釉がかり黒灰色を呈する。他の甕の頸部は大型の甕で器壁の厚さは1cmほどの厚手のものである。胎土には砂を含む。焼成がよく灰色を呈し、肩の部分には自然釉がかり始めている。杯はいずれも灰色でていねいな作りであり、底部には糸切り痕がある。

(篠崎 健一郎)



図36 21号住居址出土遺物(1:4)

⑤ 23号住居址 (図37・38・39, 写真60・76)

遺構 調査地区の東端に、ほぼ同時代の一群6軒の住居址の中の北のはしに位置する10世紀の竪穴住居址である。ほぼ南北を向き、南北4.4m、東西4mのおよその方形で、北東隅がまるい。他は、三隅ともだいたいきちんとした直角に近い角になっている。深さは現存25cm、東辺中心より少し南寄りにカマドが設けられている。柱穴とみられるものは、北辺に近く3、南辺近く1みられるが、並び方が不規則であり、家の構造の判断に苦しむところである。

また北壁には他の建物址の柱穴?とみられるP199がある。カマドはほとんど完全に破壊されて、カマド

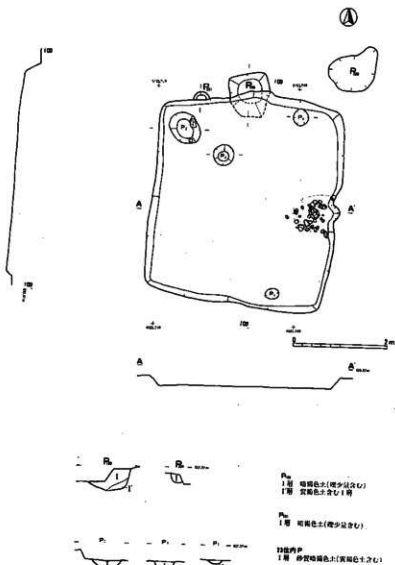


図37 23号住居址 (1:80)

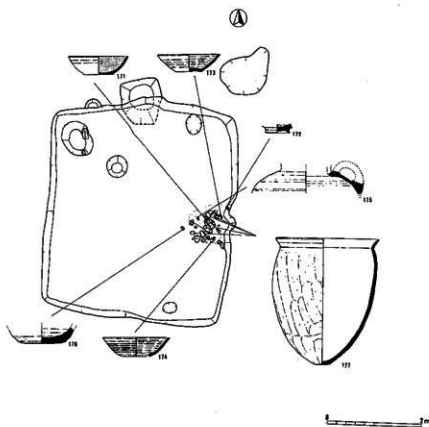


図38 23号住居址遺物出土状況 (1:80 遺物 1:8)

石の残りが数個散乱しているばかりである。遺物もカマドの周辺に集中して出土している。

遺物 遺物は、須恵器の杯2個体、同壺小片、土師器の甕1個体、杯1個体が主なところで、その他に甕や杯の小片が数十片ある。

杯(173)は、口径13.5cm、底径5.7cm、器高3.5cm、色調は内外面とも灰色で焼成はよい。成形はロクロにより底部は回転糸切りになっている。

杯(174)は、口径14.6cm、底径6.2cm、器高4.1cm、成形は前者と同手法により焼成もよい。色調は内外とも青灰色である。

壺(175)は環状の耳の基部を含む肩の部分であるが、推定口径は10cm程の、丸い肩の壺であると思われる。色調は灰色で焼成はよい。

土師器の甕(177)口径22.4cm、底径3.5cm、器高26.3cmで、大きく開いた口縁、短かい頸部、ゆるやかにふくらんだ腹部と小さな不安定な底を持ち、内外ともに赤褐色を呈するものである。内部と口縁部はロクロナデを施しているが、腹部は大きくヘラケズリによって調整している。焼成は普通である。

黒色土器の杯(171)はロクロ成形、回転糸切り底をもつもので、内部は黒色、外部は茶褐色である。口径13cm、底径6.4cm、器高3.8cmを測る。

(藤崎 健一郎)

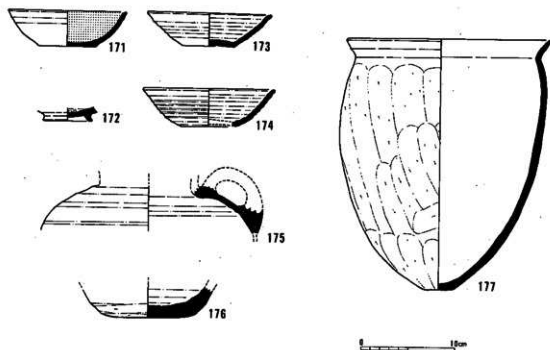


図39 23号住居址出土遺物(1:4)

⑥ 24号住居址(図20・40, 写真60)

遺構 調査地区東部の住居址群の東端に、中心をやや北東に向け、北壁と西壁をのぞかせ、あとの部分を調査地区区外に出している竪穴住居址である。北壁は約3m、西壁も同じ程である。南西隅には楕円の平たい石が1箇置かれている。深さ約40cmで、25号住居址を三角形に切っている。

遺物 遺物の量も少なく須恵器3片(甕底部1、杯口縁部2、杯蓋片1)土師器は甕底部の他8片である。

須恵器口縁部(181)の一つはていねいな作りで、焼きもよいが内面は褐色を呈する。

杯蓋(178)は砂のやや多い胎土で、焼成はあまりよくない。

甕底部(180)は青灰色を呈するよい焼きのものである。10世紀の住居址であろう。(篠崎 健一郎)

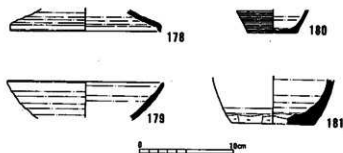


図40 24号住居址出土遺物(1:4)

⑦ 26号住居址(図20・41, 写真60・61・64・77・81)

遺物 調査地区東部の住居址群の南端に、27号住居址を切り、29号住居址にその大部分を切られて、北壁と東壁だけをあらわしている10世紀の竪穴住居址である。中心線をほぼ南北に向けた、東西3.8m

南北3mほどの隅丸長方形である。残存部分は北及び東の部分が鍵状に約80cmの幅の帯状で、東壁にはカマド址がある。北東隅にある2箇のピットのうち南のものは、やはりこれらの住居址群に重なる建物址4号の柱穴とみられ、その北西に並ぶピットがこの住居址のものであろう。

遺物 遺物は須恵器の裏の破片数個(体分約30片と若干の杯片(うち底部に墨書銘あるもの1))、土師器は裏及び杯の小片数十片(うち内黒の杯数片)、鉄器1がある。

須恵器裏は比較的大型のものが多く、また腹部にタタキメのあるものが多い。タタキメは平行なものと格子目のものだが、同じものはない。墨書銘をもつものは杯の(281)の底部弱の部分であるが、回転糸切り痕の上に大きく2字?を書いてある。下の文字は明に「長」であるが、上の文字はその下部をわずかに残すだけで、十分に読めない。強いといえばその末端部分の形から「大」と読めるかも知れない。灰色の焼成不良の須恵器杯である。

土師器はあまりに細片で全形をうかがい得るものは少ない。

鉄器(192)は長さ8.5cm、幅最大1.5cm、厚さ最大約3mm、槍の穂先状で断面クサビ状のものである。クサビ状になっているが刃のついていたようすはない。あるいは刀子のナカゴの部分かとも見られるが、用途については後考に待つ。

(藤崎 健一郎)

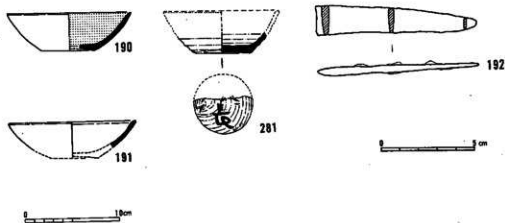


図41 26号住居址出土遺物(1:4 192 1:2)

⑧ 27号住居址(図20・42, 写真60・62・77・81)

遺構 東部の住居址群にあって、北西端を26号に、北東隅を25号に切られ、その上、東壁部分を調査区域外にとられている10世紀後半の竪穴住居址である。その規模は南北4.8m、東西は少し大きい、壁の張り出した隅丸長方形の住居址らしい。カマドは東壁にあったと思われるが焼土のみで残存していない。またこの住居は火災にあったとみられ、床面には灰や木材の炭化物の堆積がみられた。炭化物の中には木材の形状を残しているものもかなりある。

遺物 遺物は須恵器と土師器、鉄器であるが量は多くない。須恵器は裏・杯・杯蓋の小片約20片である。裏は外面に平行のタタキメのつくものも多く、その一つは九底である。また一片には外面に黒色、内面に

緑色の美しい自然釉の生じたものがある。

土師器は甕と杯であるが甕はいずれも小片で全形をうかがえるものはない。杯は復元できたものが3個あるが、杯(193)は黒色土器である。これは径15.0cm、器高4.8cmやや大ぶりのもので平底、回転糸切りである。外面にはロクロ目が残る。腹部がふっくらとふくらみ、口縁がわずかに外反する形のよい杯である。外面は褐色を呈する。もう一つの杯(196)は径12.8cm、器高3.7cm、回転糸切りによる平底、灰白色を呈し焼きはよくない。他の杯(194)は、ロクロ成形である。

鉄器(199)は刀子で、きつ先とナカゴの上部を失っている。

(篠崎 健一郎)

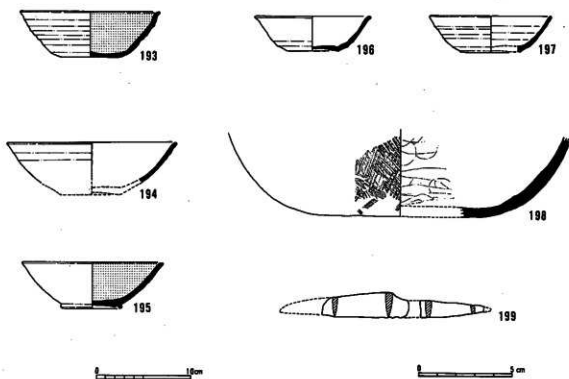


図42 27号住居址出土遺物 (1:4 1991:2)

(6) 第五期

① 3号住居址 (図30・43・44, 写真51・71)

遺構 前田遺跡の調査地区の西北隅に位置する11世紀前半の竪穴住居址である。東辺3.4m、西辺3.4m、北辺3.6m、南辺3.4mとやや東北隅の張り出した、少し長方形に近いプランの小型の住居址で、中心線は南北より10°ほど東に振っている。カマドは東カマドで中心よりわずかに南に寄っている。なお本住居址は、建物址1を切っており、なお細い溝に東壁を切られたかっこうになっている。

住居址内の柱穴は西北隅にあるものが1箇と、南東隅のものがあるが、後者は柱穴の感じはうすい。その他の柱穴は不明である。

遺物 遺物は土師器と須恵器・灰粘陶器がある。土師器には先ず甕(19)がある。口径21.0cm、底径10.2cm

が、砂の多く含まれた胎土といい、作り方の粗雑さといい、いかにも粗製の感をまぬがれない。杯（二点は黒色土器）三点はいずれも長年使い古されたという感じで、器の内外面ともに器胎が剥落し薄く軽いものになっている。これは土中に埋没していたからではあるまい。一点は白色を呈するが、おそらく使用した土の性質によるものであろう。

須恵器は二個体分ほどの裂の小片であるが、いずれも焼成がよく、一個体(17)のものには黒色の自然釉がかかっている。また底部は糸切り痕を残したまま高台を付けている。他の個体はかなりの大甕であったらしく、外面に叩き目文がついている。

灰釉陶器はロクロ成型、糸切り底の杯の破片で、口縁部に僅かに灰釉が見られる。

(藤崎 健一郎)

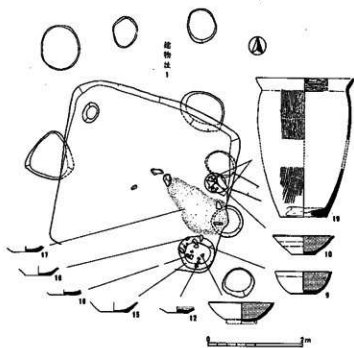


図43 3号住居址遺物出土状況（1：80 遺物 1：8）

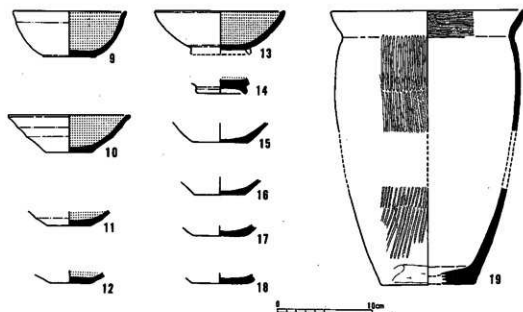


図44 3号住居址出土遺物（1：4）

② 6号住居址 (図6・7・45, 写真53・73・81)

遺構 6号住居址は本遺跡中央のやや北寄りに検出された竪穴住居址で、7号・8号・9号の各住居址と切り合い状態を示して検出され、直接としては7号住居址の北端部分を切って設けられたものである。大きさは東西5.3m、南北3.3mで四角は凹凸の多い形状の、隅丸長方形プランである。竪穴の長軸を85°東に振っている。内部の土層はI層が西壁に沿う縁で、酸化した赤褐色土が堆積し、II層は竪穴内部に充満している黒褐色土で、III層は東壁に附着した黄褐色土であり、VI層は西壁の下部に黒褐色土が砂利を多く

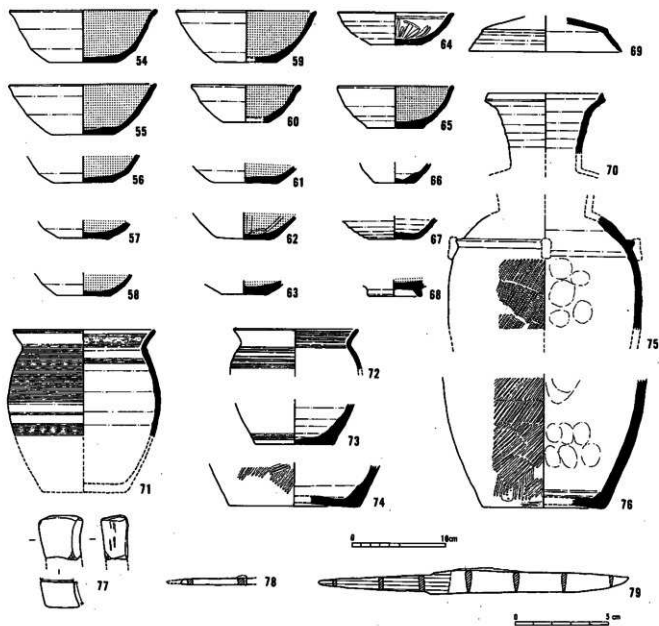


図45 6号住居址出土遺物 (1:4 78・79 1:2)

含んでわずかに堆積していた。床面までの深さは、東壁に近い部分で20cm、西壁の近くで30cmと西側に傾斜をしている。四隅の壁は何れも崩れて原形を留めない状態である。床面にピットが12個検出された。この内、P8は平面が楕円形で長径60cm、短径50cm、深さ40cmで、底部は漏斗状をしており、他は大部分浅い丸底である。

遺物 遺物は、土師器・黒色土器・須恵器と2点の鉄器、その他がある。本住居址出土の遺物では、土師器黒色土器の杯の比較的多いのが特長である。

土師器・黒色土器は杯が18個体と甕が6個体ほどである。杯(55)は口径12.7cm、底部6.5cm、器高4.1cmで、内面はうすい黒色を帯びる。外面は黄褐色である。内外面ともロクロ成形で、底は糸切り底である。

杯(54)は口径16.2cm、底径6.8cm、器高5.7cm、外面は明褐色、内面は黒色である。外面はロクロナデを施しているが、剥落が目立つ。内面は磨いてある。

杯(59)は口径15.9cm、底径6.5cm、器高4.6cmで、外面は明褐色、内面は黒色である。ロクロ成形で糸切り底、内面は磨かれている。

杯(65)はやや浅い形で、ロクロ成形、糸切底、色調は内外面とも灰褐色である。

土師器甕(72)は、短い口縁部が外反し、腹部がまるくふくらんだ形である。内外面ともきれいにロクロ調整をしてあり、色調はやや暗い褐色である。口径13.6cm。

(71)もほぼ同型の器とみられるが、やや大きく口径は15.5cmになる。

須恵器は大甕破片数個体分、杯数個体分、杯蓋3個体分がある。

甕(76)は外面に平行タキメを持つ厚手のもので、内部には指でおさえたあとがいくつか残る。焼成は悪く褐色を呈する他、火度も十分上っていないようである。同様なもの底部がもう1個体分だけある。

(75)は肩に凸帯をめぐらせた四耳壺であるらしい。内面はロクロナデ、外面は平行叩き目文である。焼成は甘く、須恵器らしい金属的な音もせず、色調も外面は灰色、内面は褐色である。須恵器の甕には他に焼きのよい厚手の破片が数個体分ある。平行あるいは格子目状の叩き目文を表面に持つものが多く、黒色の自然釉のかかったものもある。須恵器の杯の破片も4個体分ほどあるが、胎土もよくなく焼成も甘い。成形はロクロ成形により、底部は回転糸切りになっているが、成形はやや雑である。さらに杯蓋もあるが同様なものが多い。そのうち1片は時期が下るもので、灰釉陶器片少量とともに後世の混入とみられる。

本住居址の床面からは鉄製品が2点出土している。

(78)は長さ3.6cm、太さ約3mmほどの(錆が厚く付着しているので、そのものの太さは明でない)釘状のものであるが、何に使われたのかはわからない。

刀子(79)は比較的遺存度がよくて、本来の姿を大体うかがうことができる。長さ15cm、幅は基部の所で1.3cm、厚さ4mm、刃部の長さ10cmである。柄の部分には、木質の痕跡を見ることができる。

(藤崎 健一郎)

③ 17号住居址 (図19・46、写真58・81)

遺構 調査地区南端にある住居址群の中にあり、18号および19号・21号住居址を切って存在する10世紀中葉の竪穴住居址である。長軸を正しく南北に向け、南北5.4m、東西4.4mの隅丸長方形で、東部を斜に幅約40cmの暗渠排水溝に切られている。これは勿論近年のものである。住居址内にはピットが18個ほどあるが、その並びかたは不規則で雑然としている。カマドは東壁中央に煨土の散布がみられた。

遺構 遺物は須恵器・土師器・鉄器である。須恵器は甕・杯・杯蓋のいずれも小片である。甕はおよそ

4個体分であるが、そのうち同1個体の2片に注意したい。この2片は甕の口縁部で、外反してさらに口縁が内面に向くもので、頸部以下には平行の叩き目文が縦に頸をそろえて並んでいる。この甕は何らかの理由により、焼成途中で止めてしまったらしく、割れ口から成形の手法をある程度うかがうことができる。まず胎土は幾種類かの粘土を混合して使っているらしく、内部に白色の土が層状にあるいは線状に見えることである。そのような状態であることは、おそらく練りが不十分でよく混和をせずに使用したのではないかと思う。さらに割れ口が層状を呈しているのは、成形が水引きでなく、紐作りあるいは輪積みによりロクロ調整で作っているということであろう。焼成途上で破損したものとすれば、多分前者も原因の一つにあげられるであろう。

鉄器(144)は刀子の刃部と茎の中間部分である。

(篠崎 健一郎)



図46 17号住居址出土遺物 (1 : 4 144 1 : 2)

④ 19号住居址 (図19・47, 写真58・59・76・81)

遺構 調査地区南端の住居址群の中に、20号住居址を切り、17号住居址に西半分ほどを切られ、中心線を北東に向けている10世紀代の竪穴住居址である。幅40cmほどの近年に作られた暗渠に、中心部と東端に近い部分を割られている。東壁の長さおよそ4mであるが、北壁と南壁の状態からみて西壁の部分はかな

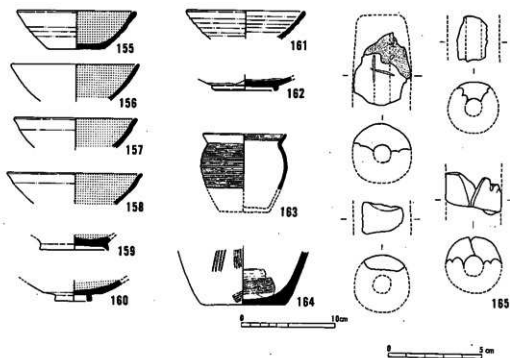


図47 19号住居址出土遺物 (1 : 4)

り広がるらしく、全体の形は東西に長い不整形ではなかったかと推察される。壁の線も後からの破損もあるかと思われるが、かなりこまかい屈曲がみられる。カマドは東壁の南端近くに設けられているが、この位置は、住居址全体の形状とともに異例である。床面にはピットが6箇みられるがやや並びかたは不規則である。

遺物 遺物は須恵器の甕及び杯の破片約40点、土師器甕及び杯の破片約50点、灰釉杯片2個体分、フイゴの羽口1個体分がある。

須恵器の甕は小型薄手のもの1個体と、大型のもの5個体ほどである。

小型の甕(163)はていねいなロクロ成形で底は回転糸切りである。大型の甕は外面に平行あるいは格子目のタタキメのあるものと、タタキでなくロクロ調整のものがある。底は平底である。

土師器は甕(164)および杯である。甕は小型のまるい胴をもち口縁が外反し、胴の外面にロクロによるカキ目をもっている。大型のものは厚手で2点の平底に木葉痕がある。おそらく朴の葉のあとであろう。杯は黒色土器が目立つ。

灰釉は皿であるが内面の底をまるく残して、周辺部に施釉している。

羽口(165)は基部の径約6.5cm、内部の穴の径2cmの土師質のもので、胎土には多量の砂が混入してある。あるいは、この住居址が鍛冶職の仕事場であったかも知れない。(篠崎 健一郎)

⑤ 28号住居址 (図20・48・49・50, 写真60・63・64・77・81)

遺物 調査地区の東部にある住居址群のほぼ中央にある。11世紀代に属する竪穴住居址である。他の住居址との切りあいはなく、26号住居址のすぐ北に接して、中心線を南北に向けている。規模は西壁4.4m、東壁4.2m、北壁4.2m、南壁4.0mのやや不整な隅丸方形である。カマドは東壁のほぼ中心にある。床には7箇ほどの柱穴がある他、西部に楕円形の長径2m、短径1mほどの大きな浅いピットがあり、さらに北西隅には長径80cmほどのピットもある。また住居址の縁に沿うようにしてあるいくつかのピットは、あるいは垂木を支える柱のあとであるかも知れない。住居址の深さは30cmである。

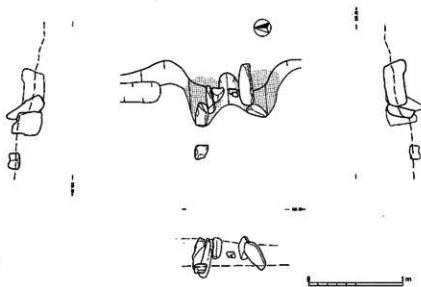


図48 28号住居址カマド (1:40)

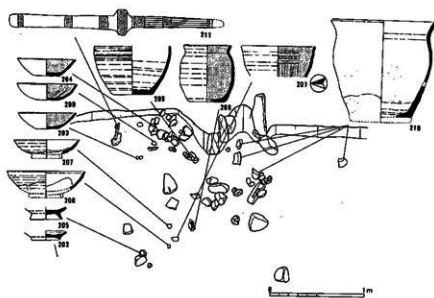


図49 28号住居址カマド付近遺物出土状況 (1:40 遺物 1:8 211 1:4)

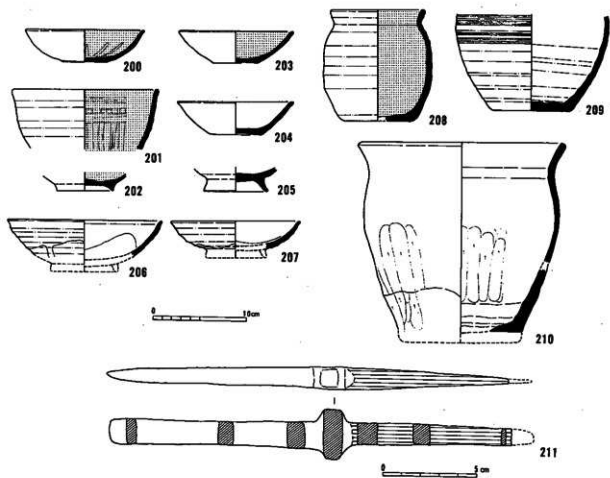


図50 28号住居址出土遺物 (1:4 211 1:2)

遺物 遺物は須恵器・土師器・灰釉陶器・鉄器がある。須恵器は大型の甕の破片数個体分と中型の甕の破片2個体分、杯の小片が少しである。大甕はいずれも平行のタタキメを持ち、1点は口縁部の直下に、タタキメの上から見られる限りでは5条ずつ2段の、櫛様の工具による波状文をつけている。中型の甕はタタキメがなく、表面にロクロ調整をおこなっている。またいずれの個体も焼成がよく、自然釉のかかったものもかなり見られる。

土師器はそれぞれ数個体分の甕と杯である。甕はロクロによらずヘラで表面を削って調整しているものと、内外面ともロクロ調整をおこない、底も回転糸切りになっているものがある。いずれも内外面に炭化物の付着がみられる。

杯は復元された限りに於ては比較的浅い形のもので、ロクロを使用したあとは見られず、焼きも良くない。黒色土器はロクロ目があり、底も回転糸切りとなっている。内部はよく研磨されており煤の吸着も十分である。

灰釉陶器は2個体の椀である。大きさは(206)が口径16.8cm、(207)は口径14cm。いずれもロクロ成形により、ていねいな作である。高台は失われているがおそらく付高台かと思われる。焼成もよく灰白色を呈する。施釉はどちらも高台を持って少しずつ部分的に漬けかけを行なったとみられ、内外面に波状に釉がみられるが、外面はほとんど消えている。内面には緑色を呈する部分が特に釉だまりにみられる。

鉄器は、鑿で、基部には木質部が遺存しており、基部の先端をわずかに欠損する略完形品である。

(篠崎 健一郎)

⑥ 29号住居址 (図20・51, 写真60・64・78・81)

遺構 調査地区東部の住居址群の南端に、26号住居址にかぶさり28号の南に並んでいる11世紀代の竪穴住居址である。中心線を南北に向け、北壁4.8m、南壁4.4m、東壁及び西壁が4mと、隅丸のやや北の広がった形の方形である。床面には6箇の柱穴と、西部に寄って長径2.4m、短径約1.5mの浅いピットがある。東壁の中央にはカマドが設けられているが、石組みはすべて取り去られて、痕跡と焼土のみになっている。

遺物 遺物は須恵器・土師器と1点の鉄器である。須恵器は大甕数個体分の小片とわずかな杯及び杯蓋である。大甕は表面に平行の甲き目文を持つものと、ロクロ調整のものがある。杯は1個体で回転糸切りの平底である。杯蓋は口縁を含む小片1つであるが、口縁近く、端が少しめくれた様な形状がやや特長的である。土師器は内黒のものを含む50片ほどの杯と甕の小片であるが、復元できた1個体の杯(212)についてみると、口径13.0cm、器高4.6cmのややまる味を帯びた腹部をもつもので、底は回転糸切りである。胎土には

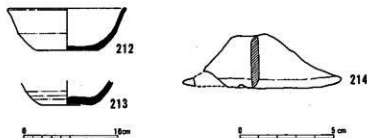


図51 29号住居址出土遺物 (1 : 4 214 1 : 2)

相当量の砂を含んでいるが焼成はよい、黒色土器で、黒色部分は内面ばかりでなく外面の中ほどに及んでいる。

鉄器(214)は刃物とみられるものの破片で、一面は扁平、片面はややまる味を帯び一端に幅5mmほどの面がついて刃となっている。銚のようなものの一部ではないかと思われる。

(篠崎 健一郎)

(6) 第Ⅲ期

① 11号住居址 (図52・53・54, 写真55・75)

遺構 調査地区の西北部に位置する12世紀のものと思われる竪穴住居址である。12世紀の住居址は他に2軒あるが、現在までに大町市内で調査されたものうちでは、最も新しい時期のものである。

緩傾斜に掘られている為、南壁は検出されなかったが、規模は東西4.1m、南北3.9mのやや不整な隅丸方形のプランを持つ。また東から西に流れていたらしい幅1mほどの溝の跡を切って、この住居址は作られている。

カマドは東壁中央やや北寄りに位置し、焼土が遺存するのみであるが、石組み粘土カマドで、カマド石は抜き取り持ち去られたと考えられる。

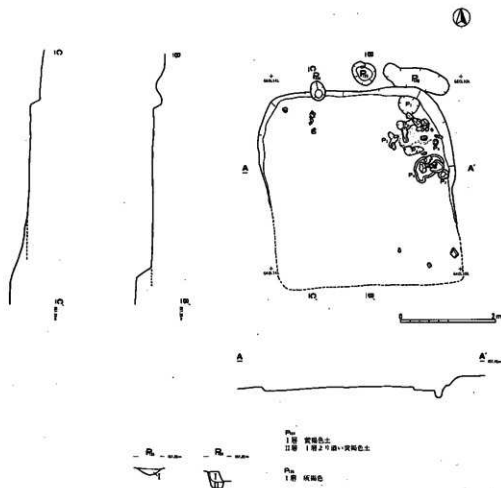


図52 11号住居址 (1 : 80)

遺物 遺物には土師器・須恵器・灰釉陶器がある。土師器は杯が一個体と3個体の小皿がある。

杯(123)は口径14.7cm、器高6.0cm、底径6.6cm、胴がまるくふくらんだ大ぶりの器である。高台が大きいので坐りが安定している。成形は紐作りのものようであるが、成形も調整もていねいである。ただ表面の大部分が剥落して荒れた器肌を見せている。

3個体の小皿は、ほぼ同型同大で(121)の色調が暗褐色を呈するのに対し、(120・122)がうすい褐色である点がやや異なる。成形手法もロクロ成形、糸切りと同じである。またいずれも粗製品である。

須恵器は、2個体の杯と小皿1個体、大甕5個体ほどである。

杯(125)は、口径12.4cm、底径5.9cm、器高4.1cmで、ロクロ成形により、底も回転糸切りで高台はない。内外面ともきれいに調整されている。胎土も精選され、焼成もよく、色調は内面が青灰色、外面はやや褐色となる。他の杯は底部に近い小片だが、青灰色を呈し胎土には砂の混入が多い。小皿は口縁の小片で、精選された土で、ていねいに作っている。これらはすべて後の混入品と思われる。

四耳壺(129)は、耳の部分を含む口縁部破片である。口径は推定14.1cmで、肩の張った形であるらしい。耳(環)は、肩の上部、口縁に近いところに付けられている。胎土にはやや多くの砂を含むが、作りはて

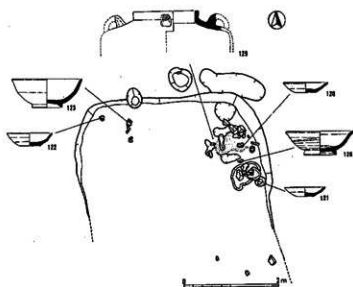


図53 11号住居址遺物出土状況(1:80 遺物 1:8)

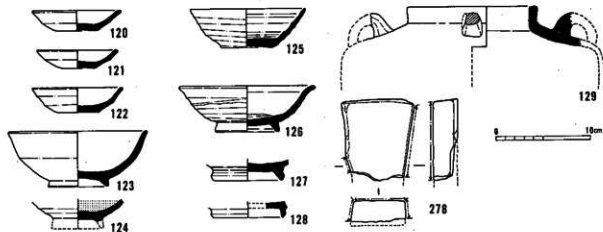


図54 11号住居址出土遺物(1:4)

いぬいである。焼成はよく、内面は青灰色、外面には少し緑がかった自然釉が一面にかかっている。

大甕は口縁部を含む、厚手のもので外面には平行タクキメがあり、焼成はよい。(図示できるだけの資料ではない)

灰輪陶器は復元された碗1個体と、2個体分の底部、口縁部小片である。

碗(126)は口径14.8cm、底径7.7cm、器高5.0cmのもので、ロクロ成形である。成形後底部をヘラケズリをし、その上に高台を付け、ロクロ調整をしている。作りかたはあまり念入りではない。形が歪んでいるのは焼きひずみかと思われる。色調は灰白色である。釉は内面では、底の部分を径7cmほどを残して施され、外面では口縁から寸ほどに施釉されている。釉はうすくかけられているが、内面下部にはわずかな釉だまりが見られ、その部分はかすかに緑色を帯びている。口縁部分の小片は、胎土もよく精選され、薄手なていぬいな作りで焼成もたいへん良い。施釉の程度はさきものと同様である。

(篠崎 健一郎)

② 22号住居址 (図54・56, 写真59)

遺構 調査地区最東南端に南北約5m、幅約1mの西辺をのぞかせ、大部分が非調査地区に埋もれている12世紀の竪穴住居址である。

中心線を北より20°ほど東に振っており、柱穴が1箇あらわれているばかりで、カマドもわからない。隅丸方形の住居址であろうか。

遺物 遺物は土師器小片10片ほどと、須恵器片20片、灰輪陶器片3片がある。

土師器は杯の破片が大部分で、どれも磨滅が甚しい。

須恵器は四耳壺1個体分を含む甕3個体分と杯1個体分である。四耳壺(169)は耳ひとつを含む肩の部分で、肩をめぐる凸帯は断面台形をなし、耳は全形が不明である。胎土も精選され焼成もよい。色調は内面黒灰色、表面には黒色の自然釉がかかっている。他の須恵器の甕類はいずれも堅緻であるが、色調は黒・灰・白色・暗褐色などさまざまである。また表面は平行叩き目文がみられるが、1片だけ斜格子目状文もみられる。

灰輪陶器は底部1片と2片の腹部である。おそらく1個体と思われる。胎土もよく精選されロクロ成形もていぬいである。外面の釉および底部にたまった釉はうすい緑色を呈している。(篠崎 健一郎)

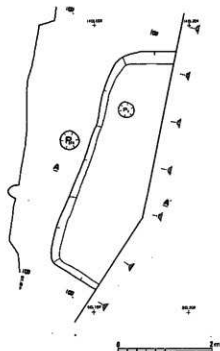


図55 22号住居址 (1:80)

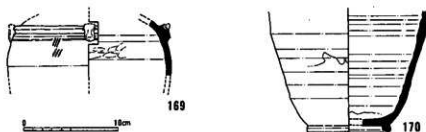


図56 22号住居址出土遺物 (1:4)

③ 32号住居址 (図26・57・58・59, 写真65・66・78・81)

遺構 調査地区の東北隅に33号住居址と、北西から南東へ向って流れていた溝を切って作られている竪穴住居址である。ほぼ南北を向き、東西4.7m、南北4mの隅丸方形であるが、東辺は3.4mと短かく、南辺が中心から少し東寄りのところまで折れこんだ形になっている。

カマドは、石組み粘土カマドで、西壁南端に大小10個余りの石の集積と焼土の散布が見られた。床はよく固められているが、北西隅には少し軟弱な部分があるのは、溝址のあとに作られたせいかも知れない。またこの住居は火災にあっており、住居址の西半分は炭化した建材の集積があり、床面には灰の堆積がみられた。焼けた柱材は西に向って倒伏している。住居址内の柱穴は中心部と西壁付近に集中している。

遺物 遺物は須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器、及び若干の石器類である。

須恵器は、甕(あるいは壺)およそ4個体分はどの破片と、数個体分の杯破片、1個体分の杯蓋破片がある。甕はいずれも大型のものであったらしくかなり厚手で、ほとんど腹部に平行あるいは格子目の叩き目文を持つのが1片だけ頸部に波状文らしい文様を持つものがある。また大甕の1つは生焼けである。杯はロクロ成形で、底部も回転糸切りになっている。杯蓋もよく精選された土で、ロクロでいいいに成形されている。杯・杯蓋は混入品である。

土師器・黒色土器は6個体分以上の杯と、個体数不明の甕の小片若干である。杯は高台のあるもの4、ないもの2ほどである。いずれもロクロ調整、糸切り底で、そのうち(217)(217)は内黒である。また(217)の口縁には細い一本の凸帯がめぐらされている。この住居址出土の土器は精製とていってよいであろう。

灰釉陶器は、長頸壺1、皿2、埴6、その他である。

長頸壺は肩の部分2片で、いずれも頸の立ち上り部分がわずかに残っている。ひも作り成形後、第二次のロクロ成形によるものであろう。色は灰白色を呈し、内面は灰色である。焼成はよいが釉は定着せず、剥げ落ちたようなムラになっている。

埴(221)は、口径14.4cm、底径6.4cm、器高6.1cmの大きさ、底はへラケズリの後、高台をつけている。

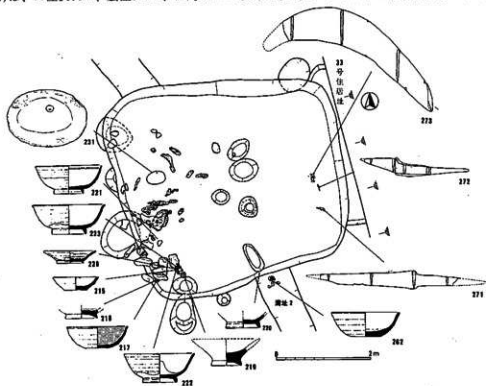


図57 32号住居址遺物出土状況 (1:80 遺物 1:8 271・272・273 1:4 275 1:16)

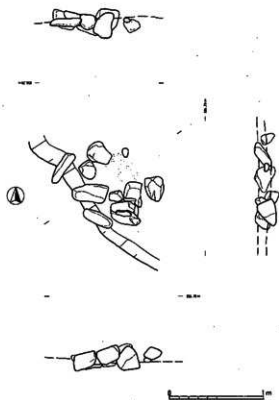
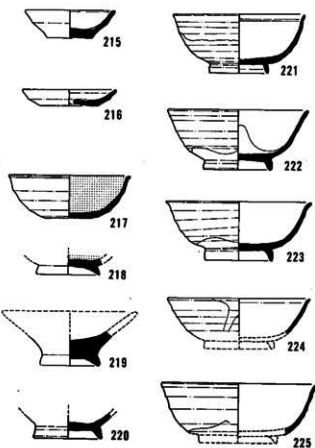


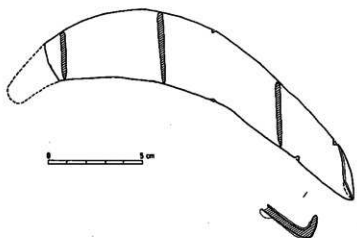
図58 32号住居址カマド (1 : 40)



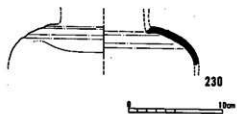
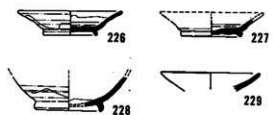
271



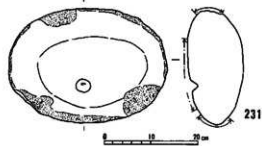
272



273



230



231

図59 32号住居址出土遺物 (1 : 4 271・272・273 1 : 2 275 1 : 8)

素地の色は灰白色で、灰釉は外面に口縁から2cmほどに、内面は底7cmほどに見られる。釉調はやや緑がかり、斑状に仕上がっている。

坑(223)は口径16.2cm、底径7.5cm、器高6.1cmで底は糸切り後の付高台である。灰白色を呈するが、高台内部は黒色である。釉は外面は口縁から2cmほどまで、内面はやはり中央部分をまるく残しているが、少し狭いために、上に重ねた器の底がわずかに剥がれて付着したようすがみえる。

坑(222)は、口径15.3cm、底径7.3cm、器高6.4cmで、底は糸切りの後、付高台である。素地は灰白色だが、高台周辺は煤が付着し黒みを帯びている。施釉は高台を持って横ざまにつけかけたらしく、波状になっており、外面も高台近くまで釉がかかっている。

灰釉の皿は2個体とも段皿である。(226)は、口径11.3cm、底径5.8cm、器高2.6cm、口縁部が少し外反する形で、高台は付高台である。内面の段はあまり際立つものでなく、やや丸まみを帯びている。焼きはあまり良好ではない。

緑釉陶器は、同一個体のものとみられる皿の破片2点である。

皿(229)の破片のうち1片は口縁部である。ロクロ成形により、釉の下にロクロ目をうかがうことができる。焼成はよく質は堅緻である。釉は均一に内外とも万遍なくかり暗緑色を呈するが、内面は焙解がやや不十分なためか、少し粗面をなしている。胎土は須恵器質であり、堅緻な焼成で、おそらく東濃及び嶺南ではなく、京都方面の窯で焼かれたものであろう。

本住居内に置かれてあった石は砂岩の18cm×13cm×3cmの分銅形のもので、明らかに火を受けているようす、また炭化物の付着が見られる。特に使用した痕跡はないが、カマドの支脚石と考えられ、そのものの形は人為的に整えられたものではなかろうか。もう一つの石(233)は、35cm×26.4cm×12cmの楕円形の安山岩で、周縁部はこの形を得るためであろうか、叩打痕が一面につけられている。また表面には軽く研磨したあともある。表面の中心部分から少しはずれて、人為的なものとみられる径3cm深さ1.5cmのまるいロート状の凹みがある。おそらく作業台として使用されたものであろうが、その使いみちについては後考にまきたい。

なお本住居址からは3点の鉄製品が出土している。2点は刀子であり、他は鎌である。

(272)は現存の長さ11cmのもので、そのうち7.5cmほどは柄の部分である。またこの部分には木質の付着がみられる。

(271)は残存度がよく、なお原姿を十分うかがうことができる。現存長さ14.5cm、切先部分と中心頭の部分が少し欠損している。刃部の長さは10cm、基部の幅1.85cm、厚さ4mmである。刃も棟も一直線に切先に向かって伸びるくり小刀の形式である。

(273)も刃先を若干欠損しているものの、およその原姿をうかがうことができる。平打ちの薄手のもので、中心よりわずかに先によったところが最も幅広く、またこの部分で大きく内湾している。柄をすげる部分は狭いが厚く作られている。柄は本体の端をめくり包みこんで装着したようで、しかも本体に直角でなく、およそ45度の角度をつけ、刃部とひらいてつけられたようである。この鎌の用途としては、草刈りあるいは稲や麦を刈るのに用いられたものであろう。

(篠崎 健一郎)

(7) 時期不詳

① 31号住居址 (図59, 写真64)

遺構 調査地区東部に一軒だけ、グループから少し離れ、3分の2ほど水田耕作時に削り取られて、北

壁と西壁の一部をのぞかせている時期不明の竪穴住居址である。湧水のため辛うじてその輪郭と3箇の柱穴を検出したにとどまった。また遺物の出土は見られなかった。

(篠崎 健一郎)

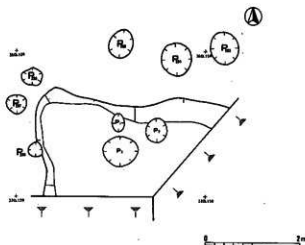


図60 31号住居址 (1:80)

2) 建物址

前田遺跡からは、計4棟の建物址が検出された。4棟中3棟(建1・2・4)は、住居址との重複関係、方向、規模等が類似及び近似しており、これらは同一時期に存在したものと推定される。建3については、形態、方向、規模等が異なっており同一時期かどうかははっきりとしない。

① 建物址1 (図30, 写真67)

発掘区北西端に位置し、P94・95・121を3号住居址に、P101を4号住居址に切られている。南東6mには1・2号住居址、東12.5mに13・14号住居址、東5mに5号住居址、南6mに11・34号住居址がある。

形態は桁行5間×梁行3間であるが地表が南に傾斜しており、4号住居址に削り取られてしまったらしく南側梁行は柱穴が3本検出されたのみである。桁行方向は、N6°Wを向く。規模は、桁行全長7.6-7.98m、梁行全長5-5.1mで、柱間寸法は、桁行一間1.2-1.6m、梁行一間1.5-1.6mを測り、平面積は、39.73㎡である。柱穴は粘性のある褐色土を掘り込み、掘り方はほぼ円形であるが、楕円形のものも見られる。規模は、最大90×83cm、最小45×45cmで深さは35-50cmを測る。地表が北-南へ30-40cmの傾斜がある為か、やや南側が浅い。柱穴は底が、ほぼ平垣に掘られている。埋土は、漆黒色土が主であるが、底部端に黄褐色土が見られるものもある。柱底はどれからも検出されなかった。遺物は小破片の土師器甕が見られた。

本址は、3・4号住居址に切られていることから10C以前(Ⅱ期以前)と考えられる。

(島田 哲男)

② 建物址2 (図19, 写真68)

発掘区南側中央に位置し、P247と南側梁行中央のピットを17、21号住居址に切られている。周辺には、18・19・20・22号住居址がある。

形態は桁行3間×梁行2間であるが南側梁行中央のピットは21号住居址造成時に削り取られてしまったらしく、見られない。桁行方向は、N2°Eを向く。規模は、桁行全長6.8m、梁行全長5.5mで、柱間寸法

は、桁行一間1.6~2.5m、梁行一間2.5mを測り、平面積は37.4㎡である。柱穴は砂礫層を掘り込み、掘り方はほぼ円形で、規模は、80×70cmで深さ40~50cmを測る。柱穴は底がほぼ平坦に掘られており、埋土は黒色土一層のみで、柱痕等は検出されなかった。遺物は何も検出されなかった。

本址は、17・21号住居址に切られていることから、10C以前(Ⅺ期以前)と考えられる。

(島田 哲男)

④ 建物址3 (図61, 写真68)

発掘区北東側中央西端に位置する。西側桁行の南側2ヶの柱穴は発掘区外であるが、後に土中より検出された。北東5~10mには、6・7・8・9・35号住居址、南東1~10mには24・25・26・27・28・29・30号住居址、建物址4、南西4mには12号住居址がある。周辺に大小のピットが20ヶ見られるが関係は不明である。

形態は桁行2間×梁行2間で、桁行方向はN57°Wを向く。規模は、桁行全長5.2m、梁行全長5.0mで、柱間寸法は桁行一間2.0m、梁行1.5~2.5mを測り、平面積は26㎡である。柱穴は砂礫層を掘り込み、掘り方はほぼ円形で、最大90×82cm、最小90×48cmで深さは30~50cmを測る。地表が北へ南へやや傾斜がある為か、やや南側が浅い。

柱穴は、底がほぼ平坦に掘られている。埋土は砂礫を含む黒色土一層のみである。柱痕はP213は中央やや東寄りから1ヶのみ検出された。P135の南隣にP131・P213の北隣にP214が見られるがおそらく、補助的な柱穴と考えられる。P127の西側にP219が見られる。これは、おそらく、2×2間の総柱の建物の中央に位置する柱穴より東側へずれているので、この建物の構造の上で東側半分を支える為の柱の柱穴と考えられる。遺物は何も検出されなかった。

本址の時期は切り合い関係、遺物等が見ら

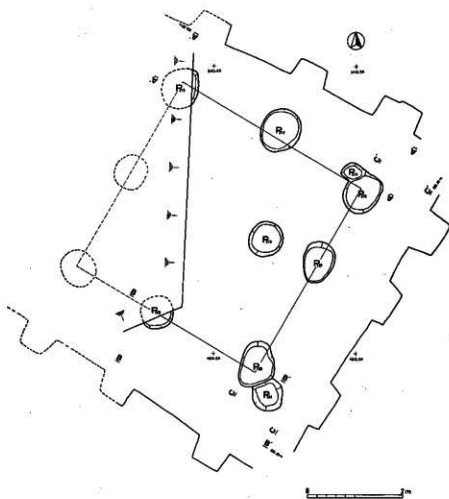


図61 建物址3 (1:80)

れずはっきりしない。

(島田 哲男)

③ 建物址4 (図20, 写真68)

発掘区中央に位置する。P138・154を28号住居址に、P288を26号住居址に、P289・160を27号住居址に、P155・266を29号住居址に切られている。

形態は桁行3間×梁行2間で、桁行方向は、N8°Wを向く。規模は、桁行全長7.0m、梁行全長4.5～5.0mで、柱間寸法は桁行一間1.8～2.2m、梁行一間1.8～2.2mを測り、平面積は33.25㎡である。柱穴は、褐色土層、砂礫層を掘り込み、掘り方はほぼ円形で、規模は70×60cm、深さ50～60cmを測る。柱穴は底がほぼ円形に掘られており、埋土は、砂礫、褐色土粒混入の黒色土一層のみで、柱痕は検出されなかった。遺物は何も検出されなかった。

本址は、26、27、28、29号住居址に切られていることから、10C以前(XI期以前)と考えられる。

(島田 哲男)

3) その他の遺構と遺物

(1) 竪穴住居址・建物址以外のピット

① P25 (図62・68, 写真69・79)

調査地区北東部に検出された95cm×52cm、深さ12cmの楕円形のピットである。内部からは、須恵器製の小片2点、土師器破片数個体分、杯(黒色土器を含む)数個体分が検出されている。ピットは底部だけ残っていたことになるが、その大きさからみて墓塚であるか考えられる。時期は10世紀とみられる。

(篠崎 健一郎)

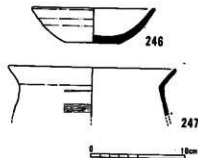


図62 P25出土遺物(1:4)

② P35 (図1・63, 写真79)

調査地区北東隅のピット群中の南端にある20cm×20cm、深さ15cmの小ピットから、内耳鍋1個体が出土している。口径21.7cm、器高12cm、底径11cmで、口縁部より3cmほど下ったところに、約1.5cm幅の浅い凹帯をめぐらす。

この周辺には大小のピットが約20個ほど検出されているが、おそらく建物址かと思われるものの、不規則な配置で具体的にどのような形の建物であるか不明である。

(篠崎 健一郎)



図63 P35出土遺物(1:4)

③ P89 (図64・65, 写真70・79)

調査地区西端に近く12号住居址の西にあるピット。56cm×51cm、深さ17cmの大きさで、内部は炭化物少量を含む砂質の黒色土が入っていた。その中から須恵器短頸甕の口縁部破片1、須恵器大甕破片約20、灰釉陶器蓋1、緑釉陶器段皿破片1が、ピット内に集積された状態で出土した。出土土器の時期はⅢ期であろうが、このようなピットの中にバラバラの土器片が集積されているという意味はどこにあるのであろうか、後考にまちなたい。

(篠崎 健一郎)

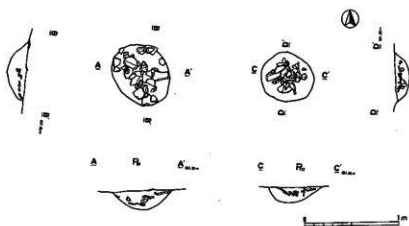


図64 P89・123 (1:40)

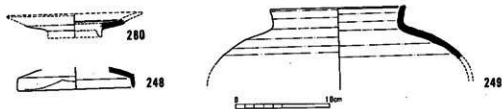


図65 P89出土遺物 (1:4)

④ P123 (図64・66, 写真70・79)

P89と2mほど離れて位置し、規模は、67cm×54cm、深さ21cmの断面形は皿状のピットである。内部にはP89と同様土器片の集積がみられたが、やはりすべて須恵器と灰釉陶器片で土師器は一点も見当たらない。また須恵器大甕の中に、P89のものと接合できるものもことから、両ピットの時期は同じとみてよいだろう。遺物は、酸化焼成となったため褐色を呈する須恵器大甕の1個体を含む、甕38片、灰釉陶器耳皿、および瓶の破片それぞれ1個体分がある。耳皿は長径9.5cm、中心部の幅7.4cm、器高1.7cmのもので、底は回転糸切りの平底である。灰釉陶器ではあるが、色調は黒灰色で須恵器と見紛うほどである。灰釉は内面に施してあるが、十分には溶解していない。

(篠崎 健一郎)

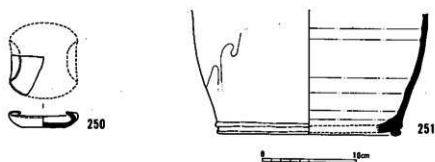


図66 P123出土遺物 (1:4)

⑤ P170 (図67・68・69, 写真69・80)

調査地区北東隅にあるビット群の中の北東端に、P25の北東3.2mに位置するそら豆形のビットである。中心線は真北に向け、長径180cm、短径110cm、深さ16cmである。断面は周辺部が浅く、中心部が深い、一段の段がついている。

遺物はビットの北側東寄りに3グループに集積された状態で検出され、土師器・黒色土器の2種があり、10個体のうち耳皿1と小甕1を除いて、すべて杯であるのが特長である。耳皿は全体が黒色の高台のある品で、長径9.4cm、器高3cmである。

成形の手順としては、本体となる円盤をロクロで作り、高台を付けロクロ調整をしてから取り上げて耳を折り曲げる。内面を調整するという順であろう。内面には中心から放射状に暗文がつけられているが、これは生乾きのとき特に強く磨くのである。小型の甕は器高10cm、口径9.5cm、丸底である。手づくねで表面に指圧痕を残す。底部が厚く口縁に近づくにつれて薄い。口縁部はやや作りが粗雑で凹凸が多い。杯は小型の(252)と(253)を除く6個体が黒色土器である。また黒色の杯は全体が \cap の字形に開く付高台を持っているのも特長的である。最小のNo.5とNo.7は同形同大で口径10.2cm、器高4cm、最大のNo.9は径15.8cm、器高7.8

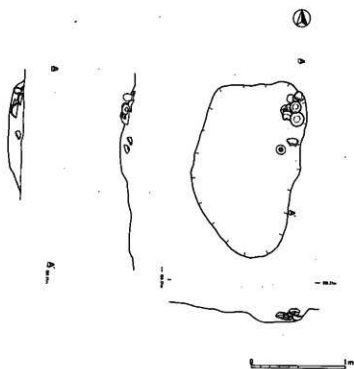


図67 P170 (1:40)

cm、椀形の整った形である。このような器がそろって、しかもほぼ完璧で出土していることや、ピットの大きさや形状からみて、P170は墓塚であることは間違いないであろう。

(篠崎 健一郎)

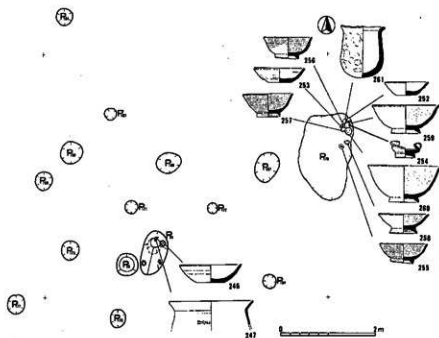


図68 P25・170遺物出土状況 (1:80 遺物 1:8)

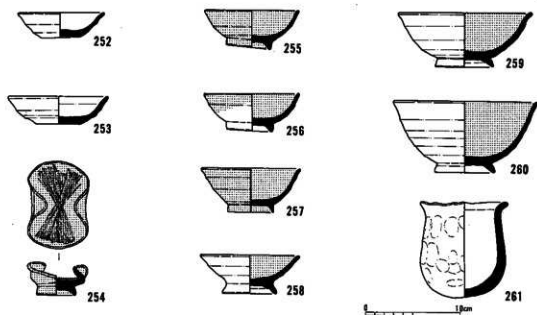


図69 P170出土遺物 (1:4)

● P170出土の黒色土器

P170からは、7点の黒色土器が出土している。そのうち、258・259の2点は一般に見られる、外面ロクロナデ、内面ヘラミガキの内面黒色の黒色土器である。256・260は、内外面ロクロナデの後に内外面手持ちヘラミガキした内面黒色（256は、外面口縁部も黒色）の黒色土器、254・255・257は、内外面ロクロナデの後に内外面手持ちヘラミガキした内外面黒色の黒色土器である。254・255・257は、一般に見られる黒色土器（内面黒色土器）とは異なっており、内外面及び器内まで黒色であり、ヘラミガキも丁寧で、高台までヘラミガキしている。また底面までもヘラミガキしているもの(258)も見られる。焼成も堅緻で瓦器質に近似するものも見られる。これは、畿内で見られる黒色土器の手法に類似しており、おそらく256・260も含め、畿内の黒色土器の影響を受けた黒色土器と考えられる。

(島田 哲男)

⑤ P196 (図6・70, 写真54・81)

調査地区東部の住居址群にある8号住居址と9号住居址の間、切りあう8号の東壁と9号の北壁にまたがってあるピットである。96cm×86cm、深さ23cmのやや楕円形で、中から小型の甕1と砥石が出土している。甕は口径21cm、器高も21cmの土師器で、ロクロなどによって調整しており、焼成良好で明るい褐色を呈する。砥石は長さ30cm、最大幅10.5cm、厚さ4.3cmの、扁平な砂岩である。これは荒砥として使用したわけで、例えば刀のような大型の刃物も研磨できるわけである。このピットもあるいは墓塚かも知れない。

(篠崎 健一郎)

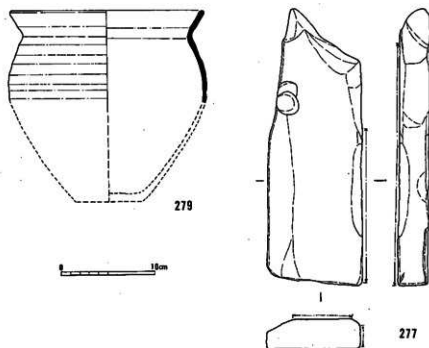


図70 P196出土遺物(1:4)

⑦ P194 (図6・71, 写真79)

本址は、調査区東部西側に位置し、6号住居址南西コーナーに切られている。砂礫層を掘り込み、規模は42×38cm、深さ50cmでほぼ円形である。埋土は、黄褐色砂粒を含む灰黒色土である。遺物はビット内東側の10cm程度検出面より下った所で、ロクロ成形を明瞭に残す須恵器杯Cが出土した。本址は、遺物等よりⅪ期と思われる。

(島田 哲男)



図71: P194出土遺物 (1:4)

⑧ P202 (図1・72, 写真79・81)

本址は、調査区東部中央東寄りに位置し、溝3を切っている。黄褐色砂礫層を掘り込み、規模は32×30cm、深さ16cmでほぼ円形である。埋土は、黄褐色砂粒をわずかに含む黒色土である。遺物は上層検出面直下、ビット中央部付近より、黒色土器杯Cと身の子を欠損する刀子が、重なり出土した。本址は遺物等よりⅪ期と思われる。

(島田 哲男)

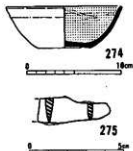


図72 P202出土遺物
(1:4 275 1:2)

⑨ P264 (図19・73, 写真79)

本址は調査区南西部中央に位置し、19号住居址南西コーナーに切られている。砂礫層を掘り込み、規模は88×80cm、深さ5cmでほぼ円形を呈する。埋土は黄褐色土粒、小礫を含み、炭粒を少量含む黒褐色土である。遺物は中央付近より、ロクロ成形を明瞭に残す須恵器杯Cと鉄棒が1ヶ出土した。本址は遺物等よりⅪ期と思われる。

(島田 哲男)



図73 P264出土遺物 (1:4)

(2) 溝 址

溝址は1~4の4本すべて発掘区北側で検出された。

① 溝 址 1

発掘区北西で検出された。本址は3・4号住居址を切っており、1号住居址東西両側~11号住居址北側まで22mに渡って延びる溝址で、3箇所(1・2号住居址南側、3号住居址東側、4号住居址東隣付近)で1号住居址東側~11号住居址北側までの溝に対し110°~115°で西へ枝分かれし、1・2号住居址の南西側で枝分かれした溝に対し110°北側へ枝分かれしている。また、所々で小さく枝分かれしている。溝は幅30~60cmで深さは10~25cmを測る。本址の埋土は、黄褐色土粒を含む暗褐色土である。遺物は何も検出されなかった。本址は規則的な角度で枝分かれしているが何の為のものか不明である。

本址の時期ははっきりしないが、中世か、近世頃のものと考えられる。

(島田 哲男)

② 溝 址 2 (図70, 写真79)

発掘区北東隅で検出された。本址は32号住居址に切られ、N35°Wに傾いて10mに渡って延びる溝址である。規模は、幅が北側先端30cm、南側先端60cm、最大幅90cmで深さ20~30cmを測る。本址の埋土は、砂礫を含む黒色土である。本址からは32号住居址南側20cmで底部回転ヘラケズリ、一部手持ちヘラケズリの須恵器杯Aが出土した。

本址の時期は、出土遺物等よりⅧ期(8C)頃と考えられる。

(島田哲男)



図70 溝址2出土遺物(1:4)

③ 溝 址 3

本址は9号住居址内より南側へ10mに渡って延びる溝址である。本址は、 $\frac{1}{2}$ 以上を9号住居址に切られている。規模は、幅10~30cm、深さ10~30cmを測る。本址の埋土は、砂礫を含む黒褐色土である。本址からは、遺物は何も検出されなかった。

本址の時期は、9号住居址に切られているのでⅧ期(8C)以前と考えられる。

(島田哲男)

④ 溝 址 4

発掘区北東中央、8号住居址の南壁東寄りから4.5mに渡って延びる溝址である。本址は8号住居址に切られている。規模は、幅20~25cm、深さ10~20cmを測る。本址の埋土は砂礫を含む黒褐色土である。本址からは、遺物は何も検出されなかった。

本址の時期は、8号住居址に切られているのでⅧ期(8C末~9C中葉)以前と考えられる。

(島田哲男)

⑤ 溝 址 5

発掘区北東中央西寄りに7号住居址南側コーナーから3mに渡って延びる溝址である。本址は7号住居址、P208・P277に切られている。規模は、幅15~30cm、深さ10~20cmを測る。本址の埋土は砂礫を含む黒褐色土である。本址からは、遺物は何も検出されなかった。

本址の時期は、7号住居址に切られているのでⅨ期(10C後半)以前と考えられる。

(島田哲男)

(3) 暗 渠 (図1)

暗渠は1~3まで検出された。すべて時期は近代である。暗渠1は発掘区西側やや南寄り隅で暗渠2、3は発掘区南東中央で検出された。暗渠2は暗渠3に切られている。暗渠2はT字形に交差した形態のもので、暗渠1~3ともに掘り方は、底が平なU字状である。暗渠1は中央に土管が有り、周囲をレンガ片、瓦片、礫で覆っている。幅30cm、深さ30cmを測る。暗渠2は、溝を掘り、底に径4~8cmの丸太材を2~4本を埋め、その上層を小礫で覆って造られており、南北方向のものは、幅30~50cm、深さ20~40cm、東西方向のものは、幅50~60cm、深さ30~40cmを測り、東西方向の方がやや広く掘られている。暗渠3はすべて小礫で埋められて造られており、幅20~30cm、深さ20~30cmを測る。(深さはすべて、検出面からのもの。)

(島田哲男)

3 前田遺跡出土の炭質物、骨片、その他について

炭質物は殆んど全て木材の炭化物であったので、その鑑定には双眼実体顕微鏡を用いて木口面と径目面を調べて決定した。但し微小片であったり、炭化直前の炭は困難であり、例としてミスナラかコナラか区別がむずかしく唯ナラ材として記載したものが多し。これ等はコナラ亜属とした方がよいかも知れない。針葉樹の炭化物は、広葉樹以上に困難でマツのような樹筋道に特徴のあるものは別として、他は断定しにくいものが多く唯針葉樹とのみ記載した。

(森 義 直)

表1 前田遺跡出土炭化物・骨片・その他一覧

住居址 番号	出土炭化物・骨片その他	住居址 番号	出土炭化物・骨片その他
1住	ナラ材	15住	アカマツ材(多) マメガキ材(混入か?)骨細片
4住	クリ材、針葉樹1種、哺乳類の足の骨片他 床面の灰中に緑色顔料CuCO ₃ P内にカエデ材、カマド南P内鉄滓	16住	ニホンジカ雄(角と足の骨の一部)
		17住	クリ材
5住	クリ材(多)、針葉樹小片	18住	ナラ材、クルミ材
6住	中型哺乳類の足骨(シカ?) 壺内にも骨粉	19住	クリ材(多)、ナラ材、マメガキ材、モミ材、 スギ材?、鉄滓(ガラス化の部分も付着)
7住	クルミ材、モミ材その他 中型哺乳類足骨片、マメガキ材	23住	クリ材、ナラ材
		25住	針葉樹材2種
8住	ナラ材、針葉樹材2種 小型哺乳類の骨片	26住	クリ材、カマド内アカマツ材(多)
		27住	哺乳類の足骨片
9住	クリ材、ナラ材、骨細片	28住	アカマツ材(多)、ナラ材
10住	クリ材	29住	クリ材、大P内に哺乳類骨片
11住	ゴヨウマツ材	32住	クリ材、ナラ材、カエデ材、ヤマウルシ材 アカマツ材(多)、他針葉樹材2種
12住	クリ材		
13住	ナラ材	P1内	クリ材(多)、針葉樹材小片
14住	針葉樹材の微小片	P5内	小型哺乳動物の骨片

4 ま と め

前田遺跡は、大峰山から流れ出る宮ヶ沢の小扇状地の、南向きの緩斜面に展開していた。七世紀末から12世紀—平安時代末以降までの古代農村のあとである。検出された竪穴住居址の数は36軒、建物址は4軒であるが、調査地区の中央にかなり広い面積の調査不能部分があり、その下にはおそらくまだ数軒の遺構があるものと思われる。遺跡の土質は北部および西部は粘土質で、晴天には固くしまり、雨が降るとどろどろになって、なかなか乾かない。また南部の低い方からは地下水が湧くという、良くない条件の下での作業であった。

竪穴住居址の時期は、Ⅶ期2、Ⅷ期5、Ⅸ期2、Ⅹ期4、Ⅺ期8、Ⅻ期6、Ⅼ期3、不明4であるが、同時に存在したものは、もっとも住居数の多い10世紀あたりでも、調査地区内に限ってまず4軒ほどではなからうか。さまざまな形で切り合っている東部の住居址群のうち、9—11世紀に属する7軒、その上の8—11世紀に属する5軒につき、切り合い関係に主に、遺物の形を従にして、その前後関係をみると下のようになる。

30号→25号→24号・23号→27号→26号→29号 35号→9号→8号→7号→6号

23号は他の住居址と切り合い関係はないが、規模が小さいところから、25号から23号・24号と二つに家族に分れたのかも知れない。

この地の背後を流れ下る宮ヶ沢の北方一帯は、平安時代中期の建立になる仁科御厨で、その頗腹の宮である仁科神明宮は、沢をへだてたすぐ北にある。その仁科御厨の草創期とこの遺跡となった農村の時期は一致するのである。しかし、その村か御厨の範囲内にあったかどうかは微妙なところで、すぐ隣であるからといって御厨の村であるとは限らないであろう。宮ヶ沢の語源について宮分け沢のつづまった呼び方であるという説がある。つまり仁科神明宮の地の他の宮（總高神社か？）の界がこの沢であるということであるか、この考えに従えば遺跡の村は御厨ではないことになる。

ここは集落名山の寺が示すように、中世あたりに寺院があったかと思われ、集落内には山の寺はじめ、寺であることを示す地名も残っているが、劇場整備はそこまでおこなわれなかった。また前田の地名は、中世に於ける土豪の館に関係するといわれるが、もしそうだとすれば、遺跡となった村がどこかへ引き移り、家がなくなった後ここは田になったと考えられよう。

今回の発掘調査は行政発掘であったために、制限されることも多く、意をつくすこともできなかったが、それなりの成果はあげられたように思われる。その1は、大町市内でははじめての12世紀の住居址まで調査することができたことである。これは豪族仁科氏の支配を支えた農民層の実態を知る上での、貴重な資料になろう。また当時の墓塚とみられる遺構を調査でき、その中から耳瓦、内外面黒色土器の出土があったことなど、いずれも大町市内での最初の知見である。

(藤崎 健一郎)

住居地名	25 住		26 住		27 住		28 住		29 住		30 住		31 住		32 住		33 住		34 住		35 住		36 住 ?	
	X 期	方 形	X 期	方 形	X 期	方 形	X 期	方 形	X 期	方 形	X 期	方 形	X 期	方 形	X 期	方 形	X 期	方 形	X 期	方 形 ?	X 期	方 形 ?	X 期	方 形 ?
平 原 (長崎x福岡)	6.2x5.7	4.8x3.1	S 88° E	S 79° E	N 90° E	S 88° E	4.9x4.5	4.9x4.4	4.9x4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
主軸方向(ヤマド 方向)越後より	S 88° E	S 88° E	S 79° E	S 79° E	N 90° E	S 88° E	S 88° E	S 88° E	S 88° E	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カマド 形 類	粘土カマド	石砌土柱カマド	石砌土柱カマド	石砌土柱カマド	石砌土柱カマド	石砌土柱カマド	石砌土柱カマド	石砌土柱カマド	石砌土柱カマド	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カマド 位置	東壁対称中央	東壁対称中央	東壁対称中央	東壁対称中央	東壁対称中央	東壁対称中央	東壁対称中央	東壁対称中央	東壁対称中央	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
主 柱 穴	1	2	3	3	4	2	2	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
周 溝	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
備 考	灰函上30cmで内 壁を築き、灰函 に巻いた切石 に巻いた切石 を切る。30 柱を切る。		2柱に切られる 2柱を切る 2柱を切る		2柱に切られる 2柱を切る 2柱を切る		2柱に切られる 2柱を切る 2柱を切る		2柱に切られる 2柱を切る 2柱を切る		2柱に切られる 2柱を切る 2柱を切る		2柱に切られる 2柱を切る 2柱を切る		2柱に切られる 2柱を切る 2柱を切る		2柱に切られる 2柱を切る 2柱を切る		2柱に切られる 2柱を切る 2柱を切る		2柱に切られる 2柱を切る 2柱を切る		2柱に切られる 2柱を切る 2柱を切る	
	杯	-	1	1	1	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土 瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鍋	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
小形鍋	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杯	-	1	2	4	1	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土 瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杯	2	1	2	-	-	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土 瓶	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鍋	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土 瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鍋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土 瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鍋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土 瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鍋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土 瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鍋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土 瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鍋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土 瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鍋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土 瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鍋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土 瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鍋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土 瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鍋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土 瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鍋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土 瓶	-	-	-	-	-																			

表3 前田遺跡建物址一覽

(1尺=30cm, 1坪=3.3㎡, 尺:坪に關しては、小數第2位で切り捨て)

番号	形状	面積		柱間寸法		平面積㎡ (坪)	棟方向 (桁行方向) (南北より)	地方の規模(cm)・形 ()内は柱痕存在数	遺物	備考
		桁行(m) (尺)	梁行(m) (尺)	桁行一間(m) (尺)	梁行一間(m) (尺)					
1	■ J 5×3	7.6~8.1 (25.3~25.9)	5.1 (17.0)	1.0~2.0 (3.3~6.6)	1.1~1.5 (3.6~5.0)	40.04 (12.1)	N 6° W	最大91×82、最小50×39 土師砂小片 瓦片40枚以内	なし	3、4号住居址に切られる Ⅱ期(10C)以前
2	■ G 3×2	6.8 (22.6)	5.5 (18.3)	1.8~2.5 (5.3~8.3)	2.5 (8.3)	37.4 (11.3)	N 2° E	80×70、長さ40~50 土師瓦片	なし	17、21号住居址に切られる Ⅱ期(10C)以前
3	■ E 2×2	5.2 (17.3)	5.0 (16.6)	2.0 (6.6)	1.5~2.5 (5.0~8.3)	26.0 (7.8)	N 57° W	最大90×82、最小90×48 長さ40~60	なし	
4	■ G 3×2	7.0 (23.3)	4.5~5.0 (15~16.0)	1.8~2.5 (6.0~8.3)	1.8~2.2 (6.0~7.3)	33.25 (10.0)	N 8° W	70×60、長さ50~60 土師瓦片	なし	26、27、28、29号住居址に切られる Ⅱ期(10C)以前

表4 新田遺跡建物出土ピット一覽

番号	形状	長さ (cm) (尺・寸・分)	土層	遺物	時期	備考
25	樽円形	95×52	黄褐色砂粒を含む褐色土 黒色土	土師砂片1、小形銅1、土師器 黒色土器片	Ⅱ期	主軸 N 19° E、墓域か？
35	円形	20×20	黒褐色土	内耳環1	中世	形状は柱穴状であるのでP 179、180、181、182、183、36で 柱穴群(遺物址)であるか？
89	ほぼ円形	56×51	灰白色砂、礫を含む砂質黒色土	灰銅器蓋1、須恵器須恵Ⅰ 片1	Ⅲ期	ピット内に大銅片が埋蔵する状態である。 主軸 N 65° W、須恵器大銅片 P 123 と重合するもの有り、同一時期と考えられる。
123	ほぼ円形	67×54	灰白色砂粒を多く含む、礫を含む砂質黒色土	灰銅器耳皿1、瓦1、須恵器 大銅片	Ⅲ期	ピット内に大銅片が埋蔵する状態である。 主軸 N 28° W、須恵器大銅片 P 83 と重合するもの有り 同一時期と考えられる。
170	不規則円形	180×110	黄褐色砂粒、礫を含む砂質黒色土	黒色土器杯5、埴1、耳皿1 土師器 電2、手穴(形不明)1	Ⅳ期	主軸 N 0°、墓域か？遺物西側北寄りに集中。
194	円形	42×38	黄褐色砂粒を含む黒色土	須恵器杯1	Ⅲ期	6号住居址に切られる。
198	やや楕円形	96×86	黄褐色砂粒、小礫を含む黒褐色土	小形銅1、磁石1	Ⅰ期	8、9号住居址を切る、墓域か？ピット主軸方向にやや 大形の磁石が載る、主軸 N 27° W。
202	円形	32×30	灰褐色砂粒を含む褐色土	黒色土器杯1、刀子1	Ⅲ期	遺物は杯、刀子とも検出面出土。
264	円形	88×80	黄褐色砂粒、小礫を含む黒褐色土	須恵器杯、鉄棒1	Ⅲ期	19住に切られる。

表5 前田遺跡遺構内出土陶器土器一覽

H-1土器類, Ko-黒色土器, S-須原器, Ka-穴吹陶器類, R-磁器類

No	図番	出土地点	器種・器形	高さ		色		土	成形	裏形上の特徴		備考
				口徑	底徑	外面	内面			外面	内面	
1	5	1号住居址 1層 S・竪D	(15.0)	-	-	灰色	灰色	砂粒少々含む。	底面:ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	
2	5	1号住居址 1層 竪.4・7	S・杯A	15.0	-	5.3	灰色	砂粒少々含む。	底面:ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ (陶器同転)	
3	5	1号住居址 竪面 No.2	S・杯A	12.3	7.0	4.7	灰色	大粒な砂粒を多量に含む。	底面:ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ (陶器同転)	
4	5	1号住居址 竪面 No.11	S・杯A	13.5	5.1	4.8	白灰色	大粒な砂粒を多量に含む。	底面:ヘラケズリ の境多量。	ロクロナデ	ロクロナデ	タタキ(平 行向き直文)
5	5	1号住居址 竪面 No.8	S・高壇	20.0	-	-	白灰色	砂粒・小石を含む。	胴面を杯部にはり つけ、胴に凹転へ ラケズリ。	ロクロナデ	ロクロナデ	
6	5	2号住居址 No.10 2号住居址 P.11	Ko・酒杯	-	9.6	-	灰・赤褐色 脚:赤褐色	石灰・雲母・縦砂粒 殻・小石を少量に含む。	杯底と胴面を付けた後、胴部外 上半部をラケズリし、その後下半 部をヘラで磨き、その残部は 以下はヘラナデ。	ロクロナデ	ロクロナデ	
7	5	1号住居址 竪面 No.5 1号住居址 No.5	H・盃F	15.5	-	23.0	暗褐色	砂粒を含む。	ヘケリ(口縁部はヨコ、胴部は 下はタケ)	ロクロナデ	ロクロナデ	
8	5	1号住居址 No.14	H・盃F	15.4	4.0	-	口縁:赤褐色 底面:赤褐色	砂粒・雲母殻を含む。	口縁部は横転ヘケリナデ 胴部はヘケリ(タケ) 底面は横転ヘケリナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	
9	44	3号住居址 No.1	Ko・杯C	13.2	6.0	4.3	暗褐色	砂粒を含む。	底面:凹転糸切り	ロクロナデ	ヘケリガキ	
10	44	3号住居址 P ₂	Ko・杯C	13.4	5.5	4.0	白色	砂粒を含む。	底面:凹転糸切り	ロクロナデ	ヘケリガキ	
11	44	3号住居址 1層	Ko・杯C	-	4.7	-	赤褐色	灰石粒、石灰粒、砂粒	底面:凹転糸切り	ロクロナデ	ヘケリガキ	
12	44	3号住居址 No.2	Ko・杯C	-	4.4	-	赤褐色	灰石粒、石灰粒、砂粒	底面:凹転糸切り	ロクロナデ	ヘケリガキ	
13	44	3号住居址 No.2	Ko・杯B	14.3	5.4	4.1	明褐色	雲母、砂粒を含む。	底面:凹転糸切り	ロクロナデ	ヘケリガキ	
14	44	3号住居址 1層	Ko・杯B	-	5.2	-	灰吹褐色	灰石粒、石灰粒、砂粒を 多量に含む。	底面:凹転糸切り	ロクロナデ	ヘケリガキ	
15	44	3号住居址 No.8	H・杯C	-	5.9	-	赤褐色	砂粒、雲母を多量に含む。	底面:凹転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	
16	44	3号住居址 No.3 P ₁	H・杯C	-	5.5	-	灰褐色	灰石粒、石灰粒、砂粒を 多量に含む。	底面:凹転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	
17	44	3号住居址 No.3	H・杯C	-	5.6	-	暗褐色	砂粒を多量に含む。	底面:凹転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	
18	44	3号住居址 No.5	H・杯C	-	6.0	-	赤褐色	雲母、砂粒を多量に含む。	底面:凹転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ (ロクロナデ)	

No.	図号	出土地点	器種・器砂	法		量		色		土	成	形		備考
				口径(㎜)	底径(㎜)	高さ(㎜)	底径(㎜)	外	内			外	内	
19	44	3号住居址 №.1 №.2	H・甕 S・PC	21.0	10.2	-	-	赤褐色	赤褐色	砂粒を多量に含む。			口縁部はロクロナデ。肩部・胴部は黒い、ハケム(タテ)。底部はヘラケズリの状態。イナデ。	
20	32	4号住居址 I層	S・PC	(13.9)	(7.2)	5.0	-	赤褐色・ 白灰色	赤褐色・ 白灰色	石灰粒、長石粒、砂粒を多量に含む。			ロクロナデ	
21	32	4号住居址 I層	S・PC	-	6.0	-	-	白灰色	白灰色	砂粒を多量に含む。	底部：回転糸切り		ロクロナデ	
22	32	4号住居址 №.5	Ko・PC	12.5	5.2	4.8	-	赤褐色	黒色	2~4mmの小石と砂を含む。	底部：回転糸切り		ロクロナデ	
23	32	4号住居址 №.5 カマド	Ko・PC	13.3	5.9	4.7	-	明褐色	黒色	少量の砂、霰粒を含む。	底部：回転糸切り		ロクロナデ	
24	32	4号住居址 №.3 P ₁	Ko・PC	12.1	3.0	4.3	-	赤褐色	黒色	2~3mmの小石と砂粒を含む。	底部：回転糸切り		ロクロナデ	
25	32	4号住居址 №.2	Ko・PC	12.3	5.7	4.5	-	赤褐色	黒色	2~3mmの小石と砂を含む。	底部：回転糸切り		ロクロナデ	
26	32	4号住居址 №.1	Ko・PC	12.7	5.8	4.0	-	明褐色	褐色	砂粒を含む。	底部：回転糸切り		ロクロナデ	
27	32	4号住居址 №.5 カマド	Ko・PC	13.4	6.0	4.6	-	明褐色	黒色	霰粒、砂を含む。	底部：回転糸切り		ロクロナデ	
28	32	4号住居址 №.10 N14	Ko・PC	16.9	7.5	5.0	-	明褐色	褐色	砂を多量に含む。	底部：回転糸切り		ロクロナデ	
29	32	4号住居址 №.10	Ko・PC	13.1	-	-	-	白褐色	黒色	霰粒、砂粒を多量に含む。			ロクロナデ	
30	32	4号住居址 カマド内	Ko・PC	12.4	-	-	-	明褐色	黒色	砂粒を含む。			ロクロナデ	
31	32	4号住居址 №.15	Ko・PC	12.0	-	-	-	淡黄褐色	黒色	長石粒、石灰粒、霰粒、砂粒を多く含む。			ロクロナデ	
32	32	4号住居址 I層	Ko・皿B	12.0	-	-	-	赤褐色	褐色	長石粒、石灰粒、霰粒、砂粒を多く含む。			ロクロナデ	
33	32	4号住居址 P ₁	Ko・PC	-	8.3	-	-	白黄褐色	黒色	長石、石灰、霰粒、砂粒を多く含む。	底部：回転糸切り		ロクロナデ	
34	32	4号住居址 P ₁	Ko・PC	-	5.8	-	-	赤褐色	黒色	長石粒、石灰粒、砂粒を多く含む。	底部：回転糸切り		ロクロナデ	
35	32	4号住居址 №.3	Ko・PC	-	5.7	-	-	赤褐色	黒色	長石粒、石灰粒、砂粒を多く含む。	底部：回転糸切り		ロクロナデ	
36	32	4号住居址 №.5	Ko・PC	-	6.4	-	-	淡赤褐色	黒色	長石粒、石灰粒、霰粒、砂粒を多く含む。	底部：回転糸切り		ロクロナデ	

No	図番	出土地点	器種・器形	法		色		土	成	形		考
				口徑	底徑	最大通径	脚高			外	内	
37	32	4号住居址 灰国	Ko・杯B	-	-	白濁色	褐色	長石粒、石英粒、砂粒を多く含む。		ロクロナデ	へうしがキ	
38	32	4号住居址 №12	H・杯C	11.9	5.0	赤褐色	赤褐色	長石粒、石英粒、砂粒を多く含む。	底面：凹陥糸切り	ロクロナデ	へうしがキ	
39	32	4号住居址 №17	H・杯C	(13.0)	(6.4)	白濁色	白濁色	長石粒、石英粒、凝鉄質、砂粒を多く含む。	底面：凹陥糸切り	ロクロナデ	へうしがキ	
40	32	4号住居址 №5 №7・15 カド南P内 カマ下内	H・ 小型D	(14.9)	7.9	暗褐色	暗褐色	砂粒、葉目を多量に含む。	底面：凹陥糸切り	カネノ、ロクロナデ	口縁部カネノ 肩以下ロクロナデ	
41	32	4号住居址 №4	H・ 小型D	-	5.6	暗褐色	暗褐色	小石、葉目を多量に含む。	底面：凹陥糸切り	カネノ	ロクロナデ	
42	32	4号住居址 №9	H・罐J	(18.5)	-	赤褐色	赤褐色	長石粒、石英粒、凝鉄質、砂粒を含む。		ロクロナデ	カネノ	
43	32	4号住居址 I層	H・罐K	(20.7)	-	褐色	褐色	砂粒を含む。		口縁部ロクロナデ 肩部・胴部ロクロナデの後タテ 方向ハケム	ロクロナデ	
44	32	4号住居址 №17	H・罐J	20.2	-	赤褐色	赤褐色	長石粒、石英粒、凝鉄質、砂粒を多く含む。		口縁部ロクロナデ 肩部・胴部ハケム(タテ)	口縁部カネノ(ロコ) 肩部・胴部ハケム (ナナメ・ロコ)	
45	32	4号住居址 №19 I層	H・罐	-	8.7	赤褐色	褐色	1~2mmの小石を多量に含む。砂粒を含む。		胴部ハケム(タテ)	胴部・腹部ナデ(方向不明)	
46	32	4号住居址 №8 №9 №14	H・罐K	22.8	-	赤褐色	赤褐色	砂粒を多量に含む。		口縁部ロクロナデ 肩部・胴部ハケム(タテ)	口縁部カネノ 肩部以下ナデ	
48	34	5号住居址 P ₄	Ko・杯C	13.6	5.9	5.0 明褐色	黒色	石英、砂粒、葉目を多量に含む。	底面：凹陥糸切り	ロクロナデ	へうしがキ(暗文)	
49	34	5号住居址 I層	Ko・杯C	15.8	-	褐色	黒色	砂粒、葉目を多量に含む。		ロクロナデ	へうしがキ	
50	34	5号住居址 灰国	H・ 小型D	(11.6)	5.9	明褐色	暗褐色	凝鉄質、葉目を多量に含む。	底面：凹陥糸切り	口縁部・底面ロクロナデ 肩部カネノ	ロクロナデ	
51	34	5号住居址	S・蓋	-	13.0	灰色	灰色	砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	
52	34	5号住居址	S・四耳罐	-	-	赤褐色	暗褐色	砂粒を含む。		タタキノ(平直筒文)	内型	
53	34	5号住居址 I層 灰国	S・四耳罐	-	-	灰色	灰色	長石粒、砂粒を多く含む。		タタキノ(筒子目状文)	内型	

No.	図番	出土地点	部種・部材	法			色		質	土	成	形	外形		備考
				口部	底	高	底	高					内	面	
54	45	6号住居址 Ⅲ13	Ko・杯C	16.2	6.8	—	5.7	暗褐色	黒色	礫母、小石を若干含まれ、 を多量に含む。	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	ヘライガキ	
55	45	6号住居址	Ko・杯C	15.8	6.5	—	5.4	赤褐色	黒色	1cm程度の小石を多量に 含む。	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	ヘライガキ	
56	45	6号住居址 Ⅴ5	Ko・杯C	—	6.1	—	—	赤褐色	黒色	砂粒、炭屑を多量に含む	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	ヘライガキ	
57	45	6号住居址	Ko・杯C	—	5.5	—	—	明褐色	黒色	砂粒を含む。	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	ヘライガキ	
58	45	6号住居址 Ⅷ8	Ko・杯C	—	5.8	—	—	赤褐色	黒色	砂粒、炭屑を多量に含む	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	ヘライガキ	
59	45	6号住居址 カヤ'	Ko・杯C	15.3	—	—	—	明褐色	黒色	砂粒、炭屑を多量に含む				ヘライガキ	
60	45	6号住居址 Ⅷ2	Ko・杯C	(11.8)	—	—	4.0	淡赤褐色	黒色	長石粒、石英粒、砂粒を 多く含む。				ヘライガキ	
61	45	6号住居址	Ko・杯C	—	7.0	—	—	淡灰褐色	黒色	長石粒、石英粒、砂粒を 多く含む。	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	ヘライガキ	
62	45	6号住居址	Ko・杯C	—	5.7	—	—	淡灰褐色	黒色	長石粒、石英粒、凝結炭 粒、砂粒を多く含む。	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	ヘライガキ(簡文)	
63	45	6号住居址	Ko・杯C	—	5.2	—	—	明褐色	黒色	砂粒を多量に含む。	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	ヘライガキ	
64	45	6号住居址 Ⅲ3	H・杯C	12.8	5.4	—	3.5	明褐色	明褐色	少量の砂を含む。	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り(遺文)	
65	45	6号住居址 Ⅲ2	Ko・杯C	12.5	6.2	—	4.5	明褐色	黒色	砂粒を多量に含む。	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	ヘライガキ	
66	45	6号住居址 Ⅲ1	H・小皿盤	—	4.1	—	—	黒褐色	黒褐色	砂粒、炭屑、石英を多量 に含む。	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	
67	45	6号住居址 Ⅳ4	S・杯C	—	5.6	—	—	灰褐色	灰褐色	砂粒を含む。	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	
68	45	6号住居址	Ko・杯B	—	6.1	—	—	明褐色	黒色	砂粒、炭屑、小石を含む	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	ヘライガキ	
69	45	6号住居址 S・蓋E	(16.5)	—	—	—	—	青灰色	青灰色	砂粒を含む。	縁付部分			凹陥未切り	住居址埋没時に 掘入したものと 思われる。
70	45	6号住居址 S・長脚皿	—	12.5	—	—	—	灰色	灰色	砂粒を多く含む。				凹陥未切り	
71	45	6号住居址 Ⅲ11、 小皿盤D	H・ 小皿盤D	15.2	—	—	—	淡青褐色	淡青褐色	砂粒を含む。	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	口縁部高部のみ(口) 胴部凹陥未切り
72	45	6号住居址 H・ 小皿盤D	H・ 小皿盤D	13.6	—	—	—	明褐色	明褐色	砂粒を多量に含む	凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	口縁部のみ(口) 胴部以下凹陥未切り
73	45	6号住居址 H・小皿盤	—	—	9.6	—	—	赤褐色	黒色	砂粒を含む	底部：凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り	凹陥未切り

No	図番号	出土地点	形態・形状	法		色		土質	土	成形	形状		備考
				口部径	底径	外部	内部				外	内	
74	45	6号住居址	S・葦	-	14.2	-	明褐色	赤褐色	砂粒を含む。		外	ヘラナデ	
75	45	6号住居址	S・四耳葦	-	-	-	赤褐色	赤褐色	灰石粒、石粒を含む。一ト粒を下方に含む。		外	カタキメ(筒子目注文)	内
76	45	6号住居址 No.9・10	S・葦	-	(13.2)	-	赤褐色	赤褐色	砂粒を含む。		外	カタキメ(平行面注文)	内
80	35	7号住居址 No.3	Ko・萩C	-	13.9	5.9	4.2	黒色	砂粒を若干含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
81	35	7号住居址	Ko・萩C	-	12.4	5.0	3.4	灰色	砂粒を少量含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
82	35	7号住居址 No.2	Ko・萩C	-	12.5	5.4	3.9	赤褐色	砂粒を少量含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
83	35	7号住居址 No.1	Ko・萩C	-	12.9	5.1	4.0	赤褐色	少量の砂粒、雲母粒を含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
84	35	7号住居址	Ko・萩C	-	16.0	7.2	5.4	黒色	砂粒を少量含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
85	35	7号住居址	Ko・萩C	-	14.3	-	-	赤褐色	砂粒を含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
86	35	7号住居址	Ko・萩C	-	12.4	-	-	赤褐色	砂粒を含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
87	35	7号住居址 No.5	Ko・萩C	-	13.2	-	-	明褐色	砂粒、雲母を多量に含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
88	35	7号住居址 No.2	Ko・萩C	-	14.0	-	-	赤褐色	砂粒を含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
89	35	7号住居址 No.3	H・萩C	-	13.2	-	-	赤褐色	砂粒を含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
90	35	7号住居址	H・小形葦	-	-	5.8	-	明褐色	砂粒を含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
91	35	7号住居址	H・小形葦	-	-	7.3	-	赤褐色	砂粒を含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
92	35	7号住居址 No.4	H・小形葦	-	-	7.4	-	明褐色	砂粒、雲母を多量に含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
93	35	7号住居址	S・双耳葦	-	-	-	緑灰色	赤褐色	赤石粒、砂粒を含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
94	35	7号住居址	S・双耳葦	-	14.8	-	-	褐色	砂粒を少量含む。	底部：凹面・赤切り	外	カタキメ	ヘラナデ
96	17	8号住居址	S・萩A	-	6.0	-	-	青灰色	赤石粒、砂粒を多く含む。	底部：ヘラ切り	外	カタキメ	ヘラナデ
97	17	8号住居址	S・萩A	-	5.5	-	-	赤褐色	赤石粒、砂粒を含む。	底部：ヘラ切り	外	カタキメ	ヘラナデ
98	17	8号住居址	S・萩B	-	9.4	5.6	4.5	赤褐色	赤石粒、砂粒を含む。	底部：凹面・ヘラナデ スリの底付高者	外	カタキメ	ヘラナデ
99	17	8号住居址	H・廣D	-	14.1	16.4	-	茶褐色	赤石粒、石炭粒、砂粒を多く含む。	底部：凹面・ヘラナデ	外	カタキメ	ヘラナデ
100	17	8号住居址	S・葦	-	-	(13.1)	-	赤褐色	赤石粒、砂粒を含む。	底部：凹面・ヘラナデ	外	カタキメ	ヘラナデ

No	図番号	出土地点	器種・器形	法			量		色		土	成	形		備考
				口径 ϕ	底径 ϕ	最大径 ϕ	底面 ϕ	外面 ϕ	内面 ϕ	外			内		
101	17	8号住居址	S・瓦葺	26.0	-	27.0	-	赤褐色	赤褐色	大粒の砂粒を含む		口縁部と胴部下チキム	口内	口内	
102	17	8号住居址 I層	S・壺	-	8.8	-	-	青灰色	青灰色	長石粒、砂粒を含む。		口内	口内	口内	器入遺物?
103	17	8号住居址 I層	S・壺	-	(11.4)	-	-	青灰色	青灰色	長石粒、砂粒を含む。		口内	口内	口内	器入遺物?
105	10	9号住居址 №.3	H・杯A	12.4	-	4.7	-	黄褐色	黄褐色	長石粒、砂粒を多く含む		口縁部指でのオキヤムニの痕ナド 以下指でのオキヤムニの痕ヘラケズ リネの後ナド	指でのオキヤムニの後ナド		
106	10	9号住居址 №.1	Ko・高杯	12.9	-	-	-	赤褐色	黒色	石灰粒を多く含む。		ヘラミガキ	ヘラミガキ		
107	10	9号住居址 I層	S・壺D	17.0	-	(4.0)	-	赤褐色	赤褐色	長石粒、砂粒を含む。		上面口縁部ヘラケズリ(左) 下面口縁部口内ナド	口内	口内	
108	10	9号住居址 №.1	S・壺 I層	19.2	-	-	-	灰白色	灰白色	細砂粒をわずかに含む。		口縁部口内ナド 以下多量の後堀イナド	口縁部口内ナド		
109	10	9号住居址 I層	H・壺F	16.5	6.0	(15.1)	(25.0)	茶褐色	茶褐色	砂粒を含む。		口縁部ナド(口内) 以下ヘラケス(口内) ナド(口内)	口縁部ナド 以下ヘラケス(口内) ナド(口内)		
110	10	9号住居址 P ₂	H・壺	-	7.3	-	-	赤褐色	赤褐色	砂粒、礫母、小石を多量 に含む。		ヘラミガキ	ナド(口内)		
111	10	9号住居址	S・壺	-	(0.8)	-	-	赤褐色	赤褐色	長石粒、砂粒を含む。		口内	口内	口内	器入遺物
112	10	9号住居址 №.4	H・壺D	20.4	-	-	-	灰黄褐色	灰黄褐色	長石粒、礫母粒、石灰粒 砂粒を含む。		ナド(口内)	ナド(口内)	ナド(口内)	
113	10	9号住居址 №.4	H・壺D I層	20.8	6.2	19.4	(32.0)	茶褐色	茶褐色	長石粒、石灰粒、礫母粒 砂粒を含む。		ナド(口内)	ナド(口内)	ナド(口内)	
115	12	10号住居址 I層	H・杯A	13.4	-	4.8	-	黄褐色	黄褐色	長石粒、礫母粒、砂粒を 含む。		(ヘラナド)	ヘラミガキ(口内)		
116	12	10号住居址	S・杯A	(13.0)	-	-	-	灰白色	灰白色	長石粒、砂粒を含む。		口内	口内	口内	
117	12	10号住居址	S・杯B	14.6	10.4	-	3.6	灰色	灰色	長石粒、砂粒を含む。		口内	口内	口内	
118	12	10号住居址	S・杯B	-	8.2	-	-	灰色	灰色	長石粒、砂粒を含む。		口内	口内	口内	
119	12	10号住居址 床面	S・壺D	(17.0)	-	-	-	灰色	灰色	長石粒、砂粒を含む。		上面口縁部ヘラケズリ	口内	口内	
120	54	11号住居址 灰層 №.2	H・皿C	9.5	4.2	-	2.0	明褐色	明褐色	若干の砂粒を含む。		口内	口内	口内	
121	54	11号住居址	H・皿C	8.9	3.6	-	2.0	暗褐色	暗褐色	少量の砂粒を含む。		口内	口内	口内	
122	54	11号住居址 №.4	H・皿C	9.7	4.5	-	2.7	褐色	褐色	若干の砂粒を含む。		口内	口内	口内	

No.	図番	出土地点	器種・形状	法			量		色		断面	土	成形	形状上の特徴		備考
				口径mm	底径mm	最大径mm	部高mm	全高mm	断面外	断面内				外	内	
123	54	11号住居址 №3	H・杯B	14.7	6.6	-	6.0	赤褐色	赤褐色	断面	砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り 縁付適合	口径ナナデ	(へらミガキ)		
124	54	11号住居址	Ko・杯B	-	(5.5)	-	-	茶褐色	黒色	断面	砂粒を含む。	底部：凹縁糸切り 縁付適合	口径ナナデ	へらミガキ		
125	54	11号住居址	S・杯C	12.4	5.8	-	4.1	灰色	灰色	断面	砂粒を若干含む。	底部：凹縁糸切り	口径ナナデ	口径ナナデ		
126	54	11号住居址 №1	Ka・碗	14.8	6.7	-	5.0	白灰色	白灰色	断面	灰石粒、砂粒をわずかに含む。	底部：凹縁糸切り 縁付適合	口径ナナデ	口径ナナデ		
127	54	11号住居址	Ka・碗	-	(7.4)	-	-	白灰色	白灰色	断面	灰石粒、砂粒をわずかに含む。	底部：付適合	口径ナナデ	口径ナナデ		
128	54	11号住居址	Ka・碗	-	(7.5)	-	-	白灰色	白灰色	断面	灰石粒、砂粒をわずかに含む。	底部：付適合	口径ナナデ	口径ナナデ		
129	54	11号住居址	S・四耳	14.1	-	-	-	黄灰色・赤灰色	断面	砂粒を多く含む。		口径ナナデ	口径ナナデ			
130	22	12号住居址	S・壺	26.0	-	-	-	灰色	灰色	断面	灰石粒、砂粒を多く含む。		口径ナナデ	口径ナナデ		
131	23	13号住居址	S・壺D	13.6	-	-	3.35	濃灰色	濃灰色	断面	砂粒を含む。		口径ナナデ	口径ナナデ		
132	23	13号住居址	S・杯C	12.1	(7.0)	-	3.6	灰色	灰色	断面	砂粒を若干含む。	底部：凹縁糸切り	口径ナナデ	口径ナナデ		
133	23	13号住居址	H・小形甕D	-	-	(11.8)	-	赤褐色	明褐色	断面	砂粒を含む。		口径ナナデ	口径ナナデ		
134	14	15号住居址	S・杯	(14.7)	-	-	-	灰色	灰色	断面	灰石粒、砂粒を含む。		口径ナナデ	口径ナナデ		
135	14	15号住居址	S・杯B	(7.8)	-	-	-	灰色	灰色	断面	凹縁へツクシの縁付適合		口径ナナデ	口径ナナデ		
136	14	15号住居址	S・壺D	-	-	-	-	白灰色	白灰色	断面	灰石粒、砂粒を含む。		口径ナナデ	口径ナナデ	明付凹縁	
137	14	15号住居址	H・壺D	(17.2)	-	-	-	白灰色	白灰色	断面	灰石粒、砂粒を含む。		口径ナナデ	口径ナナデ		
138	14	15号住居址	H・壺	-	4.0	-	-	赤褐色	赤褐色	断面	灰石粒、石炭粒、砂粒を多く含む。		口径ナナデ	口径ナナデ	凹縁糸切り (器入遺物)	
139	15	16号住居址	S・杯	(12.8)	(7.3)	-	(4.0)	白灰色	白灰色	断面	灰石粒、砂粒を含む。		口径ナナデ	口径ナナデ		
140	15	16号住居址	S・壺D	10.0	-	-	2.95	青灰色	青灰色	断面	砂粒を多く含む。		口径ナナデ	口径ナナデ		
141	15	16号住居址	S・壺D	-	-	-	-	灰色	灰色	断面	灰石粒、砂粒を含む。		口径ナナデ	口径ナナデ		
142	46	17号住居址 №1 灰皿	Ko・杯C	16.0	-	-	-	淡黄褐色	黒色	断面	灰石粒、石炭粒、砂粒を含む。		口径ナナデ	へらミガキ		

No.	団体番号	出土地点	器種・器形	法		土		成	形	形		備考
				口径	底径	器内	器外			外	面	
143	46	17号住居址 P-16	S・杯C	(11.5)	(5.2)	青灰色	青灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹底赤切り	口径ナナデ	口径ナナデ	器入遺物
145	24	18号住居址	S・杯C	3.6	5.5	灰色	灰色	砂粒を含む。	底部：凹底赤切り	口径ナナデ	口径ナナデ	
146	24	18号住居址	S・杯C	5.6	-	白灰色	白灰色	砂粒をわずかに含む。	底部：凹底赤切り	口径ナナデ	口径ナナデ	
147	24	18号住居址	S・杯C	5.2	-	灰色	灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹底赤切り	口径ナナデ	口径ナナデ	
148	24	18号住居址	S・長脚型	7.1	-	青灰色	青灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹底赤切り の浅付高台。	口径ナナデ	口径ナナデ	
149	24	18号住居址	S・長脚型	8.5	-	灰色	灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底部：凹底赤切り の浅付高台。	口径ナナデ	口径ナナデ	
150	24	18号住居址 №3	H・脚	6.5	-	赤褐色	赤褐色	大粒な砂粒を含む。	底部：木葉底	ハケナ(ナナ)	ハケナ(ナナ)	
151	24	18号住居址	H・脚	9.8	-	黄褐色	黄褐色	石末粒、砂粒を含む。	底部：木葉底	ハケナ(ナナ)	ハケナ(ナナ)	
152	24	18号住居址	S・壺	11.2	-	青灰色	青灰色	灰石粒、砂粒を多く含む。	底部：木葉底	ハケナ(ナナ)	ハケナ(ナナ)	
153	24	18号住居址	H・脚 I	22.3	21.0	23.0	黄褐色	灰石粒、石末粒、砂粒を 含む赤色砂粒を多く含む。	ハケナ 底部ナナデ 口縁部・胴上半一部ナナ	ナナ(ヨコ)	ナナ(ヨコ)	
155	47	19号住居址	Ko・杯C	13.5	6.2	-	黒色	砂粒を少量含む。	底部：凹底赤切り	口径ナナデ	口径ナナデ	
156	47	19号住居址 №2	Ko・杯C	13.8	-	-	黒色	灰石粒、石末粒、黄砂粒 砂粒を多く含む。	口径ナナデ	口径ナナデ	口径ナナデ	
157	47	19号住居址 カマド	Ko・杯C	13.1	-	-	黒色	灰石粒、石末粒、砂粒を 多く含む。	口径ナナデ	口径ナナデ	口径ナナデ	
158	47	19号住居址 №2	Ko・杯C	14.6	-	-	黒色	細石末粒、細砂粒を多く 含む。	口径ナナデ	口径ナナデ	口径ナナデ	
159	47	19号住居址 カマド	Ko・杯B	7.4	-	-	黒色	灰石、薄層炭粒、砂粒 粒を多く含む。	底部：付高台	口径ナナデ	口径ナナデ	
160	47	19号住居址 カマド	H・杯B	3.9	-	-	黄褐色	灰石粒、薄層炭粒、砂 粒を多く含む。	底部：付高台	口径ナナデ	口径ナナデ	
161	47	19号住居址 I 脚	S・杯C	12.7	-	-	赤赤褐色	灰石粒、砂粒を含む。	口径ナナデ	口径ナナデ	口径ナナデ	
162	47	19号住居址	Ka・皿	6.5	-	-	白灰色	細砂粒をわずかに含む。	底部：付高台	口径ナナデ	口径ナナデ	
163	47	19号住居址 カマド内 小形器D	H・ 小形器D	(8.9)	(5.3)	(8.5)	(9.4)	黄褐色	灰石粒、黒印粒、砂粒を 含む。	口縁部口径ナナデ 以下ナナ	口縁部ナナデ 以下口径ナナ	黒部 90号器類 (新)ナナ

No.	調査年	出土地点	種類・器形	法		量		色		土質	土	成形	形状		備考
				口径(φ)	底径(φ)	最大径(φ)	器高(φ)	外	内				外	内	
164	47	19号住居址	H・壺	-	8.9	-	-	黄褐色	黄褐色	長石粒、石英粒、砂粒を多く含む。	底部：木炭灰	ヘナリ(ナナ)	上層ナナ 底層ヘナリ(ヨコ)		
166	36	21号住居址	Ko・杯C	14.2	-	-	-	赤赤褐色	黒色	長石粒、石英粒、砂粒を多く含む。		ロクロナデ	ヘナリガキ		
167	36	21号住居址	Ko・杯C	-	6.7	-	-	黒灰色	黒色	長石粒、石英粒、砂粒を多く含む。		ロクロナデ	ヘナリガキ		
168	36	21号住居址	S・杯B	-	9.0	-	-	灰色	灰色	長石粒、砂粒を含む。	底部：回転糸切り 底層：回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ		
169	56	22号住居址	S・四耳壺	-	-	18.0	-	黄灰色	黄灰色	長石粒、砂粒を多く含む。		ロクロナデ	ロクロナデ		
170	56	22号住居址	Ka・花銅覆	-	8.9	-	-	白灰色	白灰色	長石粒、黒色砂粒、砂粒を含む。	底部：竹高台	ロクロナデ	ロクロナデ		
171	39	23号住居址	Ko・杯C	13.0	6.4	-	3.8	茶褐色	黒褐色	砂粒を含む。	底部：回転糸切り	ロクロナデ	ヘナリガキ		
172	39	23号住居址	S・杯B	-	5.2	-	-	赤赤褐色	赤赤褐色	砂粒を含む。	底部：回転糸切り 底層：回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ		
173	39	23号住居址	S・杯C	13.5	5.7	-	3.5	灰色	灰色	長石粒、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ		
174	39	23号住居址	S・杯C	14.6	6.2	-	4.1	黄灰色	黄灰色	砂粒を多く含む。	底部：回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ		
175	39	23号住居址	S・把子杵壺	-	-	-	-	灰色	灰色	長石粒、砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ		
176	39	23号住居址	S・壺	-	-	-	-	灰色	灰色	細砂粒を含む。	底部：回転ヘラナ ズリ。	ロクロナデ	ロクロナデ		
177	39	23号住居址	H・壺L	22.4	3.5	-	26.3	赤褐色	赤褐色	長石粒、石英粒、カッ鉄 粒、砂粒を含む。	口縁部ロクロナデ 胴部ヘラケズリ。	ロクロナデ	ロクロナデ	灰燼層	
178	40	24号住居址	S・蓋D	16.2	-	-	-	淡黄灰色	淡黄灰色	長石粒、砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ		
179	40	24号住居址	S・杯C	16.8	-	-	-	赤褐色	赤褐色	長石粒、砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ		
180	40	24号住居址	H・小型蓋D	-	5.4	-	-	茶褐色	茶褐色	長石粒、砂粒を多く含む。		カキ	ロクロナデ		
181	40	24号住居址	S・蓋	-	9.0	-	-	黄灰色	黄灰色	長石粒、砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ		
182	25	25号住居址	S・蓋D	-	-	-	-	黄灰色	黄灰色	長石粒、砂粒を多く含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	焼付回転	
183	25	25号住居址	S・杯C	13.0	6.3	-	3.5	黄灰色	黄灰色	長石粒、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ		

No.	図号	出土地点	標高・標形	口部	法		量		色		調	土	成	形		備考
					口部	底面	身大	口部	外	内				外	内	
184	25	25号住居址	S・F C	11.5	5.0	-	4.1	青灰色	青灰色	青灰色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。	底面：回転水切り	口部	口部		
185	25	25号住居址	H・小型竪D	15.1	-	15.2	-	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。		口部	口部	口部	
186	25	25号住居址	H・竪M	22.4	-	-	-	赤褐色	赤褐色	赤褐色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。		口部	口部	口部	
187	25	25号住居址	H・竪J	24.3	-	-	-	赤褐色	赤褐色	赤褐色	長石粒、石英粒、砂粒を含む。		口部	口部	口部	
188	25	25号住居址	S・竪	19.7	-	-	-	青灰色	青灰色	青灰色	細砂粒を多く含む。		口部	口部	口部	
190	41	28号住居址	Ko・F C	(19.5)	(5.7)	-	(4.0)	白灰色	黒色	黒色	砂粒を含む。	底面：回転水切り	口部	口部	口部	
191	41	28号住居址	H・F C	(14.0)	-	-	-	明褐色	赤褐色	赤褐色	砂粒を含む。		口部	口部	口部	
193	42	27号住居址 №4	Ko・F C	15.4	6.6	-	4.9	暗褐色	黒色	黒色	砂粒を含む。	底面：(回転水切り)	口部	口部	口部	
194	42	27号住居址 №4	H・F B	15.4	6.4	-	5.1	赤褐色	赤褐色	赤褐色	砂粒を含む。		口部	口部	口部	
195	42	27号住居址	Ko・F C	(16.5)	-	-	-	明褐色	黒色	黒色	砂粒を含む。		口部	口部	口部	
196	42	27号住居址 №1	S・F C	12.8	5.6	-	3.7	白灰色	白灰色	白灰色	砂粒を含む。	底面：回転水切り	口部	口部	口部	
197	42	27号住居址	S・F C	(13.4)	-	-	-	灰色	灰色	灰色	砂粒を含む。	底面：回転水切り	口部	口部	口部	
198	42	27号住居址	S・大竪	-	18.0	-	-	灰色	灰色	灰色	灰石粒、砂粒を含む。		口部	口部	口部	
200	50	28号住居址	Ko・F C	13.3	4.8	-	3.3	明褐色	黒色	黒色	炭粉、砂粒を多量に含む。	底面：回転水切り	口部	口部	口部	
201	50	28号住居址 №9	Ko・竪	15.7	-	-	-	赤褐色	黒色	黒色	灰石粒、石英粒、砂粒を含む。		口部	口部	口部	
202	50	28号住居址 №6	Ko・F B	-	6.1	-	-	淡赤褐色	黒色	黒色	黒石粒、黒石炭粒、明砂粒を含む。	底面：回転水切り 口部：一回転	口部	口部	口部	
203	50	28号住居址	Ko・F C	12.6	4.9	-	3.5	暗褐色	黒色	黒色	砂粒を多量に含む。	底面：回転水切り	口部	口部	口部	
204	50	28号住居址	Ko・F C	12.4	5.0	-	3.45	暗褐色	黒色	黒色	砂粒を多量に含む。	底面：回転水切り	口部	口部	口部	
205	50	28号住居址	H・F B	-	6.9	-	-	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	灰石粒と砂粒を含む。	底面：回転水切り の残材高台	口部	口部	口部	
206	50	28号住居址	Ka・竪	16.8	-	-	-	灰色	灰色	灰色	砂粒を含む。		口部	口部	口部	
207	50	28号住居址	Ka・竪	14.0	-	-	-	灰色	灰色	灰色	砂粒を含む。		口部	口部	口部	

No	図番号	出土地点	製煉・造形	産 色				調 面	胎	土	成 形	上 の 特 徴		備 考
				口徑mm	底径mm	最大mm	器高mm					外 面	内 面	
208	50	28号住居址	Ko・ 小形甕C	10.2	7.0	11.85	12.2	暗褐色	黒色	砂粒を多く含む。	底面：回転糸切り	ロクロナデ	へラミガキ	
209	50	28号住居址	柱・ 小形甕D	-	8.6	16.7	-	暗褐色	暗褐色	金剛目、黒炭目、石英粒を含む。	底面：回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	
210	51	29号住居址 No.10	カ・ H・ No.10	(21.9)	-	(21.4)	-	淡灰褐色	淡灰褐色	葉面粒、石英粒、長石粒、カ・鉄炭粒、砂粒を多く含む。		口縁部ロクロナデ 胴部ヘラミガキ	口縁部ロクロナデ 胴部ヘラミガキ	
212	51	29号住居址 No.1	Ko・ 杯C	13.0	6.8	-	4.6	明褐色	黒色	石英粒、長石粒、砂粒を多く含む。	底面：回転糸切り	ロクロナデ	へラミガキ	
213	51	29号住居址	S・ 杯C	-	5.3	-	-	暗灰色	暗灰色	長石粒、砂粒を含む。	底面：回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	
215	59	32号住居址	H・ 皿C	9.7	4.9	-	2.8	淡灰褐色	淡灰褐色	砂粒を多く含む。	底面：回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	
216	59	32号住居址	H・ 皿C	(10.1)	(6.3)	-	(1.7)	淡灰褐色	淡灰褐色	細砂粒を多く含む。	底面：回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	
217	59	32号住居址 No.2	Ko・ 杯C	13.2	5.0	-	4.6	褐色	黒色	砂粒を含む。	底面：回転糸切り	ロクロナデ	へラミガキ	
218	59	32号住居址 No.3 底面	Ko・ 杯B	-	6.9	-	-	淡灰褐色	暗色	長石粒、石英粒、砂粒を多く含む。	底面：回転糸切り 捺付高台。	ロクロナデ	へラミガキ	
219	59	32号住居址	H・ 杯B	-	6.3	-	-	淡灰褐色	淡灰褐色	砂粒を多く含む。	底面：回転糸切り 捺付高台。	ロクロナデ	ロクロナデ	
220	59	32号住居址 No.1	H・ 杯B	-	7.3	-	-	淡灰褐色	淡灰褐色	細砂粒を多く含む。	底面：回転糸切り 捺付高台。	ロクロナデ	へラミガキ	
221	58	32号住居址	Ka・ 埴	14.4	6.4	-	6.1	白灰色	白灰色	細砂粒を含む。	底面：回転ヘラミガキの捺付高台。	ロクロナデ 下半部回転ヘラミガキ	ロクロナデ	内面口縁部に 沈線
222	59	32号住居址 No.2 底面	Ka・ 埴	15.3	7.3	-	6.4	白灰色	白灰色	砂粒を多く含む。	底面：回転糸切り の捺付高台。	ロクロナデ	ロクロナデ	
223	59	32号住居址	Ka・ 埴	16.2	7.5	-	6.1	白灰色	白灰色	細砂粒を含む。	底面：回転糸切り の捺付高台。	ロクロナデ	ロクロナデ	酸化銅付着
224	59	32号住居址	Ka・ 埴	(15.5)	-	-	-	白灰色	白灰色	細砂粒をわずかに含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	
225	59	32号住居址	Ka・ 埴	(16.8)	-	-	-	白灰色	白灰色	細砂粒を含む。		ロクロナデ	ロクロナデ	
226	59	32号住居址	Ka・ 埴	11.3	5.8	-	2.6	白灰色	白灰色	砂粒を含む。	底面：付高台	ロクロナデ	ロクロナデ	
227	59	32号住居址	Ka・ 埴	-	6.3	-	-	白灰色	白灰色	細砂粒をわずかに含む。	底面：回転糸切り 捺付高台。	ロクロナデ	ロクロナデ	
228	59	32号住居址	Ka・ 埴	-	6.7	-	-	白灰色	白灰色	細砂粒をわずかに含む。	底面：回転糸切り 捺付高台。	ロクロナデ	ロクロナデ	

No.	図番号	出土地点	形状・部形	吹口径φ	吹込部φ	土色		土質	土質	成形	形状上の内		備考
						断面内	断面外				外	内	
229	59	32号住居址	R・直	(10.5)	-	-	緑色	細砂粒を含む。			ロクロナデ	ロクロナデ	
230	59	32号住居址	Ka・瓦葺	-	-	-	灰白色	細砂粒を含む。			ロクロナデ	ロクロナデ	
232	59	33号住居址	H・葺M	19.0	-	-	赤褐色	長石粒、石英粒、重砂粒、砂粒を含む。			口縁部ロクロナデ 基部ヘラナデ	口縁部ロクロナデ 以下ヘラナデ	瓦葺
234	29	34号住居址	H・葺	-	8.4	-	赤褐色	重砂粒、石英粒、砂粒を含む。			ヘチメ(多ク)	ナデ(直)	
235	29	34号住居址	S・高段	-	-	-	黄灰色	長石粒、砂粒を含む。			ロクロナデ	ロクロナデ	上部穴縁後、周辺を磨き再利用
236	8	35号住居址 №6	S・杯	14.4	-	-	明褐色	砂粒を多量に含む。			ロクロナデ	ロクロナデ	
237	8	35号住居址	S・杯	4.8	-	-	灰褐色	砂粒、重砂を含む。	底面：ヘラナズリ		ロクロナデ	ロクロナデ	
238	8	35号住居址	S・杯	-	-	-	灰色	砂粒を少量含む。	底面：凹陥ヘラナズリ 若干あり		ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ記号アリ
239	8	35号住居址	H・葺	11.2	(6.5)	-	明褐色	砂粒、重砂を多量に含む。	底面：ヘラナズリ		ナデ	ヘラミガキ	
240	8	35号住居址	S・高段	11.3	-	-	灰色	砂粒を含む。			ロクロナデ	ロクロナデ	基部のみ
241	8	35号住居址 №4	H・高杯	-	11.3	-	赤褐色	砂粒を多量に含む。			ミガキ(多ク) 底面(少ク)(直)	ヘラナズリ	基部のみ
242	8	35号住居址	S・垣圍	-	10.0	19.9	灰色	砂粒を若干含む。			ロクロナデ	ロクロナデ	
243	8	35号住居址	H・葺E	21.8	-	-	暗褐色	砂粒、重砂を多量に含む。			口縁部ヘナデ 以下ヘラナデ	口縁部ヘナデ 以下ヘラナデ	
244	8	35号住居址	H・葺G	14.4	-	-	赤褐色	砂粒、重砂を多量に含む。			ヘラナデ	ヘラナデ	
245	8	35号住居址	H・葺G	13.2	-	12.9	17.0	暗褐色	砂粒を多量に含む。		ナデ(直)の縁ヘチメ(少ク) 底面ヘラナズリ筋ナデ	ナデの縁ヘチメ(直) 一部ナデ(少ク)	
246	62	P ₁₁	№2 H・杯C	13.5	6.0	-	赤褐色	砂粒を少量含む。	底面：凹陥全切り		ロクロナデ	ヘラミガキ	
247	62	P ₁₁	№1 H・小型葺D	18.0	-	-	黄褐色	長石粒、砂粒を多量に含む。			口縁部ナデ(直) 基部カキ	ナデ(直)	
248	65	P ₁₁	Ka・葺E	12.6	-	-	白灰色	細砂粒をわずかに含む。 特色：白灰色			ロクロナデ	ロクロナデ	
249	65	P ₁₁	S・垣圍	14.6	-	-	赤灰色	長石粒、砂粒を多量に含む。			ロクロナデ	ロクロナデ	
250	66	P ₁₁	Ka・耳皿	-	1.2	-	灰色	細砂粒をわずかに含む。 特色：赤灰緑色	底面：凹陥全切り		ロクロナデ	ロクロナデ	

No	図番号	出土地点	器種・形状	法			量		色		土質	成形	形状上		備考
				口径cm	底径cm	最大径cm	器高cm	外	内	外			内		
251	66	P ₁₂₃	Ka・環	-	19.7	-	-	白灰色	白灰色	細砂粒を多少含む。 粘土、白灰色	底部：回転ヘラ状 スリ後付結合	回転ナブ	回転ヘラ状スリ		
252	69	P ₁₁₉	N2 H・直C	9.5	4.3	-	3.0	明褐色	明褐色	砂粒を少量含む。	底部：回転糸切り	回転ナブ	回転ナブ		
253	69	P ₁₁₉	N3 H・直C	10.3	4.9	-	3.0	灰色	灰色	砂粒を少量含む。	底部：回転糸切り	回転ナブ	回転ナブ		
254	69	P ₁₁₉	N10 Ko・耳皿	9.5	3.0	-	2.1	黒灰色	黒灰色	細石炭粒、雲母粒、長石粒、砂粒をわずかに含む。	底部：回転糸切り の後付高。その後 回転ナブ。	回転ナブ→ヘラミガキ	回転ナブ→ヘラミガキ	破文	
255	69	P ₁₁₉	N7 Ko・杯B	10.2	4.7	-	4.1	黒灰色	黒灰色	長石粒、石灰粒、砂粒 を含む。	底部：回転糸切り の後付高。その後 回転ナブ。	回転ナブの後ヘラミガキ	回転ナブの後ヘラミガキ		
256	69	P ₁₁₉	N5 Ko・杯B	10.3	4.6	-	4.0	黒色	黒色	長石粒、石灰粒、砂粒 を若干含む。	底部：回転糸切り の後付高。	回転ナブの後ヘラミガキ	回転ナブの後ヘラミガキ		
257	69	P ₁₁₉	N6 Ko・杯B	10.2	5.0	-	4.8	黒灰色	黒灰色	石灰粒、長石粒、砂粒 を含む。	底部：回転糸切り の後付高。その後 ヘラミガキ。	回転ナブの後ヘラミガキ	回転ナブの後ヘラミガキ		
258	69	P ₁₁₉	N8 Ko・杯B	11.0	5.8	-	4.2	暗褐色	黒色	砂粒を少量含む。	底部：回転糸切り の後付高。	回転ナブ	ヘラミガキ		
259	69	P ₁₁₉	N1 Ko・杯B	14.6	6.4	-	5.8	明褐色	黒色	砂粒を含む。	底部：回転糸切り の後付高。	回転ナブ	回転ナブの後ヘラミガキ (ヨコ)		
260	69	P ₁₁₉	N9 Ko・杯B	15.9	6.7	-	7.7	黄褐色	黒色	砂粒と雲母を少量含む。	底部：回転糸切り の後付高。	回転ナブの後ミガキ(ヨコ)	回転ナブの後ミガキ(ヨコ)		
261	69	P ₁₁₉	N6 H・手づく お土器 (小型類)	9.6	-	-	10.3	暗褐色	明褐色	長石粒、石灰粒、雲母 砂粒を含む。	手づくね	指サヤニ後ナブ(工具不明)	指サヤニ後ナブ(別庄調製)		
262	74	墳址2	S・杯A	14.4	4.4	-	5.2	灰色	灰色	砂粒を少量含む。	底部：回転ヘラ状 スリ、一部手づく ヘラ状スリ。	回転ナブ	回転ナブ		
263	71	P ₁₁₄	N7 S・杯C	13.3	5.1	-	3.6	黄灰色	黄灰色	長石粒、砂粒を含む。	底部：回転糸切り	回転ナブ	回転ナブ		
264	73	P ₁₁₄	S・杯C	14.6	5.0	-	3.5	灰色	灰色	砂粒を含む。	底部：回転糸切り	回転ナブ	回転ナブ		
265	16	36柱?	S・環盤	-	12.2	-	-	灰色	灰色	砂粒を含む。	底部：磨削付	回転ナブ	回転ヘラ状スリの後回転ナブ		
266	16	36柱?	S・杯A	-	8.0	-	-	赤褐色	赤褐色	長石粒、砂粒を含む。	底部：回転ヘラ状 スリ。	回転ナブ、回転ヘラ状スリ	回転ナブ		

No	図番号	出土地点	器種・器形	法			量		色		胎	土	産	蓋		の	特	考
				口徑=	底徑=	最大径=	器底=	器高=	外	内				面	面			
267	16	30柱?	H・壺	-	6.7	-	-	黄褐色	黄褐色	灰石片、石灰粒、カキ灰、磁質を多く含む。	底面：木燻度	ナゲ(ヨコ)	ナゲ(ヨコ)					
274	72	P ₁₀₁	Ko・杯C	12.7	5.9	-	4.4	明黄褐色	黒色	石灰粒、灰石粒、砂粒を含む。	底面：回転糸切り	ワタワタテ	ワタワタテ	ヘラミカキ				
276	63	P ₁₃	内耳壺	21.8	16.0	-	12.0	暗褐色	暗褐色	砂粒を多く含む。		ワタワタテ、一電ナゲ	ワタワタテ	ワタワタテ				
279	72	P ₁₁₉	H・小形壺C	(21.2)	(21.6)	-	-	明褐色	明褐色	石灰粒、黒砂粒、砂粒を含む。		ワタワタテ	ワタワタテ	ワタワタテ			大形な小形壺	
280	65	P ₁₁	R・段皿	-	-	-	-	淡緑色	淡緑色	灰石粒をわずかに含む。		ワタワタテ	ワタワタテ	ワタワタテ				
281	41	高住	S・杯C	-	(6.4)	-	-	灰色	灰色	灰石粒、砂粒を含む。	底面：回転糸切り 灰土を固く付けた 回転糸切り。	ワタワタテ	ワタワタテ	ワタワタテ			底にO長の器蓋	

表6 前田遺跡出土鉄製品一覧

遺物番号	調査番号	出土地点・層位	器物名	遺存状態	現存計測数値 (cm) (g)				備考
					長さ	幅	厚さ	重さ	
78	45	6号住居址	紡錘車	軸の一部	3.5	0.35	0.3	1.2	
79	45	6号住居址No.6	刀子	完形	16.45	1.2	0.3	17.7	木質部厚く残る
96	35	7号住居址	鉄鏃	基部の一部、身部の $\frac{2}{3}$ 欠損	2.7	1.35	0.2	2.0	
104	17	8号住居址	楔	完形	4.45	2.1	0.9	8.2	
144	46	17号住居址	刀子	身の先端、基部の先端欠損	4.9	1.3	0.4	6.2	
189	25	25号住居址	鉄鏃	頭部先端、基部の一部欠損	5.4	0.6	0.3	3.3	
192	41	26号住居址No.2	不明	完形	8.5	1.5	0.4	9.6	先端部尖がる
199	42	27号住居址No.2	刀子	身の先端、基部の一部欠損	(8.45)	1.3	0.4	5.6	
211	50	28号住居址No.1	鋸齒	ほぼ完形、基部の先端欠損	21.3	2.6	1.08	141.8	
214	51	29号住居址	不明	略完形	6.6	2.8	0.4	15.2	台形で刃部あり
268	32	4号住居址下面	紡錘車	軸の一部	4.15	0.5	0.5	4.3	
269	17	8号住居址	鉄鏃	基部略完形	(12.7)	0.6	0.55	(5.35)	
270	10	9号住居址	鉄鏃	基部の一部欠損	5.7	1.0	0.3		
271	59	32号住居址①	刀子	身の先端、基部の先端欠損	14.5	1.85	0.4	15.1	
272	59	32号住居址②	刀子	略完形	11.0	1.5	0.25	13.3	基部部分に木質部厚く残る
273	59	32号住居址	鏃	先端部 $\frac{1}{6}$ 欠損	18.2	3.85	0.3	52.8	
275	73	P 202	刀子	刃部の一部と基部	3.8	1.4	0.35	5.8	
		P 264	鉄片	完形	13.8	7.9	2.5	150	
		遺構外	刀子	基部	4.2	0.75	0.3	5.3	

表7 前田遺跡出土石製品一覧

遺物番号	調査番号	出土地点・層位	器物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	備考
47	32	4号住居址	磨き石	15.10	6.3	5.05	875	完形	安山岩	磨打痕
77	45	6号住居址	砥石	4.7	4.0	2.8	90	一以上欠損	粗粒砂岩 (硬砂岩)	
114	10	9号住居址	石皿 (石臼)	28.4	21.0	8.0	7,300	完形	安山岩	磨痕
154	24	18号住居址	砥石	6.3	6.7	1.4	85.5	略完形	粗粒砂岩	
231	59	32号住居址	台石	34.9	25.2	12.1	15,000	完形	安山岩	磨打痕、凹、一部に磨痕
233	27	33号住居址	砥石	9.3	8.15	3.35	362	両端欠損	粗粒砂岩 (硬砂岩)	
277	70	P 198	砥石	29.0	9.9	3.2	1,486	完形	粗粒砂岩	
278	54	11号住居址	砥石	8.7	8.0	2.7	250	一部欠損 基部一部剥落	粗粒砂岩	

真 写

1. 借馬遺跡・追分遺跡周辺と圃場整備事業進行状況航空写真



2. 借馬遺跡C地区全景
(中部電力株式会社
協力北方上空より)





1. 借馬遺跡C地区全景
(中部電力株式会社
協力、西方上空より)

1. 近景（南方より）

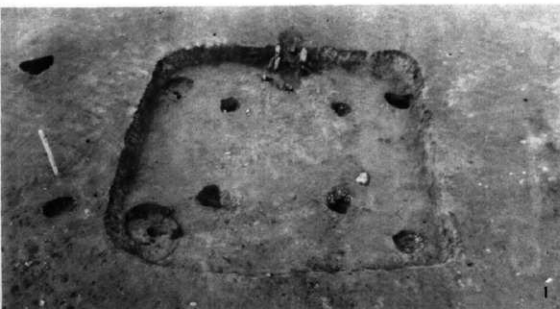


2. 近景（発掘調査中、南方より）



3. 近景（発掘調査中、北方より）





1. 61号住居址
(南方より)



2

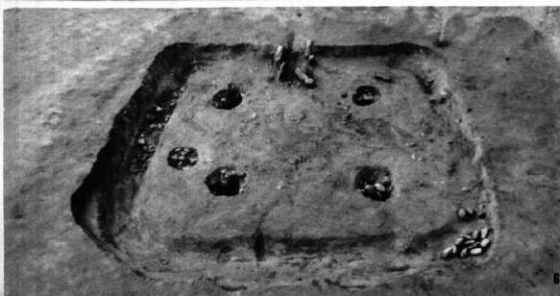


3



5

2.3.4.5.
61号住居址カマド



6. 62号住居址
(南方より)

6

1. 62号住居址礎・遺物
出土状況（南方より）



2. 62号住居址カマド

3. 62号住居址編物用石錘
出土状況



4. 63号住居址
（南方より）



5. 63号住居址礎・遺物
出土状況（南方より）





1.2.3.4.5.6.7.8.
63号住居址カマド



7.8.9.10. /
63号住居址
遺物出土状況
(7.8. 遺No43
9. 遺No49
10. 遺No23)



1. 64・68・69号住居址
(北方より)



2. 64号住居址
(南方より)



3. 64号住居址礎・遺物
出土状況 (南方より)





1.2.3.4.5.
64号住居址カマド
6. 64号住居址遺物
出土状況
7. 69号住居址
(東方より)

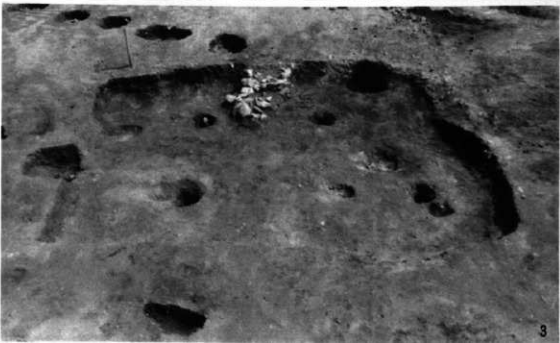
1. 68号住居址
(西方より)



2. 65号住居址・建物址
29 (南方より)



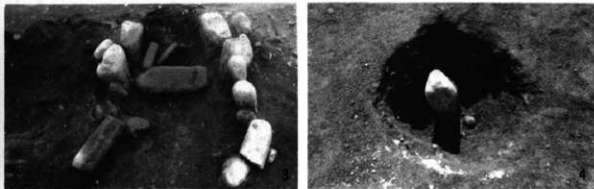
3. 65号住居址
(西方より)



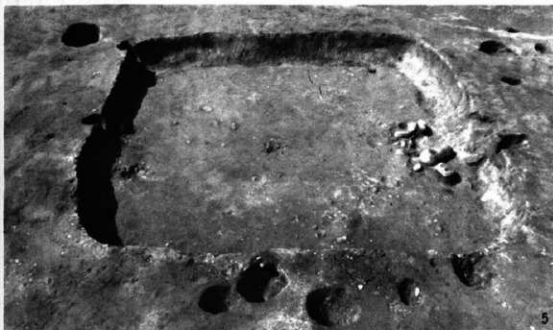
1.2.3. 65号住居址カマド



4. 65号住居址P₁内立石出土状況



5. 66号住居址
(南方より)



6. 66号住居址礎・遺物
出土状況
(遺No52・55・63・
64・65・67)

